
女學世界定期増刊
第二巻第八號
ほとゝぎす
東京 博文館發行

時鳥を聞きゆくりなくも遲咲きの山櫻花を見出しては、なほ春の名殘りのおもほえて、心ゆくこともさはなれど五月雨の降りつゝく頃は、大かたならず心さへかきくもりて、いぶせき歟、やうやう晴れて嬉しと思へば、照りはたゝきて、身もやけんばかりの暑いと苦しく、なかなかに堪へがたうなん、然はあれと日のやうやう西山に沈む頃より夕風そよそよと蓮の池をわたり、螢は露をたつれて草葉の間をみだれ飛ぶを見ればおのづから心も涼しく、晝の暑さも忘られて、實に樂しさよ、又檐にさしのぼりたる月影を眺めては、嗚呼かゝる夜の長かりせばと短夜をかこち結びもあへぬ曉の夢に驚ろかされては、火鷄を恨らみ、あるは親しき友どちと近き川邊におりたちて、水を結びて遊ぶなど、面白き事數へあくればなかなかに、その樂しみ春に劣るべくもあらじと思われぬ。

評　淡々たる着筆却て趣あり

●日記の一節

（丙賞）

大阪市東區清水谷東之町番外二番邸　仙田蒔

五月一日　晴れ、月初めに斯れば、今日は雨天少なからんなどいひ合て樂しむ。

午後英國婦人ハヮードの君來まして、我が爲に聖書の講義されける、げに心行くばかり尊くめでたかりし。夕方曇りて今をもきつかへしが、夜に入りて寒さ增し雨は降らず終せぬ。

五月二日　曇り、正午頃に日かげ見へにけれど、しばしのまにて、やがて小雨の降り出でしが、夕刻より次第にはげしく降りまさり、遠雷さへおどろしく鳴りそへければ一時は物すごきやうおぼゆ。

さるにても昨日おろせし朝顔の種洗ひ出されはせず　心づかわるゝ事よ。

五月三日　晴れ、今日は八十八夜とて、百姓共やく日とやとのふらん日なるに、さて[illegible]なるよ、今年の豐年告ぐらんか。

いづくの里も今日は數多の物の種の蒔かるゝならんに、さてもいづちにこよなき花の咲くらんや、天より見給ふ神はげにおかしき日ならんかし。

氣づかひし朝顔さ程にもあらざりし。

五月四日　晴天、日中はあつきばかりなりしが、暮がたより雨となる。

五月五日　前夜より續きて降りに降る、雨の中に餌をひろひつゝ巣にはこぶ雀のぬれ姿哀れなり、かゝるひくき動物すら子を愛る情のこまやかさ、眞親は尊きものぞかし。

終日止みまとてなかりしが雨たれものこり少なになりにけん、よひより小やみとなりぬ。

五月六日　天よく晴れ渡り露もつ木の葉に旭かゝやき蝶のかげさへいとうらゝ見ゆ。

五月七日　晴れ　東なる弟の許より手紙來る變りなし。日頃の雨多かりし故か、早、朝顔の二葉を合せて出でけるもあり、赤くぼかせし白き芽の中園を地上にあがきたる、頭背くしてすぐなる、何れ短き一世の榮華夢見つつあるらんかし、あられ優しの花よ汝が世にも風あり雨あり、色香を愛る蝶々の眼を引く、ゆかりの色こき盛りは、しばしのまぞ、やがて秋風たちそめて、朝な朝なの霜降にありしすかたは見んよしもなく、北吹く風に枯葉ならしつゝ、去りもえやらぬなきからの、ありし昔を籬垣にしのぶらん虫の音の哀にかなしき時も來つらむ。

評　筆は幼穉なれど文に眞氣こもる

抒情文

●春のゆめ

（甲賞）

神奈川縣青木町六十七　保田ゆづる

散り殘りたる梅か香は猶ほ園の外邊ふ東風にこもりておそしとや啼く鶯の聲に目さむれは哀れ今思ひ設けぬ邂逅とは心ひそかに嬉しみつゝも余りの嬉しさに心ともなく手をとり交はし浮かれ出にし妹か影觸やこゝ三年忍ひし心や通ひけん實になつかしの故里の野に語り合つゝ千草にあそびて狂ひ交しつ胡蝶に戲れしあとけなの妹か委何處ともなく消え失せぬさても口惜しと我にかへりて視れはむべ仇し寐醒の夢なりけるよ實に嬉しの夢戀しの樣や今一度その空想の影たに辿りてましと瞞然目をとつるも身は徒に現世の奴となりて過にし悲しみにもたゆるのみさても果敢なきは夢なるかな

あゝ夢よ汝は如何にして此我か忘るゝ由なき悲哀の胸に暫時喜悅の光明宿らせしぞ汝はわれに何の恨みありてかやかては消ゆる嬉しの影に導きて我を欺き弄ひしぞさはれ如何に宿世の緣因薄くして同し血分し此姉此一人の妹は今や汝の力借りすしては長世に束の間も逢ふよすかなきぞ實に戀しさの極みなれ

思ひ起す三とせの昔世は花鳥の彌生の空詠めあえぬ花またつきぬ梢には情なき風たにしはし心してそ吹かまし物をまだ十歳にみたぬ幼き遙けき希望は充ち滿ちて歡樂の花また咲かぬ妹か身に心急ぎの常なき風は如何に身にしみ吹きにけんかりそめと思ひしいたつきは日ふるゝまゝ露愈らん樣もなく春深くなるや哀れ愛らしのみまひは散り行く花に誘はれてはらの如き紅の頰に笑ひの血しほ湧く由もなく鈴の如き涼しの眼は長世に闇に眠りて又と再ひさむる由なき果敢なさよ思ひ出るも胸潰るをあはれ其日其時やいかに

さても已れこゝに幾年故鄕しのふ旅枕春風そよく花の晨霞立ちこむる秋の夕九十の春光夜半の嵐に消ゆるとも三五の月明心なの雲かくすともいつかは故里しのふの心や枯れ果つへきここは戀々たる故山の風景惜しみてにも非す目なれし都の春にあきてこもあらす月すむ夜半の夢にたに忘れはせじと契り交はせし友も物かはこの唯一人の幼き妹につきぬ涙のこれはなりきあゝ春去り秋來り世は又もや花にあくかるゝ昨日けふ花は嘗しなからに咲き揃ひぬ鳥は嬉しけにこそのしりへをくりかへしつさるを我身やいかに實に涙の種ならずやはあゝ今は言はし語らし我は泣きになき咽ひに咽ひぬいつしか聞ゆる軒の玉水の音點々心ともなく窓の外眺むれはいつの程にか催しにけん細々たる雨絲は亂れに亂れて今朝咲き初めにけん紅の桃の花一ひら淋しけに散りゆくも實に心なきものとも覺えす心細さそそきつり行く

評　此種の悲慼をのぶる文多けれど、大概は文も想も共に古めかしく見るべきもの少なき中に、此一文は、たすかに思想もすぐれ、文章も老熟の域に入れるを見る、本誌の才媛文壇において、近來有數の作也（日東）

●琴の音

（乙賞）

四谷左門町八十八番地　渡邊しき

世を厭ふ心ならでも、秋の夕、雨ふる夜などは、つれ〴〵にいと物うきに、松にかよふ琴の音には、なべての人の心慰むものなれや。まして月

おぼろに花匂ふ様、あるは鶯來鳴く南の窓に、妙なる音の聞ゆるなむいとゞ優しうおかしきに、しかも花いよ〳〵艶に月歩みを止め、鳥の聲ますく〳〵妙なるを覺ゆるかし。緩く弱きは春の湖に小波立ち、野邊の小川の流るゝが如く、強く急なるは深山の瀧崕より落ち、谷の流岩ばしるが如し。あるは花の散るが如く村雨の降るに似たり。あるは露の滴るが如く、雪の舞ふに似たり、四季山川のながめを音色に聞く、いとも奇しく妙なるは琴の音なりけり。

神代の古、八重垣つくらせ給ひし小琴のためしは申すも畏こく、嵯峨野の奥の琴の音は、雲井の空に聞え渡り、九重の雲深き御簾の隙もる妙の音は左中將の君の心を惱ます種と成りぬ。善惡邪正を明かにし、天が下を治むと云ふ裁决の庭に此音響きては、心なき士卒をも感ぜしむ、況してや智仁勇兼れ備はれる將侍をして、如何に心を傾けしめけむ、花の旛月の宴、玉の露、賤が折戸の分ちなく、へだてぬものは琴の音なり、是に依りて人我の心の憂を慰むるのみならず、喜怒哀樂の想をのべて、情ある人の心を動かし、我心音のかよひ路とぞなれ。尊くも嬉しき琴の音優しくも哀れなる琴の音や、曲つる糸の音繁くとも、心のふしの一筋に千々の想やこもるらんかし。

評　やさしく、ゆかしき琴の音を抒情的にしるせるは、此の文也、着想と文章と共に優佳なるは喜ぶべし(日東)

●籠の雀

（丙賞）

信濃國松本町一六五六番内　小松のぶ子

弟の九つになれるが。學びの道にはおそきものから。竹馬の歩み足とく親のいさめもきかで心のまゝにふるまひけり。ある日屋根の瓦に雀の雛を捕りて飼ひけり。摺餌などさるべくものして、竹籠に入れて朝夕の慰めものにしてけり。親雀はこよなくうれひげに、日ごとにほど近き柿の木の枝に止りて、うらめしげに籠を見おろして啼く。何ごとをいふにかあらん、いとあはれなり。二三日經ぬれば、雛なきかなしび、父やよぶらん、母や呼ぶらん、空のかたをのみ眺めてなく。一日おもしろき遊びごとにまぎれて、弟は餌をわすれたれば、いとゞかなしく啼きしきるに、やをら歩みよれば、うれしがりて飛びまどひつゝ、嘴を籠のひまより出して、餌を求むるさまいと悲し。細き木屑に餌をさしてとらするにいかばかり嬉しきにかちよちよと聲を限りになく。親のもとにあらましかば心のまゝに養はれんものを、せまき籠にこめられ、かゝる餌をだにえがてになくよ。人ならばと親雀の心ぞげに悲しかりける。あくる朝弟の泣きのゝしるにゆきて見れば、猫もやくひけん、籠は破れて雀の足のみ傍に散りぼいたり。こは必ず隣の三毛のしわざならん、見つけたらんをり、たゞ一うちに殺してんと、弟のむつかるもことわりなり。かゝらんを知りけるにや、昨日は殊に悲しう啼きけるよと涙おちぬ。あはれ、親雀は今いづくにか啼き悲しむらん、あはれ籠の雀。

評　頑是なき弟が、子雀の親をはなれて泣き悲む心も知らで、無情にも之れを狹苦しき籠の中におしこめ、いと愛して飼ひ置きけるがある日、その愛せる子雀が、猫にや喰ひ殺されけむ、慘酷なる死を遂げたれば、怫然として怒りの色をあらはし、その最愛の飼鳥のために、仇を報ぜむといきまけるさまを描きたるは、其趣向大いによろし、文章もいつもながら、頗る巧み也、ことに、結末の數言は情趣深し(日東)

消息文

●歸國せし友よりおこせしかへし

〔甲賞〕　本所區仲之鄕竹町十一番地　宮内千代子

汽車のゆるぎいでし後もなほ御姿のみゆる限は打ちまもり居り候ひしをかへりみもせで急きたまひしはいと心つよき君かなとおうらみもいたし候さて宿に歸りてはいま頃はいづこの里をすぎたまふらむ今日はなにがしの川こしたまふらむなど御みちすがらの驛々地圖くりひろげてせめての心やりにみつゝ思ひわぶるまゝに早十日をすぎしけふのひる頃嬉しうもおこせたまひつる御文なつかしう存じ上げ候つらきはいと言すくなにのたまひぬるなれどなにやかやせはしう渉らせらるゝ折柄なめればとまたあはれにも存じ上げ候旅も今の大み代となりてはよろづいや進みに進みて足らぬものもはべらねば道のほどつゝがなうおはしつるめりとは思ひ上げ居り候ひしも御消息にて全く心落つき申候此の頃は氣候いとかはり易く候まゝ風になあてられたまひそたゞこれをのみあんじ上げ候かしこ

評　詞が錬れて、よくも其意をのべられたり（日東）

●和歌の添削を乞ふ文

〔乙賞〕　長野縣松本町中ノ丁　丹羽はる子

此春は、いつもより、冴ゆる寒さの肌寒く覺え侍るを、いかに、暮らせ給ふことも御座しますや。世はなれたる處に、家居を移し侍りしよりは面の當り、みけしき伺ひ奉る事も叶はず。隨ひて。眞のうたがひも解きがたく、逝く春の哀れにもまさるは、古里の戀しさになん。時に此ふもとの池に碎くる月はあれど、峯の老松には錦もかざらず。なれぬ山屋の淋しさに、かれて承りし歌日記のこと思ひ出し、少しは心のなぐさみにもと、日々、一筆二筆と、ものに記し侍りしが、半年余りを經るまゝに、いつしか、この一綴とはなり侍りぬ。固より習はぬ業の、いと拙くて、御耳はふるゝだに、はづかしさの堪へがたく侍れど、かくて止みなば、いつかは上達すべきとて、つゝましさをも顧みず、御添削を乞ひまゐらせるになん、あはれ、切なる、おのが心を御くみたまはり、拙きを捨てさせて、御翠の匂ひだに加へ給らば、こよなき幸にこそ。御老躰の御上御大切にと、かげ乍ら、祈りあげ參らするになん。かしこ

評　文詞優佳也、されど、書翰文はいま少し當用的なるこそよけれ（日東）

●藤の花に添へて友の許に

〔丙賞〕　四谷左内八十八　渡邊しらゆき

待ちわびし花鳥の音色もいつしか影をとゞめず、つゝじ山吹となしげもなく過ぎゆく春のつれなき風を恨みつゝ籠りがちにのみ明し暮し侍る間にいつの程にか庭の藤が枝咲きそめ紫の雲棚引きたるに、池の白波立ちかへり心あらば呼びもとめよと往きなやむ人の樣いと床しきに、山時鳥のそれならで君はいつし來ましらんと思ひわびつるあまりに、此方の空忍び給へとて色こきを手折りて參らする、只机の上にのみながめな捨て給ひそ

花の下陰はいと長くは待れど散りての後青葉に忍ぶは紫の色のみならむやは　あな　かしこ

賞外雜文

●雨

河内　大矢たね子

雨は夕立こそげに〳〵心地よきものなれ、あらかれのつちさへ、さけんばかりのあつさたえかたきに、あはれ、一しきりふりそゝぐ雨もかななど、かこつまもなく、大空はさながら墨を流せるばかりにかきくもり、かみおとろ〳〵となりはためき、あやしうすゞしき風、さと吹きくれば、彼方の山ははやうすゞみの刷毛もて、押しなでたらんやうに見えしが、やかて瀧の如き雨は、こなたにも降り出でつ、庭の面は忽ち池水のあふれしごとくなりしも、しばしにて雨やみ空はれ、枯れ〳〵なりし草さへ水さへ、とみによみがへりたる心地して、緑いやます木々の葉末にしたたる、餘波の露の玉とある折から、雨にみがゝれたる月影の青葉のすきよりほのめきそめし風情、げにたとへなく覺ゆ、さはれ、ものへ行きたる途にて、俄に降り出でたる、なか〳〵につれなくおぼゆるもをかし、明日は親しき友と久々にものへゆく約束して寢たるを夜あけて雨戸おしやれば、あなうたて、しと〳〵とふりゐたるいかにつれなきよ、近きわたりの、清き小川に翁の一人が釣りしける折からふり出でたる雨の、鏡の如き水の面におちてさながらさかづきの形したるが、いとをかしきに共に行きたる童の兵士の調練見る如しと、爪音によそふらんとて、ふり出でたる小雨に、小田の蛙の一聲二聲ふみよむ窓に趣をそへたるうれし、寢覺をかこつ秋の雨、さては桐の葉もろくさそはれて、さらぬだに寂しき夜半におとなふ時雨、いづれわびしからぬはなきに、病の床にきゝあかす、一しほ心ぼそきゝはみにこそ

●藤を觀る記

久留米　飯田その子

かげろひもゆる春の彌生も今一息のよとなりて足引の山の尾の上の雲霞は處定めず失せにけり。はる〳〵と雲雀は高く御空に鳴き青柳のいと長きも日にそひて袖にえならぬ桃櫻の香も盛り惜まず散りはてゝ春も名殘なく暮れ渡り桑染の夕ぐれ近くなりにし頃より山寺の鐘の響の三つ四つと咲きそめて今なむ眞盛りなるよととり〴〵の噂なり。されば此盛りを過ちてはとかぞいろも奨められければとあるめでたき日うらゝかに風靜かなる日を撰びてかぞいろともに三井郡北野天滿宮の社内なる藤をと志ざしつゝうち出でぬ。道の程は小半里もあらなむ。行く〳〵みやびつくせる數多の人のかげろふは同じ心に出で立ちたる詣人なるべし。着きて先づ社前にぬかづき右手の斜を顧れば紫の雲の下りゐるかと疑はれ漸く近づけば幾千條ともしらぬ濃紫の花の糸ゆるく吹く風に打ゆらぎたるえもいはれず。境内はいと廣々として藤はたゞ一本の根より出でてし古びたる五塹の過ぎされども丹精の養ひを得たるなるかはた神のしはざなるか木を柱に竹組みたる大荒目の棚にかせがれつゝ四方にはひ廣ごりて物の三反許りは限なく覆ひあまりてこなたは池の上りにさしうつろひ水も紫に色變り其の花の穂先折り〳〵水の面をかきまわすはえならざる風情あり、かなたは厳めしき垣にやさしうかゝりてなほいかめし。こゝには酒茶菓なんど賣るとて假屋を數多花下蔭にしつらへり。花見むとて來る人も多くして少女の何か口たゝきつゝ心そらにありくもあり。ばうぞくなるあるやごとなき人にや。あるはつゝましげなる又ははや瓢かたぶけ矢立出して物するあり。今日は晴れにはれて一天雲なく手にとる許りに麗

に花をすかして山の梢けども又打見る人もなし。おのれらよき程の處に設けたるスヰーツによりて打見つゝ竹葉など取出して藤のしなひの長き日一日紫の染む許り花下蔭に遊び暮しつ。人も漸く三々五々と立ちそむればおのれは猶も飽かぬ心地のしつれどもかぞいろのいざとのたまふににほふ紫の花の色香まさむ程あたらしみ心殘してかへさにつきぬ。げに飽かぬ　花の盛りにて散らぬ日數の長かれと祈るも甲斐なく留らぬ色をいかにせむ。あはれ

●櫻

神奈川　ゆ　づ　る

世の中に此花なかりせばと歌ひけん古へ人なまれふこはあられとも思ひ及はぬ神世はしらずおうよそ此花世に咲きいでてしより春としいへば花はなといはゝ櫻花と稱へらる清く閑けき梅か香は草木も人も目かれし枯野に冬を名殘の雪間をわけて身にしむ風にも靡り惜しまず夜毎の霜にたゆみもせでけなげにも春の門出に先がけしより櫻まつ間の心やいかにさても花の譽れや幸や羨ましさの限りなる九重の御花奥深く立こむる八重の霞の絶間より燦然たる朝日に對ひて匂ひいでたる愛でたさはいはずもがなありともしれぬ賤が伏屋のやれ垣にやとる月さへおほろ夜に我獨り春しりかほなるも哀ならずや實にや都の錦おりなせし花の林はろに雲にたとへむも今は仲々に古めかしうて鬱々たる老松古杉枝を交へし幽谿とやいはん山影に昔しかわらぬ古木の櫻見ては漫ろまだふまなくに吉野の宮の古き御なけき昔しなからの奈良の都もしのばるゝなれさはれ濃き淡き互みに競ふ艷然たる色一重八重時こそかわれ優しの姿さてもあてなる盛り殺さるをすみわたる大空に一點たゞならぬ雲のたゞすまひ心なく翼をのへておそふ風一陣またゝく間もなく爛漫たる花は一片の名殘だに止めんとつとめす紛々時ならぬふゞきと亂れ灼々たる花の光はあはれ一滴の涙の露たにのこすよしもなくて果敢なく消え行くにまかす哀さよ譬や我大和男子の一旦事急なるに逢ひては義勇公に奉じて君の御爲め事ある身の幸福もさてはかゆるに物なき命をも惜しまてすすむ健氣さにまさるとも劣らましやはとぞおほゆるなれあゝ徒らに其美に醉ひ其色にあくかるゝ世の人は此勇壯しのふるまにけなげの決心身にしみなはれと思はずやたゞ詠めあへぬ間の雨を惜しみ散らぬほとの嵐を歎くは此花のまことの心なりやわれはひそかにうたがふなり

●桃の花を見る

信濃　丹　羽　開　代

やまひの名殘つくろはんとて、かりそめにこの山里なる叔母の家にうつり住みてよりは、門を出ずして垣根つゞきに花をも眺め、垣内ながらになく鳥の聲をも聞きて、おのづからこそ心もまぎれたりしか。やう〳〵花もうつろひ行きて、空にしられぬ雪さへ庭の面に積りにたるが、あかず口惜しさに眺めなれば、今日はひいな祭る日なりとて、里のうなゐどもが、桃山吹の花など、こちたきまで手折りもてゆくを見るにも、家なるはらからのけふの、あるじまうけおもひいでられてなつかしうなん。曾波の眼新たに綴びたりとかや、ほのかに歌ふなる聲の聞ゆるは、かゝる山里にいかなる人のすまへるならん。貴賤と親疎とを論ぜずとか。花ある人家をもとひて見ばや。よしや、うちつけなるわざも、心あらん人はとがめじなどおもひつゝ、はしたに山みちのあないさせてそゞろにいでたつ。こゝの垣根かしこのくまに咲きたるが、みな一つ色に美しきを、これはけもゝの花にて侍り。あれはすもゝにみえ候へなど、およびさしつゝいふもおかし。柳のにくうなりにたるが、生ひつゞきたるほそ

き道を、あへぎつゝゆくなど、たゞくれなゐの雲のおりゐたらんやうに見ゆるあたりは、これなん桃の林に侍るといふ。仙源いづれの處にかとうちすしつゝゆきて見れば、松の柱かやが軒かごかにすみなしてゆゑづきたる柴の庵あり。かしらの髮雪のやうなる翁の、眞柴かりてかへらんとおぼしき山がつと、どうちゐたり。うちつけにおどろかさんも、不言の花おもはん事のやさしうて、垣のとにたゝずみをれば、いつしかと日ごろのやまひもわすれはてゝ、こゝちにはかにすがへしう。天さへわれさへ花に醉ひたるやうなるは、かのをのゝえくたいけんあたりにやと思ふがうちにも、千とせやすぎぬらんかし。

◉螢狩の一夜

長野　小林義美子

皐月の末つ方あまりつれづれなるまゝに、獨り机に倚りて儀錦の言の葉を探り、文の林に見ぬ世の友を訪へなどして餘念もなき折柄、へだてぬ友の訪ひ來て、よべの螢狩はいとも興ありきと語るに、女子の身にふさはしからぬ遊び事と思ひつれど、えたえて共に打連れだち、家を出てゝ二三町隔たりたる里外れの清き流のほとりに到りぬ。

こなたの橋の袂の柳の下に佇めば、まだ日はたそがれやらで、小田の蛙の啼く聲に澤さへもさわぎわたり、咽ぶ流れの音に和して自然の琴を奏



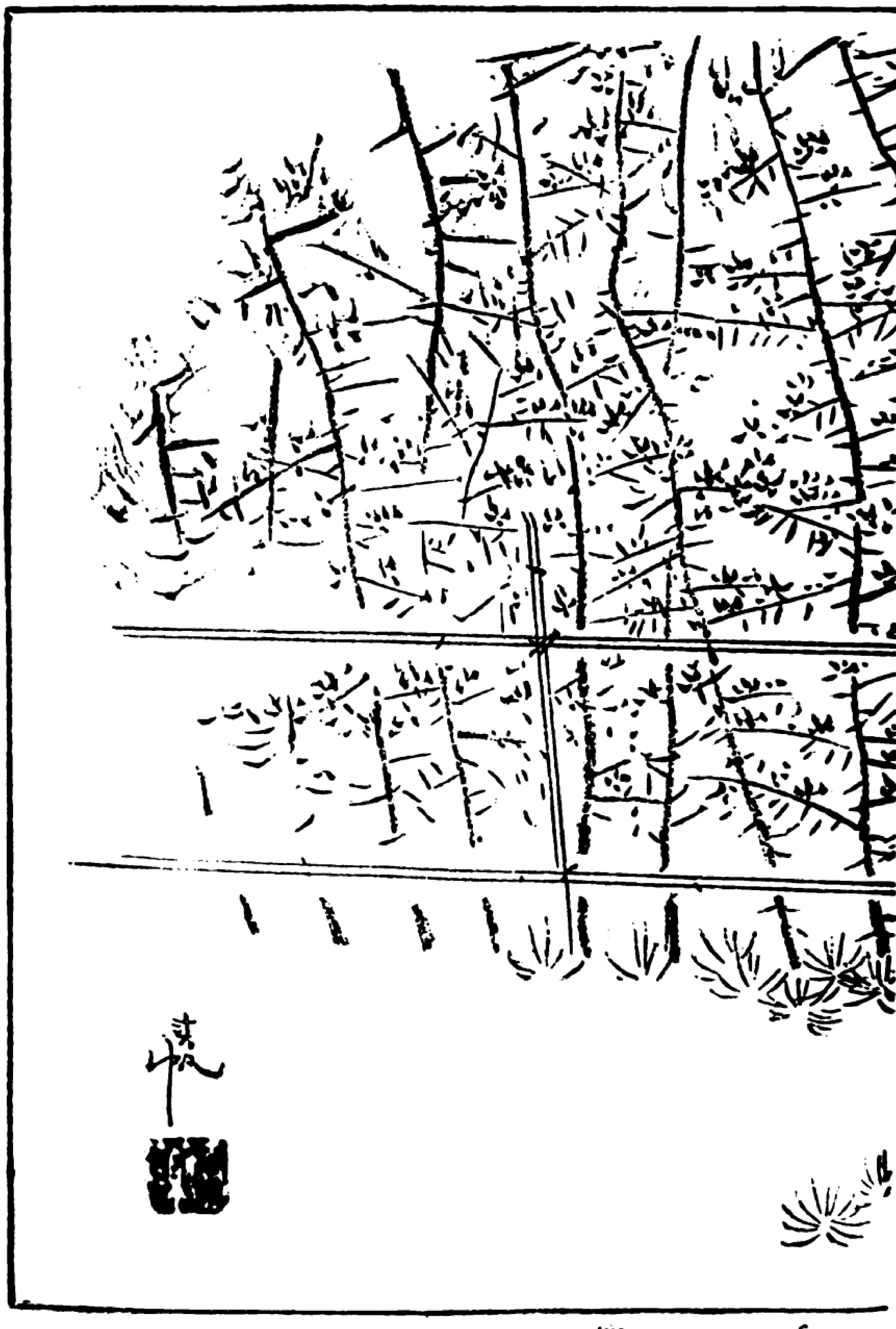
新　　わ

するゝに、天地はやすがすがしふなりぬ。

とかくするうち、螢は飛び去り、飛び來りて、あるは柳の糸に上り、あるは稲葉の露に止まり、あるは低く飛びて水の上に流れ、あるは高く空に上りて星かと疑はれ、そのさまいみじふならんと云ふばかりなし。

彼方此方に男おみなの童等の打騒しりつゝ追ふを見れば、あはや團扇の下に墜ちんとして巧みに虎口を遁れ去るあり、あるは四方よりしたゝかに攻められてあはてゝ水に落ちたるあり、落つると見せて飄然虚空に舞ひ揚るある、千叉萬、闘ふが如くあらそふが如く、飄へるが如く、舞ふが如く、躍るが如く、狂ふが如く、其美くしく妙なる事、げにやたとふるに物なく身はとみに塵の外の心地して、日頃のうさも何處へか消え失せけり。

まだしも興の盡きたるにはあらねども、東の山の端にいつしか月の花やかにさし上れるに、螢もいつしか稀にみち〳〵たれば、友もさらばとて



相伴ひて家に歸り、そを机の上に打ちのぼして又もや文の林に迪りける程に、青葉を渡る夕風の俄かに訪づれて燈火もろくも消えぬ。

今はこそと、ひとしほ美はしき螢の光に對ひて自ら車胤子の昔を偲びゝろもまたいみじふてな。

そよかぜのふきけす　窓のともしびに
かはるほたるの　かげそすゞしき

夏の月

伯耆　池田みつ子

柳の葉越にてらすひかりの、何となく青う見えて涼し、まして、木の下のいさゝ小川にうつりたる、ことにおぼゆ、木々の若葉にてりたる、草の上の露にきらめきたる、また、いと涼しく見えて、晝の暑さも忘るばかりなり、水鷄のはげしくたゝきたる、ほのめく影の姿なども見えて、思ほはずにてをかし、かゝる折には、影くだきつゝ、川瀬に舟をうかぶるみやび男もあらむ月をむかへて、琴かきならすたをやめもあらむ、かゝらうたなど高聲に吟じて、水の心を驚かす舟の中には、月の光も男しくさすなるべし、うす物の袖、なほ重げにとりなしたる高殿には、さす光もおのづからやさしかるべし。所々にしたがひ、心々につけて、ことやうに見え、ことやうにおぼゆるもをかし。げに月は夏こそ見るべかりけれ、春なられば、人の心は花にも奪れず、秋なられば、人の心は淋しからず、冬なられば、人の心はすさまじからず、月は夏こそ、又は月こそ。

梅雨中友を招く

久留米　よ　も　き

時節柄とて此程は月日の影も見え申さず、ふりつゞく五月雨に柳の糸水絶間なく、外には柴の戸おとなふ人もゐまさず、朝夕ながめくらし候て、心さへ曇りがちにていといぶせく、池の蛙の鳴く聲も何となう物を催し心みだれ候折しも、西の空やゝ雲破れ夕の光り洩れ出てゝ、花橘の打かほるもいとなづかしく存じ候間もあらせず、又々、むら〳〵と黒雲立おほひておどろおどろしう降り出て、誠に退屈におはしまし候折柄、如何御暮しなされ候哉、あまりのつれ〴〵に書よまむも面白からず候へば、年頃心打あけし學びの友どち打つどひて、さもゆかしき琴のしらべなりともいたさばやと、ふと思ひつき候まゝ、近きあたりの二人三人打まれき候ところ、是非〳〵御元さまをも招きてよと皆々の御望みに候まゝ、道の遠きに如何と存じ候へども、成るべく御くりあはせられ、雨の小やみを幸ひ御車を運ばせられ候ひては如何に候哉、五月雨淋しき空にしめやかなる憂を晴さむは、これに上こす樂みはなかるべく候。もし御入來出來させられ候はゞ、皆々御待ち申上居候事故、少しも早き方よろしく候。かしく

旅にて病める姉の許に

尾道　香　都　子

五月雨ふりつゞく今日此頃の、もの佗しさに、一入姉上様の御なつかしく、如何御暮し遊ばし候はんと、日々御案じ申上候折柄の、御便りにとびたつばかり嬉しく拜見いたし候へば、思ひ掛なや姉上様には、五六日前より御心地常ならず御なやませられ候との御事に、胸先とゞろき、御玉章持つ手もふるはれて、其後は讀も得やらず先立もの　涙に御座候。旅の空にて御病の床にふし給ひ、殊に兄上様は日ごとの御出勤故、何かと御不自由の御事のみにてさぞ御心細くおはすらんと、推はかり參らするも、堪難き思ひに御座候、妾なりとも御側に居侍らば少しは御心を慰さむるよすがとも相なり候はんものを、如何にせん、海山遠く隔てゝは思ふにまかせず、空しく東の空ながめては涙にくれ申候。明暮姉様の御上のみ、御心配にすごさせ給ふ母上様へ、此由申上候時の苦しさ、母上様は其れより直に姉様日頃御信心の淨土寺觀音様へ御願掛に詣でられ候

御なずかしき御上様、今頃如何に御なやませ居給はん、此手紙御手にとどきし頃には、何時もの如く、拙きくれり膏に、御笑ひ遊ばし候程、御心地よく、ならせられなばよきになぞ、様々の思ひに胸もみだれ申候、何卒御心大きくもたせられ一日も早く御全快のほど祈り上参らせ候　かしこ

●嫁きて後妹に寄する文

河内　大矢たね子

あらがねの土もさくてふ此頃のあつけさにも皆々様には御さわりもなうていよ／＼御すこやかにおはしまし候やさて此方へ参り候てよりは日もまだ浅きゆゑにや夕方すゞみにおもてへ出てゝは年頃住みなれし故郷の空うちながめられたらちねの御膝もとはらからのまとゐの事など兎角おもひいでられこひしうのみ存じくらし候これにつけても多年養育の御恩身にしみておぼえ候されど一旦他家へ嫁ぎ候上は何事も其家を家として心ひとつにかひ／＼しく家政にまたがひ候事女子の道なる事はかれて學校にて師の君のおほせられ候事にて今日にいたりはじめて深く思ひしられ候にてゆく／＼は御もとにも此心懸け肝要とぞんじ候又嫁ぎて後はいかほど事を思ひ候てもせんかたなきものに候私も家に在りし間は我儘のみ申上げ又御許にも折々腹立たせ中候事今となりては悔しく候へども後の悔臍を嚙むとも及ばざる事に候まゝ此邊もよく／＼御こゝろえ成されてひたすら御孝養なされ私の分をも補ひ下され候やう願ひ入り候　かしく

●夏の夜

本所　宮内千代子

涼しさに衣の袂風にまかせて、そゞろに宿たちいづれば、花やかなりし

夕日は、いつしか沈みて力なく、四方の山々やう／＼暗うなりゆきて、きらめく星影のいときよし、行手の森に幾すぢとなく煙のたなびくは、妻が濁酒鮮魚に夫の歸りをなぐさめむとて、その調度をものするに急がしきゆゑならむ

心にまかせてゆくほどに、とある谷川のほとりにいたりぬ、すみわたりたる月は清けき水に影をながし、なかば崩れたる土橋のあたりには、玉の如き露をやどして夏草ところ得顔なり、しばし佇むほどに、さは／＼と涼風わたりてその美くしき玉の、はらり／＼とこぼれて、衣の袖をうるほすも心よきに、葉蔭よりは二つ三つと次第々々に螢の飛びいづるおかしさ

折りしもあれ、何處なるらむわか葉の風にうちそひて、吹きすましたる笛の音の、身もひえ渡るまできこえぬ、あはれいかなる人のすさびなるらむ、我が身ばかりと思ひしを、さては今宵の月にあくがれいでゝなむ。思へば去年になりにけるかな、ともにあはせて笛を吹きしは此の川邊なり、小流たづさへて共に螢狩せしもこの川邊なり、われ今かの笛の音をきゝて、いかでむかしをしのばざるべき、君を送りて訣れしもこの川邊なり、檜をはらふすゞ風、せかるゝ水の響、さわぐ蛙の聲、すべて見るもの聞くもの一として昔のさまをあらためぬに、送りし君が身の上なるかな、あゝ水よ、當時の水となりて、われと共にその昔をかたれかし、君は水上の花片ゆきて歸らず、われは岸の糸柳、影を水にひたして君にともなはれざりしをいかにせむ。つきぬ思ひは行く水の流れにましてたえぬに等しく、君がおもわの忍ばれて、心苦しき折りしもあれ、かすかに見えし一つ星は、柳の上に流れきて、はたと光をうしなへり

評　着想高雅にして筆致輕婉、得易からぬ文といふべし(日東)

◉嬉しき夢

長野 丹羽はる子

楽しみを分たんは、いと易き事なれど、苦しみを共にせんと云はれなば、誰しも、耳掩うて逃げ去るべし。これ人情の常なれば、あながち咎むべきことならずとはいへ、頼みなき事ならずや。

かゝる習はしの世にありて、たゞ頼もしきは兄弟にぞありける、苦しみ楽しみ物として分たぬはなく、事として共にせぬはなし。かくばかり親しく、かくばかり嬉しきものは世にあらずなむ。已れ常に思ふやう遥くへだゝりてさへいと忍ばるゝを、まして兄弟なき人よ、いかに心細からん。幸と云ふ幸は多しとも父母兄弟そろひ居るに、こしたるものは何かあらん。已れも其幸にはもれずして、父母同胞そろひ居るは、こよなき身のさきはひになむ。されど兄君は早くより、もの學びの爲都にものし、先つ年定めの業終へ給ひしが、近きころ亞米利加に渡りぬ。さらでしも曇りがちなる此五月雨の空、いかに過ぐし給ふらんなど、いと／＼戀しくて、夜な／＼一家集ひては、ひたすらその歸りを待つのみ。今宵しも、いとゞ忍ばれて文机に向へど、好めるふみさへ、心に入るべくもあらず、いつか我こゝろは數千里の海越えて兄君のほとりに、さ迷ふなりけり。折から電報々々と叫ぶ聲す。走り出て見れば、こはそもいかに、夢か、現か、待ちに待ちにし兄君の、今横濱に着き給へりといふ知らせなりき。家内はさながら、霧の氷の床に、春風のおとなひしもかくやと思はるゝばかり、喜びさわざ、わきて母君の御悦びはたとふるにものなし。弟共も明日は兄君の御歸りぞと聞き、喜び勇みて、兄君萬歳と唱ふるも嬉しきに、末の妹の廻らぬ舌に、和したるも愛らし。折しも次の室より母君のみ聲にて「何を痴りごち給ふぞ、いたく夜も更けぬるに、いて休み給へ」とのたまふ。と驚き正氣に歸れば、是なんはかなき机上一睡の夢にて、嘗人を喜ばしめし電報すらいづち行きけん。殘るはほの暗き燈火のかげのみ。あはれ夢なりけり。嬉しき、喜ばしき、楽しき、夢なりけり。あゝ夢よ夢、いかなれば兄君に逢はぬ間にさめ果てしぞ。名殘惜しみ限りなるかな。今一度兆の夢路にもどれかしと迫れど、無形の夢には聲なくて淡き一縷の煙となつて何處ともなく消え去りぬ。折しも幽かに空なき渡る時鳥一と聲、やがて燈火かいたて、墨すりながして、かいつくるはこの嬉しき夢。あはれ此硯の主もまた兄君なりけり。

評　筆づかひは上手なれど、想は平凡をまぬがれず（日東）

◉春雨のあと

信濃 阿佐野みよ子

之れともわかぬ細き雨の、日毎／＼に降りつゞきて、欝々しきを、今し空は晴れて、日影うらゝかに、窓にさしいれば、あまりのうれしさに、ゆくりなくも、野邊にぞさまよひ出てぬる。木の芽、若葉は、一雨毎にのびゆきて、時知らぬ松さへ一しほの色そへぬ、もえ出てしばかりの若草は、皆露にうろほひて、はづかにのこれる夕日を浴びて、玉の如く輝けるは、得も云はれぬ風情にこそ。古へ人が祁を玉數と云はれけんも、この野邊は、また玉數と云ふべくなん。

評　短文字なれど、頗る妙趣あり、さながら、纖々細々たる春雨の音を聞くが如し、ともいはんか（日東）

◉一日の旅

廣島 岩崎よし

やみ難き要事の有りて吳にいます兄上の許に行くべく母上より命ぜられ

ぬ今日は明日はと氣のみあせれど雨天續きにていふも思ふも兎角に其甲斐無く空しく日をぞ過しける或日も風さへいたく吹き加りて浪の音凄じく斯くては明日も望みなしとてとくより臥床に入りぬ夜半過ぐる頃より雷鳴甚しく今にも落ちぬらんかと安き心もなし暫くして漸々鳴りも靜まりければ何時しか夢路に入りにけんやがて目覺むれば小やみなかりし雨も風も名殘りなう晴れ渡りて朝日の影うらゝかに舟子共嬉しげに罵りさわぎつゝ沖を差して出て行くわれもそゞろに心嬉しく仕度調へ下婢もて汽船出港時間問はせぬれば十一時三十分なりといふ切符は後刻持參すべしとの事なれば唯其時をのみ待つやがて十一時過しと思ふ頃切符持ちて來る程近き所なれど乘り後れなば詮なしとて出掛く

待合所にて待つ事久し十二時も過ぎ一時も過ぎ早や二時も過ぎぬれど船の影だに見えず寄り集いにし人々もまだか／＼と退屈げなり多分昨夜來のしけに後れしならむ軈て三時過ぎし頃若者汽船見えしとて走せ歸る人人よみ返りたる樣にて浮船に乘り沖合遠く漕ぎ出づ打見やれば是れなん利根川丸とて中國通ひ中有數の大船なり漕ぎ付くや先を爭ひて乘る樣いとあさまし汽笛の音と共に動搖し初めぬ我は家人等の如何に待ちあぐみしならんと急ぎ三階なる運動場に登る此所は上等中等のみ限りなればいと靜かなりやがてわが家の前に至るや妹等のいち早く見付てもろ手揚げつゝ差しまねく我れもハンカチーフ打振りつゝある程に船は島山の間に隱れ見えずなりぬ遠近の山を望めば過し年の淸遊そゞろに偲ばれぬ「變りなき山の姿や波の音果敢なき人と物思へとや』過し年遊びし旅の偲ばれて變らぬ道の懷しきかな」など口吟みぬ程なく吳灣に入る初瀨敷島宮古吉野嚴島吾妻千代田明石の諸艦厳めしく碇泊し壯觀得もいわれず是等の艦より吹き出す喇叭の音波を隔てゝ聞ゆ兵士等は甲板に出で何事か忩がしけなりあゝ勇ましとあかず見てある程に汽笛一聲汽船は吳港に着きぬ浮船に乘りて上陸す直に腕車をかりて和庄町に至り兄上に對面しぬ時に午後四時少し過ぎなりき

評　文は巧みならねど、事實をありのまゝにしるせば書き振りは、大いによろし、そは敍事文に最も必要なる用意なれば(日東)

◉花あやめ見に誘ふ文

但馬　和多田文子

蝴蝶の夢のまだ覺ぬ間に花は靑葉に成りはてゝやうやう夏氣を催し候頃あくがるゝ心も同じう散りはてなばいと宜かるべきを夫れのみなごりとゞまりてきのふけふ暮し詫候ひぬされば兼れて一度はもろともに御契り申候堀切の花菖蒲最早四五日を過ぎなばいと盛の由申し來り候ふ故同じ心の渡田文子下坂延子の君達と明日の朝早う出立し向ふ五日の豫定にて行くとに相成り候御許樣も御同意たまはらばいかばかり嬉しう候はん思召のほど受給り度おなじうは最上川の稻舟ならずもがな御返しごとはつほどゝぎすよりも待ちわたり候あなかしこ

◉梅　雨

信濃　丹羽はる子

日をふるさみだれの雲、いぶせしともいぶせしや。あけなばさりともそらだのみも、めさむるすなはち、軒の玉水耳につきて、かうしあくるもものうくなん。例の物のほんども、いとせめてつれ／＼の心やりに、づしの中よりとりいでゝも、雨づゝみにやかたらはん友もとひ來ず、いとさう／＼しうなん。あひ知れる友の山邊にすまへる、其人がりたづねなば、花橘にやどりして、ぬれつゝなのる郭公の、初音きくよしもあらんかとはおもうものから、心に思ひたてるのみにて、たけき事とは、な

やみなき空をのみながめつゝをるに一こゑいうびんといへるは、つれはめづらしからぬことなれども、かうつれ／＼なるをりは、かゝるおとづれさへ、例の初音よりもうれしうて、いそぎわらはしてとりもたせて見るに、女學界世もて來れるになん、こと事なくひらきつゝ見もてゆくにおのれがえせ歌さへ、ものゝはしにのれる、さらば汗あゆるこゝちすれども、ひと／＼の文にうたに、天なる地なるめもあやなるまでにて、なかしき品定めさへ、めかゞやくばかりなる、なにがしのよびの雨にはやうかばりたる、つれづれのまきらはしになん。

評　別に巧みといふほどにあられど、いつもながら苦のなき書きぶりに感服也、作者も本誌文壇の珍才、勉めてます／＼其文才を揮はれむことをのぞむ(日東)

●女子文學雜感

大阪　藤井とみ子

小說家としては知らず、詩人としての女性には能く何程の望みを繫ぎ得べき、女性は到底詩人として立つを得べからざるものか、吾人をして忌憚なく言はしめよ、女子の性情は例へば藤の花の紫に美はしく咲けるも、其蔓のねぢくれたるが如き乎、理に脆くして情に强きは女子の通有性なり、情に强きが故に能く泣き能く笑ふ、女子をして無教育ならしむれば即已む、多少高等の教育を受け高尚の思想を有たしめば、其涙や丈夫一掬の涙にあらずといへども、其笑や冷かに苦き笑に非ずといへども、一莖の野菊に向へば能く自然を讃むの涙となる、春風花を吹くの天使の笑とやならむ、其思想の如何に一小天地に限られたるを言ふ勿れ、女子の涙女子の笑以て能く人を動すに足る也、起て江湖の姉妹よ、女子は抒情詩人として成功すべき一の要素を具へたるものぞ。

我邦萬葉集時代には女子の和歌に雄大なるもの多く、衣通姫以後女子の和歌に堪能なるもの頗る多かりしなり、蓋し優美は女性の最もよく適する所、其和歌に成功し易きも亦怪しむに足らずといふべし、故税所篤子女史は明治女性の才子、和歌に巧なる點に於て、かの宮内派群歌人より遙かに優る所ありしが如し、今や其を躡ぐものやある、竹柏園門下和歌に堪能なる才媛多しと聞けど、未だよく詠みたる歌を聞かず、近くは明星流の女性鳳あき子出で、其歌未だいかゝはしき評はあれど、稍歌に奇才あるを認む、請ふ大に囑望せむ、平安朝の昔にかへりて明治の世に、閨秀の一團を見才媛輩出せしは、そもはや昔となりぬ、中にも明治文壇の名花一枝ともたゝえられ、あはれ東洋のエリオツトといはれし一葉女史一たび逝きて、巾幗の奇才玆に空しく、閨秀作家また數ふるに足るものなし、今やたゝ女子大學の國文科に才媛の囑望すべきものありといへども、今幾年を經ざるべからず、省みて本誌文壇に早くより頭角を顯はし來りし、宮澤すみれ、藤田いさを、水橋康子等の諸女史よ、語を寄す卿等の文詞才藻共に秀でたるは、文學愛好の念に於て妾等の日夜仰慕に堪えざる所、思ふに諸女史は芳紀未だ若かるべし、幸に積みたるが上にも修養を怠るなくして、行く／＼は、あはれ我邦女子文學を代表するの才媛と、世にたゝえられんことを祈る

評　珍らしき論ともいへれど、詩人としての女性を簡明に說かれたり(日東)

●學びやの友

和泉　井上とみ

退きてより早や一とせを經ぬ、わが學びやは堺市のさる女學校、こゝに袖を列ねて校門を出入し、級をも同じうせし、學びの友は總て幾人かあ

りけむ、さるものは日々にうとき習ひ、道ゆくふりに知らぬさまして行過き玉ふつれなき方はこゝに數へずして、苟にも昇降の途すから掛稱棋掛の玉の價問ひもし答へもしつる、この手柏の裏表なき友、指をれば纔て十二三人とぞ數まへらる、三日見ずばとは男の事をいふものなから、女も一年たてばいたう變るもの哉。この春近隣に住む友と櫻狩の歸るさ汽車を同じうせし友の君、見まがふ許り美しうおとなびさせ給ひて、御髮の樣も引詰めの束髮に一輪の薔薇簪し給ひしに似ず今日の麗かさ、此頃嫁ぎ給ひしと聞きしが實にて、今日背の君のあと追ひ給ふ蜜月の樂しみ幸の限りは此君の上にこそとは、未だ獨身の此友が言葉なりき。名はこゝに洩さじ何某の君が卒業後五つ月たゝぬに可愛ゆき坊樣設け給ひしは、嫁きておはしゝを御腹に秘めて學びやに通ひ給へりしを、誰も知らでありし、さてもおかしきは人の運命よ、かの君がかく早く母君と呼ばるゝやうなり給はむとは、此事つたへ聞きなばこゝらの友垣の惑やいかならんと、獨微笑まれてなむ。級の年長におはして女子獨立論に熱心し給ひし友の一人、今は南海の濱に小學校の女教師を勸め給ふがあり、蠻の童を導き給ふ事の如何に骨折るゝわざならむ、風雨はげしき日とて校に君を見ぬことなしといふ其忍耐と堅志とを以てせば、私立學校を設けさせむ君が宿志の、其成功は期してまつべし、げに有望しきは此君にこそあれ。われより齡二つ下にて其頃はさい髮の緣ふさ〳〵しきに、白きリボンつけていと氣品よく、心はいと無邪氣におはしゝ君の、今は東都青山のバイオレットの匂しるき學びやにていそしみつゝありと聞く。才學共に級中に秀いてさせ給ひ、心やさしく衆望ありし某の君、卒業後まもなく亡き人の數に入り給へり、世に定まれる君さへありしと聞くを、其方の恨みはさる事乍ら、愛で給ひし父母の君が嘆きはさこそと、こゝらの友が集ふ每に彼の君の事語りて袖濡さぬはなし、其校に在るの日十六夜日記の講義を聞きて、歸るさわれと、慈母の子を思ふの厚きに泣きし事ありき、今は此やさしき君が面わ見むよしもなし、われ長しへに忘れじこの泉下の友を。

評　同窓の友のさま〴〵をしるすは、興なき業にあらねど、これはと思ふ節なきをうらむ(日東)

●兄樣よりの手紙

埼玉　守谷きもと

一、兄樣はけふ都をば立たれしはづ、あの杉山の彼方には我親はしの兄樣がと、朝日の方を都とたのしみ、あさな〳〵の早起、わけても今日はうれしかりしよ。指折りて待つ旅の空よりのお雁信、心もどかしうも母樣への告言、平案すぐれさせ給はぬおからだの、異りし空にお風もやと、心の憂さもとり〴〵に。

二、今日磯部の宿よりの御玉章、昨日の物憂心も何處へか、さて押切る封も手あらゝかに、親心の母樣の待てよ妾がと仰せらるゝも、此時ばかりは心にくゝ、母樣と額をあつめて見る〳〵、雨に濡れても飴の名物に體は恢復せりとの御文やさしく、明日つとめて妙義山へ登るとありしにぞ、母樣も妾も如何なるけはしき山にや、かつて城峯山にて見し譯なかうむれる鋸の樣したるおそろしき山がそれとかや、邪なう山登り果てさせてやと、眼と眼を見合ひはべりては又文をよみかへしぬる。

三、前橋のやどりにてとありて、妙義山登りのくはしきお話、水くきのあと細やかに油絵の景色を見る心地して、泣岩の石門のと、母樣も妾も胸のうちはら〳〵と躍り動きぬ、さる大尉殿が鯱立ちに名ある旭嶽の一節に涙落しはべりしを母樣に心つけられて知りぬ、兄樣も、深山育ちの余さへもさるおそろしき岩山ははじめてなり、前橋のおなじき校にあら

たなる友數多えて、うれしき心地に飾ろしき山詣る心ひも去りぬと記し給ふ。
四、中禪寺よりとて、足尾の銅山の話は歸りて後詳しく申すべし、(中略)心掛けにし男體登りを果しぬ、余は此山にて鹿の角の片われを拾へり、余が之を拾ひたるは吉祥か否か、たゞかなしむ、之の角は他の片われにめぐりもあはて何時までかあらむ、戀しかるべきにと、細工屋之の角を見て償すべきほど、そな余によといふ、きざまむとにや、いとにくし、「拾ひ親のなさけもあれば人の手に、いかで渡さむ片われの角」、とあり又、湖に舟うけて乘りめぐる、まことに快なり、あすは華嚴瀧を見て心を洗ひ、さて後日光に向ふべし、とあるさる、鹿の角早く見まほし、旅物語早くきかまほしと、母樣も妾もいひあへり。
五、もはや届くべき日數なるに、日光よりも水戸よりもおたよりなし、今宵は大洗の宿ならむに。
六、、、中學校よりとありて兄樣の手蹟にあらず‥‥。(完)
　評　いま少しおもしろく書けぬものにや(日東)

新體詩

●夏の夕

佐々木和子

(天)

西に照りたる天つ日は
　山のかなたに落ち行きて
うばらににほふ夕映の
　光はまたくうすれたり
入相つぐるかねのおと
　靜けきひゞき傳へつゝ
　蘆の葉そよぐ川岸に
　　夕じほ遠くみちて來ぬ
ゆめみる如き星くづは
　くしき光を放ちつゝ
　　かみのいませる樂園に
　　　導くことゞがゝやきぬ

靜かなる暮色の、うつし出して、眞に迫る。新躰詩といへば女子も、男子のそれの如く、晦澁無雜なるが多きに反して、此作者の只管優雅ならむとつとめられたる尤も見るべし。
(住所不明至急申込あれ)

●曉の歌

伯耆米子町大字紺屋町船越方　池田みつ子

(地)

雲井の宮の欄干に
焔の男神立ち倚りて
輝く御手をあぐるとき

千條の線は海に垂れ
磯馴松が枝風立ちて、
呼ぶは樂しき曉の歌。

其あけぼのゝ歌にさめ、
玉の宮居のまどあけて、
龍の宮姫ゆるやかに、
かきなす琴の一曲に
闇もさ霧もきえゆきて
あけてそわだれ浪の上。

うるはしき、調清らしき詞、さながら曙の風と浪とにも似たらむか。

●我が歌

〔入〕 信州上水内郡柴村大字住良木四八一番 小林つね子

菫となりて岸の邊に、きよき姿をほこらむか、
さはれつれなき夕風に、散り逝く運命をいかにせん。
胡蝶となりても、草の、花に居らうつさむか、
さはれいつしか蜘蛛の、網にかゝるをいかにせん。
清水となりて岩かげに、たのしき戀をかたらむか、
さはれ流れて末つひに、海に入る身をいかにせん。
雲とならばや大空に、ひとり自在に翔るべく、
さはれ嵐の襲ひなば、影だにとめぬ儚なさよ。
いづれ情につらき世は、
そよ夕ぐれのなづかしき、
星とならばやむらさきの、
光りまばゆくきらめきて、
とこしへ戀をかたるべく。

流滑宛轉よく其云はむと欲する處をいふ。蓋し前者の壘を摩するもの。特に下して人となすは、此種のもの尠しとせざればなり。

●巖頭に立ちて

〔秀逸〕 信濃 小松のぶ子

そはうらぶれし少女が、戀の懊惱の忍び音か、
あらず淋しき荒磯に、闇を私語く浪の音。
ゆくては遠き波の上、闇にも走る白銀の、
かほそき光今更に、戀の行方を思はする。
白きひかりの薄れては、いたましかなわた海の原、
はてしもしらぬ波の上に、たゞ〳〵闇の墓なるを。

眞理に似たる手をのべて、浪の滴を掬び見よ、
わびしかるとも君が手に、奇しき運命を解きえなん。

見ずや消えゆく夕づゝの、その行末を思ふまに、
淋しの磯よ露こめて、浪は靜けき夜となりぬ。

蝶の羽袖をかへしては、晨の花にいかふごと、
秘めて彩ある星くづの、人を咒ふか紅に。

風や千里の浪に鳴る、闇に私語く音をきけば、
浪のしぶきのしく／＼に、忍ばるゝ哉戀の行末。

前三四節大に佳、然れども後數節いつれも晦澁の躰あるは惜むべし。

●夕妹の墓をとひて　信濃　阿佐野みよ子

（秀逸）

靜かに鐘のひゞき來て　夕の窓に二つ三つ
散りくる花を見てし時　悲しき我身と知りにけり。

困しき胸のおもひをば　ひくき調の詩にずして
そことしもなく逍遙へば　流るゝ星のかげ靑し。

いつとは知らず己が身は、夕闇とほくたどり來て
今は世になきいもうとが　み前にひとり立てりけり。

色も昔のまゝにして、春美くしく咲き出でし
かほりも淸き白桃の　一枝をかるく携へて。

夕べ園生に手を取りつ　樂しく見てし此花を
手向の料になさんとは　はかなき蝶が夢のごと。

よみぢの花は赤くとも　そはまどはしの色なれば
情の露はみえずして　葉うらに潛む魔もあらん。

石も冷たきおくつきは　あつき涙はそゝぐとも
色うつろはぬ花かげの　君が眠りはさめやらず。

よし朧夜を風あれて　松の梢はさわぐとも
なき名きざめる碑の　底の夢路は安からん。

折しもそらの星一つ　奇しき光に流れつ、と
仰げど影は見えやらず　あはれ妹が靈かそも。

女學世界定期增刊夏の卷

第貳卷第八號

ほととぎす

（六月十五日發行）

ほととぎすは、女學世界才媛詞藻第貳卷夏の卷として六月十五日を以て發行す、時方に夏季滿目の綠陰翁鬱として翠微窓前に滴るの好季節に會す、本誌の增刊は體裁高尚にして趣味の多饒を以て知らる其の內容は例に依つて紙數二百八頁、中才媛の競爭になりたる▲小說十五種▲抒情文三十種▲和歌百五十種▲新體詩二十種▲消息文三十種▲敍事文三十種を以て成る眞に是れ奇葩瓊章の展覽會たり、猶附錄として左記八編を收め、口繪には內外の人物風景の新鮮奇拔なるもの十二面を添ふ。

附錄

▲英國の家庭　英國劍橋女子高等師範學校長　ミス、ヒユース

▲支那の婚禮　在漢口理學士　西澤公雄

▲古代日本女文豪　塚越停春

▲泰西御伽話　長田蕙香

▲隱れたる日本の風俗　文科大學講師　小泉八雲

▲清少納言　鹽井福子

▲將軍の寡婦　華族女學校講師　淺岡一

▲父親　武田櫻桃

雜報

●東宮妃殿下御着帯式

去月十五日東宮御所に於て妃殿下御着帯の御式を御擧行あらせられたり當日齋藤東宮太夫、木戸同侍從長、村木同武官長、桂主事、錦小路主事心得、萬里小路、正親町、生源寺、富田各女官は午前六時より東宮御所に伺候し諸般の準備を調へ同八時頃鷹司熈通公は夫人順子と同乘大禮服にて參着齋藤太夫、桂主事、萬里小路、生源寺女官等御玄關に出迎へ直に表御殿に誘引此所にて御帯を捧げ太夫各女官、産婆等恭しく之を受けて妃殿下に奉り鷹司公爵夫妻は種々の御饗應を受け一旦退下玆に目出度く御式を終り同十一時より皇太子殿下は御正裝の上齋藤太夫、木戸侍從長、村木武官長、侍從、武官等を從へさせられ表御殿に御出座參賀の爲め伺候したる田中宮相、同夫人、德大寺內相、香川皇后宮太夫、花房次官、岡侍醫局長、橋本顧問官、九條道孝公、同道實氏、同夫人、鷹司熈通公、同夫人等に拜謁仰付けられ畢て有栖川宮、同妃兩殿下を召され御開宴あり田中宮相以下各女官等に御陪食仰付けられ掛判任官以下には夫々酒饌を賜りたる由尙ほ右の御式御擧行に付き兩陛下其他より左の如く御祝儀の御贈進ありたり

聖上陛下より皇太子殿下へ	生鯛	一折
聖上陛下より皇太子妃殿下へ	生鯛	一折
皇后陛下より皇太子殿下へ	生鯛	一折
皇后陛下より皇太子妃殿下へ	生鯛	一折
常宮周宮兩殿下より皇太子同妃兩殿下へ	五種交魚	一臺
富美宮泰宮兩殿下より皇太子同妃兩殿下へ	五種交魚	一臺
有栖川宮同妃兩殿下より皇太子同妃兩殿下へ	生鯛	一折
九條公爵より皇太子同妃兩殿下へ	五種交魚	一臺
典侍柳原愛子より皇太子同妃兩殿下へ	鯉	二尾
中山一位局より皇太子同妃兩殿下へ	三種交魚	一臺

又皇太子同妃兩殿下よりは兩陛下に對し奉り生鯛一折宛の御答禮あり前記各宮其他へも五種又は三種交魚の御贈答ありたる由

●文相の女子教育方針

此頃文部省に開かれたる全國高等女學校長會議に於て菊地文相の演説せられたる要概は左の如し、近來女子教育論のかまびすしき時節柄、まづ第一に當局者の意見を聞かむとて何人も望む所なるべければ此に紹介す。

△我國の女子は多數の諸外國人と異り良妻賢母となること即ち結婚を目的とするもの普通なるが故に女子教育は職業的專門、高等の學科よりは普通教育の方一層必要にして適切なりと信ず△また我國の家庭も外國の家庭と異なるを以つて今日の如き思想過度の時代に於ては、動もすれば新舊思想の衝突を來たし家庭の不和之れより生ずるの實例尠しとせず、我が女子教育の目的之れに鑑み品性の陶冶は勿論智育の例に於ても特に新舊思想の衝突を避くるの考案を以て教授に努めざるべからず△人は感情の動物ながら殊にも女子は感情に强き性質を有するものなれば感情の激發に際しては往々にして常智常識を沒することあり之れを救ふの道は理學思想の變遷即ち理學的智識を與ふるに在りたとへは近來中等以上の家庭にてすらも淫祠邪教の迷信非常に流行し居れるが如き亦た此感情の奴隷と爲れる結果に外ならず△特に望むべきは日常生活に必要なる智識と趣味とを與ふるを最初の目的と爲すことなり換言すれば女子に必要なる常智常識を主とする教育の方針を執るに在り

▲而して右等の目的を達するが爲めには學校と家庭との連絡必要也而して斯教育を以て任んずるの人士は、よく〳〵生徒の父兄の實際的企望を述ぶるに向つて、懇切に耳を傾くる雅量と衷情となかるべからず云々と

◉女子職業學校製品展覽會

去月十日（土曜）午前八時より神田一ツ橋外同校に於いて校友大會を兼ね生徒製作品展覽會を擧行せり今其景況の一斑を記さんに同校玄關傍右方の教室を來會者の控所に充て此室に東京府教育品展覽會へ出品の大花籠外造花二籠を置きあり少憩の後生徒に導かれて裁縫、編物、刺繡、造花、圖畫等各科の授業を順次觀覽したる後販賣所に充てたる同校北部大教室に入れは生徒の製作に成れる靴下、手拭、錢入、帶止、洋袴下、枝折、羽織紐、皿敷杯數百點を花の如くに置き飾りあり且編物にの錢入、枝折等を柳て枝に結び陳列所の諸所を裝飾し頗る美麗なりし次は圖畫科陳列場にて繪畫額、同書畫帖用、帛紗、夏の半襟、帶上げ、扇子、團扇、名刺入等へ總べて圖畫を應用せしものにて女子の特有性とも云ふ可き綿密なるもの多く陶器附繪も共に會場に陳列し皿、湯呑、菓子器一輪瓶等これも亦總べて圖畫を應用しあり次は刺繡科陳列場にて信玄袋、人形、帶止、寫眞入、ハンカチーフ、紙入、小楊枝入、額等にて最も人目を惹きしは鹽瀨に刺繡せし額面なり次は裁縫科陳列場にて小兒夏洋服、人形衣服、涎懸け、信玄袋、紙入、小兒夏帽子等種々あり時節柄小兒の洋服帽子等殊に需用者多かりし次は造花科陳列場にて花簪、花籠等數百點あり山吹の一枝五十錢薔薇一枝六十錢等にて多數の造花大瓶に挿みあり最も廉價なるは花簪にて三錢高價なるは花籠

にて十圓のものあり次は西の別室にて割烹科の實習あり各生徒をして鍋、盛方、道具、洗方、立廻り等の役を分ち教員監督して薩摩汁を作りつゝあり其他の料理の口取(二色卵)肉けんちん(隱元金團)鉢(照燒伽羅蕗)甘煮(章魚の櫻煮あげ慈姑)等にて各生徒手襷にて甲斐々々しく從事しつゝありしが總て同校生徒の製作は固より販賣のみの目的に非らざれば比較的親切に製作し且廉價なれば來覽者の婦人等手土産に購買せしもの多かりしが總て、當日の製品賣上金額は一千四百餘圓の多きに上れりと。

●華族女學校運動會

同會は去月十四日校內に擧行せられ　皇后陛下を始め奉り四內親王殿下も御臨校あらせられたり今其景況を記さんに名にし負ふ同校の事とて富貴の花の魏紫姚黃を一園の中に蒐めたらんが如く眩ゆき計り美はしかりしが中にも初等中等一級二級の生徒が打揃ふて方形運動を爲せるは恰も蝴蝶の春風に舞ふが如くダンスと體操の調和太だ可なるものあり女子の運動としては誠に相應したるものなり、初中等三級の毬籠競爭に北白川宮の御息女が金枝玉葉の御身に御在しながら御身輕げに出でたゝせ玉ひいつも勝を占め玉ひしは喝采四もに起れり高中第二の啞鈴體操意外に調子よく、幼稚園の遊戲はいつもながら可愛らし霞む夕日の舞、小鳥の舞は舞と體操の調和を計りたるものにて奇麗言ふ計りなし、高中全體の配膳競爭は滑稽にして高等小學第一第二の生徒がピアノに連れて回轉行進螺旋運動を爲したるは優美なり、ローンテニスには意外の巧手多く鐵啞鈴の體操には男まさりの力者も見へたり、初中一の障礙物競走は趣わりて面白く高小三、初等一の表出體操は雅にして優なり、高等中學全體の方形運動螺旋運動はさすがに姿勢能く整ひ態度能く肅にして頗る見るべきものあり其他蛇行進、漁獵競爭の奇なる踵趾運動、柱環りの美なる人目を喜ばせしが中にも高中一の生徒が擔架競爭の名の下に赤十字社員が戰地に於ける負傷兵に繃帶を施して擔架に運べる實狀に擬したるは甚だ感動を與へたり、最後の綱引は卒業生と職員が競爭にて一勝一敗相當りしに喝采の聲四邊より起り壯觀いはん方なかりし、

●荻野千壽子

同女は當年取つて僅かに八歲と九箇月、父を荻野登一

郎と云ひ廣島市西本川に生る、先代は相應に資産ありしも右父の代となりて衰へ今は小やかなる賣藥其他小賣りを營み居れり千壽子幼より物覺え敏く且記憶に富み平生遊び戯むる中にも人の言語を聽き居りて忘れず漸く小學校に入るや學問の進み優に群童を拔き其後故あり卒業せざりしかど今日は其識力僅かに高等小學卒業の上にありと新聞を讀みて社說論文を解し又演說に巧みにして先日九段偕行社に招かれ貴顯紳士滿座の間滔々おめず臆せず愛國婦人會の主意を述べたるには一同アッと舌を卷きしとなん、彼は號を鐵嶺と稱し筆揮縱橫未だ熟すると云ふにあらざるも其達者なるは殆んど大人も及ばざる風あり又同女は一昨年九月以降關西各地を巡り、神社佛閣に奉りし扁額、各學校生徒の面前に揮毫せしもの等其數を知らずといふ、今度の上京は、益々其技を研き 旁 諸學科を修めて其天才を大成せしめん爲なりとぞ、されば撫育者其の人を得次第、之に少女史が一身を委託し、父は直に歸鄕の途に上るべく、上流社會の令夫人中、已に少女史の將來に囑望し居るものもありとかや、由來神童に大成者少なく、曾て四國に鐵門といへる少童あり書名夙に江湖に鳴り、神童の稱一世に高く、終に知を博文老侯に辱うして伊藤の姓を賜はり、明治の瑞なりとの意を以て、明瑞の號を付せらるゝに至りしに拘はらず、爾來志滿ち意驕りたる爲なればにや、將附隨者の其人を得ざるに依ばにや、盛名亦た疇昔の如くならず、將に曲書者流と其選を一にせんとすと傳ふ、鐵嶺女史たるものよろしく自重して可ならんか。

●寺田翁の節車談

高等商業學校長寺田勇吉氏は曩に帝國教育會に於て人力車に就て有益なる演說ありたり曰く『東京には凡そ九萬輛の人力車四萬人の車夫があつて之が爲め費消する高は一年殆んど千萬圓に近いと云ふ驚くべき金額である而して車夫の身躰上より云ふも肺を破り心臓を破り大に健康を害ふは確かなる事實である近來人力車夫が益々增加して苦しいながらも生活を爲して行く譯は乘り人も以前より殖えたからであるがさて乘客はと云へばその身分服裝等より見るも徒步するが相當なるべきものが妄りに車に賴るやうになりたり惡慣惡化である車に乘る金で牛肉か鳥でも食したならば身躰の營養を助くることが出來て丈夫となるに却て人力車に乘て脚の健康を害することをして居る地方へ行つて見て

も縣知事や書記官や市長などが役所と自宅とは目と鼻の間にありながら車に乘つて往復する又は自分が徒歩して後より空車を曳かせて行く是は實に無駄なことで何も必要もないに躰裁のみを飾るには及ばないことである東京も地方も益〻此の如き有樣になつては生活に逐はれた上句の果ては人力車夫とならうと云ふ惡しき事例を作る如何しても今の内に防ぎ止めて此賤業を減じ一方には乘る人曳く人の健康保全を計らねばならぬ一躰當節の人達が車に限らず旅行をするときにも停車場に着くと自分にも持てる輕き荷物をさへ直ぐ「赤帽」に渡したり旅館の下男や下女に蝙蝠傘迄持せるなど漸次無性になりて來た外國人などは重々しき荷物を身躰も曲ずに悠揚としてヒッ下げて歩み行く姿態は立派なものぢやナニ躰格が違ふと違ふぢやない十分健康を養へば誰にも出來る事である所謂活潑なる精神は健康なる躰軀に宿るであるから我國民は一層躰力を養成せねばならぬ節車會は脚力躰勢を丈夫にする一の方法で極めて必要なり故に諸君も進んで實行し亦奬勵して貰ひたいものぢや」云々

◉女子の友誌友會　東洋社の發起に係る同會は去月十一日神田明神社内開花樓に開き席上成瀨女子大學校長の家庭教育に關する演說、寺田文部書記官の歐洲婦人と日本婦人との體格比較談、清水澄風氏の玩具の話等あり畢つて一同撮影、餘興に丸一大神樂あり福引あり午後五時散會

◉吉村寅太郎氏と成女學校　吉村氏が今回第四高等學校長となりて金澤へ赴任されしに就て成女學校の方は自然責任を解かれしならんとの事なるも、同校は吉村氏が特別なる目的を以て設立されしのみならず爾來長足の進歩を以て校運隆昌に赴きたる此の際責任を辭せらるゝが如き事はなく。同校の休戚に關しては依然責任を負はるゝ事にて同氏不在中は水谷直孝、嘉悦孝子、宮田修の三氏に一切の校務を委任し一層の熱心を以て盡力せらるゝ由、

◉女子裁縫學校　本校は女子に必要なる和洋服の裁縫を教授し傍ら修身、家政、禮式、刺繍、造花、挿花、編物、茶の湯等の諸科を兼修せしむ專ら日常必須の智識養成を目的として設立されたるものにして學科を本科及撰科の二種とし、本科は裁縫を專門とし自餘の科目を撰科とし、本科の修業年限を二ヶ年とし、別に補習科なるものを設け古代物の裁縫を教授す月謝は本科五十錢、撰科は一種に付四十錢二科以上は中額の事、猶ほ遠國の者には寄宿を許す食費一ヶ月五圓校舍は東京牛込區北町三番地に在り

◉栃木婦人會　同會は爾後益〻盛況にて去五月四日第三回大會を開き東京よりは下田歌子、上杉文秀諸氏出會して有益なる談話あり、當日決議の事項は貧民の學校設立、婦人界の風俗矯正、貧民救濟等にて爾來着々實行を急ぎつゝある由會長營野松子、幹事平岩幸吉氏專ら會務に鞅掌して盡力さるゝ由

◉大隈伯の女子教育意見　大隈伯頃日客に對して曰く余は女子の高等教育に關しては絕對の賛成者なり成瀨仁藏氏の校長たる日本女子大學校には創立委員の一人として盡力し尙今後も應分の助力を與へんと欲す然れども余は女子の高等教育に付一の憂ふべきものあるを認む其は他に非ず乃ち高等教育を受けたる結果唯智育のみ進みて物識と作り藝人と作る是なり婦女子は天性上別段智識の涵養を主とせずとも自然に相當の進境に入り得るものなれば余は德育と體育とに重きを措かんことを當局者に希望して止まず體育の必要なるは勿論一般の既に知了する所なれば喋々を要せず德育は一層重大の問題にして世の學者、教育家の苦心する所なるが余の考にては常識以外の德育は女子の涵養上害あつて益なく殊に乾燥無味なる宗教趣味を含有する德育法の如きは大なる害毒を施すものと確信す故に余は女子に對する高等教育の第一義は常識以内の德育を重しとし體育之に次ぎ智育の如きは最下に措く可きものと思考す此調子にて女子を涵養し來らば遂に圓滿なる結果を收むべきを信じて疑はず云々

◉大學醫院の受診手續　東京帝國大學醫院にて診察を受け又は此處に入院せんとする者の中には同門前に入院手續案内などゝの看板を揭げし狡猾なる案内者に不法の金錢を貪らるゝ事少からざりしが醫院にては兼て此通弊を一洗せんと是迄午前の一定時間内に先着したる患者十五人に限りて診察する方法なりしを改め今度は其來院の遲速に拘はらず抽籤を以て診察者を定むる事としたるに尙ほ彼の營業者等が不都合を働く摸樣ありしかば更に現時の如く外科内科共に午前六時迄に到着せし者は其人數に制限を置かず先づ助手をして一應悉く診察せしめ其中重病と認めたる十五人を限りて主任醫が診察する事と改めたれば從來の手續に比しては一層簡便にもあり且つ前記の如く六時迄に同院に至りし者は悉く助手の診察を受け得る事ゆゑ受診者は能く此邊に注意して狡猾なる案内者の爲めに無益の金錢を貪られざること肝要なるべしとなり

◉玉川の鮎　本年は鮎の生育非常に好く目下既に五寸以上七八寸位のものあるより遊漁の順路は甲武鐵道の國分寺停車場にて下車し府中を經て赴けば五十丁この往復車代一圓位なるべく又立川、日野驛に下車すれば玉川迄廿丁程なり遊漁の方法には種々の好みあれども鵜一番（漁夫三人）にて二圓五十錢、筌一圓七十錢、

大船(二十二三人乘合)二圓、小船七人乘一圓五十錢、また跳網は水幅と人數に依て一定せず右の相場は立川、日野ともに同様なりとぞ

◉女子文學會●●● 神田區小川町一番地に新設の同會は一般、女子敎育の隆盛につれて入會者頗る多しといふ、會長は木村博士、顧問は井上、小杉兩博士にして講師には井上賴圀(枕草子)尾上文學士(三鏡)大川茂雄文學士、(制度)吉丸文學士(十訓抄、女子風俗史)藤井靜子(作文)小杉博士(有職、源語)佐々木信綱(古今集)南茂樹(文典)新村文學士(言語學)木村博士(萬葉)畔柳文學士(文學研究法)等の諸氏なる由

◉家事講習會●●● 前記の女子文學會內に新設の同科は入會者既に定員に達せしも大敎場を得たれば此際尙若干名の入會を許すといふ、講師は女子高等師範敎授松本文學士(兒童敎育)同敎授佐方鎭子(衣食住、家事敎授法)同敎授矢田部順子(裁縫敎授法)同敎授岩川理學士其他學士數名なりと。

◉圖案の流行●●● 目下裾模様或は帶地織物などの圖案に在來の趣味を用うるものは東京よりも寧ろ京都の方割合に優れり、先頃白木屋、三井などの吳服店が懸賞にて募集したるも優等當選者の多くは京都の出品なりし裾模様帶地、其他衣服の模様及び友仙等は數百年間殆んど專賣の如くに京都の特有工藝品でありし故、圖案家の數の上より見ても又多年經驗の上より見ても東京は京都に及ばざるべし我國固有の圖案に於ては東京が京都に及ばざる點もあらんか、併し近頃歐米の圖案を參酌して製作したる染模様は未だ充分に趣味あるもの尠し、されどこの歐米の新趣向を加味したるのは京都よりも東京の方割合に發達せり、故に京都は歐米の圖案を學術的に順序を經て學び、東京は我國在來固有のものを探究せしならば双ながら完全に近き者が出來るならん

◉露國皇帝の日課●●●●● 露國皇帝は每日午前八時三十分を以て起床し自ら衣服を着替へて先づ茶を啜り九時に至れば直に堆積せる諸文書につき一々點撿し或は國務大臣を召して種々下問し給ふことあり十時より十一時の間において晝餐を喫し晝餐後一時までは或は國務大臣の覆奏に對し一々意見を陳述し或は幾百の文書につき御璽を鈐され或は各地方官よりの報告を披見する等殆んど繁劇を極むるに係らず陛下には時に少計の菓子と茶とを喫する外は少時の休憩をすら取り給はず斯くて一時に至れば一先づ別室に退き此に二女王殿下を相手

に四時まで種々の遊戯に耽り給ふこと常なり即ち一時より四時までは陛下の休憩時間にして此間に侍臣をして内外諸新聞を朗讀せしめ熱心に聽取さる外國新聞は倫敦タイムス、巴里フヰガロー及びコロゼ、ガゼットの三種に限られたり斯のごとく陛下には新聞を愛讀するも書物は殆んど手にされたることなしかくて四時より七時までは再び國務を見らるゝこと午前のごとく午後七時に至て晩餐の宴を開かれ此に初めて陛下が家庭團欒の樂には入らるゝなり通常寢室に入らるゝは午後十時と定まりたれど國務多忙の折は深夜まで眠に就かるゝことなくその熱誠に且勤勉に在すこと洵に驚くべきばかりにて以上の日課は病氣其他事故ある折を除き未だ嘗て一日も怠り給ひしことなしといふ

◉慈善感化事業の熱心家 元市ヶ谷監獄署看守にて目下文部省の省丁なる磯井彦次郎氏は去る明治十九年中より大に見る處ありて衣を割き食を減じて慈善感化の事業に熱中し特に囚徒匡正の事に留意せし結果幼年免囚及び其他不幸者數名を自宅に同居せしめ或は其他便宜の地に於て救養するなど大に斯業の爲盡力せしが追回遂に周圍及び感化せられたる囚人等の勸誘に從ひ日本慈善種德協會なる者を設立せしと警視總監に願書を提出したり其計畫によれば資金募集額一千圓に達したる時公然事業に着手し其五萬圓に達するを俟て感化院の建築に從事すべしといふ

◉仙臺侯龜千代丸の產衣(口繪解) 右は三井吳服店陳列場參考品として出品せしものなるが龜千代丸(綱村公)の方は地質紋羽二重お納戶地寶づくしの模樣紋は五つにて仙臺家の定紋竹に雀又卯の助丸(これは綱村公の養子吉村公)の方は地質は羽二重にて茶色干網に貝づくし模樣いづれも丸袖丈は今日よりも短く吉村公の方には白羽二重の繻袢あり是は伊達家の舊臣平野保章の出品にして此人の話によれば九代前の祖は伊勢守といひし神官なりし由、同公七夜の祝に御祈禱の節拜領せしなりと伊勢の守は伊達騷動の時奸人の讒により浪人となりしが龜千代の七世の時再び元の官職に付維新に至れる由尤も維新の際流浪せしも今日まで保存せしが去年同店にて政岡の衣を陳列せしより同品も出所確かなりし故陳列したるものなりといふ

◉懸賞文受賞者中住所不分明の分

本誌第六號紙上に掲げたる懸賞文當選者中左の五名は住所記載無之爲め賞品送附致難く候間至急御通報有之度候

▲新小枝(廣島)▲井上よし子(靜岡)▲重松竹子(備前)▲吉村とし子(相摸)▲彦坂信子▲山家ゆき子(米澤)

女學世界第貳卷第九號記事豫告

（七月五日發行）

▲風俗改良談（東京音樂學校長）……渡邊龍聖君
▲題未定……三輪田眞佐子君
▲夏の自然（科學談）……藤堂梅軒君
▲忍耐の說……野中千代子君
▲生活の金針（成女學校講師）……嘉悅孝子君
▲家庭隨感（ドクトル）……川瀨元九郎君
▲感化院の話（續）……高瀨眞卿君
▲室內裝飾……近藤嘉三君
▲家庭時言……大町桂月君
▲音曲の話……水原翠香君
▲ローザボンビュール女史……中內蝶二君
▲天女使（漢文講義）文學士……久保天隨君
▲淀のわたり（國文講義）文學士……尾上柴舟君
▲詠歌のしをり……文學士……武島羽衣君
▲挿花のしをり……稔華庵主人
▲鮑のはなし（科學談）……金非金牛君
▲素人料理法……岩間芳松君
▲人間身体の妙能（下）……林壽祐君
▲家庭小說懸賞披露
其他、家事、衞生、禮法、生花、裁縫、編物、圖案等例により材料豐富

毎月一回五日發行

定價表

一冊	（紙數二百八頁）……金二十錢	郵稅 一冊 二錢
四冊	（三ヶ月分）……前金七十五錢	
八冊	（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢	
十六冊	（一ヶ年分）……前金二圓八十錢	

內｛定刊數……十二冊 増刊四回…三、六、九、十一月價格同一

廣告料

	二十四字詰一行	半頁廿二行	一頁六十四行
特等	……	……	割引 三十三圓
一等	四十三錢	十三圓七十六錢	割引 二十七圓
二等	三十五錢	十一圓二十錢	割引 二十二圓
三等	三十錢	九圓六十錢	割引 十八圓

▲等級の位置〆切日等都合次第御相談可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る。
●總目錄御入用の方は二錢郵券相添へ申込あれ。

明治三十五年六月五日發行　第貳卷第七號

編輯人　松原岩五郎
發行人　大橋新太郎
印刷人　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町二十六番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

大町桂月君著

美文韻文 **黄菊白菊**

全一册洋装袖珍美本 正價二十五錢 郵税六錢

大町桂月氏の文は、蟄龍を動かすと已に久し悲慨の聲を發しては秋風の老松に激するが如く。哀痛の音を吐きては、孤猿の幽澗に呌ぶが如く、句々血を吐き、字々珠を綴る。麗くして沈痛優にして豪宕、洵に是れ一代の才筆文壇の珍品、一讀すれば人の思を清くし、感情を純潔ならしむ。讀書家の燈下、美文と韻文とを學ぶ者の摸範となすに足る。この絶好可憐の册子なかるべからず。

●内外遊戯法 ●全一册洋装並製 ●正價二十錢郵税六錢

●新撰假名遣活法 ●全一册洋装並製 ●正價十五錢郵税二錢

●支那學術史綱 ●全一册洋装並製 ●正價三十錢郵税四錢

●冠詞例歌集 ●全一册洋装上製 ●正價二十五錢郵税四錢

大和田建樹君著

散文韻文 **深山櫻**

全壹册洋装袖珍 正價金四十錢 郵税金六錢

此書は大和田先生の散文韻文を輯めたる者、一たび繙かば櫻の山に分入るが如く、手を放つ能はざるの妙ある可し。

●新体詩歌自在 ●全一册洋装上製 ●正價一圓郵税十二錢

●新体詩學 ●全一册洋装並製 ●正價十五錢郵税四錢

●歐米名家詩集 ●全一册洋装並製 ●正價金十五錢郵税四錢

●花さくら ●全壹册洋装上製 ●正價二十五錢郵税四錢

●國民教育の方針 ●全一册洋装並製 ●正價七十五錢郵税十二錢

●況翁閑話 ●全一册洋装上製 ●正價二十五錢郵税六錢

●海軍出身案内 ●全一册洋装並製 ●正價四十錢郵税六錢

●通俗治療救急法 ●全一册洋装上製 ●正價三十錢郵税四錢

大和田建樹君著

散文韻文 **雪月花**（第六版）

全壹册洋装袖珍 正價金三十五錢 郵税六錢

其文は、清楚婉麗其歌は優雅流滑、奇想天外より來りて、句々風を生するものは、大和田先生の筆と爲す。蓋し落寞振はざる今日文學界中の旗鼓たるものは此書を措きて他に又た何かある。

●新撰歌典 ●全一册洋装並製 ●正價四十錢郵税八錢

●霓裳歌話 ●全一册洋装上製 ●正價三十錢郵税四錢

●竹柏園集 ●全壹册洋装袖珍 ●正價三十五錢郵税六錢

●藻木鹽 ●全壹册洋装上製 ●正價四十五錢郵税六錢

文學士 土井晩翠君著

天地有情

全壹册洋装袖珍 正價金二十五錢 郵税金六錢

峨々の山洋々の水以て晩翠君の詩を評すべし此集君が今日迄の吟峨を錄したるものにして新体詩中別に一旗幟を樹立するもの詞華爛熳誠に明治詩壇の新光輝たるに背かず請ふ愛讀を玉へ

（綴付の二）

美文韻文 **花紅葉**

鹽井雨江 武島羽衣 大町桂月 三君合著

●全壹册洋装袖珍美本 正價三十錢郵税六錢

雨江、羽衣、桂月三文學士の錦心繡腸、吐いて美文となり、發して韻文となれるもの、集つて此冊子に在り。才華爛發、紙上珠を聯ね、洵に花紅葉を一時に看るの心地すべく、明治文壇の奇觀たり。

●英文典語句慣用法 ●全壹册洋装上製 正價六十錢郵税六錢
●英和應用會話指針 ●全壹册洋装上製 正價三十錢郵税四錢
●實用英和作文 ●全壹册洋装上製 正價三十錢郵税四錢
●新撰日本文典 ●全貳册和装上册 正價九十五錢郵税八錢
●文章字典 ●全壹册和装上製 正價七十錢郵税六錢
●歴史字典 ●全壹册和洋上製 正價六十錢郵税八錢
●日本大辭典 ●全壹册洋装上製 價二圓廿五錢小包四百匁
●日本小辭典 ●全壹册洋装上製 正價七十五錢郵税八錢
●日本辭林 ●全壹册洋装並製 正價三十錢郵税六錢
●美辭寶典 ●全壹册洋装上製 正價三十錢郵税六錢
●山陰麒麟 ●全壹册洋装上製 正價廿五錢郵税四錢
●芳哉義士の譽 ●全一册洋装並製 正價三十錢郵税六錢

日本體育會員西川政憲君著

育兒體育 **健康要訣**

●全壹册洋装袖珍美本 ●正價三十錢郵税四錢

我國の家庭を見るに育兒の方法其宜きを得ず往々にして敎育を妨げ反て身の不健康を招くの弊あり著者久しく之を憂ひ日常の經驗に徵し本書を著はさる其說述の懇篤なるは敢て喋々の辯を俟たず

●演說討論軌範 ●全壹册洋装並製 ●正價三十五錢郵税八錢

文學士大町桂月君著

大絃小絃

●正價金三十錢 ●郵税金八錢

大絃急雨の如く小絃私語の如しとは、琵琶の聲のみならんや。桂月先生の此書、才氣潑剌筆力縱橫、以て普通文の摸範とすべく以て作文の指南とすべし。

●突貫 ●全壹册洋装上製 正價三十錢郵税六錢
●戰塵 ●全壹册洋装上製 正價三十錢郵税六錢
●千山萬水 ●全一册洋装上製 正價五十錢郵税十錢
●續千山萬水 ●全壹册洋装上製 正價五十錢郵税十錢
●耶馬溪 ●全壹册洋装上製 正價四十錢郵税四錢
●一蓑笠 ●全壹册洋装上製 正價三十錢郵税六錢
●檜木笠 ●全壹册洋装上製 正價四十錢郵税六錢
●南船北馬 ●全壹册洋装上製 正價四十錢郵税六錢

破竹居士著

健康と遠足

●全壹册洋装紙皮金字入 ●正價三十錢郵税六錢

凡そ政治家たると事業家たると學生たるとを問はず其身の健康を保全せずんば健腕も振ふ能はざるべく目的も達し能はざるべし本書は著者二十有餘年の實驗に徵し健康保全の最良法を詳述したるもの而も其議論文章の多姿多様なる讀者をして覺へず嗒然たらしむ

●續南船北馬 ●全壹册洋装上製 ●正價四十錢郵税六錢
●旅硯 ●全壹册洋装上製 ●正價四十五錢郵税六錢

東西二十四傑

●全壹冊　洋裝袖珍美本
●正價三十五錢郵稅六錢

●源爲朝……（桂月）
●ハンニバル……（天溪）
●秦始皇……（鯉洋）
●シーザル……（空花）
●山田長政……（烏城）
●コロンブス……（天溪）
●項羽……（賀軒）
●加藤清正……（秋香）
●ペートル大帝……（華水）
●大石良雄……（青軒）
●フリードリヒ大王……（成友）
●鄭成功……（露伴）

●ロシントン……（不染）
●木戸松菊……（水哉）
●鐵木直……（紫山）
●ネルソン……（左川）
●新田義貞……（蘭雪）
●北條早雲……（麗水）
●唐太宗……（絅齋）
●ガルパルジー……（春汀）
●李鴻章……（柏軒）
●モルトケ將軍……（霞城）
●木村重成……（小波）
●ジャンダーク……（樗牛）



近世 世界十偉人

正價五十錢郵稅八錢

●（伊國）カミロ、カヴール……松村介石
●（土國）オスマン、パシア……小山正武
●（露國）ゴルチヤコッフ……中西牛郎
●（獨國）ビスマーク……松本君平
●（支那）曾國藩……川崎紫山
●（英國）ベーコンスフイルド……尾崎行雄
●（日本）西郷隆盛……三宅雪嶺
●（米國）ハミルトン……島田三郎
●（佛國）ナポレオン三世……高山林次郎
●（英國）ルイ、コッスート……石川安次郎

●歐山米水　●全壹冊洋裝特製　●正價一圓五十錢郵稅十錢
●歐米小觀　●全一冊洋裝上製　●正價四十錢郵稅四錢
●歐米漫遊雜記　●全一冊洋裝上製　●正價四十五錢郵稅六錢
●大英國漫遊實記　●全一冊洋裝上製　●正價七十錢郵稅十錢
●米國漫遊雜記　●全一冊洋裝上製　●正價三十八錢郵稅六錢
●白山黑水　●全一冊洋裝上製　●正價四十五錢郵稅六錢
●燕山楚水　●全一冊洋裝上製　●正價四十五錢郵稅六錢

●波斯之旅　●全一冊洋裝並製　●正價二十錢郵稅六錢
●[illegible]俗紀聞　●全六冊和製上版　●正價一圓郵稅十四錢
●支那人氣質　●全一冊洋裝並製　●正價二十錢郵稅八錢
●實歷清國一斑　●全一冊洋裝上製　●正價二十五錢郵稅四錢
●歐洲巡遊通信　●全一冊洋裝並製　●正價二十錢郵稅八錢
●日本名勝地誌　●全十二冊洋裝並製　●一冊三十錢郵稅八錢
●改正漫遊案內　●全一冊洋裝上製　●正價四十錢郵稅八錢

●枕頭山水　●全一冊洋裝並製　●正價十五錢郵稅四錢
●紀行文集　●全一冊洋裝上製　●正價六十錢郵稅十六錢
●續紀行文集　●全一冊洋裝上製　●正價六十錢郵稅十六錢
●續々紀行文集　●全一冊洋裝上製　●正價六十錢郵稅十六錢
●俳諧紀行文集　●全一冊洋裝並製　●正價三十錢郵稅八錢
●紀行文選　●全一冊洋裝並製　●正價十五錢郵稅六錢



（後付の五）

● 日清戰史
全七册洋並綴 大判 頁 特價一圓九十錢 郵税五十六錢

● 平城包圍攻撃
全一册洋布上綴 大判七八二頁 正價七十錢 郵税十八錢

● 黄海大海戰
全一册洋布上綴 大判八三八頁 正價九十錢 郵税二十錢

● 北清戰史
全二册洋並綴 大判六六六頁 正價六十錢 郵税四錢

● 米國獨立戰史
全一册洋並綴 中判三一二頁 正價十八錢 郵税六錢

● 米國南北戰史
全一册洋並綴 中判三〇八頁 正價十八錢 郵税六錢





● ナイル海戰史
全一册洋並綴 中判三四七頁 正價十八錢 郵税六錢

● フレデリツキ大王七年戰史
全一册洋並綴 中判三一六頁 正價十八錢 郵税六錢

● 三十年戰史
全一册洋並綴 中判三二八頁 正價十八錢 郵税六錢

● 歴山大王統一戰史
全一册洋並綴 中判三一六頁 正價十八錢 郵税六錢

● ピユニック戰史
全一册洋並綴 中判三二五頁 正價十八錢 郵税六錢

● 希臘波斯戰史
全一册洋並綴 中判三五三頁 正價十八錢 郵税六錢

文學士 鹽井雨江君著

美文韻文 暗香疎影

全壹册洋裝袖珍 正價二十五錢 郵税金四錢

雨江先生の文温籍にして氣韻自から高く恰もこれ梅影清水に落ち暗香黄昏の月に浮ぶする如き天下讀書家願くは一本を備へて詞藻を味はれよ。

● 英米海戰史
全一册洋並綴 中判三二〇頁 正價十八錢 郵税六錢

● 伊太利獨立戰史
全一册洋並綴 中判三三〇頁 正價十八錢 郵税六錢

● 希臘獨立戰史
全一册洋並綴 中判三一六頁 正價十八錢 郵税六錢

● 英國革命戰史
全一册洋並綴 中判三三〇頁 正價十八錢 郵税六錢

● 佛國革命戰史
全一册洋並綴 中判二九七頁 正價十八錢 郵税六錢

● 英佛聯合征清戰史
全一册洋並綴 中判三〇〇頁 正價十八錢 郵税六錢

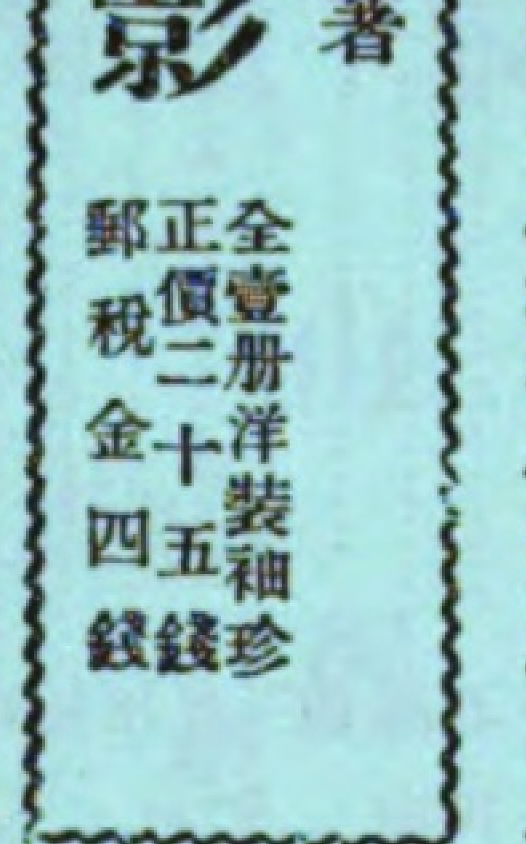
● 印度蠶食戰史
全一册洋並綴 中判三一〇頁 正價十八錢 郵税六錢

千河岸櫻所君著

近世百傑傳
全壹册洋裝袖珍上製 正價金五拾錢 郵税金八錢

續近世百傑傳
全壹册洋裝袖珍上製 正價金四拾錢 郵税金六錢

本書は勉強耐忍忠孝節義の事蹟を歴叙し以て少壯子女修身立志の基礎龜鑑さすべきものを主眼とせり其正編に於ては林子平より原垣山まで百人の評傳何れも其眞髓を描出し續編更に長沼澹齋より小永井小舟まで一百人の名士を輯めぬ千河岸先生精到壯嚴の筆をもつて此正續二編を著はし大抵近世の名士を網羅せり。



● シーザーポンペー羅馬戰史
全一册洋並綴 中判三二六頁 正價十八錢 郵税六錢

● 南洋之風雲
全一册洋並綴 大判一二四頁 正價二十錢 郵税四錢

● 新建國
全一册洋並綴 大判二一六頁 正價四十錢 郵税六錢

(後付の六)

志賀重昂君著

日本風景論

●正價金四十錢
●郵税金六錢

本書は審美的さ理學的さを調和し以て風景の洵美なる所因を立論せしもの、日本近代の名著迚今や新樹空に連なる季節に當りて此書を繙閲せは殊に趣味の言ふべからざるものあらん。

虞蘭得將軍	法學士	布施謙太郎君著
ウエリントン	文學士	高木尙介君著
クリスピー	法學士	名尾良辰君著
メッテルニッヒ	法學士	森山守治君著
カビテンクック	法學士	谷野格君著
ジヤンダーク	文學士	中内義一君著
シーサー	法學士	柿山淸君著
査列斯大王	法學士	中大路正雄君著
フランクリン	文學士	熊谷五郎君著
ニユートン	文學士	三好愛吉君著

●以上各編共正價金一册十三錢郵税四錢

英米文人傳

●全壹册洋裝中判並綴
●正價金十二錢郵税四錢

英傑之典型

●全壹册洋裝小判並綴
●正價金十錢郵税四錢

志賀重昂君著

地理學講義

●正價金二十五錢
●郵税金四錢

本書は東西在來の地理學講究の方法に全く別機軸を出したるものなり日本全國の公私學校には或ば敎科用に或は參考用に或は敎師用に擧りて使用するのみならず淸國各地の學校に使用せり

通俗百科全書

全部二十四册菊判洋裝並綴

定價

●自一編至十五編一册二十五錢●六册一圓四十錢●十二册二圓七十錢●十五册三圓三十五錢●郵税一册八錢●

百科の學自ら登高自卑の序なかるべからず本書此目的を以て當代知名の文士に囑し百科の學に付き勉めて其文辭を簡易にし其の意義を通俗にし以て門に入り堂に昇るの楷梯ならんことを期せしが今や全部完成を告ぐ何人も座右必備の寶典とせられたし

定價

●自十六編至二十四編一册三十錢●六册一圓七十錢●九册二圓五十錢●全部五圓八十錢●郵税一册八錢

島田豐君 島田弟丸君著

學生用英和字典

●全壹册總皮上綴
●正價壹圓三十錢郵税十錢

島田豐君 島田弟丸君著

袖珍學生用英和字典

●全壹册總皮上綴
●正價一圓五十錢郵税八錢

島田豐君 島田弟丸君著

學生用和英字典

●全壹册總皮上綴
●正價一圓八錢郵税十錢

井上敏夫君著

作文錦囊

●全壹册洋裝上製
●正價三十五錢郵税六錢

(後付の八)

女學世界
毎月壹回五日發行
第貳卷第七號
（明治參拾參年貳月廿五日第參種郵便物認可）
（明治參拾五年六月五日發行）

（定價金貳拾錢）

東京秀英舍印刷


女學世界定期増刊
第二巻第八號
ほとゝぎす
東京 博文館發行

夏季増刊「ほとゝぎす」目次

口絵 写真

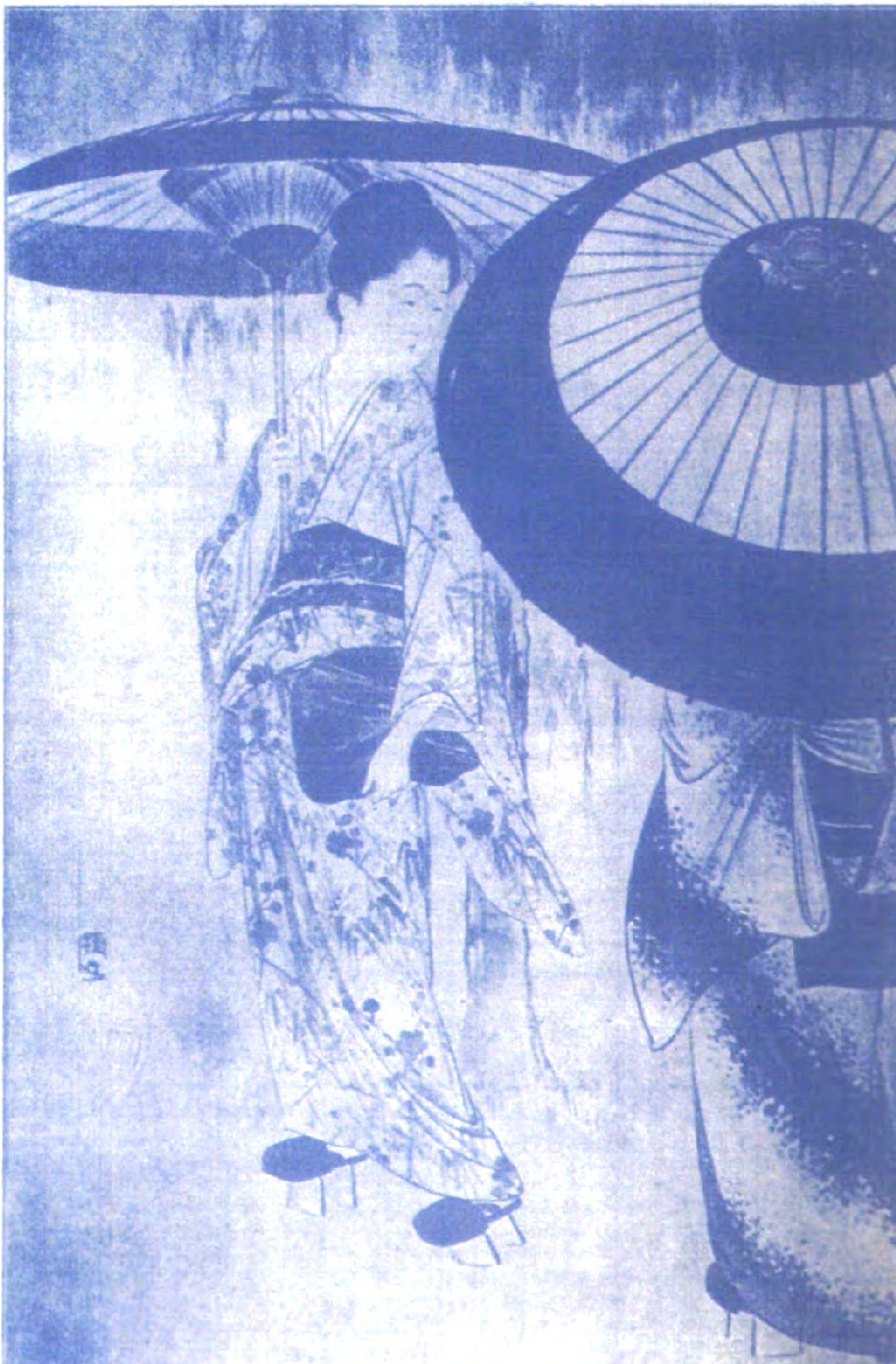
小説

和歌

新体詩

抒情文

五月雨

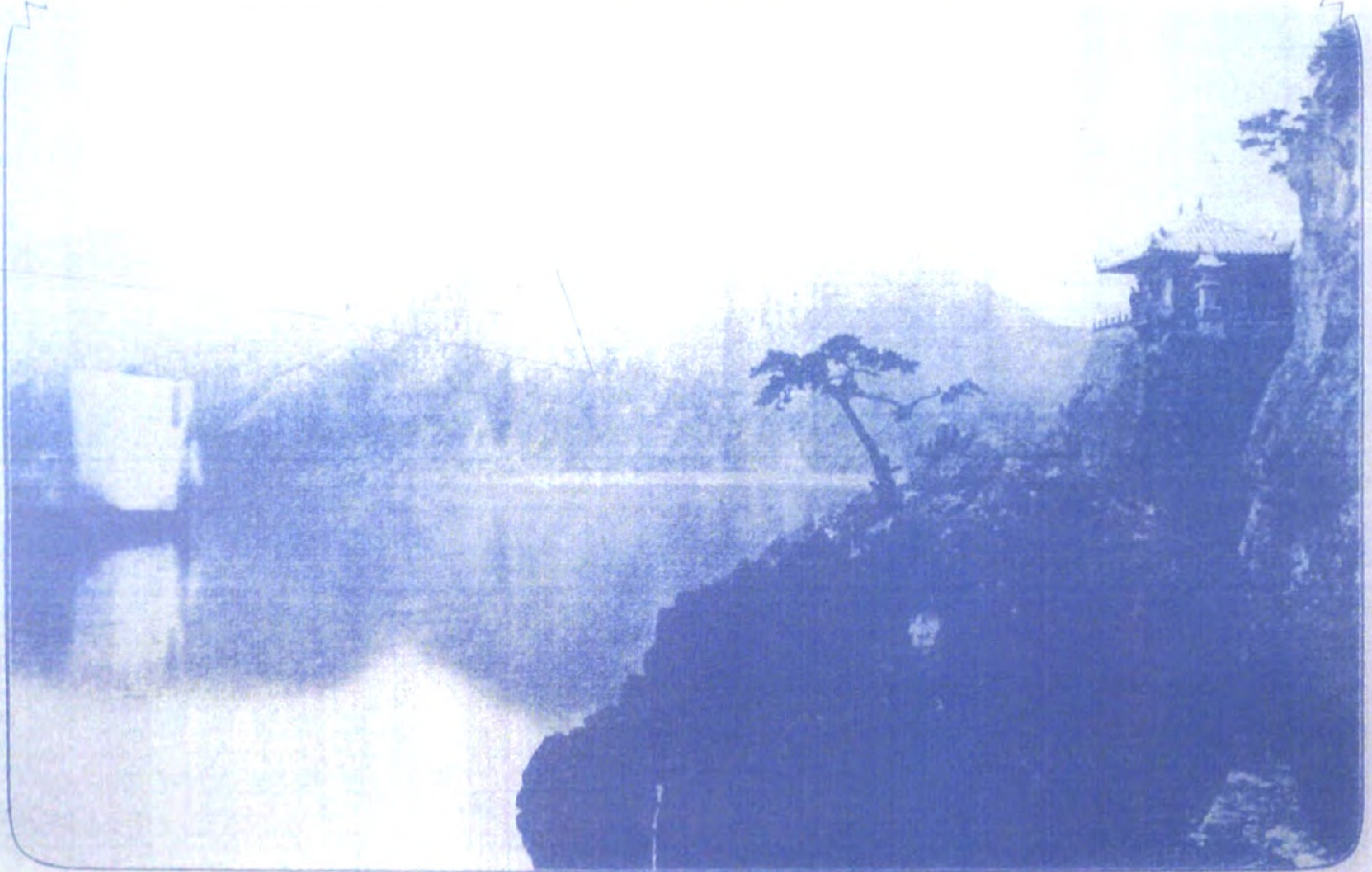


王昭君



菱田春草氏筆

關門風景



(光村利藻氏撮映)

備後阿武兎岬



慶應義塾教授 菅綠蔭君著

言行要錄

全一冊

洋装菊判上製
紙數三百餘頁
正價郵税未定

國の盛衰、社會の文野は、一に之を組成せる個人の言行如何に基し、而して、個人の成敗、國家の隆替も、亦一に吾人の日夜に事とする、大小の言行、之が起因本源たらざるものなし、依て、著者菅氏は、夙に此點に着眼する所あり、維新以來、實に驚くべき世變に遭遇せる、今の人が、今の社會に、處する所以の道、即言行の要、處世の法を示さんが爲、本書の述作を見るに至れり、收むる處の文章は、凡て七十有餘編、記する處の事項は、之を總論、健康編、成功編、品性編、及び處世編なる五編に、分ちて、細大殆と漏すなきは勿論、其行文の平易にして明快、材料の斬新にして多趣味なるが如きは、是れ此類の著作中、近時稀に見る處の好文字たり、乞ふ成功要錄とともに、一本を備へて、各人各家に於ける座右、日夜の師友たらしめんことを、

菅綠蔭君著

成功要錄

正價廿八錢郵税六錢

本書は菅綠蔭氏の新著にして、立志編、處世編及び健康編の三編より成り、其材料は、專ら歐米の著書、新誌等に求め、廣く和漢の諸書をも參考して、現世紀の青年が志を立て、世に處する所以の道、及び之が基本たる健康保全の新法を説くこと、凡て九十有五編、今回慶應義塾國文教科用書として、上梓することゝなりたれば、弊館著者に乞ふて、廣く之を世に公にするに至れり、說述懇到、文章流暢にして、獨り、青年立志の要書たるのみにあらざるなり、請ふ一本を几上の寶鑑とせられよ、

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

(甲の一)

(甲の二)

少年讀本

全部五十册　洋装菊判美本　紙數百頁以上

正價　一册拾三錢、十二册壹圓參拾錢、二十五册貳圓六拾錢、全部五圓、郵税一册四錢

少年讀本は一册讀切にして、其記する處は、本邦近世の英雄、豪傑、高僧、烈婦人、學士等の傳記にして、一册一人を限り、筆者皆當代の文章家なり、行文平易流暢、眞に少年讀本の名に負かざるべく、讀みもて行く内人をして志氣を振興し、心胸を開拓し、拍案快と呼び、擊鼓妙を叫はしむべきものあらん、其の筆下風雨を起し、紙底鬼神を泣かしむるの慨、未だ必ずしも贅せず、苟も有爲の志を抱く少年讀者諸君は、購讀して海濶天空的氣象を養ひ、轉乾旋坤的事業を爲すの端緒を爲せ、

- 第一編●高島秋帆　福地櫻痴君著
- 第二編●白河樂翁公　中村秋香君著
- 第三編●河井繼之助　戸河殘花君著
- 第四編●三條實美公　依田學海君著
- 第五編●曲亭馬琴　饗庭篁邨君著
- 第六編●井伊掃部頭　巖谷小波君著
- 第七編●山田長政　遲塚麗水君著
- 第八編●錢屋五兵衛　桐生悠々君著
- 第九編●春日局　岸上質軒君著
- 第二十六編●周布政之助　堺　枯川君著
- 第二十七編●荻生徂徠　内田魯庵君著
- 第二十八編●松平伊豆　森山吐虹君著
- 第二十九編●中江藤樹　國府犀東君著
- 第三十編●島津齊彬公　春山鶴峯君著
- 第三十一編●高野長英　千河岸貫一君著
- 第三十二編●橋本左内　桐生悠々君著
- 第三十三編●釋月照　千河岸貫一君著
- 第三十四編●平野國臣　白河鯉洋君著

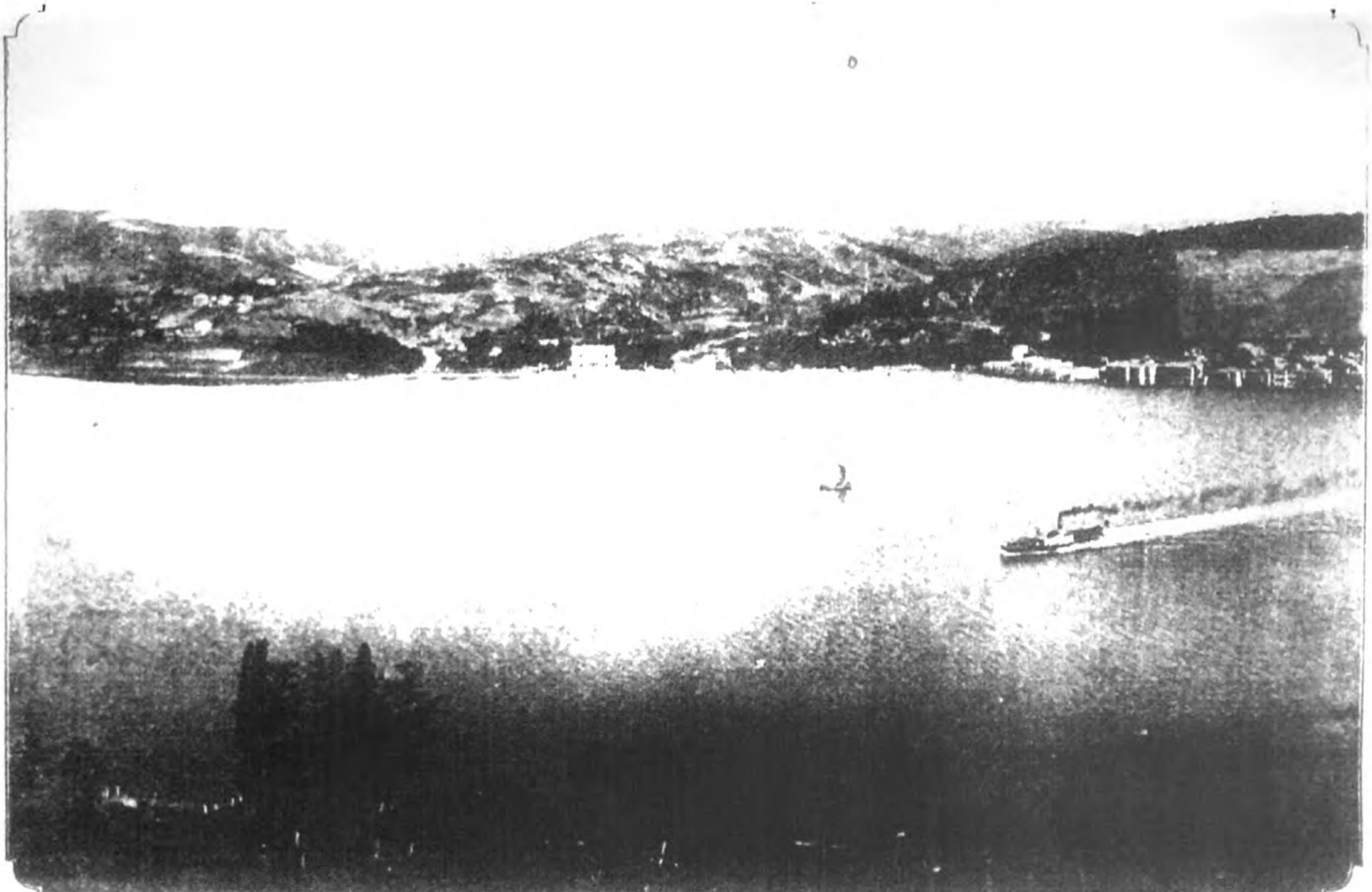
第十編 ●水戸烈公 野口珂北君著
第十一編 ●桐野利秋 春山鶴峯君著
第十二編 ●藤田東湖 大和田建樹君著
第十三編 ●伊能忠敬 幸田露伴君著
第十四編 ●新井白石 武島羽衣君著
第十五編 ●水野越州 中村桂軒君著
第十六編 ●池大雅 田山花袋君著
第十七編 ●木内宗吾 松原廿三階堂君著
第十八編 ●西郷隆盛 川崎紫山君著
第十九編 ●阪本龍馬 坂崎紫瀾君著
第二十編 ●横井小楠 大野洒竹君著
第二十一編 ●貝原益軒 石原笠堂君著
第二十二編 ●渡邊華山 渡邊霞亭君著
第二十三編 ●中濱萬次郎 石井研堂君著
第二十四編 ●近衛忠熈公 勢多章之君著
第二十五編 ●間宮倫宗 笹川文學士著

第三十五編 ●熊澤蕃山 幸田成友君著
第三十六編 ●雲井龍雄 玉木椿園君著
第三十七編 ●野中兼山 北村香陽君著
第三十八編 ●大鹽平八郎 堀紫山君著
第三十九編 ●佐久間象山 塚本澁柿園君著
第四十編 ●小栗上野介 勢多章之君著
第四十一編 ●阿部伊勢守 熊田葦城君著
第四十二編 ●松尾芭蕉 國府犀東君著
第四十三編 ●石川丈山 田岡嶺雲君著
第四十四編 ●德川吉宗 草野正義君著
第四十五編 ●烈女お藤 藤本藤蔭君著
第四十六編 ●林子平 松居松葉君著
第四十七編 ●塙檢挍 長谷川天溪君著
第四十八編 ●本居宣長 落合直文君著
第四十九編 ●高田屋嘉兵衛 中村冷露君著
第五十編 ●大槻磐水 大槻如電君著

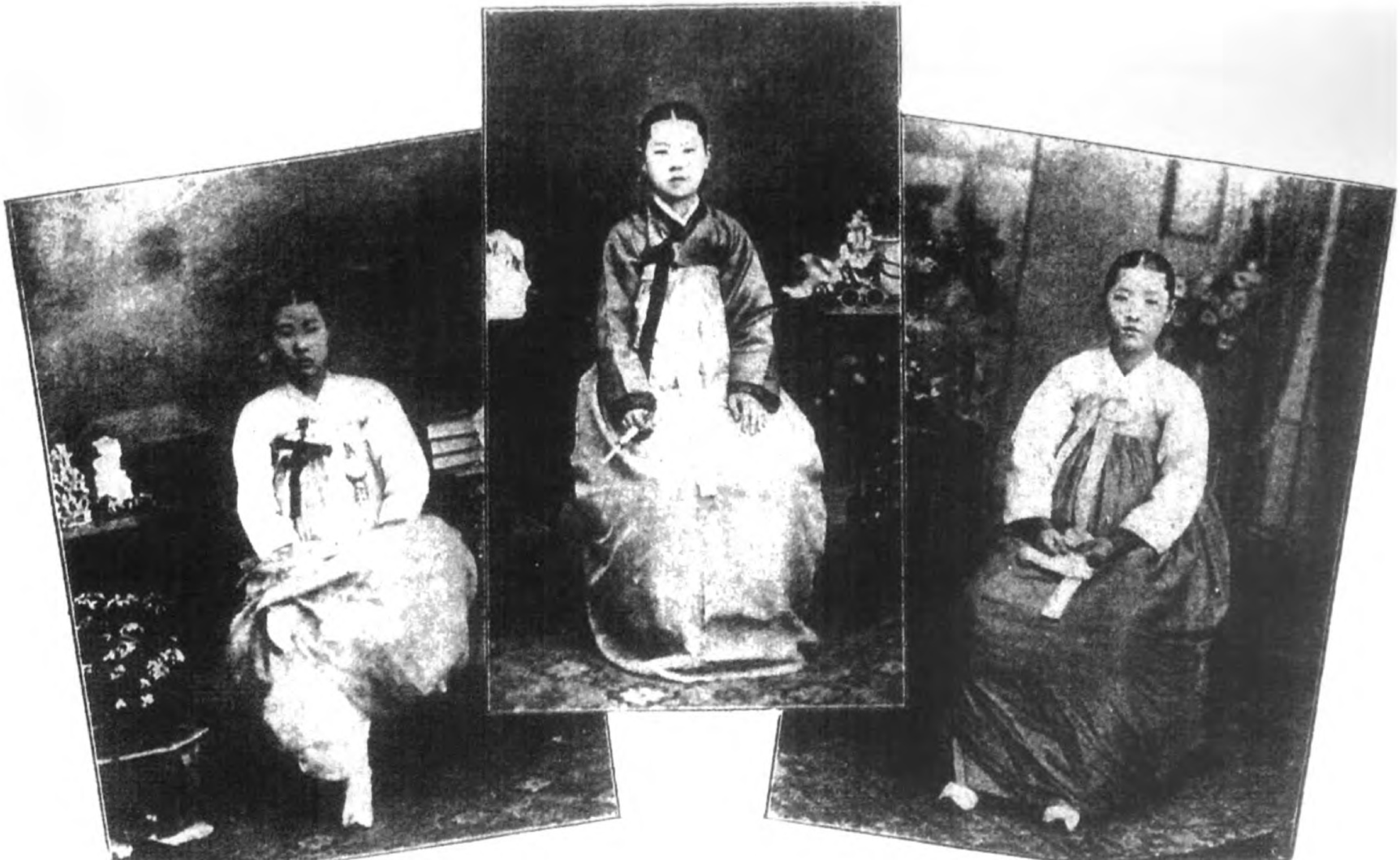
發兌元 東京日本橋區本町 博文館

(其ノ三)

泰西風景

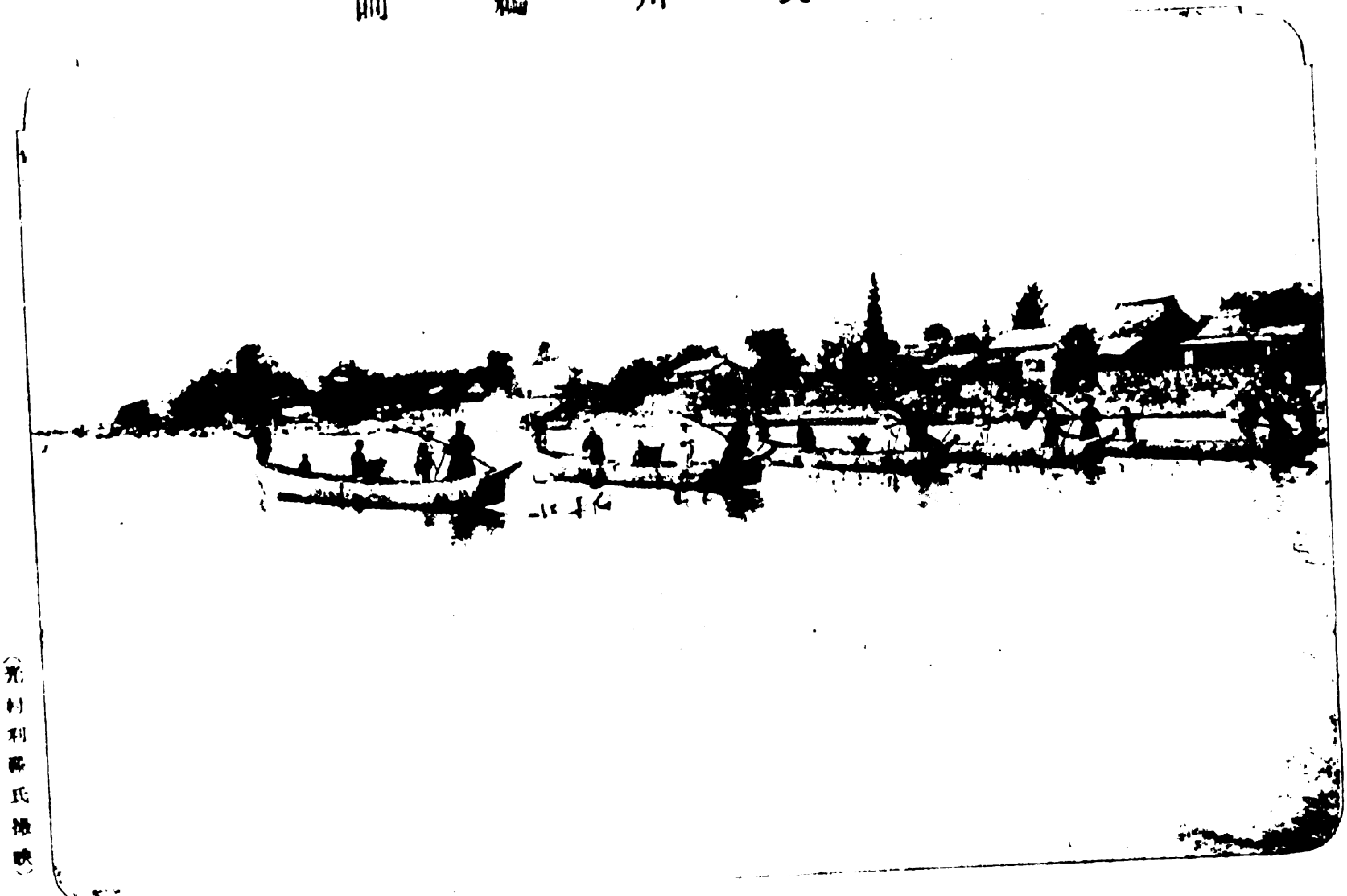


土耳其ボスポラス海峽



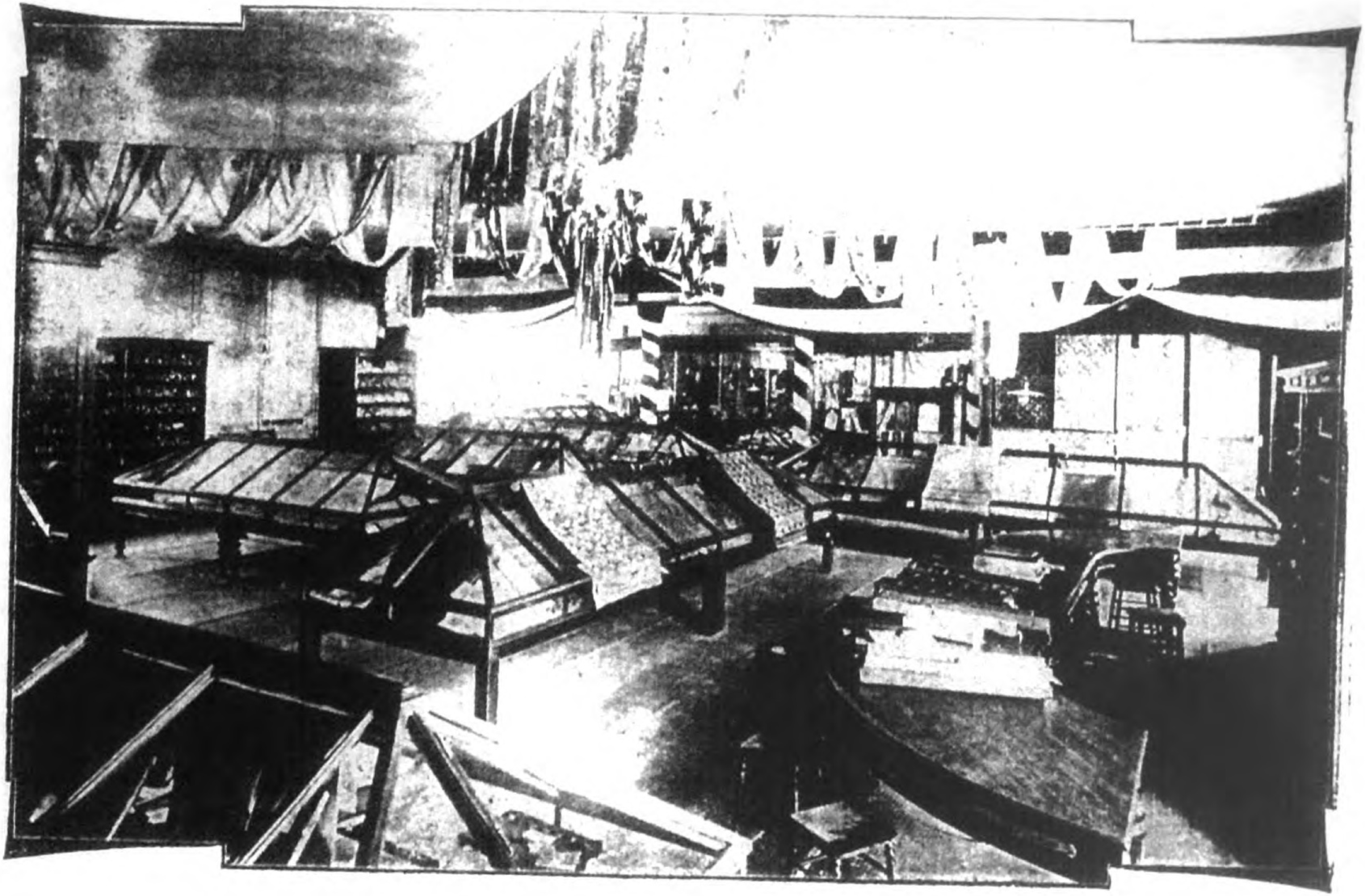
朝鮮婦ノ風俗

長良川鵜飼



（木村利郎氏撮映）

三井吳服店陳列場



博文館 **商業叢書** 發兌

既刊

- **シンジケート及トラスト** 全壹冊 洋裝上製 法學士 後[illegible]勇君著 上製六十五錢郵稅八錢 並製五十錢郵稅八錢
- **實用手形法釋義** 全壹冊 洋裝上製 法學士 勝部國臣君著 上製四十錢郵稅六錢 並製冊錢郵稅六錢
- **世界商工業史** 全壹冊 洋裝上製 法學士 桐生政治君著 上製六十錢郵稅十錢 並製四十五錢郵稅八錢
- **商業汎論** 全壹冊 洋裝上製 商業學士 飯田旗郎君著 上製六十五錢郵稅十錢 並製五十錢郵稅八錢
- **國際貿易論** 全壹冊 洋裝上製 法學士 壇野禮助君著 上製六十錢郵稅十錢 並製四十五錢郵稅八錢

法學士 勝部國臣君著

實用商業會話

●全壹冊洋裝袖珍美本(新刊)
●正價金三拾五錢 郵稅六錢

—○—

最も嶄新にして且つ適切なる商用語を網羅したるは蓋本書の特色にして而も添ふるに廣告の文例意匠を始め電話電信に關する一切の用語手形書式尺牘稿書受取請求書等の書法は勿論貼札記號賣聲等に至るまで苟も商業上必要のもの擧げて洩さず商業者常に一本を懐にせば敢て亦通辯を待つの要なかるべし

續刊

- **歐米商業實勢** 全壹冊 洋裝上製 法學士 森山守治君著
- **商業金融論** 全壹冊 洋裝上製 商業學士 飯田旗郎君著
- **經濟通論** 全壹冊 洋裝上製 法學士 二宮基成君著
- **銀行及外國爲替論** 全壹冊 洋裝上製 法學士 野口弘毅君著
- **商品論** 全壹冊 洋裝上製 法學士 島田文之助君著

(乙３一)

第十編 ●前々太平記 博文館編輯局校訂

第十一編 ●太平記 博文館編輯局校訂

第十二編 ●紀海音 浄瑠璃集 水谷不倒君校訂

第十三編 ●續近松 浄瑠璃集 水谷不倒君校訂

第十四編 ●近松半二 浄瑠璃集 水谷不倒君校訂

第十五編 ●後太平記 博文館編輯局校訂

第十六編 ●脚本傑作集 （發賣禁止絶版）

第十七編 ●京山全集 岸上質軒君校訂

第十八編 ●落語全集 石橋思案君校訂

第十九編 ●並木宗輔 浄瑠璃集 水谷不倒君校訂

第二十編 ●紀行文集 大橋乙羽君校訂

第二十一編 ●一九全集 博文館編輯局校訂

第三十一編 ●常山紀談 江見水蔭君校訂

第三十二編 ●萬物滑稽 合戰記 石井研堂君校訂

第三十三編 ●續一九全集 博文館編輯局校訂

第三十四編 ●黄表紙百種 幸堂得知君校訂

第三十五編 ●俳優全集 博文館編輯局校訂

第三十六編 ●俗曲大全 長井金升君校訂

第三十七編 ●續々紀行文集 岸上質軒君校訂

第三十八編 ●續馬琴 傑作集 内山幻堂君校訂

第三十九編 ●續京傳三馬 傑作集 博文館編輯局校訂

第四十編 ●脚本傑作集 水谷不倒君校訂

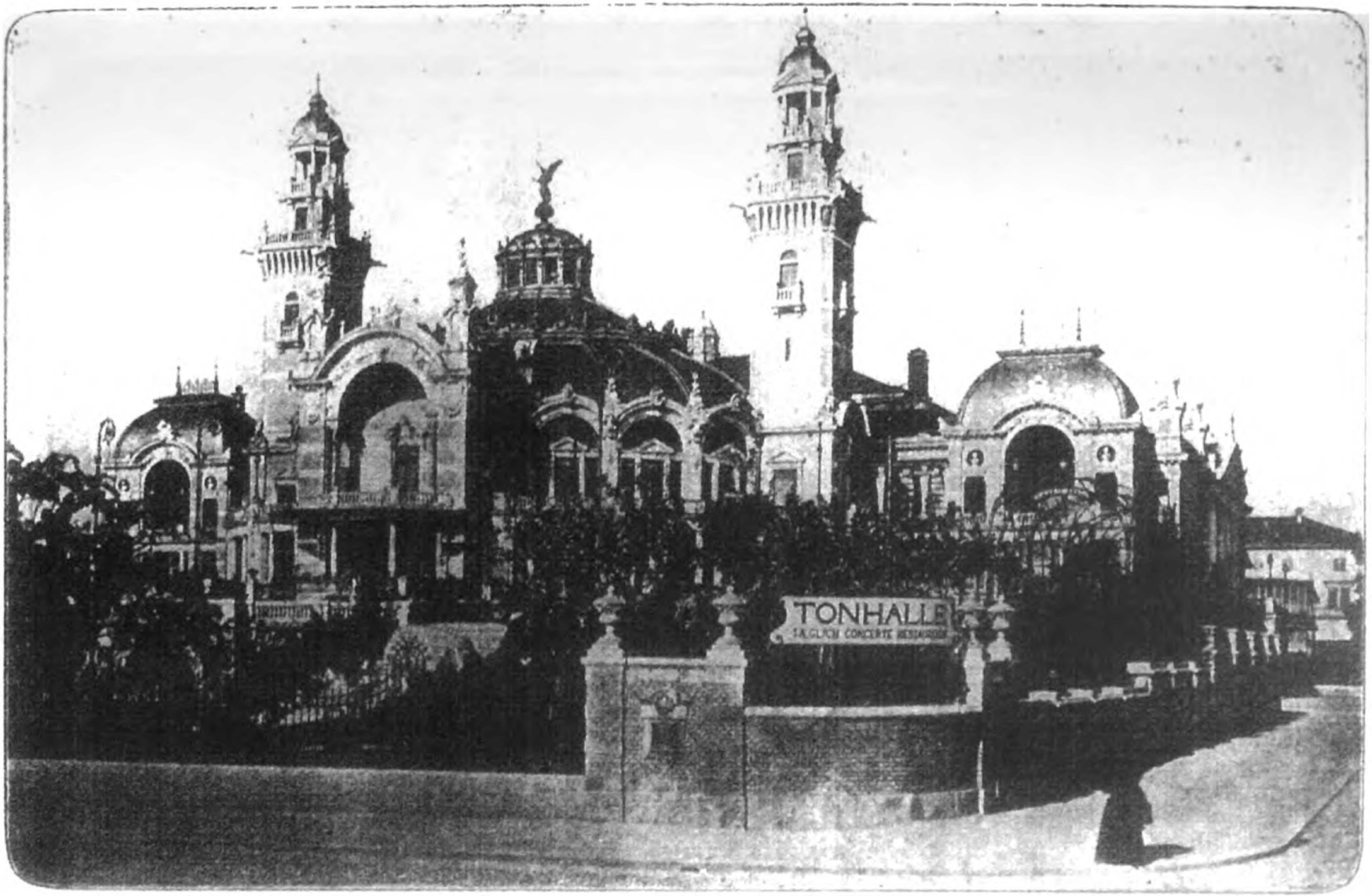
第四十一編 ●釋迦八相 倭文庫（上） 博文館編輯局校訂

第四十二編 ●釋迦八相 倭文庫（下） 博文館編輯局校訂

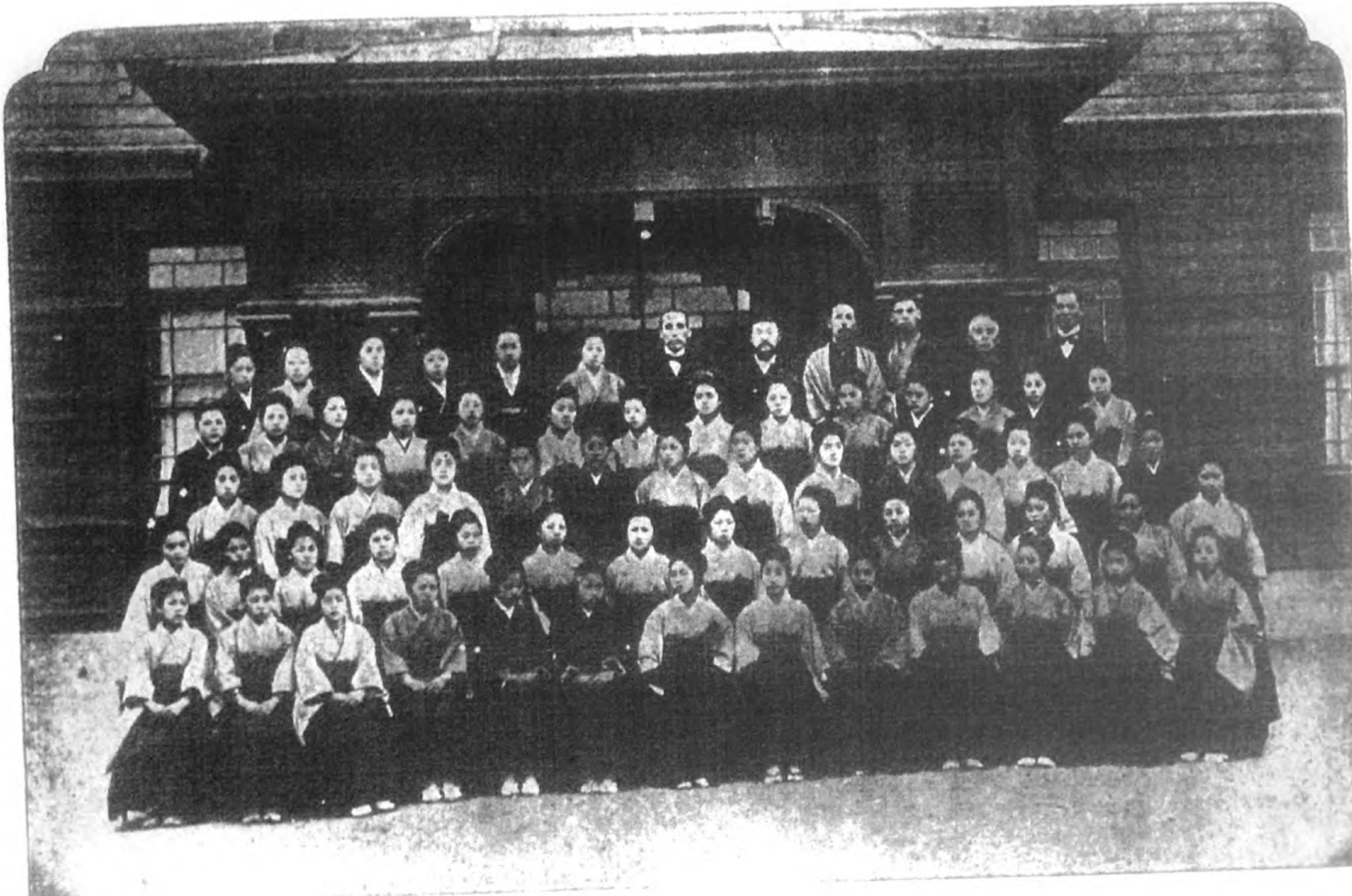
●正價 一冊金六拾錢 六冊前金三圓五拾錢 拾貳冊前金六圓九拾錢 廿五冊前金拾參圓全部五拾冊前金貳拾五圓郵稅一冊拾六錢

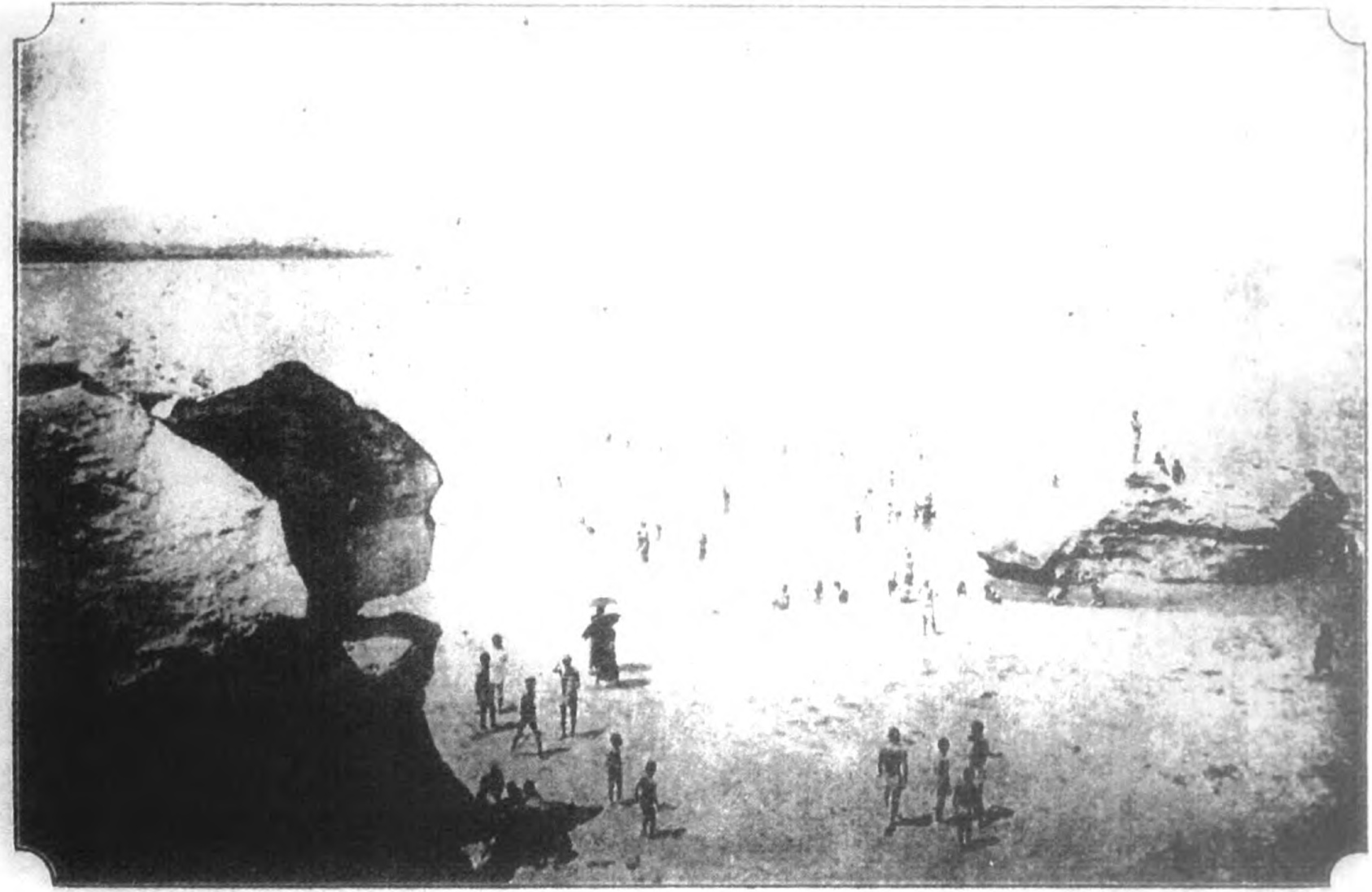
發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（その三）



瑞西ツウリツヒ　トンホール旅館





鬱城尻近海水浴場

（光村利藻氏撮影）

女子美術展覽會出品（石膏塑像）



秋山もみち作　淺井清子作　月今澄子作

風雅文庫

（全部六冊袖珍美本）

鶯亭 長井金升君著

風雅文庫 狂歌の栞（第四編）

全一冊洋裝袖珍
正價廿錢
郵稅六錢

川柳の惡口と一口にいへど、狂句は人情を穿ち教訓の意を含み、言廻しの自在なる雅となく俗となく面白がる物にて、落し噺のまくらに迄引出さるる程世に廣まりしは柳樽なり然れど中には巧みに穿ち過ぎて一寸意味の分らぬ句多し、本書は柳樽中の名句を一々丁寧に評し尚春夏秋冬古事遊里人事戀神佛名所無常其外數十の題を分て柳樽中の名句に明治の新作を添へ初心の爲めに指南車たるを期す

既刊

第壹編●都々逸の栞
第貳編●冠句の栞

續刊目次

第四編●狂俳句の栞
第五編●狂句の栞
第六編●雜俳の栞

本書全部を纏めて美帙に裝ひ明窓淨几の下に備へて花月の好伴侶とせば百年の長齡も此の浩氣を養ふの原素となるを得べし雅客たる人必ず一本を購入せざるべからず

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（丙の一）

鍋島侯爵夫人題詠　福羽子爵題辭
竹屋子爵夫人序文　博文館編輯局編

衣服と流行

全壹冊洋裝
正價廿五錢
郵稅六錢

口繪

●官女の風姿●加茂葵祭の風俗●日光祭禮東あそび●田舍の綿くりと糸繰●東京奥樣と娘風●美人洋裝●美人彈琴●東京藝妓と雛妓●鴨河納涼中の京藝子と舞子●大阪中の島に於ける浪花藝者と雛妓●藝子の着付

衣服は體を蔽ひ、寒を防ぐ實用の外、又美を添へ氣品を加ふ、故に社會の進步に隨つて衣服彌〻美に、流行益〻盛なり、本書は和洋兩服の製法、用法より、摸樣色合を始め、古來流行、嗜好の變遷及び今時の流行等を詳敍し、文の足らざる所は優麗精緻の畫を用ゐ、懇切丁寧に之を說明す。紳士貴女等若し本書を身邊裝飾の參考に資せば、風采彌よ優美高尚なるべし

發兌元　東京本町　博文館

中江兆民先生遺稿　一年有半の讀者は必本書を讀むべし

警世放言

●全壹冊菊判洋裝
定價四拾錢郵稅八錢

目次要領●衆議院議員の一大義務●國會議士の後楯●候補者に告ぐ●在野政治家の最大義務●政治家の度量●無主義の辨●黃金に非ず黃金に非ず●政治上の道義は將に壞敗せんとす●內閣の責任●功臣政府●樞密院●帝室と內閣の分離●內閣と議會の勝負●腦髓の改革●理論は邦家を覆へす者なるか●大臣たる事は六かしき者なるか●政治的藝人●外數百題……

兆民先生一代の奇才を懷き、不幸夭折し天下をして擧つて痛恨せしむ、然れども、先生が筆を驅て胸中磊塊の氣を吐き、世を罵り人を嘲けり、衣冠紫綬を笑殺し、富豪勢客を慨殺し、時に花月に吟傲し、詩酒歎絃俳優藝妓に寄與したる文章千百萬篇に及び、一として其妙を盡さゞるなし、今其の最も傑出したる者を選擇して此の書を作る、先生天縱の逸材、及び其面目を知らんとするもの、若くは文章の妙を窺ひ學ばんとする者は、宜しく此の書に據るべし

發兌元　東京京橋區弓町　松邑三松堂

(丙の二)

帝國百科全書

第八拾四編

文學士幸田成友君著

東洋歴史

（新刊）

歴史に古今の區別なし、過去を知るに非ずんば安ぞよく現在を知るを得ん、西力東漸の由來する所深きを明め、併せて今日の日本が世界の日本として東洋に於ける地位の多難多端なるを知らんと欲せば須らく本書を一讀せよ本書は古來東洋の天地に行動せし諸人種の興亡盛衰を敍述せるものにして識見該博考證精確東洋史に研究するに於て最も完全なる無比の良著といふべし

全壹冊洋裝
上製五十錢
郵税十錢
並製三十五錢
郵税八錢

第八拾五編

法學士小林魁太郎君著

行政裁判法論

（近刊）

行政裁判制度の發達は法治國主義の實行にして現時國家の目的なりといふも過言に非ず我國亦法制上法治國の觀念は現實の制度となり行政の區域に於ても私法に於けると同じく臣民が自立自存の權能を主張するを待るに至れり著者玆に見るあり行政裁判所特設の結果發生す必要となる權限爭議裁判制度を并論し平素研究の結果を世に公にせり

全壹冊洋裝
上製五十錢
郵税十錢
並製三十五錢
郵税八錢

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

女學世界定期増刊 第貳巻第八編

ほとゝぎす

才媛詞藻 夏の巻

小説

特賞(一)

紫陽花

羽前米澤 明神堂町　大芝信子

(一)

御身此頃恙なき哉否、試驗も相濟み候筈平常御勉强の結果上出來と推察仕候、就而は御話し申度義有之候間明日午前九時頃より是非御出て相願ひ度小生は其心にて待ち居申候、萬縷拜眉の上に譲る匆々

兄より

岡島秀子どの

突然手紙到着、秀子は飛び立つ程喜んで其夜はまどろみもせぬ位ゐ、學窓に呻吟せし時に外出を許さるゝ程嬉しき事はあらぬであらう、浮世と云ふ魔物を夢にも知らず、ひたすら眞善美の理想、敷島の道、泰西の詩、思ひは何時も雪の如し、

無情なる雨を母衣にて蔽ひ秀子は兄の寓居を訪ふた、小石川久堅町に青葉の薄暗き迄に茂りたる生垣の中に小さき家あり、これなん岡島芳雄とて文學士にして當時大學院の學生たり、未だ世に知られぬ璞の他日は世を照らすべきしろ物と知る人ぞ知るたらう、此身で此世が終るなら詩歌の國となるべきも淺間しい哉俗社會富の魔力に制せられ共に業を卒へたる輩も皆名利に

走り權門に媚ぶるも獨り凛として清く此世を送り居るは矢張此岡島芳雄である、

今しも水仙花の如き氣高き佳人の此家を訪ふたのは、まごふ方なき芳雄が令妹岡島秀子である、「オヤヤア兄さん未だお休みですか、病氣じやないでしよう、起きて頂戴よ、私は昨日兄さんのお手紙を戴いてから嬉しくて〳〵寐られん程でした、二時、三時、四時、其内に鳥が歌ひ出して寧その事臥床を出でゝ此雨さへ厭はないで來たじやありませんか、鬱陶しい事、マア〳〵私が片付ましよう」其健氣なる優美なる見惚れる程美しい、世に云ふ眞正の處女とは斯くやあらん、

やがて芳雄は手水を濟ましビンヘットを燻ゆらしながら粗造なる火鉢の前にどつさり胡座をかいて「秀ちやん宜く來たチー、梅雨とは云へ何んだか鬱陶しいじやないか、何も御馳走とてはないチー、イヤ昨夜友人持參の餅菓子が殘つてあつた筈これでもお食べよ、今日僕が外出しなけやならぬから早速話そうよ、時に、アノ用と云ふは外でもないがお前も知つて居るだらう、僕が友人の森本確郎、彼れがチー、是非お前を貰ひ度いとの事で僕も突然の返答に苦しんだが、能く考へて見れば

（二）

彼れは珍しい男、品行も方正で、學問は深遠で、第一精神の確固たる當時の世には得難い男だ、それに我等が同郷人と云へ家柄も血統も分つて居る、今は卒業した斗りで未だ官途には就かないが、彼れを引き立てゝ吳れる大谷外務次官と云ふのがある、其の次官と云ふのは森本の死んだ兄と死生を誓つた迄の義兄弟である、亡兄は獨乙國で死する臨終に大谷を呼んて實弟確郎が將來を吳れ〳〵も賴まれたと云ふ始末で、大谷次官は森本が卒業を遲しと待つて居られた位ゐで當時は切りに奔走して居らるゝ風だ、間もなく森本が就職するだらう、實に彼れこそは立派な男世に出たら官吏社會を一新する位ゐの人物だ、お前も二十二と云ふ年頃何時迄獨身でも居られるでなし、女は立派な夫に嫁すのが何よりの幸福だ、乾燥無味の學術、冷たき哲學、女子に何の必用かある、お前は今度卒業したので澤山だ、此上は專ら婦人たるの道を盡すのが肝心だ、女は柔和にして同情に富むのが第一と云ふもの、枯木に花の學問は眞心ある人は悅ばぬものだ、又一ッは故郷に在る母を觀よ、寢ての夢、醒めての夢に御身が事を思案暮してドーカ良い緣があつたならと手紙の端に云はぬ事はな

い、今度森本と約束したと聞いたならどんなに悦ぶてあらう、父上には安心させずに逝かれた始末だ、御身が縁付くと聞いたなら草葉の蔭で何程か悦ばるゝであらうぞよ、孝行をしたい頃には親は無し、僕が今日の境遇も見られずして死んで仕舞はれた、之も命數と思ふより外はない、此上は殘る母上斗りも安心させるのが孝行と云ふものだ、コレ秀子此儀に異存はあるまいネー」と覗き込む樣に妹の貌を見て居つた、秀子は恥しさに紅の色未だ冷めやらず、

（二）

秀子は學校を出てゝ活花、茶湯、詠歌の道よと親類の家から通つて居つた、或る時森本確郎からの手紙が着いた、開き見れば愛溢るゝ斗り、書中「生御身を思ふ幾年、茲に勇斷を揮て御身が兄君に語る、兄幸に諾せらる宿



願漸く徹す、予謂らく男子世に處する沙漠を横行するが如し若し一のオイセス無くんば身命斃るべし、世にホーム無くんば乾燥無味なるべし、予は飢へ渇く如く御身を慕ふなり、他日國家に爲すあるの日、疲れたる魂を慰藉するもの誰ぞ、軟手を以て慷慨を撫するもの御身が愛にあらずして何ぞ、或は又世と戰ふ時あらん戰ひ止んで月高く登るの夜御身と樂しく語るを待つべし、我心燃るが如し、云はんと欲して云ふ能はず願くは諒せよ」、秀子は手紙を讀み終り簡を蔽ふて獨り言「ア、嬉しい難有此程迄思ふて下さるものを、どうして私は拒まれよう、行く末へ苦樂を共にする理想の人は外にない、身も魂も捧げよう、早く美しいホームを作つて旅寐の夏の夕暮に淸き月をば眺めよう、外交官となり賜はゞ異國の果て迄携へて鯨住む太平

洋、虎伏す野邊の果てだとて何をか厭ふ事あらう」理想のホームを描いては獨りほゝ笑むも、これも愛の切なる餘なる乎、二十二の夏、愛なるものを識り初めて、あはれお秀が獨り寐の枕に結ぶ其夢は戀人の身の上ならん、今迄人にそゝがざりし愛の泉は湧き出てゝ何時ともなしに物の哀れを識り初めしが、是迄の活潑心に引替へて沈默の人とはなつた、折ふしは思ひのたけに熱涙こめて戀人の許に送るとは之も無理ならぬ所業なるべし、

（三）

森本確郎は首尾能く試驗も終へて保證人なる大谷外務次官を訪ふた、次官は不在なれど格別の間柄で非常なる妻君の待遇に會ふた、妻君は例の辯舌爽かに「森本さんお目出度う、聞きまするに成績は一番でしたことよ一良人が喜んで、喜んで、早く宜い道に就けてあげたいと晝夜奔走して居りますから隨分はか取つた樣子で今明日の中には辭令が下るでしよう、其れに付けてもあなたに喜ばせる事がありますよ、疾より思ふて居たけれど御卒業にもならない中に餘斗な御心配をかけてはなるまいと今迄忍んで居りましたが、今日と云ふ今日晴れてお話し申ても宜い塲合、アノ子ー」と森本の貌を見ぬ樣にしてのぞきこめば、森本は慇懃に膝に手を載せて身動きもなさゞりし「アノ子ー外でもありませんがあなたも御存じでしよう、良人の妹のお卷さんは遂此頃夫に死に別れて宅へ歸つて居のです、それで此度あなたも御卒業遊ばして思ひ付きましたは、あなたも遲かれ早かれ奥さんをお貰ひなさると存じまして丁度宜い御縁、開いた口に牡丹餅と云ふ工合で、良人も大變喜んで是非あなたに伺つて見ろと申しますので媒介抔頼むより寧その事私が直接伺つて見ようと思ひまして、子ーあなた、善は急げと云ふ通り他から差しでも入ると惡いから之は極秘密にして置て、何卒森本さん貰つては下さりませんか、容貌が左程美しいと申のではありませんが十人並と云ふて差支ない位ゐ、そして利巧で、交際が上手で、家政向きは餘程馴れた方で、マア當時の良妻と云ふて引けは取りませんよ、若い時分は貌が第一と思ふものですが、實際貌で一家は持たれませんよ、我が田に水を引く樣ですが、オホ……」と笑はるゝ程猶薄氣味惡く森本は石の如く巖として動かず、妻君は雄辯滔々と獨り舞臺の有樣なり、「そして年が

二十四で中々年丈けありますよ、そう申ては何んだけれどアー云ふ妻君を持つた方はどんなに幸福かしれませんよ、何んでも人間は目前の事斗りでなく將來の事を考へねばならんものですよ、あなたの御出世にも大分利益があらうと思はれますよ、眞人だとて實際可愛妹の聟と思ひば骨肉をくだいてもお世話申決心ですもの、御互の好都合じやありませんか」と頭から恩を被せて滔々と說かるゝの語は一々森本の胸に五寸釘を打たるゝ如き心である、森本は心密に思ふ樣、秀子とお卷とは月と鼈况してやお卷は夫を失ひたる再緣の身、思ふさへ身振ひがする、其れに反して秀子の愛らしい、美しい、彼の潔白なる愛を我が靈魂の復活と思ふて居るのに何たる惡魔の邪魔する事だらう、アヽ思ひ切つて斷らう乎、劍ね付けよう乎、と例の一徹なる氣性が胸え込み上げて得も云はれぬ不快の顏色、妻君は又强んとして「森本さん何を考へてお出です、其れは極り惡しくも入らしやらうが、其れ式の事連れに耻しくては當世のお若い方に似はんじやありませんか、此節の若い方は自由結婚とか何んとか大騷ぎじやありません乎、ほんとにあなたの樣なお固い方は珍らしいですよ、それだから尚更眞人は御信用申て居るのですよ、併し其耻しい處は花ですよ、私等の樣に其時代は通り拔けて仕舞ば鐵面皮と云ふがわで味も氣も無くなつて、花も咲かず、實もならず、最早野末への枯尾花同樣と云ふものでしよう、オホ………



折柄入來るは小間使の松なり「一寸奥樣にお目に掛り度いと仰しやるお方が入らしやりました」玆に森本は

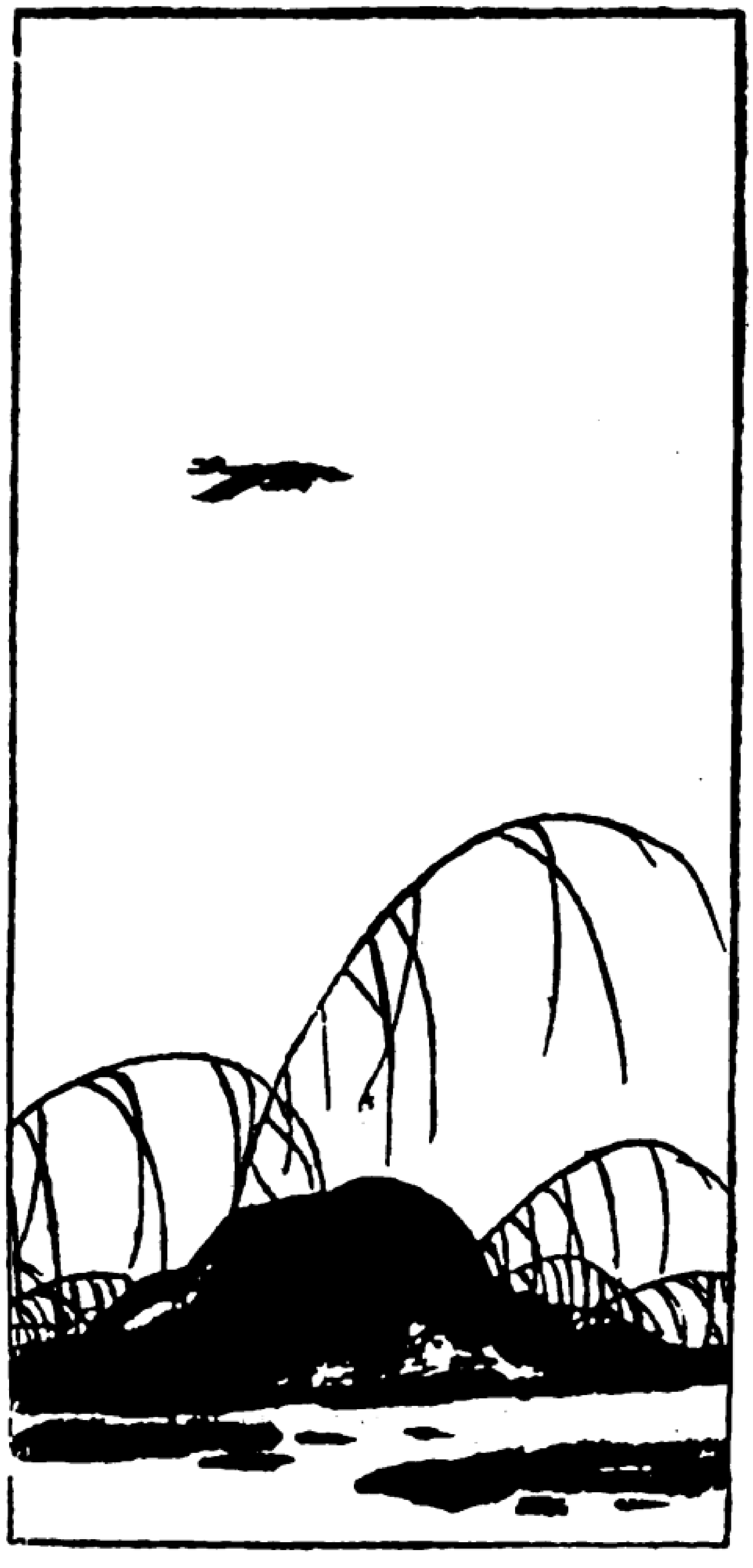
虎口をのがれ、再會を約し別れてホツト吐息を吐いた、

(四)

夜もとつぷりと暮れ果てゝ朧にかすむ月影を暫しの頼みと思ひしに、又々雲は深くなつた、森本は路傍に立たずんだまゝ「ア、人生の浮沈も此通りだ、我心も此如くだ、こんな小障が起るとは夢にも思ひ付けなんだ、だが現在の境遇より云はゞ一言の下で我運命の決する處、否と云はゞ螢雪の苦も泡末に消ゆる場合、ドウ仕樣、ドウ仕樣、又一ッには我愛の生命なる秀子が事、あれ程我れを思ふて居る、我れとて寸時も忘るゝ事は出來ぬもの、ドウして此愛を裂かれよう、位階も名譽も欲しくない、寧そ浮世を遠ざけて深山の奥に避けよう乎、月澄む野邊に脱げよう乎、我れだとて男、大和魂のある限り何處へ行つても此才を揮はれよう、睥睨せば蜻蜓洲、狭い哉、狭い哉、ヨシ〳〵宇宙の漂流者とならん、思ひ切つた、思ひ切つた、アゝ我れを奮勵せし富嶽、吾れに愛國の情を起さしめた芙蓉の山、海と別るゝは名殘り惜しや、名殘り惜しや、「覺へず天の一方を望めば星は光りを失つて空は暗し、雲霧を破つて又元の名利に立歸り、「恩愛はこれ程苦痛を感ずるものか、彼の愛を識らざりせば此苦痛を感せざりしものを、アゝ愁い、愁い、若し我れ一婦人の爲めに父母を捨て世を捨てなば社會何と云はん小才子と笑ふべし、我れながら此不斷を嘲る、アゝ天國を捨てゝ地極に住う乎、樂國を捨てゝ沙漠にさまよう乎、我が生命より貴き愛、美しき愛、今我が手より椀ぎ取られて我安然と此世に永らう事を得べき乎、世に謂ふ婦人の身と生るゝ勿れ百年の苦樂他人に由ると、然り、男子も其如くだ、人生惡妻を娶る勿れ一生の苦樂其妻に由るべしだ、生命假令生きつゝあるも魂は既に死んで仕舞た、ホーム無くしてドウして働きは出來ようか、厭やだ〳〵、思ふまい〳〵、とは云へ國には飢に泣く老父母あり、我が兄を失ひてより十年、明けても暮れても樂しみは我卒業を便りと思ふて居るものをなとて父母を殺されよう、老い先き短い双親よ、慈愛に富んだ父母よ、恵みの露をかけられて此世に育つて來たものゝ何故お粗末巾ましよう、なとて御恩は忘れましよう、ヨシ〳〵死んだ積りて大谷の言に從ひ……」今迄迷ひし村雲もいつかは晴れて恩愛の光りの星を認めし乎、

(五)

生垣深き中に何やら吟して居る。嬌紅欲滴悄無力。恰似楊妃浴後色。花容如愁何所愁。……今對此花思往事。血涙和雨紅濕巾。森本は暫し耳を傾け「ヤア彼れは例の得意の雨中海棠を觀るの詩を吟じたナア「オイ岡島君」ヤア森本君、宜く來て呉れ賜ふた、何んだか顔色か悪いじやないか、例の元氣は失せたのか、さなくば官途熱にでも襲はれたのか其の方は餘り早いじやないか、森本は悄々として「イヤ君串談ではない」何となく神氣銷沈のかたち、岡島は親友を想ふの餘り自身に引比べ「其は何事だ國の嚴父は病氣でもあるのか」森本は頭をふりつゝ「イヤそうではない實に〳〵困つた譯けだ漸く虎口を免れたと云ふ次第だ」顔色青ざめ溜め息を吐くのみ「外でもない、あの大谷へ行つて來たのだ」岡島は稍々安心した



らしく「其れは宜かつた其れに付いて小言でも食つて來たのか、前途の注意を食つたのか、官吏と云ふは愁いものだらう、チト、其れは其の筈さ、學窓にあつて空想を論ずる如く天下の英雄眼中に在りと云ふ樣には出來ないさ、さりながら其れ式の小言連れに屈する君でもないじやない乎、」慰むる樣に森本をなだめた、森本は少しも晴れた樣子はなく、「あの官途の方は好都合だが、妻君の話しには頓と閉口した譯で獨斷に決しようと思ふけれど決し切れない進退茲に谷つた、寧そ君に打ち明けて話したら何とか宜い工夫もあらうと、態々遠路茲迄廻つて來たのだ」岡島は妹秀子の一身に關した事とは夢にも思はずして「森本君、君は未だ僕を信ぜんのか、語るに足らずと思ふのか」と殆んど激したる有樣。せき立てられて森本は莨盆の灰をほと

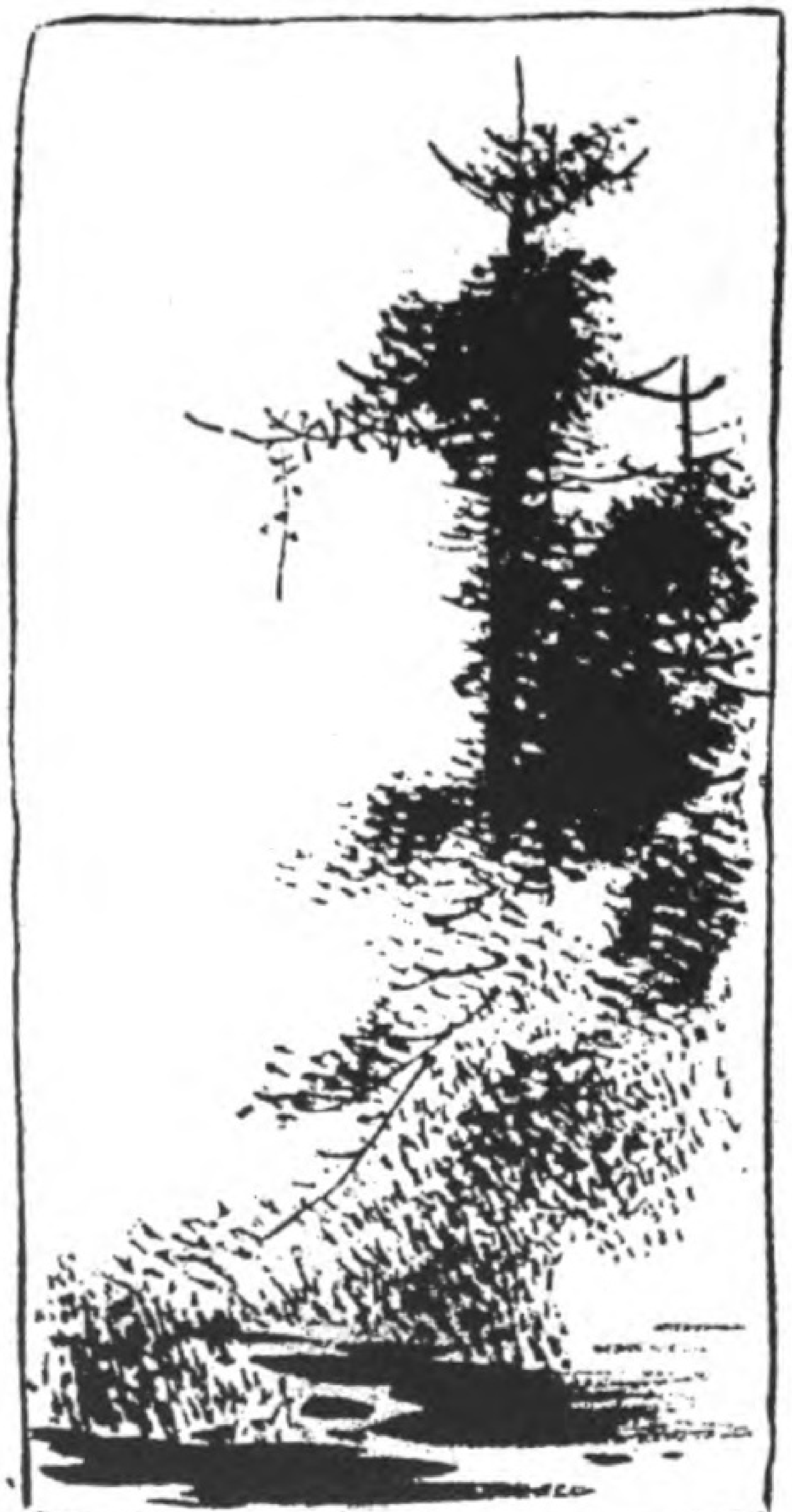
〳〵火鉢のふちにはたきつゝ、云はんとせし時に岡島が淋しき咳嗽ばらひゴホン〳〵」森本は心配らしく「君先頃よりの風邪が癒へんのか、何んだか聲も立たぬ樣だ」と岡島の貌を覗いた「僕の病氣抔はドゥても宜い、死んでも搆はん、死せば其れ迄だ、慷慨死に就くは易いが從容義に赴くは難いと云ふものだ」何となく感情を害せし樣な、氣味合ひ、森本は勇を揮つて云はんとした「實はネー君今日大谷へ行つたのも僕が一身上の事は君も知る通りだ、其れは云はん前きから大谷先生が心配して呉れたと云ふ事は妻君の話してもわり眞に奔走して呉れたは分つて居る、其内には確たる返答もあるだらうよ、其れは其れにしてもよいが又一ッ困難なる條件が起つた、アヽ一憂去つて一憂來るとは此事だ」と流石の森本も云ひよどんだ、折柄雨ははら〳〵と窓を打つた、森本は稍々語を濁らして「僕が今迄思ひ付けなんだ大谷先生の妹があるそうだ、其人は遂此頃良人に死に別れて實家なる大谷へ歸り居るとの事」續いて森本は語を發するの勇氣無し、岡島は早くも察したらん樣子、此れも發するの勇なし、六疊の室、森として水を打ちたるが如し、軒端の芭蕉に降る雨は一しほ憐れに思はるゝ、岡島は勇を揮つて「ヨシ分つた、其事は二ヒ云ひ賜ふな、妹に思ひ切らせるより外はない、思ひ切れと云つたとて承知しまい、ア、世は到底不如意勝ちだ」と立ち上つて窓を開けば雨は晴れ星は悲し氣に輝いた、暫くして又元の座に直り「森本君、君其れ式の事に躊躇し給ふな、小情の爲めに大誼を誤り給ふ勿れ、君之を思ふても世の風波を思ひやらるゝじやないか、アヽ汚れたる世なる哉、儘ならぬ浮世哉、義人も名利に制せられ、眞如も惡魔に奪ひ去らる、君に一言云ひ置く事がある、君は男兒である、眞に一個の大丈夫である、其男兒たるものは愛情の外、別に慰藉を功名の戰場に求むるだらう 去りながら婦人と云ふものに至つては愛情は即ち生命である、其の生命を奪ひ去られては死人同樣に感ずるだらう、一朝失戀の颶風に遇へば其生涯は覆へるてあらう、君だとて其れを知らん人てない、妹が愛情を玩弄したと云ふてはなし、彼女に於てもどんなにか失望するだらう、だが仕方がない止むを得ない場合になつた、唯此上は心斗りの……夫婦と思ふて行末へは憐れんで呉れ給へ、僕だとてどうならう乎、一寸先きは眞の闇だ、ましてや多病の身、だか此儘では死

なれん、死なれん、よしや死んでも此汚れたる世を清めずに居るものか、
時は進み夜は深し雨後の月憂いを含んで居る、歸らんとする森本の手をシカと握り「何故か今夜は君と別るるに忍びん」忍び兼ねたる一滴の熱涙「降つて來た君」雨に紛らす健氣さよ、いつになく別れを惜しみ見へずなる迄森本が後姿を見送つた、

（六）

其後三日を經て森本は電報に接した、ヲカシマシンタ、ヤマヒ、ハイノ、ゾクリウケツカク、

森本は其場にどつと伏し　んで夢中にさまよう感じを爲した、やがて手をとまぬいて思ふ樣「ア、彼れが死ぬとは思はなかつた、眞に彼れが死んだか、惜しい事をした、肺の粟粒結核とあるからは自殺したでもあるまいが、彼を殺したは僕である、刀を以てせず、毒を以てせずとも彼の時から病勢加はつたに違いない、彼れを殺したは僕だ、間接の人殺しだ、良心は苦しい、愁らい、悶く程苦しい、岡島が死ぬるなら寧そ話さずに居るものを、情けない、情けない、未來の英傑を無慘にも殺して仕舞た」立たんとして力なし本郷より小石川に車を馳せて岡島の偶居に入れば秀子が兄の遺體に取り付いて泣き居る樣を見て流石に胸は張り裂ける斗り、森本は覺へず「岡島君、情けないじやないか」忍ぶ血涙膝に落して腕を組みたるまま身動きもなさゞりし。



再會を誓つて別れたは四日前、果敢ない哉人の生命、春秋二十八、前途有爲の才を抱いて空しく白玉樓中の人となつた、いつ迄歎いたとて歸るまじ、英魂二び歸るまじ、此心亡友に徹するあらば感涙水と成つて、九泉に至らん、翌日、日暮里の火葬場にあはれ一片の煙となつた、

人は失せ骨になりしと云ひながら尚憐れさのます鏡。忍ぶ袂に拭ひ上げ、拭ひ上げては又涙、よしや涙に曇るとも清き心は曇らじを、此俤は此處の名殘り、片破れ月は影薄し、ふり返り、ふり返りつゝ行く時に、ほとゝぎす彼れが一聲血に鳴いて世に迷ふ佳人の魂を止むる乎、

横雲の空に東京を立ち出てゝ東臺には來しものゝ、先きの日は亡き兄、戀人と樂しく眺めた彼の山の櫻花も名殘りなく散り失せて鳥は哀しく歌ふのみ。其れさへ皆心を傷ます種てある、秀子は物思はし氣に森を眺めし途端「秀子さん」と肩を打つものあり、是ぞ寸時も忘れ難き森本確郎にぞある、「森本さんロウマア來て下さりました」二人共唯泣く斗り、稍々ありて秀子は聲を勵まし、「森本さん、そう泣いては下さりますな、是切りで逢はれぬと云ふてはなし、暫しの別れは愁らけれど、又逢ふ時を樂しみに今日より國へ返りまして母と共に宜いお便りを待ちまする、兄が死んだは致方もありません、貴郎斗りも御丈夫で御都合の宜い時に呼び寄せて下さりませ、其れ斗りを樂しみに淋しい中にも慰めましよう、別れに臨んで一片の握手、千萬無量の意味あるなり、

やがて悲しき汽車の音と諸共に東臺の曙を後に見て、刀根の水、那須の山、白川の城跡、何れか斷腸の種ならざらん、陸の奥の信夫の里に乘り替へて、山又山の故里に歸りての後は孤閨の冷かなる北溟の氷に宿するの身となりし乎、惜しむべし煙柳の姿を持ちながら長へに天の一角に沈むとも知らで亡き兄の菩提を吊ひつゝ戀人の行く末へを祈り居るとは、無慘なる世なる哉、意地惡るの世なる哉、

【評】此般の結構閨秀作家には惜しき技倆なり唯强て難を言はば文の露骨にして餘韻に乏しきを憾む

特賞（三）

別離の惱

加賀國金澤市長土塀通一番町五十三番地渡邊方 青木梅子

上

花やかなる電燈の光にそむきて、聽衆の方に半面見せたるエミリヤ孃の手は、今や將にピヤノの上に置れん

としぬ。今日の終曲として、此音樂會の花として、待ちに待ちたる聽衆は、水打ちたらん如く靜まりて其音のいかに心地よく、其曲のいかに嬉しきかと、今下りなんとする一指彈を待つ間の胸は只ならず、人每に種〻なる思を畫きて其寸時を過しぬ。斯る人〻の中にも計らず此處に來合せゐたる光枝は、其昔、遠き別離の一夜さ、戀しき夫が名殘にとて彈きし曲の名と同じ「一別離の惱」を、今宵又思はずも聞かんとしては、心自ら昔に馳せて、廿年の夢今更のやうに繰返されぬ。

あゝ思へば其折はまだ人の身の花の頃なりしよ、他人



の批評も耳にかけず、只〻其人の情に絆されて、横濱なるイタリヤ公使館に飜譯官たりし一洋人と緣結び、やがて二人の間には女さへ生れて、幾年の春秋を只樂の中に送りたりしが、一年、急なる本國政府の命令に接して、夫はやむなくも急ぎ歸る事となりぬ、只さへ狹き女の胸の、まして夫と賴む人は浪路遙けき異國人なれば、よしや倦かるゝ事はなしとも、かなしき別に逢ふ日はなきかと、嫁ぎし日より只一つ、不足なき仲の不足と、何となく心休まる日はなかりしに、睦み合ひてさる悲

も靜らぎし今日、例へば靜けき船路にして、思はずも急なる暴風に襲れしやうなる此報知聞きては、早行末の不幸の目に見ゆる如き心地して、故里遠く身は離るゝとも、我も共にと思ひたりしかど、彼方の父母のおもはくもあれば、まづ我のみ先に立歸りて、事取極めたる上にて其方を招かんと、理をわけたる夫の言葉にそむかんやうなく、涙ながら思止りて、一日も早く御側にとばかり、其手にすがりて賴みしが、倘夫は注意深く、やがて後より彼地に渡らん其折は、女の身にて遠き船路の一人旅、此子も共にとあらば一入の難義は見る如し、長き事といふにもあらねば女は先に伴はん、只賴むはしばしの辛棒、身いたはり待てよと、堅く約し慰めて、まだ其頃は漸く八つなりし娘共ゝ本國にと旅立ちぬ。其後はいつ、來よとの御手紙とどくらんと待ちわびしに、おぞや安着の報を名殘にて、其人の筆の跡は又來らず、反りて其父なる人より、僅のなやみに失せぬとばかり胸つぶるゝ報を得て、地蹈鞴ふめど海を隔つる西と東の術もなく、我も共にとばかり歎きしかど、倘、戀しき夫の形見とも只一人ある最愛の子に今一度逢はまく願ふ心ばかりに惜しからぬ命ながらへて、何時相見んと其折も賴みなきを待ち暮しゝが、後には此方より出しゝ手紙も空しく返り來れば、我も昨日や今日と變る境遇に遂東京に住居をかへて、娘戀しの思を抱きしまゝ、忘るゝ折もなく日を過し來つるなり。さるに今日といふ今日、計らずも十年の昔、其悲しかりし別離の一夜、涙に聞きし同じ曲を、又爰に聞かんとしては、聞かぬにまづ袖ぬるゝ心地して、其演奏者も戀しく、光枝はひたすらに其方を眺めぬ。

聲なき場の靜さを破りて、まづ其一指彈は下されぬ。何ともなく安からぬ思より出てし聽衆の中にも、光枝は殊に耳傾けて、只管演奏のいみじかれと祈りつ。高く、低く、奏樂の音の進むにつれて、淸く悲しき歌は唄ひ出されぬ。水底ふかくかくるゝ音の、寄せては返す波の間に間に悲しき思を人の耳に傳ふるかと思へば、天に在す神の御手にすがりて、幸なき人の悲を訴ふる司徒の聲の如く、荒れて人なき園の草木に、秋吹く風の昔の榮華語るかと思へば、影なく形なきものゝ聲の、虛空に人を屬る如く、妙にかなしき音につれて、いみじく沈める歌の節は、聞く人々の胸に迫りて、我今、自ら袂別の席に侍して、其行く人の袂にすがり、止る人

の胸に顔あてゝ、再び逢はん時なき悲しみのとゞめ難き涙を拂ふが如き思を傳ふれば、エミリヤ孃の手も聲も又、今將の嘆きに震ふかとばかり打ち亂れ、其目一度袂別の不幸を怒りて血を滯ると見れば、敢なき涙に又かきくれて、樂譜も見えずなりぬる如く、自ら歌の思に身を沈めてかなづる音色の感ふかき、光枝はさながらありし昔の別の席に又身を置く心地して、忘れがたなき人の言の葉、逢はまくほしき娘の面影など、目に見る如くうつり來て、我只ならず袖ぬらしぬ。

何時まで聞くとも飽かず思ひし曲もやがて了りて、聽く人々も心落付きしやうに胸なで下しゝ時、エミリヤ孃は場を去りて、今日の幹事といふ人代りいで、やがて孃より一場の物語あるべき旨つげぬ。

下

白き幕のさら〳〵と動くと見れば、衣の端先づ見えて、やがて立顯はれしは、先刻の樂師エミリヤ孃なり。薄緑の清く廣やかなる上着つけたるに、襟の邊より僅に白と紅との飾見えたる、まだうら若き面影のうつくしきにつれて、一際神々しきやうに、又、其色の艶やかに、其髮の黑きなど、北部イタリヤの人の面影はかくとこそ聞けど、こぼれて咲ける大和撫子の花ならずやとも怪しまれぬ。

拍手の音の靜まるをまち、場の中央に進みて一禮せしが、奏樂のなやみの尙去りあへぬ風情にて、晝の如き電燈をまづ仰ぎぬ。此一刹那、光枝は、其面影の戀しき夫に似たりとやうに思はれて、我知らず胸跳る心地しき。如何なる物語の、此美しき人の口より出るかと堅唾をのめる滿場を、靜に眺めし孃は、やがて、拙きながら日本語をもて說き出しぬ。

「遠き國よりさまよひ來し此拙き樂師を、熱心なる歡呼をもて迎へ給へる慈悲ふかき聽衆の方々よ、方々は此あはれなる演奏者を如何なる身と思し給ふか。世にもはかなき不幸の海に投げられて、賴りなき孤兒の此身を憐み給へや。且つは又、此妾を、只遠來の者とのみ思ひ給ふべけれど、妾には此日の本の國こそ忘れ難き故里の地にて侍るなり、されはぞ此度も、此國に殘れると聞く只一人の母親を尋ねんとて、かくはるばるはさまよひ來りしなり。あゝ忘れ難なき母親！　されど、かくばかり聞き給ひては、怪しき事と思ひ給はん。妾が父は、過し年迄此國の公使館にありしものにて、其時しも

妾が尋ぬる母をば娶り、其間に妾を得つとか、されど、其後、妾が八つの年、本國の命止み難くて、妾を伴ひて故國なるイタリヤに歸りしが、其旅路の疲か、故里の地ふみしといふを名のみにて、なき人の數に入りしかば、妾の祖父なる人は、譯も知らで父戀し母なつかしと泣く妾を伴ひ、譯ありて共にフランスに移り住むやうなり侍りぬ。あゝそれよりの十年この方、幼き記臆に殘りし此日の本の地の、夢に現に思出されては、遠く別れし母親の戀しく忘るゝ暇なきにつけ、其母人も、いかに年頃相見たしと思ひゐ給ふかと考ふれば、一日も早く此國に渡らばやと思ふ心の切なるより、身に覺えし音樂を頼みに、漸くはたどり來りしかど、名も知らず所も知らぬ其母親を、いかにして尋ね出すべき、父と母との分の折には、今宵と同じ「別離の惱」をかなでしと聞けば、母を尋ぬる妾の身にも、若しよすがとなる事もやと、其拙き一曲を御耳に入れ侍りしなり。されど、其尋ぬる母も恙なく暮し給ふや否や、思へばいとゞ悲しくて……」と、嬢の聲は一節毎に細りて、身の境遇の幸なきに胸迫り、熱き涙の頰を傳ふると見えしが、又さし仰ぎて、「慈悲ふかき聽衆の方々、此幸なき孤兒の境遇を憐みて、戀しき母尋ねん便を與へ給へ。あゝ天に在す神の御力もて、……其戀しき母の許に、導かせ給へ。」

泣くまじとする瞼を破りて落つる涙を拂はんとする時、目赤らめし一婦人の、人押分けて壇に上るよと見れば、うつくしき人をかき抱きて、言葉もなく泣き沈みぬ。

（終）

〔評〕結構巧みなしと雖も文章高雅にして同情深し

甲賞

葦分小舟

麹町區飯田町六丁目廿二番地 齋藤梅子

水馴棹さつとさせば、碎くる水に寫る月影きらきらと散りて、金波銀波の花の漣、舳先は淺瀨の蘆り分けて、やがて着きし入江の渚、散々と散る蘆の花は、脫捨し簑に時ならぬ雪を見せて、我嬉しまゝ船緣叩いて唄ひもやせん小唄一節。

小唄所かもう今日は、常より遲い歸路、家には妻も待つ

て居やうにと、舟は其まゝ岸に繋いて、魚籠に餘る得物を片手に、肩には雫滴る櫂一挺、今日此頃は我から馴れし漁師殿の、此生活を辛しとは思はねど、脊に負ふ月影に振返れば、腰ぎりの着物に薬の胸當して、昔に變る今の姿の、未練ならねど胸苦しや。

一足毎にちよろ／＼と小蟹隠るゝ葦原の道も四五町、一本柳散る邊より右に曲れば、猶兩側より迫る雑草、分行くまゝにとり／＼に鳴く虫の音も、跡つけしやうに止みて、月を宿しゝ葉末の露の、我歩につれてちりしくは



玉かとばかり。

草は次第に雜になりて、田畑とり交へたる廣場に出でぬ。此處よりは羊腸の畦道間を走り、其盡くる彼方には、葉もちり初めし林を小楯、二株茂る老松の根本に窓もる灯の火影、瞬くやうに只一筋見えつ。

黒き松影、窓もる光など見るまゝに、沈み勝なりし我心は急に跳りて、月も光も虫の音も、又心に入らずなりぬ。實にや、其老松の根本、其火影もる家には、我愛しの妻と、愛らしの子とぞ待つなる。さればぞ今宵も、常になき遲き歸宅を如何に待

暮れぬらん、これとて我には心なくての業にはあらず、得物一尾も多く、明日買はん米の代にも餘り、妻が心も安かれと思へばなれど、それ知らねば、恙ありてなど心痛めじぞ。幼き者は夕餉や終へし、父樣と一處にとせがまれて、又しても妻の困うじてぞあらん。

思へば妻は可憐しの者や、我は我から世を捨てゝ、自らやつす漁夫の姿の、又世に出でん心も切ならねばさまで辛しとも思はねど、花ならばいざ咲誇らん年の身を、甲斐もなきものゝために田舍に隱れて、可惜丈なす黑髮さへ手束ねの艶もなくやつしはてゝ色さへ黑くくすぼるに任せて、紅白粉は名も忘れぬらん、それも生れながらの貧しき育ならば兎も角、何不足なき家に人となりて、水仕の業にも慣れざりし身が、今日の辛苦は皆誰が爲ぞ、思へば嫁入の其折は、我も猶賣出しの新文士、此汲江が妻となりて、何不自由も見ざりしなめれど、やがて批評の欄に攻擊の文多くなり、我からも亦、世の理想の余りに低く、到底敵へて甲斐なきに憤り、筆を捨てん、文を燒かんの心起りしよりは、家の收入も日一日に少くなりていかに胸苦しかりけん。果ては親同胞にさへ見捨てられし時、離緣せよとの親里のすゝめも退けて、一家の苦を身一つに背負ひ、我を勵し呉れしは誰なりし、今も猶片時側離れぬ愛しの妻ならずや、明なき世の幾百の譏りは心に掛け給ふな、やがて見る目明るき人の出來なば、君が御名は又世に輝かんに。若し都の內の住居心に染み給はずは、何所如何なる所にても、御心に叶ふ所に移給へ、妾は御側にさへあらば、如何なる山の奥にても淋しうは思侍らぬぞと、健氣に云ひて、共に共に此利根の岸邊に移住みしも早三歲の昔、今は間に愛らしき者さへ出來て、我には再うるさき都に立歸らんより、此僻けき里にかくれ住まんこそ願の願なれど、我故に斯く朽ちながら悲しき顏一つせで、優しう盡し呉るゝ心根思へば、何時までかくて憂目を見せらるべき。

一時は勢つきし足の、又何時しかにぶりて、月に虫に思出す昔の事、其花やかなりし盛の頃、我魔女作の「半開扇」か、廿五版を重ねし祝を兼ねて、中村樓に開きし妻の披露の宴に、今は音信もなき友の上田が、即吟の新體詩を吟じて、我等が上を祝ひ呉れし事、將又、里よりの急使に妻の行きて見れば、離緣の話なりしと聞きし時の心地、あるは昨日迄文壇の花形と唄はれし汲江が、我から捨てし都とは云へ、住馴れし地を後にして、夫婦只

二人、此利根の地指して旅立ちし折の光景など、猶かねど戀る幻に、何時とも知らで畦道を過ぎ來つ。

「大變遲くゐらつしやいました事、妾は又如何遊ばしたかと思ひまして。」と、彼方より馳寄るは、其愛しの妻。

急ぎ歸りて嬉しき顔見んと思ひし身も、用なき想に足鈍らして、一入心配かけしかと見上ぐれば、布こそ當てねみすぼらしき衣きて子を背に負ひし妻目につき、我故に哀しやと思ふにつけ、えゝ男一匹が、己一人の心から、妻子に迄憂目見するかと、肉も跳るやうなれど、昔ながらの黒き髪、洗ひしまゝに後に掛けしに、青き月影さし添ひて、すらりと高き丈の胸の邊、少し明白になりし處より、白き肌さと見えたる、今更に神々しきばかり美しく思はれぬ。

「今日は大變漁があつたものだから、少し遲くなつた。一人で淋しかつたらうね。」と云へば、

「いゝえ、只あの、如何なさいましたかと思ひまして」とさし寄りて、我持てる籠受取り、さし覗きながら身を揺らして、「坊や、父ちやんが此様に澤山お魚をとつてゐらつしやいましたよ。おや、もう眠つたのか知ら。」

「うむ、眠つた樣だ、もう御飯たべたのかい。」

「はア、あの父樣と一處につてなか〳〵聞かないのを漸く食べさせたばかりで御座いますの。」

「そうか、それじや其まゝ寢かすといゝ、坊を背負つて居ちや重いだらう、どれ、籠は私が持つて行く。」

「いゝえ、よう御座いますの、貴人こそお勞れなさいましたでせう。今水をとりますからお足をお濟ぎなさいまして……。」

「ハツハ、漁夫が其樣な贅澤をしてたまるものか、前の川で澤山だ、それより下駄を。」

「はい。」

妻は彼方に去らんとせしが、又振返りて、

「眞實に今晩は御漁が御座いましたのね。」

「うむ、然し先生あまり漁が上手になつ〳〵、眞の龍伯になると、天人樣に逃げられるから危險さ。」

「ホヽヽヽ、あんな事仰つて。」

「ハハハ、戯言は戯言と、舟で見ると月は非常にいゝぜ、眞に此まゝ此處で一生を送りたい樣な心持がするよ。」

「左樣で御座いませうね、私も何時も左樣思ひますの。

又東京などに出て、世智ッ辛い中で暮すより、此まゝ一生住んでたら、どんなに心が楽だらうかと。」

「實際そうだ、薄情な冷酷な社會に立交じつて、名だの富だのつて噪ぐよりはどんなに楽か知れやしない。私も左樣思はないでもないけれど、東京にはお前の親御も姉弟もゐられるのだから、お前を一生此樣な處に置くのは氣の毒て……。」

「いゝえ良君。」と妻は驚きしやうに見上げしが、又俯向きて、「良君こそ此儘朽ちさせ申すのはお痛はしう御座いますけれど、妾などは、斯うして御側にさへ居られゝば、如何な所だつて嬉しう御座いますわ、どうせ親だ、兄妹だと云つたつて、」とホロリとせしが、甲斐なき事は思はずと心極めしやうに又空仰ぎて、「月は、何處も同じに照すので御座いますもの。」

我胸はえぐらるゝやうの心地しつ。

「うゝ左樣だ、月は何處でも同じに照す。お前さへそう思つて呉れゝば、私は一生漁夫で終つても殘念とは思はない。」

「そ、それ程迄に妾を。」と云ひつゝ、妻は我が手に取緊りて泣きぬ。

夫婦の愛の限りなく甘きを思ひつゝさし仰げば、月は雲なき空に涼しく澄みて、我は曾て今宵ばかり美しき影を見し事あらずと思ひぬ。

「もう家に這入らう、じや下駄を。」

「はい。」

軒下に網と櫂とをさし置て、足洗はんと門川の岸に立ては、妻は背の子を布團の上に靜に置きて、いそ／＼と立働く影見ゆ、大方二人が夕餉の膳を整ふるなるべし。月影を乗せしまゝ、微けき音ながらさや／＼と流るゝ川水に、惜氣もなく兩足ひたせば、影搖々とうごきしが、やがて又圓になりぬ。

（完）

（評）新体詩人が市塵を遁がれて田園に棲遅する情况を描きてよくその趣をつくしぬ

し賞

夜嵐

（上）

岩手縣森岡市四ツ家町三、三、
金田菊子

さアお姉様早く參りましよう、歸りが後く成てはお父様に濟ませぬ、あれ自轉車が來升よと云ふは、十七八才の艶麗しい娘、玉をころがすが如き中に、何と無く無限の悲みを含むやうな聲、オヤ私とした事が、又つまら無い事を考へて、思はず立ち止り升た、此人通りの多いのに、と一すぢ二すぢふりかゝる鬢のほつれを、いと白き手もてかき上げ乍ら、重げにもたぐる顏を見れば、之も十八許にや優るとも劣らぬ、秀麗しき娘なり。

歩み靜にそよ〳〵と吹く夕風に、四の袂輕かに、お姉様、只今自轉車で通り升たのは、彼の横町の下宿屋の可厭な、書生さんねと貌を窺くに、アラ常さんもオ其樣な事決て言て下さり升な、彼の掛札の文字を見てさへ、五體が戰慄とし升、てすがお姉様、私は母様から伺ひ升た時は、ツイ眞個かと思ふて、其は其は一通ならぬ心配致し升た、常さんの御親切は、何時も乍ら其度毎に、骨に銘み有難いと思ひ升よ、と憂をしみて笑ゝまぎらはさんとする風情一しは美さを增せり。

冴えにさえたる望の月漸山の端を離れて、障る物なき大空に悠然たる時、深き杉木立の下道を、見つかくれつ中垣の隔て無う、話し合つゝ、いそぐ美人二人、

お常さん、先刻話し升た事を承知て下さり升か、何卒はいと返事を聞して、私は何處迄も母様の仰に……否其では私こそ、逝い母様に申譯が出來ませぬ、私を可哀想と思召して、彼の事だけは一向お免被爲て、其より彼の美いお月様を御覽遊ばせ、心の底迄淸々し升、ほんに世の人の心が、皆彼の様に、潔白であつたらと語りつゝ何時しか立ち止りしは、夜目にもしるき陶器の門札に、松浦四郎と記されたる屋敷、何となく不安心想に、さゝ垣の許に身を潜め、暫時息を殺して内の樣子を窺ふ樣、寂寞を破りて洩るゝ女の聲、眞個に常の意氣地のないのにも呆れて仕舞、嫌に大人ぶつてお姉様なんて、彼樣奴に、つまらない義理立して、彼の事なんか幾

何上手く話して聽かしても、容易嚨だと言て承諾ず、みすみす出世の出來る塲合も遁して仕舞、實に慾のない奴、それ母樣に申譯ないの、情に斯だのつて、何人に似て彼樣に馬鹿だらう、て知れた事、だから彼の時引取てもらい度なかつたのを、兎や角と理屈を付て、たもんだから育て樣のいけない上に、悪い方に似て彼の通り、仕方がない、明日でも又能言て聞して、無理にも嫁る事にしますから、旦那樣からも其つもりで‥‥又今頃何處を彷徨て居るだらう。

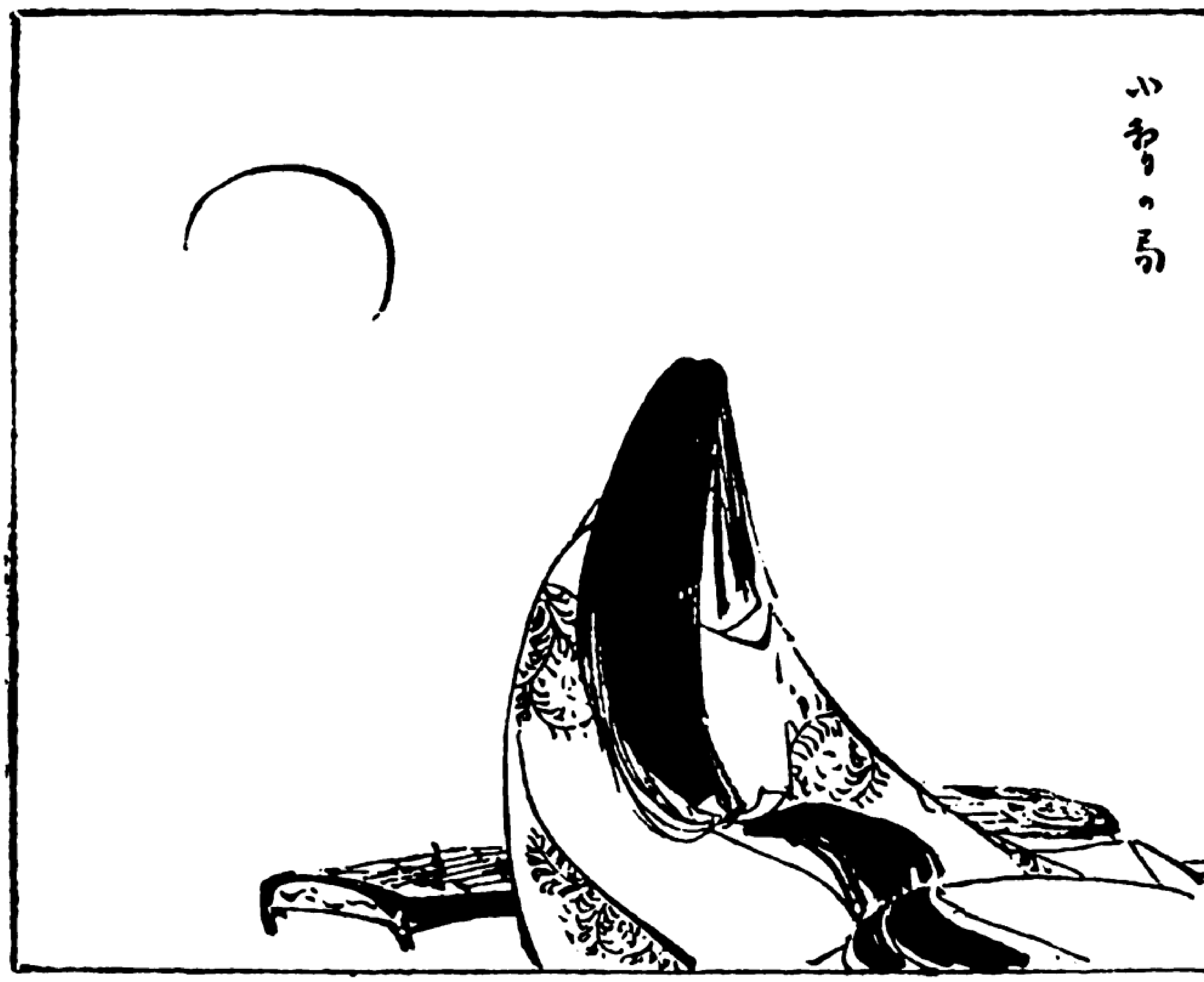
何事だか少り理由の解ない、旦那樣の、お言て御素性の其とおしはかられる樣子、奥樣とのお話、折しも月は雲間にかくれたり、外なる二嬬、ほつと溜息。

（下）

見上る杉の森に、晩鴉群をなして鳴き騒ぎ、山寺の鐘諸業無常と告げ渡り、遠く長く餘音を引きて、幽に消え去りし時、森となく林となく、さゝやかなる小草に至る迄夕暮の幕にとざゝれ、空には雨を含める灰色の雲、渺漠たる蒼空に横はりしまゝ、たが里さしていそぐらむ、行衛も知れず走るなり、折しも黄昏の色にまぎれて忍びやかに、堤の上、並木の陰を彷徨人影‥‥‥。

嗚呼、つらかつた、漸此處迄はにげて來たものゝ、思ひ餘るは此身の行末、異に私程果敢ないものは有るまい、羨いと仰しやるお姉樣のお勤めしや、生みの母樣お出で遊ばす程、身は寸斷れるよりつらいものを、思ひ廻せば忘れもせぬ一昨年の春の夜、懐しい母樣未だ此世において被爲た時なりしよ、朧に曇る月影や、散り來る花の長閑さに、そてとも知ず浮れいて、「ま袖に、もすそに、亂れてかゝるは、かほれる雪」と唱ひつゝ、木立の下に佇みて、眺むる折しも、何事ぞ、囁く聲の聞ゆるは、誰樣の睦言ぞやと怪みつゝ、すかしみれば、思ひきや、うら若草のわか〳〵と、露にも堪へぬお姿を、吹くとしもなき春の夜風にまかせ、恍惚としてあいての貌を見つめ給へるは、正しくお姉樣、あつと驚く聲を呑み、男は誰とすかし見れば、お免し被下怪みし罪、白縮緬の兵庫帶ゆたかに、手をはさみ、咲き亂れたる花陰にもたれ給へるは兼て、お許嫁の雪雄樣、ほつと胸撫で下しつゝも、幾年かけてお變りなされ升なと祈りつゝ、其のみ樂みとして居り升たのに、思ひ出すも涙の種、千代もと願ひし母樣、同年の秋、木枯軒端にすさびし夕べ、哀や桐の一葉と共にお死なり被爲れて、產の母樣お出なされて

から、私等二人は涙の淵に沈み果て、浮ぶ思ひもなく、泣ては明し泣ては暮し、袖の干る間も荒波の沖に漂ふ捨小舟、行衛も知ぬ悲さに、果てはきくも汚しきお姉様のお身の上、それよ先日御参の道で、はたと邂逅た自轉車畜生、彼の嫌な人と兎や角との風評、其間た時の私の心配さ、真倒雪雄様との御縁をお離申して、私を嫁らうとの母様のお策略とは、慮なる身の口惜しや、さりとは思ひもよらず、命にかけてもお諫め申し、全くそれと知た時の心中、――是程迄の母様のお惡しみ



とは、あゝ思はざりし、其も皆私の爲を思ふて下さる母様の御慈心、思へば、有難いお言に背いて勿躰ないが、かとはいへ、何でお姉様をお後にして妹たる身が先へ嫁れやう、先位ならまだしも、お許嫁の雪雄様へ、あゝ人の事てさへ可厭だ、罪もないお姉様へ不義の名おはせて、きずつけて、オ、恐しい母様の御心底、幾何私からお願い申したとて、彼の柔順いお姉様の事故、母様の仰とあれば如何な事でも、背いて斯といふ箸もなし、何の因果て斯迄不幸に生れたのか、あはれ母様が臨終の

時、わざわざ私をお招なされ、妾のない後は、そなたの母様がお出なされて、そち達二人のお世話をなさる事でせう、さすれば、彼の大人しい清さんには繼母、如何に苦勞をする事でせう、父様といへば今でさへ彼の通りの被爲方、後の事を思ひ遣ると之のみ異個に黄泉路へのさまたげ、妾はそちも承知の通り、旦那様に、ありとあらゆる御折檻を受け、艱難辛苦をなめ盡して、今此様になつたも、皆私の務が足なかつた爲、之と運命とやら是非もない事、とはいへ柔和しいそなたの介抱を受て此世を去るは、何より嬉く思升、假令妾が死後も、變る事なく清さんを實の姉と思ふて仲善くしておくれなら、草葉の陰で喜んで見て居り升、と、想に想ふは常さん獨と、枯しみ聲をふり搾り給ひしも消えぎえ幽かに耳に呼き給ひ、私手をお取り被爲ての御遺言に、あはれ瀧なす涙をふり拂い、御勿体ない母様、幼少い時からお引取り、お姉様と同等に愛み御教育被下升た海山もたゞならぬご高恩を受け參せし母様の、お遺物と思ふは、彼のおやさしいお姉様唯お獨、其育難いお姉様を、大切に致しませんて何としまう升、必ず影となりお仕へ申し升ぞ、お枕邊にまろび伏して、お誓ひ申し升た時の様、幾年經とも忘れともなきに、假令お兩親で何とお仰ても、如何て御遺言に背かれやう、萬一私がお言に從て嫁かうものなら、其こそ賤い者の腹故彼の様だと、死ぬよりつらい風評に責めらるゝは必定、では却て母様のお名聲を汚す許でない、お姉様に……

あゝ味氣無い、子として父母の言に背くは不孝、此様苦しい思ひをして、生きて居たとて何しやう、死ても角ても甲斐ない不運な私、生きて不孝不義理と嘲られんより、死で名譽を全うし、戀い懐しい母様に、彼の世でお目に掛り、お姉様のお爲を思ふて、是々斯と、つばらにお話し申したら、嘸お喜びになる事だらう、そうして長へにお傍にお仕へ申したい、何か何よりの樂み、あれ川の水の聲、母様のおこゑのやう……

此からと決心したと暫時も早く……

愁然として瞑目せしまゝ……

お父様お母様、お免し下され先立つ不孝の罪、さらば此後お姉様を、私と思召してお愛み下さりませ、此のみ幾重にも……

さらば、お兩親様……

色あせたる花の顏ばせに、柳の髮おどろにふり亂し、怪

しき笑を浮べつゝ、音する方を其と知りけん、ふり向く姿……あはやと叫ぶ一瞬間早や……後には梢を擲る風のこゑ、膚を刺すやう、寂寞を破る大川の流も冴ひて物凄し。

〔評〕文章雄健快風に帆を揚げて走るが如し　（をはり）

丙賞

花見小袖

筑前鞍手郡新入炭坑　松林歌子

（上）

「奥様、御隠居様が御召で御座ります」と嫻静かに開きて、両手をつけるは十七八の小間使、奥様と呼ばれしは、年の頃廿の上を二つか三つ、色白の細面、さして美人と云ふにはあらねど、さりとて又捨難き品格、涼しき眼に、口元の愛嬌は、自然人をして、追慕の念に堪ざらしむ。今しも、乳に飽きて、すや／＼眠れる愛し子が、可憐の寝顔我にもあらで、眺め入りしが、不思議や、眼の底に宿れる露の三つ五つ、「そうかへ、夫れては直に」と答ふる言葉も悩げなる、下女の立去を見送りて、思はず落す一滴、頬にかゝりし後れ毛掻遣つゝ、幼子を臥床に移さむとなす折しも、奥より聞ゆる咳嗽声、「露は其麼したんだへ」夫人は、はつとして、身繕ひもそこ／＼、恐る／＼姑の前に手をつかへ「お母様、只今はお召で御座りましたが、丁度太郎を寝かして居ましたので、つい遅なはりまして」五十の坂を三つ四つと覚ゆる老夫人、恐ろしき眼に、おろりと露子を見遣り「お前は、太郎の守さへして居れば、母さんの用は甚麼でも良いのかへ」「いゑ決して左様では御座りませんが、つい遅くなりまして、誠に相済みません、何卒御免し遊して、……何ぞ御用でも御座りますれば、御申付け下されませ」「何、もう良いよ、私の用なんざ、下女にでも頼むから、御前は彼方へ行つて御秘蔵坊ちやんの、お守でもするが良い、華族様のお嬢様に、私の用迄させては、済まなかつたつけ」「お母様、私が悪う厶りました……之からは決して……今日の様な不都合は、致しませむから何卒……此度迄は、御免し遊してッ……」「何もお前が悪いとは、云ひはしない、私が何か一言二言云ふと、直に

泣きたがる、良く、涙が出るものじや、爾樣顏を繁に見せつけるから、いつも私が余程無理でも云つて、詬責る樣に思はれ本に合つた話じや、ない、もう泣く事は眞平だ、珍らしくも無い、早く彼方へ行つてお呉れ……あゝ、昔から嫁は、身分の低い者から娶れと云つてあるが、實に本當だ」と獨言やら、怨痴やら、露子が泣き伏せるを、さも憎々しげに睨め付け「繁と云へば甚麼しました、又今夜も留守なのかへ」「はい……」「ほんに人と云ふ者は如何なるか分らぬ者じや、どんな放蕩者でも、女房を持てば身が堅まると云ふが、繁は今迄自分から一度でも、酒飲みに行くと云ふては無し、若い者には珍らしいつて、云はれて居つた程だが、近頃の有樣たら甚麼だらふ、お前は何とお思ひか」と、光れる眼の恐しさ「何事も……私が至らぬからで……ムります何卒……御免遊してッ……」折しも六疊の方に當りて「わつ」と一聲小供の泣聲

(中)

「おう、太郎や甚麼した、さあ、お乳ても、母さんは此處に居ますよ、爾樣に泣くのては有りません」と自分は右手に、はふり落つる涙拂ひつゝ、「太郎や、そなたは、ほんに不幸な子じやのう、松村の信さん等はお祖母さんの御秘藏だが、そなたは今迄つい一度、お祖母さんにお負さつて頂いた事もなく、……之も、皆母さんが惡いからだ、堪忍してお呉れ……あゝ母さんは何故こんなに馬鹿だらふ、一人のお母樣の、御機嫌さへ取り得無いとは、あゝ、情ない、夫にしても、お母樣もあんまり邪慳な成され方、自分丈は出來る限り、盡して居るつもりだけれど、未盡し方が足らないのだらふ……が、少しは心の中も、察して下さつたらば……私は何故華族なんかに產れたらふ、若し、私が身分賤しい者て有つたら、少しは哀れとも思ふて、下さらふに、身分の高いのがお氣に入らないか、いつも御華族樣〱て、あゝ、何故華族なんかに……繁樣は未御歸りなさらないのかしら、もう十一時打つたのに……あゝ、何と云はれても、やつぱり私が惡いのだ、繁樣が近頃御酒召す樣に成つたのも、元はと云へば私故、母樣の御不機嫌なのを、見るがつらさのみ心遣り、元はやつぱり……いつそ、繁樣がもつと邪慳な御方て有つたら……若し、太郎が居なかつたら……あゝ、我ながら淺間しい、假にもこんな心起しては先生やお友達に對しても恥かしいッ

……」と一人悶ゆるいぢらしさ、暫しは前後も知らで泣伏せしが、軈てきつと見上げし涙の顔には、幽に見ゆる口元の笑み「おゝ爾だ惡かつた、こんな心を起すのが、未母樣に盡す心の足らはぬ證據だ」つらしとて、我さへ人を恨みずば」あゝ、朋友の間でも親子の間でも同じ事、我さへ堪忍んで、益々眞心以て仕へたならば、遂には樂しき月を眺むる事も、出來るであらふ。諺にも、樂の先には苦しみ有り。苦しみの先には樂有り。爾だ、我には此先樂と云ふ、嬉しき望有るものを、何とて歎き悲しむ事の、有らふか、いよ／＼益々、務めては、あゝ「つらしとて、我さへ人を恨みずば……」

＊　＊　＊　※　＊

夜は早や深々と更け渡りて、天地聲なく、限なき月は板戸の隙洩りて、ほの暗き火影に照り添ひ、折々聞ゆる犬の遠吠、いと物淋し。奥の八疊にて病蓐に難める一人の老夫人、眼窪みて肉落ち、色は凄き迄青醒め、枕許には、未うら若き丸髷妻、只一人帯をも解かで端座せる、長の看護に面憔悴、露けき眼に老夫人の寢顏、昵打守りつゝ、折々洩らす太息さへ、力なげなる、見るもいと哀なり。老夫人は夢にや覺めし、寢れる眼見開けば「お母樣、お目覺てムりますか」「ミ水を」「はい」と傍に有りし水瓶よりコップに移して進むれば、老夫人は一口漏して下に置き「露や、お前は今夜も未寢ないのかゑ、私は良いから暫時御寢みな、それては身躰が續かない」「いゑ、私は晝の間に能く寢むで置きましたから、少しもねむい事はムりません、胸のお痛みは如何てムりますか、少し腰でもお揉み申しませふ」「いゑ夫には及ばないよ胸の痛みも、晝よりは大分良い樣だ、お前が爾樣に、優しく云つてお呉れだ程、私にお前に對して面白無い、今迄そなたに無理斗り云つて、さぞ邪慳な者と怨むだらふ、が、何卒今迄の事は、堪忍してお呉れ」「まーお母樣御勿躰も無い、何て私がお怨み申ませう、皆私が行屆きませんかつたからで、ムります、お母樣こそ私の、今迄の不行屆を御免し下されますれば、私は之より嬉しい事はムりません」「いゑ、そなたに惡い事は少しもありません、私が惡るかつたのだ、あゝ、私は何故那樣に邪慳な心を起したらふ。こんな優しいお前を、何故憎く思つたらふか、我ながら淺間しい、夫を、御前は少しも怨む樣子も無く、長い間夜もよく／＼寐まむで、親切に介抱してお呉れのを思へば、私は實に、如何したら良

いか、穴にでもは入つて仕舞ひたい位、何卒免してお呉」「お母樣何卒もう爾樣事は仰有りませんて、……何卒一日も早く、御全快遊して下されませ」老母は鼻打かみ「私は直に快なります、可愛い御前に、こんなに、心配させて若病氣にてもお成りだつたら如何せう。之から、能く、お藥を飮み　直快くなるから、心配をして無い、御前も身体を大切にしてお呉れ。……爾う云へば近頃大層瘦せたのう、顏色も惡い樣だ、長い看護に疲れたのだらふ、明日武富さんがお出だつたら見てお貰ひな、私はもう良いから暫時横に成つたが良い、若重くても成ると」と、今は我身よりも嫁の身を氣遣ふ志ほらしさ、あゝ、さわらぬ神にたゝり無し。

（下）

今日は日曜と見へ繁は奥の座敷に、老母と火鉢圍みて心長閑に語らひけるが、間の襖靜かに開きて入り來る露子、昔にかはりて元氣能く、顏の色もつやゝかに、一曾美しさの增さりし如く覺ゆ。茶器に老母の好める池の月取添へ、「お茶を入れましたから」とて差出せば、老母は露子を見てにこ／＼顏「をう、何より結構な、お前も暫時お休みな」「はい難有う厶ります」と、二人が中は、昔の間にあらず。繁は此有樣を見て、胸中の悦び面に溢れ「露、今お母さんとお話して居たが、追々花も盛になるから、一日お母樣の御全快祝に花見でも、催そうかのう」「はい、夫は誠に結構で厶ります、何卒、お供致したいもので、何日頃が盛で厶りませうか」「爾うさね、如何しても本月の末だね」「オホ……爾う致しますれば未十日餘りも厶りますのね、まー待遠い事」老母は、にこやかに「十日と云へば長い樣だが、何、直だね、夫に就て繁や、吉村の奥さんは先日立派な花見小袖が出來たそうだが、露にも今迄能く介抱してお呉れだつた、御賞與に、一重奮發してお呉れ」「アラ、私はよう厶りますよ、お母樣のお祝ですもの、お母樣こそ何ぞお目出度い物でも、ねー、良人」「いゝえ、私はもう老人だから、かもはないが、若い者はサッパリして居無とミット・モない繁や、直三井に電話でもかけて、少し取つて見ては甚麼だね」「私のは良う厶りますよ、お母樣のをねー、良人」繁は二人が互に、ゆづり合ふのを見て心嬉しく「之は困つたね、夫では詮方が無い、二重奮發するとしよう、其かはり一月は飯は食へないよアハ……」「まー私は良う厶りますのに」と、露子、さすが女なれば嬉し

さ胸にあまれど、夫に對して氣の毒げに、打笑めは、繁は「僕斗りゑらい損をした、もつと遲く云へば良かつた、そして僕には何の御賞與が出るか知ら」老母は微笑「お前は、今迄樂な眞似斗り、おしだつたから、何も御賞與なんか、出はしないよねー露」「オホ……」「ヤー之は一本いかれましたねアハヽ」折しも太郎は、小間使にいだかれ入り來れば、老母は「をう太郎や良い物上げるから、お祖母さんにお出、此處へ連て來な」と初めて我手にいだき取り「さあうまま上げるよ、頂戴をし、をう、お利口だ事、大層大きくなつたわ、露や太郎は近頃急に、可愛らしく成つた樣だのう、之からお祖母さんがお守してあげるよ」と大事そうにゆすぶりつ
「坊やのお守は何處行た
彼の山越へて里へ行た」

【評】姑の邪慳なる態を描きて深酷骨に入るされど心機一轉の原因を唯看病の一點に歸するは未だ物足らず覺ゆ

秀逸

白蓮華

（上）

岐阜縣安八郡大垣郭町一九三ノ七 高森と志子

美濃屋といへばこの町切ての素封、家業は代々乾物問屋のひからびしわびた代物ばかりには、似合しからぬゆつたりと福相なあるじの利兵衛、水々と美しい娘のお糸、ほんにお糸さんといへばこの頃とんと奥へも店へも見えぬやうなと、近所の一人がいひ出せば、そういへば帳場の親方もいつにない思案顔、どうやら曰くがありそうな、ちよいとちよいと長どん孃樣はあんばいてめ惡いのかえと、おせつかいとり〱。
お糸といふは利兵衛夫婦が一粒種、素よりありあまる身代の髮の飾、着物の好みそれがほしいといへばこれもかといふ具合に、金にまかせてかざり立、磨き立つるに、美しき玉のいよ〱光そひて、ことし十八の盛りの

花、仇なる嵐のふかぬ間にと、此程からの養子吟味、あれやこれやとあさりにあさつて、やつと探しあてたは下の町の唐物屋の二番息子、先づ第一に男振がよくて氣立がやさしくて、當春商業學校まで卒業したと云ふ天晴三拍子揃ふた婿様、これならばと出入の金七か手柄顔の吹聴、親父の利兵衛も膝のり出せば、あすこならは身代もよしと慾も手傳ふ母親か合槌、いよ〳〵それときめるにしても、一應は本人の胸も聞いて見ねばと只顔を赤くしてうなづく事と打出せば、案に相違の不興顔、厭々と斗離れの小座敷に引こもりて、食事にも手をつけぬに、父母はと〳〵もて餘して和女の躾が至らぬ故、貴方が餘り甘いのでと、水掛論のはてしもなければ、かねて氣に入りの小間使竹といふにいひ含めて、それとなく譯をきかせぬ。

今は亡き人なる先旦那の代、數多ありし下婢の中にお澤といふ實体者、永年影日向なく働いた功は旦那様仲人にたち、支度も相應にさして出入の大工棟梁の常吉といふに嫁入させし程なく、生れしは久次郎といふ男の子、三つの秋に流行の疱瘡、只かりそめのと油斷せし内に容易ならぬ難患となつてしまひ、そこの藥こゝのお醫者と様々に手を盡せど露はかりもしるし見えず、思ひ餘りてふと氣附しは永禪寺の藥師様、妾の幼い時の疱瘡も母様が御願開いて直して下さつた苦しい時の何とやら、すまぬことながらと子故の闇の跣足參り、一里の野路も何のそのと三七日過ぎし頃より、やゝ見直せしと思ふ中に、次第に快くなりゆき、早これならはと醫者も心ゆるす程になりてお澤は餘りの嬉しさに、これもひとへに藥師様の御利益並大抵の事では御願ほどきは出來ぬ、いはゞ命は拾ふたやうなものなれば、物心ついたらは佛様の御弟子にして御恩返しをさせますと永禪寺の和尚様まで申出しこともありしか、喉元すぐればいつしかあつさの忘らるゝか習ひ、もう來年はあれも七つ隣の子の革包提げて帽子着て學校へ行く姿を見てはいとしの一人子お寺へ上けるも可惜しく今二三年とをし移る中ある夜近所に火事を燒き出し折柄の西風にあれよと思ふ間もなく一軒二軒、それ三軒と見る〳〵中に燃えひろがりて、何一つ持出すまもなく全くの丸燒となりぬ、常吉は職人氣質の氣も大きく何金は儲もの家なぞはすぐにたつ親子が命助かりしが何よりのことゝあきらめもよけれど、お澤は狹き女心の驚き

やら、行末の取越苦勞やらに持病の血の道はげしく起りて枕上らず待てよ〳〵待ては海路の日和とやら、今に今にいひ事があるぞあすから田舍の豪家の大普請、一月中にはどつさりとした收入がある筈、今夜は仲間の前祝に横丁の魚半で一杯やる約束、土產は鮨の折詰ね向角の大福にしやうか、坊もねずにまつてゐよと景氣よげにいふて出たなり十時、十二時、一時、はてなんといふかへりの晩さ外はそれに大層な嵐の音、あの人に限つてたとへ附合にも他道へ入りこむ氣遣はなし、あゝ何とない胸のさわぎ早う歸つて下さればよいと、ねつ起きつ終まち明して嵐もやみ、鷄もなけど歸つては來す力なき身を起して立上りし窓の下姉御〳〵大變がと仲間の誰彼がけたゝましき呼聲何事と胸轟かして様子をきけば、昨夜魚半の歸り、棟梁は熊公と二人て堀端を通りかゝるとあの通り暴風、醉てはゐるし、暗くはあるし、二人ながらお堀へころげこみ熊公だけは曉方に正氣付いて、四方を見ると六七間離れて棟梁の體ぬかるみへ横たに落こんでもう息もたえているので、熊公か交番へ走る直に御役人が見える仲間も大抵集つて今に御檢視もすむ時分と、息せき〳〵の知らせ皆聞かぬまにお澤は早取逆上て正躰もなく打倒れぬ。

重ね〳〵の驚きと悲しみに、お澤が病は益々重りけふか明日かといふ程になりぬ言ひ遺すこともあらばと枕元に尋ぬる旦那の利兵衛ふし拜みて私共かこうなりはてしも全く佛様をないがしろにしたお罰此後もお賴み申すは久次が身の上、私なきあとの片付すみしだいお寺へ上げて下さる様と繰返しいひ聞えてつひに夫のあとを追ひける殘りし久次は一先美濃屋へ引取られしが生得の溫和さと愛らしさは人每に可愛がらぬはなき中にも主人夫婦は一入の氣に入り手習算盤と敎へてみれば一をきいて二を知る位の才もあり、末賴母し何もそう急に坊様にせずともと其儘店に使つて見ると御主大事と只々正直の働振りいよゝ手離しがたく、又も此世に引戾されて廿一の今日まで折々は母が臨終の遺言思ひ出づる事もあれど、生若き身の流石浮世の名殘もをしく、一日〳〵とすぐす中に、少きより一所に育ちし娘のお糸、いつか初戀の胸をこがして目てしらせ振で見するを心付かぬにもあらねど恩ある家の一人娘まちがつた事をしてはすまぬ譯とともすれば、狂はんとする心の駒つなぎつとゝめつ、素知らぬ様にてもなす程、か

なたはいよ〳〵思ひつのりて、あせりにあせる内此度の養子沙汰彼人ならばいざ知らずと親のさとしも召仕のいさめもいつかな〳〵耳にもよせずあすにも結納でも持つて來そうについ先方に媒人口すべらした金七はまだか〳〵と毎日の居催促、親分は困る娘は泣くといふ大ごた〳〵久次、流石に居つらくてや或夕暮湯に行くとて店を出たなりいづくへか姿をかくしぬ。

（下）

撞きいだす明暮の鐘の音に千々の迷ひ萬づの煩惱を捨てゝ清松山永禪寺の奥、名も智淨とよびかへつ庫裡に水汲み後山に薪を拾ひ、師の坊に供して折ふし町に托鉢に出てゝも檜木笠の奥深ければ、浮世の名よばるゝ事もなきに、今は中々心安くかくてぞ母がいまはの言葉にも叶ひ、お糸が戀もさめ果つべしと、今朝しも例の勤をへて鐘樓を下る階の下より走り出てし女の姿態まてとひしさる袂しかと促へて我名呼ぶは正しくお糸と、ふりちぎつて遁げんとすれば又とりすがる手元くゝりて一散にかけ出すをま、待てと追ひ行くお糸かなたの庭の枝折戸口半はあきたる必こゝよりとつと立入りて見廻せど滿庭只靜にして小鳥の囀をきくのみそれらしき影も見えず、古りたる木立苔むせる燈籠筧の水も音すみて閑寂の氣身にしむ斗池の白蓮はら〳〵と散りて朝風の肌寒きに取みだしたる姿何となく恥かしく思はず襟をかき合す折、彼方の障子スーと音して白き衣の老僧の立姿永禪寺の生佛樣とて碩學高德の聞え遠近に高き當山の和尚樣長髯雪の如くふくよかなる頰のわたり、慈悲の笑をたゝへてこなたを見やり玉へる樣戀にくらみしお糸が目にも尊とくしたはしく拜まれ、おぼえずもかしらを下ぐれば此方が智淨を尋ねてみえた女中衆か、私が少し御話して上げたい事もあれば先こちらへと自ら先に立ちて導かるゝに、一月この方父に母に我儘氣儘いひつくせしお糸も溫柔しく順ひて方丈の一間に入りぬ。

床の古銅の花瓶には夏水仙のかをり床しく、彼方の丸窓のほとりには葦屋釜に松風の音颯々と淨らかなる一間のさまに、燃え〳〵しお糸が情熱やう〳〵さめ行くにつけ家の騷ぎ兩親の心配さすがに思ひやられて不孝の罪の恐ろしく、懸軸の達摩大師も我方のみ睨み玉ふ心地和尚樣は手づから茶柄杓とりてさら〳〵とたてうれし薄茶一碗、お糸が前にさしおきてまづ一服とすゝ

められぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

ひる少し前お糸は寺男の五平といふ老爺に送られてい
そ〳〵と家に歸りぬ映の赤みはなほ去りやらねど目に
は美しき光みちて。

越て三日、美濃屋が奥に高砂や目出度謡ひ納められし
翌日、暖簾格子の中より滅多に動かれしことなき旦那
の利兵衛、自ら店の者二人へ萌黄の大風呂敷負はして
永禪寺の門をくゞりぬ、もたらせし椎茸、干瓢、湯葉の
色々取次に出し、小僧の脊丈けより高くつみ上げて庫
裡に運ばせ、別に上茶の二包これは和尚様へとさし出
しさて娘が改心の御禮やら、久次が此後の身の振方よ
しなにとくりかへしきこゆるを、和尚は輕くをしとゞ
めていや心配さつしやるな、何も若い一時の花じや、智
淨が事は私が引受た、今に一かどの修業がつんだら相
應な寺とらしてあの世の親達にも安堵させる、お前さ
んもひまの折はちよいと〳〵話しにござれ、今に棚の
夕顔も咲く此通りの山寺何も振舞申すものもない蚊の
大きなのとわしが自慢のにがい手前でも御馳走しやう
程にハヽヽハヽヽ。

（終り）

（評）構想陳腐にして且つ鄙俗の氣厭ふべしと雖も辭意周密にしてよ
く其の境を寫せり

葉末の露

志摩　山崎壽子

上

思へば今より三年以前我まだ帝國大學の制帽をつけて
居た時の暑中休暇に明石の北雄岡雌岡の麓神出村に靜
に余生を樂しんで居る伯父の許を尋ねた何がさて久し
く塵にまみれた空氣を呼吸して何れを見ても家と家と
て目を突く様な東京の光景に見馴れた我には青嶂翠巒
の快き眺や伯父の生々したお顔持や果ては百姓の訥訥
な風情まで殆んど應接の遑が無い程眼に映ずる樂しさ
は又一層彼の腰に十萬貫を纒ふて鶴に乗つて揚州に
遊ぶなどゝ大曾らしう云ふが我此の愉快さにはとても
及ぶまいと笑傾むけたで一幅の畫の様な山紫水涯を眼
前に控へながら如何して落付いてゐられやう「少とで
も私の側に居て話敵にでもなつたら何うだ」と伯父に

云はるゝまでに毎日のやうに野や山を駈け廻るのであつた溪川の巖に咽ぶ音や林に群れ囀く鳥の聲を耳にして深緑の間を洩るゝ幽なる日光を浴びつ颯と吹き來る山風に單衣の袖を翻しながら得々として「登々山路何時盡 決々溪泉到處聞」と口に任せて唐詩を吟じつゝ九曲折なる山腹の小逕を辿つたり累々として紫の玉を貫ぬけるかの樣に甘露自ら滴らんとする葡萄棚の下に立ちて伯父と共に自然の甘味を賞美したり種々愉快をし盡したも一生消ゆべからざる罪惡の兆をつくつたも其時であつた懷舊すれば淺ましき我懺悔物語

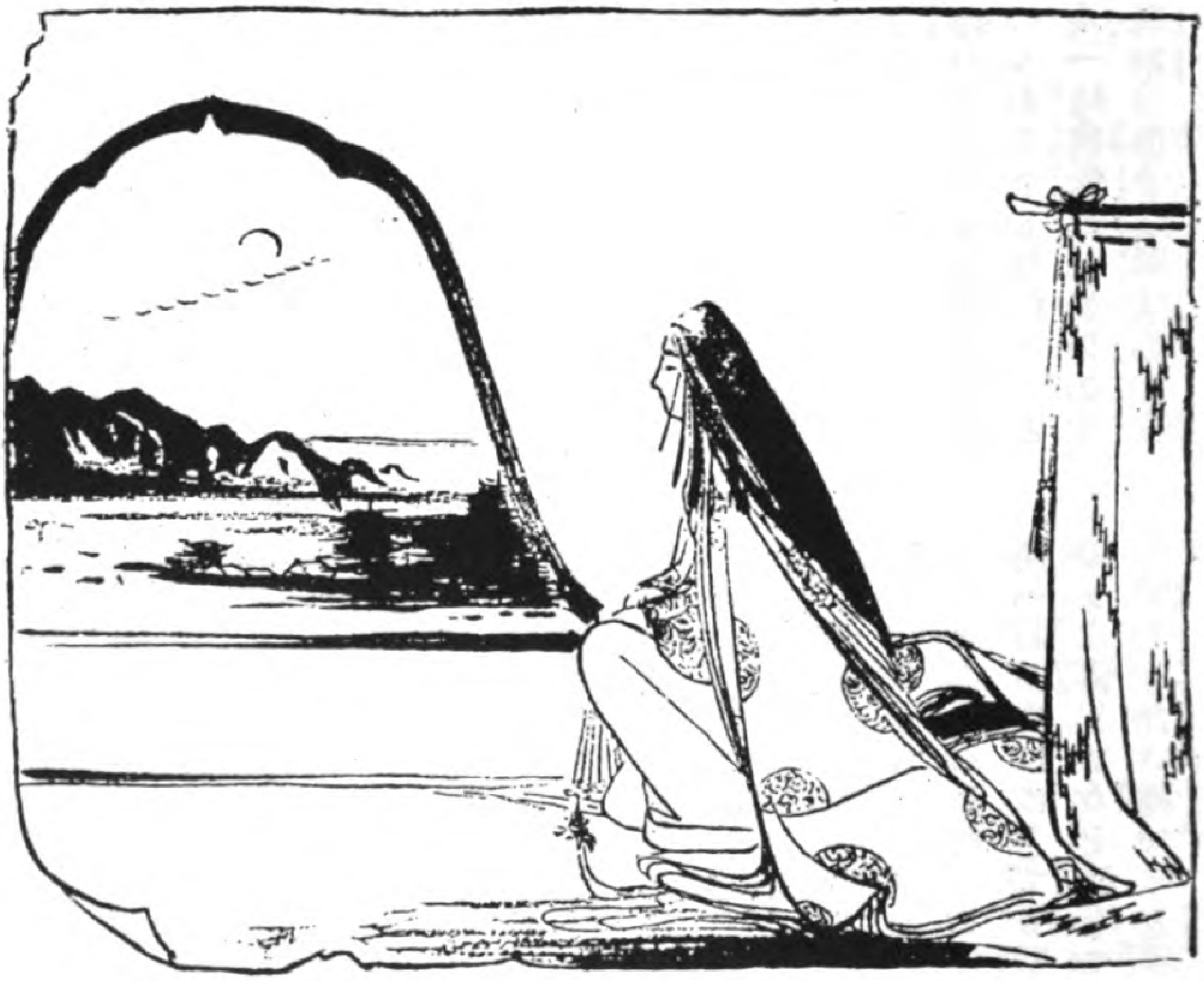
此樣な無邪氣な日を送つてゐる中いつか近き邊の老婆と心安くなつて度々其住居を訪ふやうになつた婆さんの名はお信と云つて此の村きつての正直者だそうで先立つた娘の忘れ形見の孫娘と二人つきりなので「娘も婿も引續いて死んぢまつて老の身の杖柱とも頼むは此娘只一人」と娘の脊を撫て廻しての物語隨分苦勞をして育て上たと云ふ事である

お信婆が掌中の珠はまだやう〳〵二八の蕾の花で繕はねども天のなせる麗質輝く許りの中に何所か愛度氣ない其風情に我はいつしか一方ならず心を惱す樣になつた或夜月冴ゆる橋上で邂逅つた時燃ゆる思ひを有のまゝに打あけつ戀に眼の眩みし二人は何の考も無う確く云かはしてしまつたのであつたがお信はまだ小供の稍りの娘にその樣な心の有らふとは夢にも思ひ及ばなんだから神聖なる互の戀は存外心安く相語らう事が出來つたのだ

かゝる果敢なき夢路に迷つてゐる中暑中休暇は早くも過ぎ去らうとしたでいつ迄神出に止まるべきで無いから明日は歸京と取きめた其日の朝彼の少女の家を尋ねて前の竹椽に腰を下しながらのどかな四邊の景色に暫し何事をも忘れて居た時低い柴垣から半身を表はした女があるそはなつかしき彼の女が我を見て少と會釋したが水晶に漆を點じた樣な眼に秋の水を湛へて百合の花瓣を含みし如き唇に笑を帶びてまだ朝露のひぬ撫子の花を手にしは其所に立つたゝ此方を眤と目守つてゐる其風情の優しく神々しさ宛然花の精の此世に姿を表はせしかと思はるゝ許りなるに我を忘れて恍然となつた

折しも白い蝶が何處からか舞ひ來つて少女の手の花瓣

へ接吻して暫し邊に戯れて居たが再び撫子の上に止つた時又も同じ様な蝶が來て互に上になり下になり狂ひ合つたが遂に何處ともなしに飛去つてしまつた我は其の詩的趣味に打たれて恍惚と夢見る様な眼をして見つめながら「愛は天國をして清淨ならしめ地を天國とならしむ」とあるシルレルの詩句を静に誦した時少女は閑雅に柴の戸を押開いて面羞げに我傍へ近づいて嫣然に「明日は貴君のお好な蝶採りに行きませうねいゝでせう」あゝ彼女はいつまでも我此地に在る事と思つて果敢ない



事を樂しんで居るのだ其明日こそ此處を放るゝ日とも知らで此の語を耳にした我は何して有のまゝに語る勇氣が有うかで暫し躊躇して居たがさてあるべきでないから委しく語り聞かせた上卒業後は乾度迎へ取るであろふからと賺し慰め懐の寫眞を取出して眞御身の眞情が變らであらば再會の日迄我とも思つて居てくるるやう我は御身が手折つた此撫子の一本を御身と信じて乾度大切に納つて置くからと云つた少女は其言葉の終ると共に得堪へで膝に伏と取縋つた、其後は多く云ふまじ否切

なる二人が胸の中は拙き筆ではとても書表はす事は出來ないのだから

我は其明日の未明戀しく懐かしき人々に別れて只一人床しい神出を見返り勝に歸京の途についた

下

それから二年の後であつた大學の文科部を首尾よく卒へた我は少女と約した言を實行すべきではあるが其折の腦裡には美はしい彼の姿も銀の鈴を振る樣な聲音も兎の毛程も止めて居なかつたそしてあの時は如何してあんなだつたらふと思はるゝ迄に戀には冷淡になつて居たいや冷淡になつた計りではない己が學位に自負した目では無教育なる田舍娘が急に厭はしくなつたのだそして「彼女は表面こそ優しけれ根が浮草の誘ふ水に任する田舍娘で朝の温かな情の露も夕には早や消え果てゝしまふのが習ひであるからたとひ我は心をかへずとも彼はいつしか誓ひし事を忘れ捨てゝ今は丸髷を頭に載せて夫の野面歸りを待ちつゝあるやも知れず」と思ひ至れば何となうつまらなく一時興奮劑ともなりて愛讀の詩集中にはさんであつたかの撫子迄厭はしくなりさん／＼す斷り捨てゝ少女の事は忘るゝともなしに忘れ果てた

隙行く白駒は矢の如く飛んで早くも其れから一年餘りを經た秋の始つかた何となう心持がすぐれぬ爲須磨や明石で紅塵に埃れた身を洒ひ去つた上ての春死去つた伯父の別莊が其まゝになつて居るを幸 昔床しき神出を尋ねて暫し靜養する事として出京したが明石へつくと直何となく神出が懐かしくなりまさり須磨の月も明石の浦景色も厭はしくなつたから急に神出へ向つた我は村はづれから腕車を歸して洋杖を引ずりつゝ日閑な田舍路を逍遙して居たが我方を脊にして立てる百姓の高話が聞くともなしに耳に入つた

「エッあのお信婆さん所のお露ッ子かえ？」我はハッと立止つて耳を傍てた「さうよ何でも三年前に花川の旦那樣のお家へ來て居た東京の若へ人の彼奴に欺されたが本であゝ取逆上せて身を投たのだらう」「さうだんべえさうして助かるだろふか」「それがよ今お醫者樣所へ行つたがのとても助かるめえよ」「可愛相だなアわねえな優しい女を瞞しやあがつた奴かふして打ちのめしてやりたい樣だ」と手の鍬で地を打つた

心無き百姓の一語も我に取りては晴天の霹靂化石の如

く其所に立縮ましめた
　脣は痙攣的發作の機に太く打顫ふて全身の血液は宛然氷れるかのやう半ば夢路を辿つて居た手の洋杖のすべり落つるも知らずして
「お露ちやん身を投たちうの花ちやんお出よ早く見て來やうや」可愛い丶聲は今しも横逕から驅駈た二三人の女の子の口から出た我は思はず乾となつて彼方へ走つて行く今の子等の後について驅出した
今しも山の端に入らんとする夕日をうけて路の邊に咲き匂ふ尾花女郎花などを掻き分けて殊更に撰み取つた撫子の幾本かを手にして悄然と低頭れしまゝ半は失神して細路を辿つて居た我はいつか哀れなる彼の女の墓前に立つて居た此の間から降り續いた雨に潤んでやゝ薄くなつた墓標の墨の痕まだ新らしき土饅頭も哀れに何れか無限の痛苦を與へんと云ふ事があらふか我は最早見るに忍びて愁然として顔を背けた
玲瓏玉の如き處女の神聖こそ汚さゞれ雪の如く清く無邪氣なる心を欺き嘲つた上彼女の手折つた撫子の花の色は褪せ莖は萎むとも情は昔に變らで有るとは兎の毛程も思はずして淺ましう捨て去つた鬼の樣な心に反してあゝ彼女は彼女は少女心の一筋に物狂はしくなるまで思ひつめて死しての後も我寫眞を大切に肌身放さず持つて居たのだこの優しい人の心に向つて何と謝するに言葉があらふか蜉蝣の一期波上の泡沫果敢なき物は人生とは云ひながらかばかり意外な訣をしやうとは露思ひかけなんだものを切なる戀を語り合つた花の脣は結んで開かず血に燃ゆる温かな手を握り合つた昔は最早三年前の一夢に過ぎない月は幾分か缺け缺けては滿ち春は幾度か綠の上衣を着代へ木の葉は靜けき秋の暮に幾度となう落散るとも我は此上に絶て再び彼の美はしい姿に接する事が出來ないのであるか「あゝ露さん恕して下さい私は今貴女の墓前で今迄の罪を悉く懺悔します」今は堪へ得で歔泣ので……
先にさしたる撫子の花は風無きこそよく〳〵と動きつ露の玉こほれて小草の上につきし我手の上に落ちた
「貴女の墓前にさした此花は生前お取りになつた先の花と同じく私は終生大切にしまつて置くてす」と少し傾きし淡紅の花一輪わなゝく手にそとつみて確く懷に入れつ非常なる良心の刺戟に身を悶へながら濕みし眼を上て墓標を見し刹那香の煙の縷々として輪を描き

つゝ上る中に蒼白き顔に恨を帶びて寂然と立てるはまがひもなき彼女なので我は覺えずヨロ／＼と立上り捕へんとして蹌踉き倒れた時悽く恐ろしき物怪は冷やかなる手に我手を取りて罪の牢獄に斃さんとて引行く如き心持して次第々々に奈落の底に沈むかのやう
ハッと我に返りて容を正せば今しも幽かなる夕日は蒼褪め果てし我半面を照して颯と吹く秋風に散りかゝりし一葉氷れる襟元をかすめて地に落ちた
晩鴉樹梢に噪きて虫の音漸く稠し
身には墨染の衣こそ纒はざれ今は桑門に入りしも同じ我は床しき伯父の別荘に朝夕行ひ澄まして間々昔しのぶの生しげれる伏屋にあぢきなき餘生を送つて居るお信婆を訪ふをせめてもの心ゆきとして居るのだ
今夜も寢付かれぬまゝ立出てゝ窓の戸を押開けばそら枯れし庭の草木寂として眠るかのやうに靜かなる霜の葉毎の凄まじき月の光を浴びつ絶々なる虫の音の何處ともなう聞ゆるも哀れ獨り雲に聳ゆる銀杏の老樹の兀として高入道の樣に其影黑く庭地に這つてゐる
夜色いよ／＼沈んで月を掠むる雁影閃として一點二點

《評》筆は達者なれど餘情に乏し

花ざんげ

水橋康子

櫻ちりたる跡の淋しさ、みちのくの秋には早けれど春のおそさ、鶯なきそめて梅さく頃待えて、桃も櫻も山吹も、ちらぬ間にわらひもえて縣人の野掛の心いそげど、共にちりたる跡の淋しさ、春も名殘の雨しと／＼と降に町中の店前ですら欠伸する日永、新茶の味に茶のみ友達よびつよばれつの樂しみもあまりに遠き里はつれ、脊戸の鶯小川の蛙、わかき頃御奉公中の間をのぞきても四十年來見なれ聞なれ友とせし、六十近き嫗の生家、親祖父の代より名物の米まんぢう．春は草もちを往來の人にひさぎて、煙細うたつるひとつ家に一人住嫗の、やれ／＼此間からの天氣つゞきに好をしめりじや、煙草の火附に寄人も有難と獨言、店方附て方隅に糸車取出しから／＼とくりながら、今日は三年越ての其月其日お隱れになつた御二方もいとしけれど、御行衛知れぬ方様のおいとしさ、露はおろか荒ひ風にさへお當申た事も無お育、今は何度に御座る事やら、持病の御胸

は痛はせぬか、まだ〳〵是はよいとしてあの折皆様の仰せなされた通りの池て、あゝおいたわしや誠事實の事ならどう思なをしても矢張此おいはい様、御冥福を祈る者は廣い世の中にわし一人なぞ、又してもの世迷事其ひまに御念佛でもとなへるのがせめてもの御追善なまいだ〳〵佛様御ゆるしなされてと涙ながらにくり返す稱名、燈明の丁字の花いつにも無大きなわ替つた善事か、もしや御無事で有つたならばとは凡夫のよくながら夢にもわすれ兼るが無理か、わらの上から母御にははけなされ、此きた無媼を母ともおぼしてお拾六迄、抱かれて御寢なつた可愛の御方、日頃念ずる佛様、此婆を今が今御引取なされても恨みませぬ程に、とうぞ御無事で返してと、一筋に念ずる後姿のかた痩て、めつ切よわりしとの噂いつわりならず。



其昔歌枕縁來よとつかわされて、幾年月みゆるしもあらぬに、再びは都の朧夜に狩衣姿匂はせず、松風淋敷山里に戀しつらしの思みちし身を埋められしと語傳ふ、美くしく尊とかりし人は男、其君末の世に女となりてあらわれ出しかとも思う程美く敷氣高き若尼の、夜逸街道の左に立すての邸前角の柳により掛りて、衣の袖を顔にあてさめ〳〵と泣て居られたが、わしの足音にきつとふり返つた其顔のすごさ氣高さ、言ぬ事では御座らぬ昨日はわすれもせぬ三年前、あの騷動のあつた前の夜源三郎様が御祝儀の宵に當る、誰様の執着か知らねど其時の恐ろしさ、舌はこわばり冷たい汗がたく〳〵、はづかしながら實のとこ足がすくんで、どこから歸つたやら家にかけ込てからひどひ熱、岩頂おやぢもさすが今日は馬も引兼て念佛となつ

てゝ御座ると、頼まれもせぬ風調ずき咄廻るに媼の耳、にも入て、情なや如何なる因果ぞ後〻の今日迄も口の端に御掛りなさるかと、糸車おしやりて今日一日は珠數の數の百萬遍、千萬遍はおろか聲の限舌のうごく限、後世の苦げんをのぞかてと一心込て打鐘のひゞき外にもるゝに、ゆき過て振返りたゝずみては二度三度たゆとうあんぎや、衣の色はさめたれど笠に顔はつゝめどかくせぬはやさしきあるき振、女に違は無恐や昨夜の噂思出すぞかし、ふるう足許ふみしめつゝ靜に近よりてさしのぞきやがて鐘うちならしぬ、進せまする好所じや何なら於とぎざふるまわれては下さらぬかと立出る媼の懷しの顔久しう合ぬ間にひたえの波深くびんの霜いとゞ白くなりぬ、主にはなれどの樣にか苦勞した事かとかな敷懷敷いだき附たさもこらえて、媼よう壯達て居てくれたのと唯一言に無りようの思、尼樣何と言しやり增た迷か知らねどわすれぬ聲、變な媼じやと思わしやろが賴升る只一目於笠の內をと半狂亂、わし蛇皆じや迷では無昔の皆の藻拔の躰はゞかりながら一目逢度はかりに、はぢ多い身と知り筒寄ましたと、笠かなくれはあたらしや黑髮惜や十九の年盛をやつれにやつれ、昔小町と唄はれし面影やあわれ、いと惜や誰がせし業むごき世やと草鞋もとかず引上て、嬉の涙懷しの涙四ッの袖にも泣たらて、又一しきりの雨に小松山の雉子の聲苦氣なり。

此國に入てより知人も有かと心とがめて、門に立ねは食も受ずひるは寢て夜あゆみ、淸水に瘦たる腹をすゝぎ、雨の夜一夜許は我家ながらも物すごき邸跡に讀經して明したれば、神經は高ぶり身はよわり日頃の心勞も打出て、於皆媼の優敷替らぬ情に心ゆるみて病の床に枕も上らず成ぬ、五月雨の降み降らずみ綠陰深きもうつとう敷、面白からぬ病の樣年月の勞も出て賴まれぬ今日此頃一度のよろこび夢にや成んも知れぬ樣に媼の氣苦勞見も氣の毒に、せめて慊めさする種にもとある日於皆發心の由來を細かにもらしぬ、姥二度逢たのは果敢無夢と思ふてくりやれ、人の噂の通皆は三年跡裏の池で死だ者とあきらめて、つい通の尼が一夜の宿りよりなやみ初て、何の緣やら和女の手で優敷かいほう受たなれど、つい果敢なう成たと思うてあきらめて下され、口にするも衣の手前勿躰なけれど、姥戀といふ者程世に恐ろしい物は無、數代つゝいた武弘の家柄

もわし一人のまよひ柄かなしい事數〻仕出かしました、法躰になつての此間迄もさとり切ず、漸く心がすんて柄知る。ぼたいの月、結句あの世て皆樣に御目に掛り早う御わびが仕度と今は是が待るゝ程、源三郎樣が御祝げんの日の朝、祖父樣が親の無子は一層ふびんと聞れぬ迄も今一度と、當主に向て七重の膝を八重にも折て此隱居が一生の賴、聞屆て皆をそわしてやつてくれ、幼時柄夫婦とよんて育つた中此頃の瘦れても知れてあるいぢらしの奴、家から見ても前の家督のわすれがたみ、貴殿は分家からの從子是取立てひいるではなけれど、此度の嫁子と定まりしは源三郎の望とはいへ、皆とは一腹よしや皆が腹に有中夫は先立しとて生れしまゝの子を生やに捨てゝの再緣、人も知其後の有樣其女に出來た娘を嫁にとは、知られてか知られいてかは知らねど、妹も同じ其娘に夫と思ていた男を取らるゝ皆が心はどの樣て有うとくり返して、涙こぼしての御賴も聞かれず其上祖父樣を惡口し、去父上をあざけりしとか、祖父樣御居間に御歸りなされて障子しめ切、年は老てもまけぬ氣の武士魂、腹一文字になされたと知つた時のかなしさ口惜しさ、祖父樣のかたきを取には人に知られぬ樣にと、屛風にかこんでわざとおひるの御膳もわしがはこんてそ知らぬ顏、生れ落て拾七年の其時始めて浮世の志ゆらにつゝまれて、身内は火のもゆる樣に熱く、血も留るかと思程寒い心からのふるえも出ての姥、わたしや女の樣にも無今柄思へば惡鬼になつたので有う、祖父樣の短刀を取て新夫婦の寢屋のふす間明て、半分は入か早くあれと嫁御の聲、汝皆かと源三郎樣が切附た刄の下、燈は消てなまぐさき風きやつとさけぶ一聲はたしかに女、當の皆は無事でのがれ、憐しの女房手にかけた源三郎樣も御腹めされ、叔父樣は御行衛知れず、姥其折の刄を知つてか父上の御ひぞうの無めい、私の爲に婿にもと思うて祖父樣が御ゆづりなされた物、何時も枕上に御置なさるを後で思出しました、此上はと私も裏の池に身を投ようと、こうのそいた時あの老木の櫻がはら〳〵散て、雨催ひの朧月におし鳥の女雄が否な聲てなくのが、ふと聞へたのてはづかしや又もしつとに、手を引合て死手の山道越ゆる夫婦の姿目にうかび、死にも得ず生てもいられぬ四苦八苦、ついには姥此さまになつての此頃、我爲受し人〻の苦痛せめてはげんじ參らせんと片時もおこたらぬみ

經の徳にて、今は死ぬ事も安らけく成しも御佛の御蔭、姥も共々となへてと永物語に息もきれぎれ、折柄一聲時鳥の、尼を冥府からのむかひか時鳥が、とても今宵を過す共思はれぬに、修のつとめ仕ませうから共に頼升とたゆげなる、身をおこして口そゝぎ涙に聲もしわがれし姥とともぐ\じゆしまつる普門品、

十方諸國土、　無殺不現身、
種々諸惡趣、　地獄鬼畜生、
生老病死苦、　以漸悉令滅、
眞觀淸淨觀、

唯一心に念ずる軒端漸く暮初て、螢かあらぬか靑き光幾團々、家の廻りをひくゝ飛て過時一層聲はすみたり、

南無大慈大悲觀世音菩薩、　種々重罪五逆消滅、
自他平等即身成佛。

【評】　筆のあゆみ奥床しけれど朦朧として要領を得るに苦しむ

なやみ

茨城縣新治郡土浦本町　山口もみ

上

濡れたる烏の羽色そのまゝの髮を英吉利銀杏に結んで、薄藤色のリボン一きは美しう、瘦立のすらりとした身躰を口綿に包括み、海老茶色の帶を大きからずお太鼓に結んだ姿の品のよさ、色白の下豊の頰ホンノリと櫻色にして、星のやうな眼元愛らしく、丸窓に臂をもたせて庭の面を眺めて居る身の擧止の、何處となく仇氣ない娘風、年頃は十七、八か九にはまだならぬてあろう。

暫くあたりの氣合を伺ふ樣子であつたが、軈て嬉しげにそはぐ\と文箱の中より取出した一枚の寫眞、懷かしげにほゝゑみてあかず眺めて居たのであるが、紅をサツと面に散らし、丈長い兩袖に包んだまゝ、幾度となく頰ずりして、さて靜に立上つた、嬉しげなる笑を片頰に浮べて。

寫眞手にして庭下駄引かけ、夕日を脊にあびながら植込の方へ辿つて行く、垣の白梅柳のそよぎを後に見て、

「アヽうれしい」と思はず口走つて、人もやとあわたゞしう四邊を見廻すのであつた。

娘は今年十八の花も爛漫の眞盛り、その名を菊子と呼んで、實業家として知られた山村勇造が一粒種、菊子が產聲あげてより淋しき園生に一枝の花を咲かせて、外目も羨ましきまで蝶よ花よと愛でいつくしみやさしう育上げられたのである。

菊子は敷石傳ひに廣々とした泉水のほとりへ出た。夕靄鎭守の森にかゝりて、うすら寒い風は靑柳を吹いて糸を亂し、花やかな紅の雲はおぼろ／＼薄らぎ、四方より群立鳥は鎭守の森の中に落ちて、烏の二羽三羽猶畔道に餌をあさる夕べの景色を、星のやうな美しい眼元で眺めていたが、やがてその眼遙に朧に見ゆる町の方へ遣つた。

「最う光雄さん家は見えないわ」

庭を後に脊伸しながら、何やら一心に見詰めていた折柄、夕暮急ぐ荷馬の鈴の音が向ふの堤にきこえたので、菊子はまた熟とそなたを見た。うすら寒い夕風は鬢の後毛を靜に撫でゝ庭の面に流れ行けば、後の薄紅梅はら／＼と袂のうへ美しい襟元のそこへ亂れ散る、菊子は靜に花瓣を拾ひとつて、唇にあてながら笑を含んだ眼元愛らしう、何氣なく眺めやつた紅梅の梢に、羽色見事な蝴蝶の雌雄、翼も輕く縺れに縺れ狂ひに狂ひて樂しげに舞ひ遊んで居る、日の暮るも知らず顏に。

「まあ可愛らしい」思はず獨言ちて一心に見入り／＼。

「やがて私もあんなに」此度は何やら面赤らめて、寫眞もつ手は怪しう震ひた。

折柄また美しき一ツの胡蝶ひら／＼と舞ひ下つて、餘念なき二ツの胡蝶を追ひつまはしつ、果ては三ツ一團となつて高く低く早くおそく飛び廻り狂ひ舞ふていたが、什麼した事てあろうぞ、後より舞ひ下つた胡蝶は先なる雄蝶と共に大空高く飛び去つて、可愛らしい小さな雌蝶は、あなやと思ふまに池の中へくる／＼と眞逆樣。

「アレッ」思はず聲を放つて脚下危なげに池の水際に馳せよれば、あな無慘や、愛らしいつばさは水にぬれてはた／＼と僅に身をもがく哀れさ、菊子は我を忘れて露しげき芝生の上に膝まづき、眞白き手にて水をかき

よせ〳〵、漸と救ひ上げたのであつた。

「まあよかつた」外目にも分る動氣に胸のあたりを抑へながら、ホツと吐息と共に胡蝶を見やれば、細き髭幽に動かしてさても恨めしげなる樣よ、菊子は見る〳〵顏色變り、餘りの恐しさにぞつとばかり身うち震ひて、我にもあらず胡蝶を取落すと共に、ばたりと芝生の上へ倒れ伏した。

中

「虫ですら、あんなに恨めしさうに……それを私は……君さん許して下さいッ」

薄暗い燈火の光に横顏を照させながら、身をもがきもがき、潛々と咽び泣いて居るは菊子である。

空には星の影きえ〳〵に月は光なく柳の梢にかゝりて、門近く流るゝ野川のせゝらく水音も折柄の淋しさ添ゆれば、一間は寂の氣に壓せられ、崩折居る菊子の鬢の毛わな〳〵と打震ひて見えた。

「あの雌蝶の恨めしさうな顏は、思ひ出してもぞつとする、二ツの蝶の飛びゆくを見送つて、音にこそたてね心のうちでは、どんなにか〳〵、口惜しいのであつたろう、軈てはその恨みの彼の蝶の上にまとひついて、行く先々にて心ない人の手が、思はぬ嵐に二ツの蝶の戀も終には破れて了ふのであろう、それを思ふと、……私、あゝ恐しい」

聲ふるはせながら、さて堪へがたい樣に袂を顏に押あてゝ忍泣するのである。

「君さん、許して下さい、私は、私は淺猿しい道ならぬ戀をとげたい爲、貴女を呪咀ましたの、從兄妹どしの間柄で、貴女と光雄さんとの淸い戀を妨げて、そのうへ、重い御病氣ときいた時、面に泣いて心の底でよろこびました……恐しい〳〵情ない私の心には、おいたはしい程叔父樣の御心配も、伯母樣の御心づかいも、露哀れと感じませなんだ……戀の暗路にふみ迷つて、思へば我ながら恥しい恐しいまでの心のたくみ、君さん許して下さいな、許して下さいますか」

獨言ちて胸を抱いたまゝ、身をもがき〳〵泣きに泣き悶えに悶えて、躰も共に消へよとばかり、折柄無常を告ぐる鐘の音餘韻幽に響かせて、末細々と消えてゆく、戶外には夜嵐つよく吹きすさびて、むら〳〵と雨戶を打つ露の音。

* * * * * * * *

町を離るゝ事程遠く、松の古木生ひ繁りて物淋しき神社に、夜毎〳〵祈願をこむるやさしき乙女、そは菊子である、彼は今宵も人目を忍び家をぬけ出で、ひたすら道を急いでゆくのであつた。

路傍の草は露を帶びて裳を濡らし、身を切るやうな夜風は蒼白いそが頰にかゝれる鬢の亂毛を吹き拂ひて、何處を見ても人影なく、世界は寂として遙遠くより犬の遠吠かすかに、堰かれて石を嚙む流れの音のみが感高う聞ゆる物凄き四邊の景色は、さながらそれよ、深山雨黑き夕幽鬼のいま正に立迷ふかのそれに似て。



菊子は首垂れしまゝ道を急ぎ、やがて神前に膝まづいた。

「ア、神よ」聲は只ならず、顫ひて、誠心はその面にあらはれ、双の手は高く額の上に翳された。

「おはれ恐しき妾の罪を赦させ給へ、戀の暗路にふみ迷いて、無垢なる友を呪咀ひ道ならぬ事をたくみたる、淺猿しの妾を救はせ給へ、おろかなるこの胸より、いとしき人の面影を取去りて、果敢なき戀を思ひ出しませぬ樣、神樣よ」

吹きくる風に菊子の聲はかすれ行き、血氣失せたる唇はわな〳〵と打顫ふのであつた。神の森にごう〳〵と音たてゝ吹く松風は物凄く、なよ〳〵と打ゆらぐ青柳の糸は、蒼白きそが頰に觸れて躰は氷のごとく冷へゆくに、猶あきたらいでか堪へがたきまで點々と落ちくる柳の雫、菊子は慄ふ聲音を振絞つて。

「神樣よ、切なる戀の恨を負ふて、病の床に苦しみゐます哀れの友を救はせ給へ、幸薄き友の病をいえさせ給

へ、神様よ」

凛とした、さはれ震ひを帯びた聲に祈を上げ、亂れ縺る後毛を震ふ手先で拂ひのけつゝ、寒さに冷へ切つた鳩尾のあたりを熱とおさへ、弱々しい眼で空を見上げた。雲の絶間に細い月、神木の松の梢に冴え渡つて、漆黒色の空に一きは黒い雲の、途切〳〵にさまよふている。

「アゝ神よ、妾の命にかへて、友の病をいえさせ給へ」

堪へがたき身うちの震ひをきりゝと白歯で喰ひしばり、胸を抱き身を縮めて、またもや一心に拜み伏した。

夜は深々と更け行けば吹きくる風も堪へがとう、星の影さへきえ〴〵なるに、菊子は平伏たまゝ動かぬのである。

下

「漸と私が癒れば、また菊さんがこんなに……」

薄夜着を軽く胸まで掛け、蒼白い顔に云はれぬ苦悶の色深く、ホッ〳〵と吐く息さへ苦しげに氷嚢を頭にあて、靜に横たはつて居る菊子の傍に、同じ蒼白き顔やや晴れやかに、病み上がりらしき娘の、そが細く眞白き指にて菊子の脊を軽う撫でながら、やさしういたはつて居るは従兄妹の君子である。

「貴女は神様に救はれました、ですけど、私は天の罰ですから」

「アレ、そんな事が……」

「いゝえさうですわ、天の罰ですわ、元よりからと、覺悟は定めておりますもの……貴女さへ快癒なつて下されば、私も最う……」と途切〳〵の聲苦しさう。

「またそんな事を……」とばかり君子は前髪のこぼれるまで俯向て了つた、眼には何やら露を宿して、

「素より犯した罪の、やがてその身に報つてくるは當然ですもの」息苦しげにいひつゞけて。

「貴女、君さん、何卒ぞ光雄さんと夫婦になつて下さいましな……さもなくば私は、死んでも浮ばれませんもの……」瘦せ細つた手を伸べて君子の手を確乎と握り、慚愧のこもつた眼元でなつかしげにその顔を見上げ〳〵

「君さん、眞におやつれなさいましたね……それも私が……わゝ申譯も御座いません……」

「アレ最うおよしなさい、そんな事」事もなげにいひ捨て、そつと膝の雫を拭ふのである。

「叔父さんにも伯母さんにも濟ません、御目にかゝるのさへ心苦しうございますの、ですから君さん、何卒ぞ何卒ぞ、光雄さんと夫婦に……そしてあの、私の罪を許してやると有仰て下さいましな、ね、ね君さん」思ひ迫つてひたすらにその答を促すのである、君子は幾度かためらつたが、遂に心よく默頭た。

折柄庭の白梅の梢に、さも〱樂しさうに鶯の囀り歌ふ聲がきこゆる、菊子は心地よげに笑を浮べ、さて安々と眠にいつた。　（をはり）

（評）叙事は巧みなるも一體に余の幼稚なるを如何せん

女ごゝろ

宮城縣柴田郡大江原町六十九番地
上田ゆり子

上

「郵便」

雨もよほひの雲が、墨汁を流したやうに、空一面に擴がつたので、配達夫が常より忙しげに斯く叫んで、郵書を格子の間から投げ込んだまゝ、足早に行き過ぎて終つた。

ハイと、優しい聲について出て來た女は、二十六七にもならうか、撫肩のスラリと背の高い、圓顔の愛らしい顔立であるが、蒼白い顔、憂をもつ目は、何となく人の同情をひくのである。

郵書を受け取つた彼女は、茫然と、何事をか聯想してるかのやう、暫くは見るともなく封筒を凝視めて居るのみである。何時の間にか降り出した雨は、シト〱と靜かな音樂を調てゝ居る、彼女は依然入口の柱に倚れて、身動も爲ない。

戸の隙から颯と冷たく吹き入る、細雨交りの風に、彼女はオ、寒……と身を慄はしたが、漸く吾にかへつて思ひ出したやうに封を切つた、が又讀まうとも爲ない。

上野愛子ー誠一さんの御妹樣から……どうして今頃……萬一誠一さんに御變りでも……

彼女はとぎれ〱に斯く呟いたが、心許なさそうな面もちで、とつかは封筒から取り出して讀み始めた、三行、四行、彼女の顔色はみる〱變つた。イエツ誠一さんが……といつたが自分の目を疑ふかのやう、また更に讀み直したのである、されど、悲しやな、彼女の目は確

かであつた。
後を讀まんの勇氣もなく暫くは氣を失つたやうであつたが、心が落付くにつれて、儚ない思ひが胸一杯になつて。
讀みさしの手紙の上に、一滴！二滴！熱い涙を灑いだが、得堪えんや。投げ出したやうに其處に泣き伏して、心行く許り泣いたのである。
風はいよ／＼烈しく、雨は益ゝ強くなつて、室内は眞闇になつたが、涙源が涸れたかと思はるゝ彼女は、灯を燈さうとも爲ない。
世を捨てた筈の、彼女が心を斯く迄も感動せしめた手紙はそも？上野愛子！誠一?!
彼女は力なげに立つて灯を點けたが、只さへ血色のない顏が凄い程青くなつた、恰も死人の夫にも似て……
……

中

會社にては、敏腕家といはれて、社長の御覺え愛出度さ彼れ、上野誠一も、去秋疾を得て故郷に歸つてからは、成す事もなく、日頃愛讀せる詩集を手にして、足に任せてのそゞろ歩きに、病苦を忘れて、只管保養に身を任ねて居たが、病勢は日に募る許り。一ヶ月許り以前からは容躰がめつきり惡くなつて、主治醫の山田ドクトルも首を捻ねるやうになつた。
さらでだに心配と疲勞とで身も細る許りの母と妹との心痛はさぞな……
愛さん、阿母さんは？
誠一は心配げに枕邊に座つて、兄の顏を凝視て居る愛子に斯くいつた。
アノ今初をつれて買物に被入つてよ。
あゝそうかい、じやア丁度好い、愛さんにゆつくり話したい事があるから——阿母さんにも、愛さんにも、種々心配を懸けたが僕は、此度はもう駄目だ、夫に就いて、
アラ兄さん飛んでもない……そんな心細い事仰有つちや厭よ、夫に此の頃は大層御好いようだつて山田樣も仰有てゞすから、氣を丈夫になすつて、ね、兄さん、早くよくなつて頂戴……
愛子は病める兄に力を落させじと努めて、平氣を粧ふて、快活に斯くいつたが、俯向き勝の目には、涙が一杯になつて。扨は結んで膝の上にホロリと、一雫。
誠一は夫にも心付かで、熱心に説き出すのである。

「アヽ愛さんがそう言つて呉れるのは、實に嬉しい、が僕はもう決心してるよ、母樣には濟まないが、僕には死ぬ方が幸福なのだから。といつて彼れは淋しげに打笑んだ、愛子は兄の言葉に、思はず顔を擡げて、目を見瞬つた。

誠一は布團の下より絹のハンカチーフに包んだ、一葉の女の寫眞を出して、今更のやうにつく〴〵眺めたが、輕く接吻して妹に渡し、過去の――角帽時代の――戀の歴史！彼れの戀人には許嫁の夫が有つたと、彼女は夫を嫌つて有つたが、英國留學中に病死したので、神經質の彼女は、非常に後世を怖れて、一生教育に身を任ねて、獨身で送ると言つたと、友人の話では彼女は、今も猶、或る村の學校に奉職してるとまで落なく物語つて、さて斯く言つた。

ね、愛さん、斯ういふ事情なんだから僕が萬一の事が有つたら、愛さんから　彼女が他に嫁して、餘生を幸福に送るやうに勸告めて呉れ……

彼れは極めて冷淡に、言つた積りで有つたが、胸の血潮は湧き返つて、懊惱煩悶は、蒼白い顔にあり〳〵と、刻まれた。愛子は慰むる言葉もなく、吃逆り上げて、只、泣くのみである。

下

杉の老木がコンモリと繁つて、晝さえも、獨りでは淋しいやうな鎭守の森を、低聲に囁きながら、逍遙して居る二人の男女がある。

ね、上野さん、文雄が存世中には、どうにかして先方を斷つて……と思ふてましたが、斯うなつて見ると、いくら嫌つてゝも、好く死んで呉れた、とは思ひませんわ、あゝ濟まない！と朝夕に、良心に苛まれて……二人は話しながらいつの間にか、社の朽椽に腰掛て居た。

十日の月は高く昇つて、一點の曇りもない。

上野さん！私どうしたらいゝんでせう……

彼女は斯くいつて男の膝に泣き伏した。誠一は天を仰いで嘆息するのみである。

今しも月は過ぎ行く雲に掩はれて、しばし姿を隱した、月の女神が、この哀れな二人に同情して、泣いて居ますのであらう？

四邊は寂寞として、天も地も眠つたかのやうてあつたか、社殿の背後にある、池の蛙は言ひ合したやうに、一時に鳴き始めた。

きッと面を擧げた千枝子の目には、決心の色が輝いて居る。

上野さん、私もう斷念てよ、先達からそう思つてましたわ、此の後、どんな事が有らうと、終生獨身で暮そうと。そうしたら少しは罪が滅びるでせうから……貴郎もどうぞ、今迄の事は短夜の夢と斷念て、奧樣を御迎へなすつて、樂しく暮して下さいましよ、ね上野さん、私はあなたの幸福を祈つてゝよ。

千枝さん！能く了解りました、僕も男子てす、今日限り他人になりませう。しかし、千枝さん、終生獨身だなどゝそんな亂暴な事を言ふものぢやありませんよ、女は男と違つて、そんな勝手な事は出來るもんぢやない、貴女が詰らなく世を送つたからといつて、何も夫が功德になると言ふ譯でもあるまい、夫よりは然るべき良人を擇んで暖かな家庭を御作りなさい、夢にも、そんな、無分別な事を言ふものぢやありませんよ、ね、千枝さん、了解りましたか。

誠一は、言葉優しく諭すが如くいへば。イエ了解つてよ、でも私はどうしたつて、嫁く所存なんかないわ、きつと、獨身を立て通してよ。

千枝さんが何といつても御兩親が、

イエ、ですから私が宅に居ると兎角面倒てすから、田舍に引込んで、教員にならうと思つてましたわ、ね、上野さん、惡く思つて下すつちや、私困つてよ。

千枝さんが其の決心なら僕は何も言ひますまい……憖ひ御目にかゝらん方が御互の爲てすから、僕は明日上京しませう……もう此の後は御目にかゝりません、千枝さん！これが最後の對面てす……

言ひつゝ彼れは、女の手をヒシと握つて。四月廿八日。此の森ー此の月!! 僕は生涯忘れる時が、ないてせう……

堅く決心しても流石は女氣の、頰を傳ふて、落つる涙は……（をはり）

志のぶ草

東京　芙蓉

春宵一刻價千金と申せし花の頃もあはたゝしう打過ぎ昨日今日は降りつゝきたる春の雨の五月雨のそらにもま

してわひしう覺え申候さらぬだにそぼたれがちの袖のいとゞさ我なからいひかひなう思ひ屈し居候何事も〳〵思へは夢にて候よかゝる樂しきゆめのいつまてか醒めてはつへきやは、いつかは此かなしみに遇ひ申すべくと兼て思ひまうけ居候ひしかと昨日今日とは更に〳〵思ひかけさりし事とて今更らめかしう胸せまり涙はとゞめかたう無き明かせし夜な〳〵そ多く候ひしさすかに此の一日二日か程は夢となく現となく御姿の目につきゐほろけなから思ひまとはれせまき胸のさけんはかりに候よせめては所せき庭なりともしはしの心やりに眺めはやとやをら障子打開らきそこはかとなく見渡し候處はからすも君か過る年なほざりにさし給ひし柳の根つき候か今年もはるをたがへすいとなつかしけにあを〳〵と打茂り候をフト見出れ候て又しても〳〵たえかたう心地なやましう覺え申候まゝさと障子引きたて又もや机の前に昔のゆめをくり返し候かゑ堪えかたきまゝ暫し忘れんよすかにもと詩集ひもとき候とてろいかにせまし〳〵此處にも曲者はひそみ居候よこの書の間よりヒラリと落ちし菫の一花！君はもはや御記臆の外にて在さんか妾はよう覺えて候は去年諸共に植物園にものし候をり君か戯手つから我が頭にかざし給はれしものよ其まゝ萎み候はん事の限りなうあたらしきまゝかく押花といたし長に君かたまものひめ置かん妾か心に候今は色も香もあせ果てゝ候其折妾は白ばらの小さき一輪君か御胸にさし參らせしを覺え給ふか結ひ參らせし手ありなうものゝき候ひし池のほとりまては現つともなくたゞ影のかたにそふごとく歩み變らぬかげを水の鏡にうつし候折は心なき汀の松にまて心置かれ池の魚さへねたしとや思ひけん吾等がかげを亂して行き候ひしは。今も今とて程ちかき渡の家にて想夫戀の一曲かなて居候さなり月わかき夜君か御笛にあはせ深かせしもいく夜か候ひし心づきなの事やかく見るもの聞くもの一として君を忍ばさるはなく其たび〳〵につけて唯心苦しうひとり悶へおり候最早御目にかゝりまじ御文も參らせしと固く心にちかひ居候ひしかと余りに堪えがたきまゝ一筆犯し參らせ候之をもて妾が最後の筆とも御覽し給はるべく君が若草の君むかへ給ふ吉日も近づき候へば何かと御事多く入らせ給ふべし唯々御仲らひのむつましうあし田鶴のつばさ八千代と相生のまつの共れの如く龜の尾の末ながく添

ひおはしませ世にも幸多く榮え給はん事をのみひたすら祈るのみに候御新婦様はいづくまでも御いたはり遊ばされたく夢々妾にのたまふ如き我まゝなる御振舞ひはなし給ふなこは申迄もなき事ながら例の老婆心やみがたく書き加へ參らせ候君が數ならぬ身かほどに思し給はる事の有難うこそたなか〳〵に御情けなう思はれて候先頃來度々の御消息其の度毎に身をさかるゝ心地いたされて候御返り聞えあげ度きは山々に候ひしかど又しても君が御心のこりのせさせ給ふ如き事あらば御老人様の御なげきは更なり此身への御憎しみ一層に深うかつ妾が今日までの心盡皆うたかたと消え申べきにつきしひて差控へすげなうもてなし參らせしくるしさたゞ〳〵思ひやり給ふ後とても妾は世になきものと思し給はるべくかつ妾は今日限り此地をさり遠き〳〵國にさすらへ申べければ別れにのぞみ一筆けいし上候唯返す〳〵過去は夢にて候ばまた聞えあげたき事は涙のまさごのそれよりしげく候へども今は涙にむねのさしせまり候て思ふなかばもつくしがたし萬は推し給へな」

と讀み終へてさめ〳〵となくやさしの少女かゝる少女にもこの涙あり天はいかなる無情ぞ—

天縁

播磨國宍粟郡山崎町　武間小八里

上

茲は諏訪山大通未だ建てゝ間のなき一棟池を繞らし小山をかこみさては見越しの松など數寄を極めた門構往來安全の瓦斯燈さへ主人の威光を示めしぬ此家の主人は姓名を野村深と云ひ昔は隨分銀行社會に其名を轟かせしもの今は寄る年波に劇務を辭し身を閑散に置き靜かに此世を送て居るのである家には一人の娘と四十餘りの乳母と下女との四人暮しであるされば何思ふ事なく面白可笑浮世を過して居るであろふと人は皆思ふてあろふがなか〳〵そーでない主人は絶へず人しれぬ涙に袖を濕して居るのを見る之は外でもない此家の一人娘名を花子と云ひ其名の如くならばさぞや美くしくあろふと想像するが正反對にて生れながらの醜婦其上十二三歳の頃不幸にも疱瘡を病み一面のあばたてある

其れ故二十八歳の今日迄身の治まりも付かで有ので併しながら心温順にして親に孝なるは凡知らぬ者のない位である通例ならば最早年頃ともなれば春は花見秋は月見と物見遊散に綺羅を飾り親々を困すものなるに己が見惡き姿を耻おてや人中に出づるを厭ひ唯日々書窓の下に奥深き文の林を分け入り花鳥の色音床しき浮世も知らぬげに文の面をこよなき友と明かし居のを見る親の心は如何に悲しく思ふのも無理はないのである



昨日迄桃よ櫻と持はやされし花も何時しか散りはてゝ樂かりし春も今は名殘のふ暮れ行き茂りおふ若葉の蔭に名もなつかしき橘の床しく薫る頃とはならぬ今日しも亦例の通り花子は机の上に原稿紙を延べしきりと筆を運ばせ居しが今は少しく倦みはてしにや筆を置き「お〻今日は何とて斯も日の長きにや」と獨り言つゝ身を起し椽端近ふ立ち出て見れば木々の梢は緑りと繁り遥彼方の垣根には夏菊の愛らしく我物顔に咲き出てたる上を春の名殘を夢みてや姿やつれし蝴蝶の飛び舞ふなどなかく〳〵の風情なるに心も浮ばれ庭の面に降り立ち遠近を逍遥なし居りしが何時しか父君が御居間近ふ來りぬ妾は何時如何にして斯かる所のあくがれ來しかんわやーゆふ思ひながら「ほんに今日は原稿に心を取られ一度も父上の御機嫌を伺わざりしさぞや今頃は徒然に惱み居給ふならんいて之れより尋ね參らせん」とやをら行かんとせしが微かに話聲の聞ゆるに訪ふ客のおはするにやとためろう折しも父上の御聲として「何時も〳〵かわりなき其方の眞心は過分に思ふよ猶此上ながら便り少

なひ彼が身を不憫と思ひ面倒を見てやつて呉れい凡世に彼が身程不幸なる者はないと思ふ母親には早く別れ男親のすげなき我れを頼に人と成りぬれど何んの因果にや生れ付ひての不容貌とて花の盛りも過ぎにし二十八才の今日迄孤枕冷かに空閨を守り居る果敢ない身の上通例ならば最早孫の一人二人は出來祖父よ母よと呼ばれ居る身なるに彼が温順なる生にし親を恨みもせで我れに孝養を盡し呉るゝやさしの仕振りを見ては一しほ不憫に思はれ云わぬは云ふに優ると云ひし諺への如くませや孤雁淋しく鳴き渡るの夕冷かな床の内に枕の紙を濡はして居るてあろうと思へば身も世もあらぬ苦しさ乳母樣して呉れい我れは彼が身の治まりが付かぬ内は死すとも死なれぬのであると男泣きに泣き居給ふ乳母も悲しさにや聲もしめり勝ちに何んのまー勿躰ない旦那樣の御言葉お孃樣とは宿生如何なる因縁にや至らぬ私を乳母や〳〵と仰せ下され私も亦おこがましけれど誠の娘とも思われお孃樣の御苦樂は私の身にも悲喜を感じ一日も早く御良縁のおはしましお二方樣のお歡びのお顔が見たい物と神樣に祈らぬ日は御座りませぬさるに世には神も佛もないのでありましよふかあのおやさしひお孃樣の御身になぜ此樣に無情ので御座りましよふ私は其れが悲しゆふ御座りますと今は慰めんとはせて共に泣き入りぬやがて氣を取り直しほんに私とした事が返らぬぐちのみ申上お茶を差し上げるのも忘れて居りました何んのまー憂世とて何時迄人に無情ものではありません果報はねて待てと申事も御座りますあまりくよ〳〵思ひ遊ばさずにお氣を大きくお持ち遊ばせ今に御良縁の結ばれて今日のお歎きを昔語りに遊ばす時は參ります此上お思ひ過し遊ばし御身躰に若しもの事でもあらば其れこそお孃さまがお可愛想て御座りますと慰めつゝ次の居間へと出て行きぬ跡は寂として地に啼く時鳥の聲あわれに聞へぬ

中

外に立聞く花子孃今は堪ずやありけん苔蒸す上に泣き臥しぬ思ふも勿躰ない父君が慈愛並に乳母が眞心妾は此の厚き情を受けつゝもいづれの日にか受けにし恩を報ゆる時のあるべきや老さき短き父上に斯も御心を惱まし參らす我身は前世如何なる罪をやなせし元より見苦しき身と生れば兎ても人生の尤も樂しき戀愛ちよふもの〻此身にやどるとは夢にも思はず妾は此世に生れ

ながら此世に捨てられ世人の樂しく受けつゝある幸福を受くる事の成りがたき身とは兼てより覺悟はなしながらも妾の身に未來の樂しみを夢みつゝ居給ふ父上が御嘆きを思へば如何せんわゝ此心の苦しさ望みの綱も切れはてし此身は何を賴みにつれなき憂世に永へんせめて果敢なき玉の緒を我れから絶ちて父君が日頃の御悶へをのぞき參らせんと思ひし事は幾度ぞされど〳〵親一人り子一人りの便り少ない二人が身の上妾が若しも野末の露と消ゆることあらば跡に殘り給ひし父上は誰れを賴みに餘命を送り給はんか其れを思へば死ぬにも死なれぬ此身の因果と天にさけび地にむせびはては前後の知らず不覺の涙に臥しまろびぬ稍ありて涙に亂る顏を上げ此上如何に嘆けばとて詮なし最早妾は泣かじこれも宿生の因緣なればわれみ惠厚き父君よ長の年月夢みつゝ居給ふ空想は終生妾の身に來らぬものと思ひあきらめ給ひてよ妾も浮世の事は見捨て侍りぬ唯之よりも專心學びの道を勵みせめては名を世に輝かし山よりも猶高き御洪恩の萬分一を報ひ參せんと心を決め侍れば不幸此身を憐み給ひ不孝の罪は赦させ給へと陰ながら伏し拜みぬこれより幾程もなく青年文壇に其名を見しが月日の經るごとに芳名は愈輝きて野村紫香女史の名は文壇社會に轟きぬ

下

此家の程遠からぬ處に下宿して日々出勤する一人りの紳士あり眉目秀でゝ色白く鼻下の八字髯だはしく猛からず優ならず何處やらにしまりのある當世の好男子之れは名を藤本正と云ひ元高等商業學校を卒業し今は郵船會社の神戸支店長である今しも社用を終へ己が寓居に歸り急ぎ湯浴なし夕飯を喫し橡端近ふ座をしめてとある雜誌を見て居しが俄かに「どーも此女史の文章には驚くよ男子も耻づる位ゐだ實に當世の女流社會には珍づらしい筆鋒だ併し何時も〳〵悲哀を含んで居るのを見ると何にか女史が胸中には云ふに云はれぬ悲しみを有して居るに相違ない我れも最早年頃親友の誰彼の早く妻を持てと進め吳るれど皆我れが意に叶はず當今の人概ね妻をえらぶに唯外貌の美くしきをのみ云ひたま〳〵其學力を云ふの者あるも之等は皆世に經驗もなく妄りに己が學問を鼻に掛け夫を無禮しむ不道德の者をこよなき者と思ひ尻りに敷かれながら其れとも知らで我れか妻は片書村等と知己朋友に吹聽する愚かな

者の多い世の中實に慨嘆に堪へん尤も文明開化の今日交際社界に立とうと思へは元より素養なき者は成しかたきも我れはむしろ學術のみに秀ずるよりは女子の女子たる婦徳を備へし妻を持ちたいのであるつら〳〵此女史が性質を觀察するに我れが暗に豫想するの婦人に相違ない斯かる妻を持ちなば如何に滿足ならん悲哀を含む彼れが文章如何なる事情なるや知りがたきも若しも余れに一生の苦樂を寄するならば我れは滿腔の熱情を以て之れを慰めんとしきりと見ぬ戀に心を惱ます折からわひの襖を開き「君どーも今日は格別の暑さだねー」と云ひつゝ入り來る同年輩の紳士あり「やー之れは松井君かどーも暑ひね今漸く夕飯を終へ風を入れて居る處だよ能くこそ來て呉れ給ふた其後は實に御無沙汰致して居るが皆さん御壯健に入られるかねー」と云へば「いや僕こそ申譯もない御疎遠此頃は社用實に多忙でねー心ならずも失禮したよ」と何時も變らぬ親しさは言葉にもあらわれて居る之れは藤本が舊友にて今は某銀行の支配人である其れより種々談話を成し居りしが突然松井の聲として「其れは其れとして君に云わねばならぬことがある毎々の様なれど君も最早三十才

家政をつかさどる妻を持ち給ふても能ひてはないか君が唯早婚〳〵と云わるれど君が今日の地位として下宿屋住居もあまり可笑ではないか最能加減にもらひ給へ君が返答次第に能つては僕が周旋するから君は如何なものを好むかねー美人が賢婦の何れを取るねー」と深切面にあらわして云ふた主人もほゝ笑みながら「なにる僕とて無妻主義を主張するのではない併余が心に叶ふたのがないからで有る誰れしも美人は好むさたがねー僕が希望は世人の理想とは少しく其趣きを異にして居るのである美人で素養なき者よりは人並々より降るとも賢婦を望むのである君一寸見給へ此雜紙を僕は如斯の妻を待つのである併其美醜は知らねどもだねー實に驚くだろー此女史が投稿成し初めてより文壇社會も一ほしの光彩をはなつた様思ふよと云へば「うん此女史か此女史なれは實に賢婦だよ僕は能く知つている此家の主人は余が銀行の株主である併し君もひどひ者を戀慕したねー知らぬとは云へ此女史は世にも稀れなる醜婦其故二十八才の今日迄家庭の樂しみも知らで有るのでされど其心温順にして親に孝なるは凡知らぬ者のない位で誠に不憫な身の上だよと語られ主人は暫時考

へに沈み居りしがにわかに「何程其れでこそ女史が悲痛を吐露せる事情も解かつたがね之れ程の賢婦で有りながら姿の見惡き爲め樂しき家庭も知らで一生を過すか僕は同情の涙に咽ぶので有るたとへ姿形の卑しきとて女子の女子たる婦德を備へし者を深き苦限に沈めしむる無情の浮世を恨む若しも余が彼を娶らずば終生埋れ木ではつるであらうー其れがなか〳〵忍びない元々我れは彼が優筆に戀慕せしもの其醜婦なるを聞きては義俠心のなかるべからず余は彼れが德望を慕ひ女史が多年の失望を慰めてやろうーと思ふ幸ひ君が別懇なるを以て能きに交渉を頼む之れより幾程となく野村が家には慶典の式を上げられぬ其新夫は實に藤本正なりとは今迄寂しかりし此家の內もにわかに春風駘蕩として時々笑聲の外に洩るゝを聞く(終り)

大和なでしこ

丹波國船井郡園部村字園部　武部みちよ

朝より降りつゝく春雨に、社への參詣人も見えず。社司竹内と表札うちたるが、うちには、一少年の机によりて、二三枚何か書きつけたるあり。一人の少女、茶と菓子とを持ちてこゝに來り、田中さん、折角のおいでに兄さんが留守て、もう程なら歸られましよう、小說なりとも讀んでゐてくたさい、まあお茶一つといふに、少年は手早くその草稿を懷中したり。少女は、又おかしくなさる、なぜわたしに見せられませぬか、今日のは、是非見せてもらひましよう。いゝえ、これは見せられませぬ。何おかきやしたのてす、又わたしの事を、小說にかいてたすことはいやです。まあ似たようなことてすといひて、傍の原稿をいだせば、それではありませぬ、その懷中のが見たいのです。まあそういはずに、これ御覽なさい、これも小說です。少女は、稍氣に入らぬふりしながら、手にとりて見れば、大和なてしこ、丹波田中秀文とありて、

京都の伯父上が死なれて、その五十日といふ日、伯母上を尋ねた。從弟の倫太郎がひとりありて、ようこそ尋ねてくだされた、今日は、父の五十日祭にあたるので、母は二人の弟をつれて、黑谷へ墓詣をせられたといふて居られる。火鉢を中に据ゑて、種々物語の中

に、過日、青山先生が來られて、妹の退校をいたく惜しまれ、卒業するまで、通學させたいて、かしてくれとの事てあつたから、世話になることにした、そのをり、

わが宿に花さく迄はうつし置きて
　いろ香そへなん大和なでしこ

といふ一首の歌を詠んで置かれた。明日、着替を送らうと思ふによつて、返歌をよんてくれといはる。

ときはなす青山かげにうつされて
　さかんはうれしなでしこの花

と、短冊にしたゝめて居たが、伯母上も歸られ、その日は夜更くるまで、小供の教育の事など案じられて、相談せられた。翌日、從妹たか子の着替をもつて、青山先生の宅へいつたが、たか子は花園に草ひきをして居るとて、先生がよびよせて、うけとらしてくだされた、さて先生われに告げて、この度の級長になられたから、左様、母刀自へも言傳てゝくだされといはれたが、たか子は莞爾として、すべてにひかへめなるに、その性質の溫良なるもしられ、喜ばしき少女であると思ふてかへつた。その夜、從弟にかたつて、己もかのやうな妹がほしいといふたが、伯母上も傍にありてきいてゐられた。己は山賤の身である、たか子は、京都に生れ、京都に育ちたお孃さんである、どうしてか、わが妻にむかへて、農樵を助けしむることができやう。そうではあれど、かのおとなしくゆかしき從妹を見捨てることはできがたい。まてしばし、己も器量ある人物となりて、たか子を迎へようと思ふた。冬と春とは深山に樵をかせぎ、夏と秋とは田を耕して、農樵をいそしんだが、暇ある每には書籍をよんて、五年の間に一千冊にも及んだ、撿定試驗の願書をだしたことが、村長にしられて、學校か役場かへ、是非てゝくれとしきりに頼まれ、遂に村役場の書記となつて勉めて居た。ある日曜日、看護婦のくるといふこととて、避病院へ案内のため、獨、役場に待つてゐた。十一時すぐる頃、人力車の音がするので、出て見ると、思ひもかけぬ從妹のたか子てあつた。机をへだてゝ、差し向ひに椅子によらせ、久し、便もしませなんだが、今はどうしてゐられます、伯母さんの手紙に、東山病院に居られるとは、聞いてをりましたが、靑山さんの家てお目にかゝつてから、五年、お顔を見ませなんだ

宿にあなたのことが、氣にかゝらねではありませなんだけれど、まだ思ふことがとほらぬので、とあるを默讀して、まだてゝまでどすか、おたかさんのことをおかきやしたのですな、今おたかさんはどうして居られます。さあ、これから書くのですが、先日京都へ往つて居る弟の手紙に、前田といふて、京都では名高いお醫者さんのうちへ、よめにいくとかいつたとかいふ事です。あなたの妻におもらひやすのではありませなんだか。さあ、そう思ふて居たが、前田へいつたら、よほど出精であるから、こんな片田舍へは、きてくれますまい。いゝえ、そんなことはありますまい、あなたがそこまで思ふてゐられますものを。さあ、今日迄は思ふて居たが、今日よりは想ふ人がかはつたのじやといふて、懷中の原稿をいだし、これ御覽とさしだせば、少女はうれしそうに受けとつて、己が部屋の方へ、よみに往かうとするを、少年は何ともいはず、恍惚として、ふすまの文字をながめて居たり。暫くして、菓子など食べてゐる處へ、少女はさきの原稿をもつて來て、ようわかりました、まあ、あなたわたしを妻にして、中學校の教員におなりやすの、そして、おたかさんは、五年にもたらぬ歳月に、夫に後れ、三人の小供をつれて、苦勞なさるとな。こんなことを書いて、もしも雜誌にでたならば、おたかさんは、あなたをうらみなはれますよ。なにおたかさんが、うらむどころではありません、わたしがうらんで居るのです。あなたこの小說の通りになれば、おたかさんをうらまいでもよいではありませねか。そんなら、あなたわたしの妻になつてくだされますか。少女は、心は、とびたつばかりうれしかるべけれど、言葉にいださんことは、何となう羞かしいやうて、窓の外にたゞ雨の音するのみ。(完)

斷腸文

多田すみれ子

わが友花子の君がものせしいまはの際の玉章糸より細き春雨のそぼふる庭に青柳の繰出す絮のそれならで心細き胸傷ましき其幽かなる斷腸の想を讀み上てんや、いやとよ先妾が友垣結ひし其昔のあらまし語りて見んわが友花子の君には五とせの間妾と都にて同じ學の窓に螢雪の業を積み文の林に手を携え朝な夕なの睦し

み孫に君にはピヤノに秀て妾は琴を好めるものから日々合奏に餘念なく行末千代ぞと契りしも今より實に三歳を去る年の春なりしか花子の君は結ぶの神の媒にて嫁かれしが良人なる人は程なく南濟なる某の領事とやらんにならせ玉ひしかは君には凛ゝしくも甲斐〲しくも良人に隨て彼地に赴かれしが別れたる其折の君が花の貌せは今尚妾が眼に深く刻まれいたく胸に畫まれたり恐く花子の君が斯くも氣高くかくも美はしく見えたりし事は曾てもあらず此後とてもあらずして思へば〲之ぞ生別死別の門出なりしか君がピヤノの妙なる一節も竟に筑紫の濱風と消えし事こそ物憂けれ

一筆申納候　此文の御手に披かれ候はむ其時ははや妾は浮世を空蟬の西へと急ぐ雁金の身にて候へしいとしわが友よ君と袂を別ちしよりはやこゝに三度衣を更へ春の景色の眺めは變らねども長閑なる春のなよ風に櫻の花の咲き滿ちて都大路は櫻かざして男女のあこがれ候はん君には愈御健かに文の林に分入り學の窓にいそしみ玉ひて今はさる學校に教鞭を振はれ神の御恵のいや榮に榮えますを壽ぎまつる、君と千歳の友垣結ひし妾の此幸なき光なき常闇の身の如何に哀なるかを哀れみ玉ひてよ妾には此菅の根の永き春日も爛熳と咲き亂れたる花の盛もうれしからず花は見る人によりて其趣を異にすとか妾が見し花は只物寂しく難面き夜半の嵐に吹雪と消ゆる仇櫻など面白かるべきか實に〲申忘れて候ひし妾は病に臥してわが夫の故鄕なる此淋しき諫早と申す片山里に病を養ひ今ははや玉の緒も絶えなんとこそすれ過る夏君に文せしより此方筆執る事も物憂く末期に臨みて細き息の下より申し殘さまく存じ候、三年の前胡沙吹夷の國に漂泊らひてよりわが夫が仕へまつる公け事の閑々にはとつ國人との交りも中々に忙しく又心を慰めもし學の窓にて習ひ得し外國の言の葉も朝夕に錬れに錬れて何時しか物の用をもなし出ては某の宴會某の夜會など各國の人々とも交りていと樂しく、入ては夫と共に新緑滴る庭面棚に安樂椅子を据えてゐるは山家集を繙きゐるは詩集を誦らひて好めるピヤノを奏でゝ戀しき思を古鄕の海山都の友などに寄せ樂しき月日を送るに付ても神の御恵は揚子江の水よりもいや深く御德は新高山よりもいや高きを思ひしが叙べんとして心物憂く筆も進ま

ぬ胸の痛みの候、妾は君が知ろし召さるゝ如くいと健かにいと骨太かりし質なりしに去年の卯月の変身重となりてよりは心常に清々しからず憂もはや最中となり炎暑は金を鑠かし實に身にしみ渡る此苦熱に堪えかたくして身内痩せ衰へ遂に秋風立ち初めて薬降る夜もありとは云へど病葉のひらり〳〵と落る音も耳にけたゝましく覺え候ひしが其頃より夢現の身となりていとしき夫の物いひ給ふ言も幽に響きて風にも得堪ず散り出す柳葉の身の空蟬の果ぞとはわれながら哀の極にて候ひし其後妾は夢現の間にわが夫の故郷に送られ此に秋去り冬ぞ淋しき筑紫路に夫の母君の情によりて漸く長き病も稍癒えて心安らかに此春を迎へ睦月の末つかた男子を生み落し候ひしもそれより再び病の蓐に就き彌生の花も散り盡さんとするけふ此頃人として世の務だも終へぬ此身の吐血數多度くす師は只氣管を損ひしとのみいへりしも妾にはや病の深く骨を蝕み杜鵑の血を吐く思ひわが夫は天外萬里八重の潮路の遙にして夢現なる生別ましてや今は妾の命は薄に上る朝露の風にも得堪えぬきのふけふ思ひ迫りて筆の歩みもどかしく一節又一節と吻して候只恨む一兒の世に生ひ出で

む其日を見ず夫に得會はずまた君が玉琴の妙なる音を聽く望も絕えて此儚空蟬のはかなき身と失せむ事の口惜しく降るは涙か卯花降し神の榮を壽き神の御恵を祈れども何わが望は闇の夜に月の出を待わこがるゝにも似たらんかし去ながら今は神を恨むも詮なし櫻花七日の盛牡丹廿日の寳も槿花一朝の榮より見れば夜半の嵐に盛を待たで散りぬる花ぞ哀とも見つれ天の命じ玉ひし妾が運は朝貌の朝に榮えし身にてわりけるよ今迄得し幸を思ひ受けし榮を感謝しまつるのみ妾はいはじ只願くは妾が兒は君の兒と思ひ老先長き君の手塩に培ひ玉ひてんや是れぞわが夫への誠をいたすくさひにて候へしいまわの際に戀しき夫に殘せし一封と共に此世に二なきわが友に思の餘りにおみたる水莖の埒なき繰言書き殘さまく存じて斯くなんわがいとしき友よわがいまわの心酌みて哀とも思ひ玉へかし叮已みぬ名殘惜しの君よ

四月七日　　筑紫の果より
　　　　　　　　華子

花の都なる
　菫の君へ
　　まゐる

▲（撰外佳作の分）

○○○朧の月　（山城）　紫花女
○○○古手紙　（靜岡）　中里延子
○○○、くちなしの花　（東京）　小手川やへ子
○○、かたみの手箱　（播磨）　やよひ女
○○、簾ごしの月　（東京）　植谷仲子
○○紅葉谷　（東京）　倉俣堪子
○○わくら葉　（豊前）　津田鋭子
○○呉竹　孤蝶
○○五月雨の空　（下野）　くれなゐ
○○庭の古井戸　（青森）　紫雲女史
○、荒野の聲　（新潟）　青木とも
○、薫る梅　（千葉）　飯田ちやう子
○、繼母の心　（愛知）　藤村藤枝女
○、女波男波　（伊勢）　河原芦子
○、名力　（靜岡）　浮津女史
○、小羊　（長門）　田上てい子
○、憂世　（大阪）　實とも
○、母の熱情　（新潟）　吉田苗代女
○、寫眞　（東京）　紫雲女史
○、ほとゝぎす　（東京）　無名女
○、ほとゝぎす　（茨城）　山本せつ

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

○、厭世　（東京）　中根みね子
○、戀と義理　（信州）　森江女史
○、枳殻の籬　（神田）　まこと
○誰が罪　（三河）　橋本よし子
○若葉垣　（信州）　大山はな子
○仇櫻　（常陸）　飯田とめ子
○枕頭　（靜岡）　流島子
○笛の音　（信州）　岩井芙蓉
○牡丹の夢　（信州）　米村さき子
○二葉草　（北多摩）　森田流月
○うき世　（東京）　宗審子
○時鳥　（陸前）　遠藤その子
○あはび玉　（大阪）　河野杏雨
○有の儘　（越後）　外川さい子
○慈愛の音樂　（山梨）　志村富子
○報恩の刄　（長門）　福永けい子
○君子　（北海）　長橋つま子
○すみれ籠　（仙臺）　松坂哲子
○若き尼　（丹波）　はなたち花
○かやり火　（盛岡）　原つま子
○幼ごゝろ　（千葉）　芙蓉女史

和歌

佐々木信綱先生選評

〔天〕ほたる　出雲國八束郡東來待七五八　武田季子

こぞまではほたる〳〵とよろこびし
　千代子世になし誰にわたへむ

評、螢を見て亡兒を思ひ出でし悲痛に深し、もとの四句千代子ゆきてはとあり。調いたく砕けたるをもて、かく筆加へつ

〔地〕ほとゝぎす　大阪府立病院内科看護婦　三宅かね子

温泉の宿の思ひ出多きおばしまに
　今宵も鳴くよ山ほとゝぎす

評、景情共にそなはれり。

〔人〕新樹　河内國北河内郡交野村大字私部　大矢たね子

庭前のもづる玉樫若葉して
　わさ風きよし白鳩のこゑ

評、歌の心歌の調も清し。

秀逸

◉時鳥　弘前　今ちか女

里いづれ年またわかき猿曳に
　みち教へけれ時鳥啼く

◉螢　近江　眞島義枝

病む母のみ言のまゝにけふもまた
　殘りし螢放ちやるかな

◉ほとゝぎす　加賀　河合田鶴子

茶毘の煙斜にたちて雨の足
　細き夕をほとゝきす鳴

◉仝　和歌山　宇治田秀子

蠶飼する窓のともし火影くらき
　雨のゆふべを時鳥なく

◉仝　神戸　ほほ之子

雨もよひ葬すみて人ちりし
　墓畔の夕ほとゝきすなく

◉仝　日向　厚地廣子

入船に君はつまさてむなしくも
　歸る松原なくほとゝきす

●ほとゝぎす　宮城縣　きみ子

ほとゝぎす鳴く音に心ひかれつゝ
　手綱とゝむる馬の上かな

●仝　三河　熊谷しげ子

ほとゝきすはつねひとこゑきゝにけり
　夕べ日記かく旅のやとりに

●仝　香川　ふよう

ほとゝきすおもひこもらす一聲は
　雲の衣をつゝみかぬらん

●新樹　仙臺　町田周子

君と二人めてにし花の跡とへば
　若葉をくらし山鳩の聲

●ほとゝぎす　安房　渡戸まつ子

かをる湯の菖蒲湯あみて唯ひとり
　端居しをればほとゝきす鳴く

●螢　廣島　平山なり

江の近き牧場の柳むら〳〵と
　螢飛なり人の聲して

●ほとゝぎす　下總　三田はや

五とせを汽笛になれし工場の
　病る枕にきくほとゝきす

●新樹　弘前　今ちか子

若葉さす林檎畠の一つ家に
　庭鳥なきて晝靜なり

●螢　伊勢　船越露子

里の子のうたふ茶摘の末くれて
　宇治は螢の夜となりにけり

●ほとゝぎす　和歌山　久保しげ子

江戸ゆきの飛脚は立ちて殘る燈に
　雨ふりしきりなくほときす

●螢　京都　三の宮露子

あね君を送りてかへる村はづれ
　心ぼそくもとぶ螢かな

●仝　伊勢　毛利本みと

我かかとは里川つゝみ柳かけ
　夕涼しくほたるとぶなり

●仝　千葉縣　平川雪子

渡し場に船待つゆうべ家に待つ
　いとし子のつとに螢捕ふる

●ほとゝぎす　　　　欧前　浪野はな子

ありし／＼と亡にし稚児を見し夢の
　　さめつる夜半になくほとゝぎす

●苦言七則

佐々木信綱

こたびの應募の歌、投稿の葉書、机邊に堆かきは、其數二千首を超えたるべし。今しも讀み終りて、感じたるふしの一つ二つを記さむ。

一、陳套なる想の多きは、撰者の尤も遺憾とする所なり。時鳥に橘もしくは有明の月を配合し、待わぶる心をのべ、新樹に花の梢青なになりぬといひ、螢に身をこがすおもひをよせたる、あまりに古めかしからずや。今少し新らしき着想に心をよせ給へ。

一、類似したる想多きはせん方なけれど、みだりに類似すべくもあらじと思ふ歌の、僅に數字ことなりしのみにて、一首の精神ことならぬものあるは、いぶかしき極めなり。今其一例をあげむ。

江にそへる家の燈火一つ消え
　　二つ消えうせて時鳥なく、
川そひの家の燈火一つきえ
　　二つうすれて時鳥なく
森近き家の燈火一つみえ
　　二つみえそめて時鳥なく
海にそふ家の燈火一つみえ
　　二つみゆる頃を時鳥なく

以上の如き、ある一の粉本ありて、それによられしものならむか。

一、字体不明瞭もしくは小さき葉書の中に、數首を細字にしるしたる、これらは選者を苦しめらるゝものといふべし。墨くろ／＼とけしたる、鉛筆にて記したる、其人の心もみゆる心地す。

一、古歌と全く同じきもの數十首ありき。もとより短歌は字數少なければ、暗合の例なきにしもあらねど、誰も知れるやうなる古歌を出されしあり。『心の問はゞいかに答へむ』といふ古歌を味ひ給へや。

一、某々の舍、某々女史、もしくはおやしげなる姓名をつくりたるものあり。人はまづ自ら重んずべし。いぶかしきはかゝる人々の心也。

一、男子にして女子に變名して出せる者少なからずと

聞く男子ならむには男子の名をしるして出さべるし。八束髯生ふるますらたけをにして、婦女子の名を假りて出さるゝはいかにぞや。我精神をこめて作れりし歌に他人の名を用ふるはいぶかしからずや。歌人は一首の歌にも深き愛着心あるべき也。

一、かつて我選びたりと思ふ歌の想に似せたる者少かならず。諸君が募集に應ぜらるゝは、和歌を研究せむ爲あるべければ、たゞに人の跡を踏むは口をしからずや。いかで自ら新らしき所に眼をそゝぎ、新らしき境を開き給へ。

以上苦言七則、言葉あまりに露骨に過ぎ、又思ふまゝを書きしるしたるなれば、眉ひそめ給ふ人もあるべし。さはれ、二千枚ばかりの葉書をすべてよみ終りて、深く感じたるあまりの言葉也。我真心を汲みて、其非を改め給はゞ幸也

佳調

◎新樹　　愛知　本多たづ子
花散りて青葉になりしみ社のみどりの中をゆく小傘かな

◎螢　　壱岐　石川照子
白露の玉江のあしの末遠くつゞく小草にほたるとぶかな

◎郭公　　本郷　大塚ゆき子
若き身の胸にいれてうつら〳〵物思ふ夜をなく時鳥

◎螢　　陸前　中澤香子
池殿のをすまきあげて風までは水に映りて螢とぶなり

◎時鳥　　和泉　雲野俊子
水まきて涼しき庭の松かげに露を慕ひてとぶ螢かな

◎仝　　下総　大森清子
送別の君を送りちてからなみかへろ夕をなくほとゝぎす

◎仝　　下野　花子女史
亡き友と語りし夜半の夢醒めて物思ひ居ればほとゝぎす鳴く

◎仝　　埼玉　横田秋風
ふりそゝぐ雨のゆふべに梅の實のこぼれ出ても鳴ほゝとゝぎす

◎仝　　甲斐　初鹿野梅子
田舎なる叔母上訪ひし夕まぐれ一聲きゝぬ山杜鵑

◎仝　　愛媛　竹本芳子
篝火のかげに哨兵唯ひとり砲洗ふ夜を時鳥なく

◎新樹　　盛岡　野村いさ子
春がくし木々のわか葉に朝にさしてこかれいろなる露ぞこぼるゝ

◎仝　　盛岡　いさ子
奥山にかたわれ月の朝おちて夜ふかきそらになくほとゝぎす

◎螢　　山梨　小川初野
渡し守る蘆はいれてとま船の苫もあらはに螢とひかふ

◎新樹　　伊勢　釣月子
若葉かけ行く水の音の耳にすみて涼しき風文机も設

◎螢　　伊勢　藤縄英子

青田遠と見えし白鷺いつかくれて螢すゞしき夜となりにけり

◎郭公　　岐阜　片田つゆ子

わかせ子を待つ夕暮村の雨に一聲なきて行くほとゝぎす

◎新樹　　下野　神山富美子

青葉して日影もさゝぬ梅の枝に搖籃かゝりてひぐらしのなく

◎ほとゝぎす　　下野　神山富美子

友病みて五月雨さむき此ゆふべ青葉かくれほとゝぎすなく

◎仝　　靜岡　延子

あさまたき都の友に文やりぬまちし一聲よへそきゝぬと

◎螢　　北海道　熊谷ふさ子

去年逝きしちいさき弟今頃は螢よぶらん賽の河原に

◎ほとゝぎす　　伯耆　たまな

うぶすなの森の燈火影きえてかたぶく月に啼くほとゝぎす

◎螢　　埼玉　横田秋子

せゝらぎのこなきか草を翔はなれきて庭面にひとつとぶ螢かな

◎時鳥　　北海道　熊谷ふさ子

若葉蔽ふ昔の細道つくるところ奥都城見えてほとゝぎす鳴く

◎螢　　和歌山　杉板信濃子

賤のめかはたおるまとにうちむれてかけたてぬきにとぶ螢かな

◎仝　　尾張　千賀とよ子

いにし春若菜つみけむあぜみちはそこよあしこに螢とびかふ

◎新樹　　あやゑ

病みませるわが母刀自よかゝられかし老木の柳若葉さしたり

◎螢　　尾張　岡瀬みゑ子

湯あみしてこゝろ涼しき夕まぐれかどの青田に螢とぶなり

◎新樹　　陸前　濱野はな子

かりそめのいたつき癒えず花れ見て背戸なる櫻若葉しにけり

◎螢　　信濃　竹鼻はる子

田の業をせこもろともになしをへて鍬洗ふ河にほたるとびかふ

◎ほとゝぎす　　群馬　金谷梅三郎

風やみて蠶を養はむ蠶飼ふ女の肌さむき夜をほとゝぎすなく

◎新樹　　伊豫　田中重子

古塚も今は畑とはなりにけり木の芽新桑若葉茂りて

◎ほとゝぎす　　和歌山　川口増枝

雲迷ふ那智の矛杉むらたちてなくこゑくらし山ほとゝぎす

◎螢　　陸中　澤藤常子

玉とらる木蔭の翠夜も見えて涼しき庭に螢とぶなり

◎時鳥　　東京　保谷いれ子

新らしき奥津城どころ香消えて小雨そぼふり時鳥なく

◎仝　　愛知　鈴木志ま子

ほとゝぎす啼きてすぎけり五月雨のそぼふる庭の旗竿の上

◎新樹　　和歌山　西門米子

ふくかぜになり〳〵露のたまちりてすゞしくにほふわかゝへでかな

◎螢　　赤坂　木吉つぎ子

榮へにし古の夢のあともなく荒れたるにはに螢いふなり

◎ほとゝぎす　　京都　安田梅子

瀧澤瀬のとゞろひゞく若葉山夕べとき〳〵ほとゝぎすなく

◎螢　　伊勢　釣月子

世を照す玉とあらずともいとせめて螢ばかりの身の光もが

◎時鳥　　和歌山　龍山澄子

のべ送りさむしけかへる夕まれぐ雨ふりしきり鳴くほとゝぎす

◎螢　和歌山　小山つき糸
澤の邊をくすしに急ぐ夕まぐれ道をてらしてゝとぶ螢かな

◎ほとゝぎす　播磨　みさを
ほとゝぎすなき妹の面影か夢おどろかす夜半の一聲

◎螢　横濱　岡野とよ子
とこらせて生ひしけりたるかやはらみやみをてらしてとふほたるかな

◎仝　山口　静代冬子
光あれば螢雪がくれの螢さへ世に知らるゝを學べよ吾が子

◎時鳥　小石川　山本好恵子
行き過ぎて見歸る寺の竹籔に月をかすめて時鳥なく

◎螢　和歌山　平田愛子
まくさ刈る童は去りし夕暮に野川堤螢とぶなり

◎仝　和歌山　小山玉子
城出でゝ畷道おつる夕まぐれ道をてらして飛ぶ螢かな

◎時鳥　和歌山　つき子
亡き人を送る灯つゞく田甫道雨ふりしきりなく時鳥

◎仝　北多摩　北浦いゑ子
五月雨は晴れわたるらし葉ざくらの梢ゆらぎてほとゝぎすなく

◎ほたる　埼玉　内野あき
燃ゆるかと見れば消えもし消ゆるかと見れば燃えつゝとふほたるかな

◎新樹　宮城　石垣美佐子
みしるしの櫻の花の若葉してひとしほかなし母のおくつき

◎郭公　陸前　大友かる子
[illegible]する窓より洩るゝ明ほそき雨ふる宵をほとゝぎすなく

◎新樹　大阪　靜子
椎の葉の古葉は落て若葉のみ茂れるかげぞ戀しかりける

◎時鳥　本所區　宮内倹子
瀧の音すゞしき山のこなたより山ほとゝぎす聲の落ち來る

◎仝　甲斐　土原秀子
雨はれておふち薫ちる此夕さしいつる月になく不如歸

◎螢　陸前　石垣美佐子
姫君のめのとが里ゆ送りこし京にまだみぬ初ほたるかな

◎時鳥　美作　池田芳子
なき夫の柩まもりて夜もすがら香たきそればなく時鳥

◎仝　茨城　保谷うた子
夕烟空になびきて草深きわら家のあたり時鳥なく

◎仝　長門　田上てい
うすがすむ磯の松原人絶えて雲井はるかにほとゝぎすなく

◎仝　臺灣　草場いはほ
夕立のなごりの雲の絶間〳〵もれいつる月にほとゝぎすなく

◎仝　備前　重松竹子
初かつみ市路もひさぐ空よりもたかく名のりてゆくほとゝぎす

◎螢　愛知　鈴木しま子
組きそひやみにし夜の湖に螢とふなり月はなくして

◎時鳥　京都　福崎幸子
宇治山の山ほとゝぎす茶つみうたうたひやみたる宵のまになけ

◎仝　伊勢　西野花子
藤原の榮は過ぎて九百年若葉の宇治に時鳥なく

◎仝　鳥取　尾崎なみ子

遠乗のかへる朝げをほとゝぎす忍音もらす夏木立かな
◎螢 熊本 津留菊子
たをや女のむれにしのぶの摺衣いたるとなりてもえそにけむ
◎新綠 埼玉 林渓花子
山伏の足の弱きがやすらひぬ清水のほとり若葉折りしき
◎新樹 熊本 津留菊子
花にゑいし心さまして夕風にわかはすゝしき夏となりけり
◎仝 大阪 田中瑜瑳子
丘の上の若葉のかけにそば松原遠く牧笛きこゆ
◎螢 埼玉 倉林孝子
果はずも遠く逐ひにし螢狩り露しげき野を母たづね来ぬ
◎時鳥 愛媛 大西せつ子
此の頃の看護にやせし若き妻のくすり煮る夜をほとゝぎすのなく
◎仝 東京 まつ子
ゆく手暗松林なる峯つゞき日は傾きて子規鳴く
◎仝 愛媛 大西せつ子
黄昏をいそぐ商馬か鈴の音の消え行く方になくほとゝぎす
◎仝 近江 眞島綾枝
病む稚子のね顔を見つゝ夫をまちて針もつ夕ほとゝぎすなく
◎螢 山口 草賀はなこ
うすくこくむれとぶほたるおもしろきここに入れたるもいさ放ちなむ
◎仝 河内 河崎ひさへ
荒浪のうちかへし又打かへすいそへしつかに螢とびかふ
◎時鳥 東京 ひて子
故郷の山や見ゆるとながむれば思はぬ方に時鳥なく

◎杜鵑 千葉 平川雪子
うつぎ咲く庚申塚に人絶えて雨蕭々とほとゝぎす啼く
◎螢 信濃 山崎さこん子
一つ二つすがる螢の見えそめて雨に暮れ行く野路の川面
◎杜鵑 茨城 山口すみ子
病む母のしはぶき細き雨の夜をみとりしをればなく杜鵑
◎螢 大阪 高島ぎん
漁火の光消したる川風に伴はれくる螢三つ四つ
◎ほとゝぎす 伊勢 川口よね子
山高く水澄む里に旅寝してよもすから聞く郭公かな
◎仝 愛知 鈴木しま子
雨にぬれて松原いそぐ旅人の小笠の上に啼くほとゝぎす
◎時鳥 山梨 小川初野
ほとゝぎす山より出る一聲に骨なき蚯蚓なき止みにけ
◎螢 伊勢 貝増忠子
ゆくりなく君と相見て面はゆみ螢もとらで家にかへりし
◎新樹 大阪 南英利子
亡き友の賞でし白百合また咲きてせまき楓の袖よ露けき
◎仝 羽後 西木久子
森かげの綠夕の波に似て湖の御魂よわれを呼ばんか
◎仝 和泉 奥野貞
花の上に胡蝶となりてねしよはの夢もおとなき夏木立かな
◎杜鵑 牛込 榮井りう子
矢の如く筏が下す荒川の雲間をもれて山ほとゝぎす
◎新樹 紀伊 西野光枝

山駕籠にゆられながらに下るなり新樹にくらき紀路の山徑

◎ほとゝぎす　岐阜　小川千秋子
燈籠の消えしあたりを月さして御やしろ近く鳴くほとゝぎす

◎仝　愛知　高木とも子
五月雨に床のあやめはいろおせてさびしき夕へほとゝぎすなく

◎新樹　土佐　中田榮子
凉しくも青葉しげれるしたかげは花にうかれしところなりけり

◎螢　淡路　あぢさゐ女史
人の子は螢かりするこの夕家の子ともに蠶仕事する

◎仝　盛岡　野村いさ子
しづの男の脚に水かふ黒川のやなきのかけに螢とふなり

◎ほとゝぎす　三河　加藤みゑ
ほとゝぎす二つのこゑまつと耳たてゝ人ものいはぬ燈火のもと

◎螢　岩代　落合せい子
なき人の魂かあらぬか草ふかきおくつきどころ螢とぶなり

◎仝　牛込　露子
いたつきのわがせ眠りうかゞひて針とる夜半に鳴く時鳥

◎子規　信州　小林やすい子
松青き三保の濱邊に雨はれて虹さすあたり子規鳴く

◎新樹　柳下女史
稻荷山赤き鳥居のほの見えて一里坂道若葉さすなり

◎螢　大村　寺井ちく子
たそがれに青簾ひて立てば幼兒がまわらぬ舌に螢よぶなり

◎仝　大村　寺井ちく子
里の子の網とゝかぬ河岸を風にみだれてとぶ螢かな

◎螢　日向　紀藤榮子
去年の夏少女しづみし池の上を影淋くも螢とぶなり

◎郭公　三重　細野幸子
風交りて照る松原月出てお城のわたりにほとゝぎす啼く

◎仝　越後　大島鐵子
みとりして獨り物思ふ夕まぐれほとゝぎすなきて雨ふりまさる

◎螢　松山　紅葉女
瀧の淵と人のおそるゝ觀堂の地藏のほとり螢とぶ見ゆ

◎仝　岐阜　佐藤さち雄
橋の元柳繁りて氷賣る小家のあたりを螢飛かな

◎時鳥　埼玉　内野みくも
夜更して歸るさくらき五月雨の空になのるは時鳥かな

◎仝　下谷　臼井すみ子
千杉の梢はるかに雨雲のとぶかげしげくほとゝぎすなく

◎仝　伊勢　淺沼勢洲
父上のおそきかへりを門に待てば月すむ夜半に鳴く郭公

◎仝　相模　安女
明日はつか我家ふるさとをながめやるおばしま近く時鳥なく

◎仝　信州　小林よし子
雨になるけしきの見えて霧迷ふ峰の松原ほとゝぎすなく

◎螢　大阪　たつ子
笑まひつゝ家路をいそぐ童ちのかごの螢火消えつ光りつ

◎郭公　高知　三浦花子
母君のみひつぎうめてかへるさを小雨そぼふり郭公なく

◎仝　接待いく

山かけの森林静にほとゝぎすしのび音もらす月の夕ぐれ

◎新　樹　　赤坂　原田證子

青葉山うしろに負ふて若松の天主そびゆるあしたすゞしき

◎螢　　河内　大矢多類子

賤の男かひるまにかりし夏草の中より出てゝとぶほたる哉

◎新　樹　　千葉　平川[illegible]子

塔ばかり中ば見えて寺見えず若葉の奥に鐘の音ぞする

◎ほとゝぎす　　越前　小杉繁子

旅にいでゝ木曾の山路に春宅いぬはな露つゝ夕なくほとゝぎす

◎螢　　丹波　田井品子

さらぬだに其の夕はこひしきに螢とびかふ河そひの村

◎深山時鳥　　和歌山　わかは

行くてたゞ木立をぐらく谷川のひゞきかすかに時鳥なく

◎螢　　千葉　根津梅子

はかなきの同じたぐひと草むらの露を尋れてとぶ螢かな

◎杜　鵑　　岐阜　白井たけ子

みぎ左杜鵑なく聲のして靈しづかなる夏の山みち

◎新　樹　　埼玉　貫井なつ子

かりそめにさして楽柳春雨に根づきやしけん若葉しげれる

◎ほとゝぎす　　下ノ関　大濱よし子

ほとゝぎす鳴く一聲に窓おせば楷の若葉に月は宿れり

◎杜　鵑　　横濱　安賀順

明やすき夏の夜なれどほとゝぎすまてばしばしれざめつるかれ

◎新　樹　　山城　村岡綾子

土產の神の御森の深みどり夕べもれくるともしびのかげ

◎杜　鵑　　大和　田中とみ子

旅ねして故郷の夢をみてしよりきくもかなしき山杜鵑

◎螢　　青柳女史

妹の新塚いづこおくつきのあたりさびしくほたるとふなり

◎ほとゝぎす　　東京　中野深雪

友とはれむかしかたりに夜はふけて思はず聞きぬ山時鳥

◎螢　　大阪　白木すま子

少女子の追ひ行く方に影きえて見えす見すみ飛ぶ螢かな

◎ほとゝぎす　　神戸　今村竹子

母ゆきてうゑになく子をいだきつゝ乳貰ふ門にほとゝぎすなく

◎仝　　長野縣　山崎倫子

青葉さす山の下路とめぐれば藤咲くはたり杜鵑啼く

◎仝　　和歌山　増井やう子

はゝ上の棺見送る此夕小雨そぼふり時鳥なく

◎螢　　北海道　[illegible]女

わが里の木かげ小暗き雨の日はゆうべもまこでほたる飛なり

◎新　樹　　伊[illegible]　梶原ひさ子

かご提げて漁夫あまた歸り來る新樹の浦夕日きらめく

◎螢　　安房　古泉信子

少女子が戀のうらみに身をすてし淵瀬のあたり螢むれとぶ

◎仝　　河内　大矢多類子

追ひよりて少女かおけし振袖のしもとの下をゆく螢かな

◎首　夏　　河内　大矢多れ子

夕やけのくもは朧になりそめて三日月しろし染さくらの山

◎ほとゝぎす　　和歌山　平田秀子

明試世　第八號　　ほとゝぎす

亡き妹とまゝごとなせし夢さめてながむる空に杜鵑なく
◎愛　近江　鶴田まん
暁きの低き流れは闇に見えて暁き畔を螢縫ひ行く
◎ほとゝぎす　東京　濱田まき子
宵宿舍のまどによりつゝ古えを思ふ折しも鳴くほとゝぎす
◎愛　鹿兒島　佐田泉子
青柳の蔭より出づる鵜飼舟のあとに見えつかれつゝ
◎ほとゝぎす　東京　千勝ふく
水出ぬとむら人さわぐ大利根の宵月あはしほとゝぎすなく
◎仝　伊勢　的月子
空氣舟浮くる磯べの山松の木末はるかになく郭公
◎新樹　愛知　岡瀬かつ子
岡の上に見し白壁も此頃は青葉のかげにかくれける哉
◎仝　下ノ關　大濱よし子
雨やみて朝日こぼるゝ海棠の青葉の影に小雀の鳴く
◎螢　長門　福永けい子
夏草のしげみの中にくちはてし卒塔婆のあたり螢とぶ也
◎仝　安藝　松嶽梅子
夏草のしにみか中の澤水をうつるほたるのかげにしるかれ
◎郭公　大阪　楢木葉那子
時鳥なのる一聲身にしみて消しさまさるよるの山路
◎仝　伊勢　小林久子
きく人も猶ねらせとや時鳥なく音をしまぬ雨のゆふぐれ
◎仝　伊勢　木野戸五十鈴子
子規聲しめらぬは梅雨の雲の上をやなき渡るらむ

◎愛　神戸　今村竹子
なき母のみたまをまつる夕ぐれに軒端を去らでほたる一つとぶ
◎新樹　長門　佐倉みれ子
瓊韻にと幾は往きけん畑畦の新樹の蔭に憤遊べる
◎郭公　周防　守政とみ
五月雨の空もはれたる此夕さし出る月になく郭公
◎螢　武藏　保谷うた子
美の神は小さき虫にも宿るらん闇をてらして螢とぶなり
◎時鳥　伊勢　木野戸よし子
吹く風に雲間もりいづる月影のさやかになのる山時鳥
◎螢　赤間關　熊谷ふさ子
姉上は軒のほたるに身をなして涼の世界に行きましぬと聞く
◎新樹　伊豫　入江道子
なく鳥の聲もこもりて神なびの杜は若葉の茂りあひけり
◎杜鵑　岐阜　臼井すみ子
打ちつれて子守等三人唄ひ行く松ばら深う杜鵑なく
◎仝　下野　みどり
行なするひとかげたえて月しらむ谷のあけがたなくほとゝぎす
◎新樹　東京　枝野きん子
水枝さす若葉のかげに涼しくもハンモクつりてふみを見るかな
◎寄螢述懐　長崎　古賀秀子
いてゝ我も螢あつめて文を見し昔の人にならひてましを
◎郭公　大津　森郡志子
郭公なく一聲にゆめさめて曉月夜かけかすかなり
◎螢　長野　上石操女

文認したためしを踏る頃の夜の庭の茂みに螢飛なりし

◎ほとゝぎす　名古屋　雲出浴子

ねさめしてこそやもらすと見あくれはかげさへならてさみだれの音

◎仝　尾張　鈴木とみゑ

限らじよ共にと云ひて笑はれし姉は亡くしてきく時鳥

◎新樹　大阪　香川すみ

昔し植しやどのかしは木青葉して小暗くなりぬあまどのあたり

◎時鳥　日向　山下玉子

時鳥鳴く聲も只身にしみぬ我が子の棺家いでし後

◎螢　日向　山下玉子

亡き君の御墓の燈籠火は消えて心ほそくも螢入る見ゆ

◎仝　阿波　夏山榮子

星の子かさもてはらふ石階のとゞかぬ奥に螢もゆなり

◎杜鵑　伊勢　船越露子

とむらひの一群隠に見えずなりてほとゝぎすなく黄昏の空

◎螢　弘前　成田きよ子

夢ひきて湖のほとりさまよへば涼しき袖に螢止まりぬ

◎新樹　弘前　成田きよ子

湖のかなたの森は若葉して緑に浮ぶ赤き五重の塔

◎杜鵑　横濱　長谷川さく子

から崎の松ほのぐらく黄昏なてみづうみ遠くなくほとゝぎす

◎仝　信濃　竹鼻はる子

さくらはなふたちり散ぬ山さとのわかばのあめに啼くほとゝぎす

◎仝　和歌山　小山玉子

粟買て山道三里かへり行くその夕ぐなを鳴く時鳥

◎時鳥　和歌山　前山亘子

笠はれて城のかなたをながむなば落ちゆく月になく時鳥

◎仝　陸前　竹腰花子

女房から貝おほひはてにまかり出る局の廊になくほとゝぎす

◎仝　伊勢　齋藤せつ子

時鳥心なげなる杣人も過ぎゆく方を眺めてぞゆく

◎仝　和歌山　久保寅子

雲低く雨ふりそゝぐ峯つゞき松のしげみになく時鳥

◎仝　伊勢　齋藤雪子

姉君のみ墓のあたり寂しくも夕くれ近く郭公なく

◎麥秋　大阪　成坂俊子

いつしかと畑よりはたを吹く風に波うつ麥の色づきにけり

◎仝　仝　南窓

うたひつゝ畑の青麥刈はてゝしばしやすらふ畔の松かけ

◎夢　東京　堀山直枝子

はるの夜をふみよみさしてまどろめばきのふの夢をまた見き

◎仝　新潟　吉田梅子

たひやかたしはしまとろむ手枕にまた夢に見つふるさとの家

◎仝　近江　辻とみ子

ふしのねにのほりそめたる夢さめてまくらに細しともしびのかげ

◎仝　岐阜　佐藤さち緒

ふと覺めてねやの小窓の月あかり誰そ人影のさすとほの見し

◎仝　神戸　山下やち

母君の御聲聞きつ思ひしはさめて口惜しきうたゝねの夢

春浦　埼玉　宮倉俏舒
こゝろきのいそ貝拾ふ處女らか
袖ふきかへすはるのうら風

春筏　越後　久保くに子
よしの川雪消のみつの早き瀬に
かすみを分けてくたす筏士

谷水　常陸　東　胤吉
木かくれて有とは見えぬ谷陰に
流るゝみつの音のさやけさ

同　東京　田中増吉
のほり行く山の上まて聞ゆなり
谷のそこなる眞清水のおと

山家水　村瀬のぶ子
憂きことの聞えぬ山に聞え來て
こゝろもすめる水の音かな

山家閑　松林高風
世をそむく閑しこゝろの山住は
眞柴ひとへを中かきにして

蝶　兵庫　多木定雄
咲きのこる鈴菜の花にねる蝶の
夢の羽風も香ににほひけり

同　熊本　谷岡深
花の世を吾ものにして飛ふ蝶の
春ひと時のこゝろ知らはや

藤　德川政子
はひかゝる枝をはる風吹からに
松よりあまる藤なみのはな

山川に藤の花ちる　東京　相谷長能
雉子なく聲も聞えてほろ／＼と
藤のはなちるやまかはの水

暮春　山形　星川清民
行く春を誰かはおくる鳥も來す
人もたつれぬ花のふるあと

暮春月　東京　南部喜久子
花もちりはるも今はと行く空に
のこりて霞むありあけの月

新體詩

天賞

夕ぐれ野にたちて

埼玉縣岩槻町　大亦隆子

鳴神やみて雨晴ぬ、
見よ夕空に霓匂ふ、
樂しからずや人のよは。

自然のたくみ神のわざ、
うつすにかたき彩色の、
そこに神秘のかげあらむ。

さはれひそめる其かげを、
いたくな追ひそ詩人よ、
夕、のぞみの色あらば、
朝、愁のかげあらむ。

人ははかなき虹の輪の、
しばしを神のたはふれと、
悟らねばこそなか〱に、
吾世のあやはいつくしき。

悟らであれな常久に、
たゞ仰ぎ見よ空のはて、
高く妙なる霓の色。

森嚴雄渾、一贅語なく、一冗句なし、俳弱からざるのみ。天となす。

地賞

祝ひの歌

名古屋市　奥島ひで子

野べのさ百合をしたひてや、
若き光りの星おつる、
今宵よりこそ新妻の、
花なる君におはすなれ。

絹の紫絹の深けれど、
紅にほふ唇よ、
あやのま袖にかくすとも、
君もこぼるゝほゝ笑よ。

月の女神は人の世に、
靈しき光をおもらせて、
裝姿もきよき花よめの、
君が行く手に珠敷けり。

めぐれる朱の盃に、
汲む錫懸の酒こそは、
君が祝ひと御空より、
落ちたる露のかをりあれ。

あゝ今よりは君が胸、
愛の泉やあふるらむ、
清く楽しき君が家に、
天つ御國やあらはれむ。

絢爛艶麗、而して清新の氣紙表に溢る。才にあらずんば能はず。地となす。

入賞

薄絹

伊勢國宇治中之切　河原芳子

雲の七色そめわけし、
縦と横との糸のせて、
幸の綾の光澤あれと、
君故かけし絹機よ。

汚れなき手に機取りて、
神に祈禱の歌誦せば、
血潮張ぎるわが胸に、
高き韻きは漂ひつ。

絹の成る日はやがてわが、
待ちし希望の成る日ぞと、
窓に入る星眺めては、

はかなき夢を恥らひき。
長の思ひの丈巻きて、
纏りとゝのへし薄絹の、
薄き縁と知らざりし、
おのが心の愚かさよ。

さらば今将この絹を、
秘めて悩むにえたへんや、
裂きて恨みて火に焼きて、
烟るさ中に世をや呪はん。

薄絹の薄き縁、従来のながき恨、うつし出して遺憾なし。外の此作、忍び音とゝもに見るべし。然れども、余特にこれを取るは、語麗にして意深きを以てなり。人となす。

秀逸

忍び音

伊勢國宇治中之切　河原芳子

この松蔭にあそびしも、
母校かへりふみ投げて、
君あげまきの頃なりき。

小さき我手に掬びたる、
清水甘しと汲はれしも、
君あげまきの頃なりき。

膝を枕にねころびて、
口に歌をもとめしも、
君あげまきの頃なりき。

あはれ二人は妹背よと、
道分人に言はれたる、
清き浮名のあとたえて。

今は隔てのとほければ、
嫂の少女の身を恥ぢて、
深き胸えにしづめるを。

若し君こゝに来給はば、
かゝりし事も有りしよと、
語れ清水よ、この松よ。

戀

大阪　島田光子

花をしたひて飛ぶ蝶に、
花より外のこゝろなし、
花得てそれに眠るとき、
何処かぜのゆめあらん。

君をしたひて泣く我は、
君より外のこゝろなし、
君のなさけのかかるとき、
世の憂ことはかずならず、

水に住まへるその魚を、
水より外にいだしなば、
魚は死ぬべしたちまちに、
水こそ魚のいのちなれ。

戀になぐさむこの吾を、
戀より外になげうたば、
吾何住まんかゝる世に、
戀こそ吾のいのちなれ。
濁り濁れるうつし世に、
吾戀のみぞきようけき、
いつはり多き世の中に、
君がなさけぞまことなる。
あはれ浮世の小夜嵐、
よしいかばかりすさぶとも、
二人がむれのこひの花、
散らさむものかいつ迄も、

少女怨

山城紀伊郡上鳥羽村　村岡綾子

綿の小そで綾の帯、
玉のかざしもとりそへて、
今宵嫁入る少女子の、
胸のなやみな人知るや。

門につとひし里の子は、
むかし昭君胡の國に、
行きし思ひを知らずして、
少女幸よとさゝやけり。
運命のせてかけり行く、
車轍輪音たてゝ、
野川の橋を渡るとき、
人こそたてれ柳かげ。
森の下道しばらくは、
少女の車かくろひて、
再び森を出づるとき、
鴉の司の影とびぬ。
あゝこの夕べ少女子が、
運命とはに定まりぬ、
腮紅のあせたるを、
人は幸よとさゝやけり。

行く春

信濃國松本町一六〇〇番地　峯村さき子

何とは知らずわが心、
深き憂ひに堪へざるを、
はかなからずや人の世は、
春も空しく暮れはてゝ。
吹きては散りて又吹きて、
花春ごとに若けれど、
あはれ人の子いつまでか、
頬の色紅の失色を見ぬ、
希望と云ふもまぼろしよ、
胡蝶の夢は長からず、
空にうするゝ虹の輪の、
消えては跡も無らんよ。
思ふも愚かちりて行く、
花の運命のそれのみか、
自然はとはにほゝゑめど、
世はとこしへに春ならぬ。

青葉若葉

愛知縣八名郡牛川村若宮八十九番戸　本多たづ子

すさぶ吹雪とまがふまで、
櫻のはなは散るものを、
いつとは知らずしろ駒の、
引き行く春のみ車は、
迷ひもあへず過ぎにけり。

見よや曠野に生ひ茂る、
麥のみどりは丈のびて、
蒼朮はなびく朝風に、
つれて聞ゆるうなゐらが、
草笛の音も老いでめぬ。

思へばあはれ陽炎の、
燃え立つ野邊に打ちつれて、
花より花に夢より夢に、
うつりゆきつゝあくがれし、

胡蝶の夢よいまいかに。
さもあらばあれ乙女子よ、
くれゆく春になやむより、
靜葉若葉のしげりあふ、
涼しき森の下影に、
清き想ひを歌はずや。

賞外佳作

◉少女子

大阪　藤井登美子

艶なるかなや花のごと、
くれなゐふかき君が頰、
麗しいかな星のごと、
きよくかゞやく君が眼よ。
見よその頰に湛へたる、
笑みは靜かにかがきて、
湛たる愛の眼のなかに、
永劫つきぬ情あるを。
などめよ君を譬ふれば、
秋かぜたかきみ園生に、
露たゝふるむらさきの、
葡萄のたまに似たるかな。



甘くゆかしくあたゝかき、
したゝるごとき愛をもて、
げに妻となり母となる、
君がゆくへのたのもしや。
少女よ汝はなさけある、
詩人の妹とふさふらむ、
詩人を兄とよびなして、
しばしゆるせよその頰を。

◉郭公

本郷　大津賀ゆき子

あけぼのゝ花夕のほし、
晝にもさえの春くれぬ、
思ひ出おほき女少子の、
涙よいかでわかさらん。
固く結べるくちびるや、
光冷たきまみただに、
さとしは餘るゝ君の、
臨終のみ言きけるとき。
か弱き胸のたへかねて、
やすくとたゞ一言を、
答へたりしを名殘にて、

いつか三歳は過ぎにしよ。

ちぎり結べのかの君も、　今は千里の旅の空、
往来の驛をよそにして、　いかなる夢か見ますらん。

御涙多きはゝぎみは、　はやも五十路をこえましぬ、
思へば胸のわきたつに、　あはれ鬢のなどほそき。

み墓うづむるたつ草の、　しげき思にみだれては、
露おきそふる石ぶみの、　重たき責になやみつゝ。

その夜に似たる夕月夜、　み寺の森にたゝずめは、
形見のみ言とばかりに、　血になき過ぐるほとゝぎす。

やよ郭公子こゝろあらば、　わが袷をしも過ぎざれな、
思はおなじはゝ君の、　寝覚の窓のわびしからんに。」

我は浮世をわすれけり。　あゝ青春の血汐わき、
果敢なき戀に泣く人よ、　なみだの谷を過れ出で、
露の小草はふみ分けつ、　たそがれ暗き大空の、
やみにきらめく星影に、　しづかにをのが罪思へ。
かくて迷のさめんとき、　しづかに神を讃美せよ。
くすしき光身にあびて、　獨行きつゝかへりつゝ。

ほとゝぎす

◉夕暮

和歌山　和田みち子

五彩ほのかににほふ時、　ひとり野の邊にたゝずめは、
夕映早やもむらさきの、　霧につゝまれ夜の神の、
黒きとばりはうちたれぬ。　はるかに遠く又ちかく、
やみを破りて入相の、　鐘の響は尾を曳きて、
空より空に傳ふとき、　ひかりさやけき星一つ、
平和の下界を照すなり、　くすしき光胸うてば。
つみや汚れや罪りや、　浮世の塵はすゝがれて、

◉おくつき

北信の山家にて　はる風

たふとき人もこの底に、　賤しき人もこの底に、
浮世の位、名も富も、　のころ形見は石ひとつ。

山を抜くてふ丈夫が、　たけき腕もこゝにあり、
露も恥らふ手弱女が、　そのやわ肌もこゝにあり。

戀しき親はかこてども、　親しき友はさけべども、
またと歸らぬこの墓の、　はては何處に續くらん。

小車たえぬみやこにも、　手向の紅のてらくに、
を止まぬ見れは死の神は、　あすは誰が身を誘ふらん。

ひとり寂びしき墓の前、　思ひまとひて佇めば、
浮世の夢を醒せとや、　梢にさわぐ松のかぜ。

●空蟬

靜田　清水眞子

日かげににほふくさ花の、　朝の榮達に醉へりせば、
吾れ人などかはかなくも、　散り行く暮をおもはむや、

けやすき露命守らむも、　つひはひとしきかたちのみ、
うつせみの世は今更に、　悔をなげかむこともなし。

さらば戀といふなかれ、　涙とともにめぐる血の、
またく冷えたる人の世に、　けがれし才をもとめんや。

やつれし面はうつし見て、　たゞ吾れ乍らほゝゑめば、
ますみの鏡しばらくは、　よわきいぶきにくもる哉。

●若き心

札幌　中原高子

幸なくばあゝ幸なくば、曲たかき歌あらむに、
などかさはかよわき君の、さびしさを胸に傳へむ。

いたづらに花をし嘆き、しら露のもろかるさだめ、
咲けばとていつの時にか、また君が愁やたえむ。

星のごと清けき瞳、ま白なるみ手をかざして、
海原に沈みゆく日を夕くれに君や仰ぎし。

松風の靜けき音に、つま琴のしらべ通ひて、
清くただ幽かに聞けと、亂れては思ふに堪へじ。

ふさやかにかぐろき髮の、そは雨の夕べに見しよ、
ふりかゝる清き露に、眉墨の細毛ゆかしき。

暖かき胸にもよわき戀の涙ひそまば、
せめてもやすき心に、人を戀ふ夕べ消かれ。

たそがれの寂びしたかとの、夕日影まはゆく照りて、
面ぶせに君かよる時やがて世はやみに消えゆく。

●散る花

信濃　阿佐野みよ子

夕の鐘のひくゝして、　うれひの胸にひゝく時、
化粧の窓に散りかゝろ、　闇にも白き花あはれ。

その花びらを手に受けて、　わびしかろとも曇る眼に、
春の名殘をすかし見よ、　悲しからずや人の世の。

若き命のはかなくて、　さむろにやすき蝶の夢、
うたて人の子いつ迄か、　頬紅の色を見ん。

さかり果敢なく散りはてゝ　泥にまびろゝ花びらの、
其にも似たろ身なればか、　眺めてつきぬ憂あり。

散り行花と人の世と、　いずれか脆き命ぞや、
つらみ運命をなげきては、　夕の窓にひとりなく。

●さとす　　　名古屋　青山よしえ

夕榮えのかとなふ野べの、
はかなしやたまにやぶれて、
まばらなる小が草くれに、
蝶の蝶のいはにこやせる。

うるはしく彩なる羽も、
ほとぼしる血汐に燃えて、
かひたるゝ胸の和毛は、
夕榮えの色にかよへり。

ともに連れともに遊びし、
かくぞとは今もしらなく、
その姿はいづちいにけん、
戀ひなくかあはれその姿。

ゆめなれやなれが古巣の、
うつゝかや野ゆき山ゆき、
あたゝかき夜中の睦言。
ちぎりてめをのなからひ。

あたゝかき夢さめにたる、
そのの靈よ久に消えずて。
ながからぼ土となるとも、
さ迷ふかあはれ此野べ。

その野邊もまたかの山も、
この山はまたか野べも、
昨日こそなれがそのふ、
今よりはなれがおくつき。

かなしきは短かきゆめゆ、
われはまた同じさためか、
よさめにたる戀のゆくへ、
咲、胸いたき。

●胡蝶を弔ふ　　　伯州　松本孝子

かゝやきそめし夕づゝの
朱き面輪に涙あり、

寶にれぶる春の野の、
靈の花に戀あり。

み空に飛びし汝が靈は、
幽かに響く絃の音に、
深き靜みにとさゝれて、
逝く春の曲つたへけむ。

朝、はえある花の面に、
夕、散り行く花の香に、
情けの涙をそゝぎつゝ、
手向の曲をまひにしか。

苔むす石に世を偲ぶ、
戀につれなき少女子の、
變りはてにし汝が姿、
頰の紅にも似たる哉。

塵の浮世にまひつへく、
さてこそ神は汝が靈を、
飾りに美しき貌なれば、
天のみ國に招きけめ。

花もみ國に香りては、
汝が身の眠る時、
其處に自然の愛情あり、
そこに平和の夢あらむ。

散る花しげき奥都城に、
安けく眠れとこしへに、
また來む春もあるなれば、
われは手向けむわが歌を。

抒情文

朧月夜

文學士　大町桂月君撰評

（天賞）

福岡市荒戸町　脇山わか子

いつ昇りけむ春の夜の朧月は夢の如く淡く淡く庭の松が枝にかゝれり。よべの雨にやゝ色あせし櫻は、月影に照らされて、いよいよ白く、折々は梢よりはらはらと露のこぼれつ。前の植ごみはたゞ一面に黑きかげをながく引きて、處女の嬌羞の如しなど今朝友とめでにし紅薔薇は、又見るによしなし。我は月にあくがれてひとりさまよひ、いつしか後園の運動場にと來りぬ。それよ彼方は日毎に友と爭ひしテニス場よ、此方は朝毎に走り廻りし楠よ、顧ふ此三とせの春秋、なれにし此學びの庭、こひしき此庭、花の春、月の秋、野邊のあはれも山邊のゆかしさも知らず、たゞ此寄宿舍の庭を小天地小樂園として樂しく學びし三とせの春秋あゝ樂しき三とせの月日、寄宿舍の生活も、早今宵にて終らむとせり。實に我は今日卒業のしるし文を得しなり。うれしきかな、今日の日。明日は早遠く故山の空に歸り行かむとす。げに故山はこひしきなり、なつかしきなり、我卒業を日毎に指折り數へて待ち給ふ母君もあり一生の苦樂を共にすべき未來の良人もあり。流れゆるき小野川にかげうつす櫻花、若草萠ゆる野べの菫、いかにやさしき色香なるらむ。飛ぶ胡蝶、揚る雲雀、いかにのどけき春のけしきなるらむ。我めでにし垣の白桃今年はいかに我を慕ひし彼の小犬今はいかに、憶へばこひし故山の空。想へばなつかし故園の景色。あすは此なつかしき故郷に歸り行かむとす、思へばうれしからじやは。戀し、懷し、故山の空。我一度故郷へ歸りては、たゞやさしき母君の御もとにて、新らしき浮世の生活に入らむのみ。人目もうとき片山里に、平和なる生活を續けむのみ。高き理想は我のぞむ所にあらず。遠き希望は我みたす所にあらず。想ふ我望みはホームの團欒のみ。理想低しと笑はゞ笑へ、希望なしとそしらばそしれ。我にはなつかしき故山あるを。

されど〳〵此三春なれて遊びし學びの庭、此三秋なれ

てつとめし學びの窓、今までかぎりなるらむ。都の空には早思ひたちし身、此園生の花、いつか又ながめむ、此御空の月、いつか又仰がむ。

夜や更けぬらむ、天に聲なく、地に音なし。たゞ冷やかなる夜風の折り〳〵頬のおくれ毛をなぶるのみ。時に聞ゆる遠寺の鐘の音一ツ、暫し撞やんで、又つゞく二ツ

評、筆づかひも、情致も、優にして可憐也。自から人を動かす。（桂月）

あはれ亡き弟

信濃國松本町千五百十五番
阿佐野みよ子

（地　賞）

螢はその光のうすきにも似て、人の心を悦ばしむる事の多きと或る人の云はれけんも、幸ある人の心なるべし。てりもせず、曇りもはてぬ夏の朧ろ夜に、半は涸れたる小川のせゝらぎのみ、音低うも聞ゆるに、長く垂れたる柳の枝をかすめて、あはくも、消えつ、あらはれつ、飛び行く螢の行衛を眺めては、そぞろ、やる方もなく、戀しき我身なりけり。

いと愛らしき聲はり上げて、「風車風のまに〳〵……」と歌ひしは、あゝ我が亡き弟と、さして遠くもあらぬ野邊に、螢狩しけん折なりき。あゝ籠にみてる螢を眺めやりし、其愛らしき眺に、宿りたる其光を、のぞみの光とは、見てしものを。あはれ亡き弟、思ふだに我が膓はちぎらるゝ心地こそせらるれ。「坊は今日から學校へ行くのよ」樂しく笑みてより、日々手を引きて、幼稚園まで送り行きしも、あはれ只三つきの間なりしよ。彼はふと病の床につきしかど、其時、たらちねも、妾も、只かりそめとのみ思ひ居りしを、あゝ、はからざりき、たゞひとり永き〳〵旅路にやらんとは。あな悲し、あな哀れ、悲しと言へどもことば足らず、哀れと云へども意つくされず、天に叫べども答へず、地にうつたふれどもいらへなく、只小笹にそよぐ夕風のみ、それもあはれ、悲しき聲と聞き取れて、樂しき我家は去年の六月二十八日の夕暮と共に、闇の手に覆はれぬ。折しも無常をつぐる入相の鐘は、彼が少さき靈をや、のせていにけん、いづくともなく響き來て、いづくともなく消え去りぬ。

あはれ、今彼は、何處の國のいかなる處をやさ迷ふらん、其處には彼が好める、螢は飛ぶならんか、よし螢はそこに舞ふとも、彼が籠に滿てゝん、やさしき人もなくて、我が身を求むるときもあるならん。あはれ螢かりし野

ば長へに曠はれども、彼は長へに歸らざるなり、夏さり來れば螢は再びかの野に舞へども、彼が愛らしき風車の歌は再びきく能はざるなり、あゝ彼が形見の螢かごは今は塵にまびれて、納屋の片隅に掛りつゝ、折々我が心をなやましむるなり、あはれ、あゝ。折しも、のきばをかすめて、流れ行く青き少さき光、あはれ螢火が、あはれ弟が少さきみ魂なるらんか、走り出でゝ見れども、影だに見えず、見上ぐる大空に月はたゞ、おぼろに照すなりけり。

評、才筆縱横哀切を極む。卒讀するに堪へず。(桂月)

わが心

(入賞)

丹波　はなたち花

女の學問は無用なるとなり。彼村長の孃や隣の雪坊が好き手本、兎角女は家郷に在て働くが良しとて、父は妾を學校へも遣らず。唯一度の旅さへ許されず。山に樵り、田に耕し、昨は繩、今は筵と、此年まで母が裁縫ひの業を除々に教へくるゝのみにて、物の審など手にせし事なければ、何も知らざる身は、行末の生計に不自由ならん。せめて女一通りの行儀作法讀書の道修めたし。父に語らず、母に秘して、都邊へ……若し路頭に彷徨ふ事のあらば、何の面さげて戻らるべき。矢張家に……まゝよ茲ばかりに日は照らじ。一番汽車は人も悟らじ。明朝こそと、野良より歸れば、水入らずの一家團欒。父は濁酒の機嫌美しく、今日太郎作が、和殿は良き娘を持つた、容貌は好し、親に孝行、彼甲斐性善き働振り、此村に二人とないと譽めたぞよ。他人でさへ斯うだもの。己や婆の眼には、何と映るべき。老体の疲も忘れて稼ぐも、可愛の汝に早く三國一の婿殿迎へ、初孫の顔を見たにと笑ひて德利ふり給ふ時の母の顔、和氣靄々たる瑞氣滿々たる此家庭、王侯將相の姫公達は得も知らじ。あゝはづかしや、晝の空想全く消へて、覺えず滿身に冷汗をながしぬ、斯くまで思ひ居らるゝに、一人天外に去らんとまで決せし妾の心は、鬼平、蛇平。

評、情景躍動す必ずしも筆づかひの如何を問はず。(桂月)

秀逸

忍び音

松山市大字湊町四丁目　高田操

妾は或學びやへ奉職する事となりました、處が數多い

職員の中で、風彩も備はり、學力も可なりと見えるお方が、至つてやさしく親切にして下されますので、昔如何なる縁で彼樣にして頂くであろうと、嬉しく感じて居ました。月日のたつのは早いもので、櫻の花は去年とかはらぬ色を競ふて居ますのに引かへて、妾のみは急に縁談の纒まりまして、下田へ嫁入りました。月頃日頃やさしくして頂いたお方ですから、お友達も羨み、妾も樂しく暮して居ました。それも暫の間て、學力もあり、勤勉家と目ざした的は大はづれで、日進月歩の此世の中に、唯空しく月日を送るばかりて御座いますから、お友達の榮進を見ましては勉强の効を說きもいたします し、又いさめも致します。其日次の日は碁をも縮き、特勝らしく見えますが、又してもく怠り勝で、昔聖の君の朽ちたる木はゑるべからずとやら申されました通り、お晝寢迄なされます。是ではいかぬと思案を廻らしまして、或親しき舊家を尋ね、歳我不延の一首を書いて頂きました。

或日曜日、朝日はうらゝかにさし昇りまして、鳥の聲もいさましく淸らに聞えます。其日はとり分けて居間を精く掃除致しまして、床には色かへぬ英松をいけ、新らしく出來上つた幅を掛ました。其より活花は度々變りますが、幅計りは同じ床の間で、一つの年をとりました、其歳の十一月、親しき友は文部省の試驗をうけられまして、本試驗共花々しく合格なされましたに、嗚呼思へば妾が未だ年若て人を見るの明がなかつたから、今日の此憂目を見ねばならないので御座います。憂世とは誰が名付たものでせう。ほんとに憂さくつてく、これよりも都を離れ、閑靜な田舍の學校で、無邪氣な幼兒を友として、一人わびしく暮せしかとも思ひました事も數へされぬ程でありましたが、其度々に其ては妻たるものゝ義務を盡さないと云ふ者てあると、心に責められまして、遂々面白くもなしに其日其日を送つて居ました。

或日のこと學校で官報を見て居ましたが、ふと田内の字に目が止まりまして、よく見ますれば、未幼ない頃近所で同じ樣に育ちまして、兄のない妾は此方を兄の樣に思ひ、又妹の樣に愛して下さつた御方で御座います。其後大學御修業中も、一月に一度は必すお便りもなすつて、共に兄弟の樣に仲よくして居ましたのに、去年の夏業をお卒へなすつて、久々振でお歸りなさいま

じた。四年の間もお目に懸らなかつたものですから、早速伺ひましたに、おばさんが只一人火鉢の側で何か考へておいての様子てしたから、四方山の話をして待つて居ました話を致しまする内にも、私の顔を染々と御覧なさいまして、どうも何時もとは様子が變つて居ます。時をさして歸る鳥が誰を哀れと思うてか、カアツイ／＼と鳴きます。室の隅は暗くなりましたに、友さんは足音も聞えませぬので、思を後に殘して遂に別を告げて歸りました。是迄はお歸りなさると、明日とも延ばさず、其日の中にお出になりましたに、其年は御歸省中に一度もお目に懸る事が出來ずに終りました。嗚呼何と思召したであろう。私は露計りも昔と心は變らぬ者をと、明暮怨めしく思つて居ました。其から後は絶えて音信も御座いません、おばさんのお話では友は自分の思望を遂げる事が出來なかつたから、一生わびしく暮すつて云つて居ましたから、嘸淋しく一人暮して居るて御座いませう。あれもか愛想な者て御座います。それも皆私が惡かつたのでは御座いますけれどゝおつしやつて、後は言葉もなくつて眼には怪しの露が見える計りて御座いました。嗚呼是も私の目の見えなんだからです。あきめくらとは妾の事でせう。如何に文字は讀めましてもひとのこゝの讀めぬ眼です。何ぞ妾から失望の淵にお沈め申した者てもありませぬけれど、今日此妾の非運に陷つて居るのも、何かの戒ではあるまいかと思ひまして、日々考の足らなかつたのを悔ゐ、恐懼して居まする。其お方が非常な御榮進で、京都の大學校へ御轉任になつたので御座います。其時の妾の心はどうてありましたでせう。身の毛も竦立ち、心は空に飛び去るかとも思ひました。其後は後悔の念が燃えまして、うなされた事も一度や二度てはありませんてしたが、此思が積り積つて遂に病の床に伏しました。病は日に日に募るのみで、御座いますから、星の母が附添うて須磨へ轉地療養に行く事となりました。

或日曜日、梅雨は此間もなく降りつゞきまして、一人物悲しいのに、母は何處へ行きました事やら、部屋中に居りませぬ。暫く致しますると、椽の外で話聲が致します。次第に近づきますと、友さんのお聲です、母はすゝり泣を致して居ます。是は心の迷であらうと思ふ間もなく、がらりと障子を開く人が御座います。これは幽靈といふものであらうかと思ひまして、眼をかたく

閉ぢてしまひました。

ほとゝぎす

徳島市會所町二二三　それがし

網引する蜑が呼聲、白帆張る舟人が棹の歌も絶えて、月は皎々と、岩を嚙ては玉と散る激濤を照せり。涼風は松の林を通して、黄金を溶かすとかや云ふ夏の暑さも知らず顔に我が身邊を襲ひぬ。日頃紅塵の中に棲息する身の、斯る景色一層懐しう、知らず〳〵歩は辨財天の祠の後に運ばれぬ。見返れば、今通り來し松原の間より、蜑の苦屋の燈火の影幽かにもりて、螢のとぶなる其にも似たり。見下せば底は幾丈とも知れざるに、雷の如き音して、荒浪の足許を洗ふ物すごさ云はん方なし。さるにてもふりわけ髮の昔袂連ねて此濱に貝拾ひて。多さはとりあひし妹は、今や何處にさまよふらむ。我最愛の未來の夫を、奪ひたる罪は深けれど、我は常世にそを免さん。我彼の君を慕ふが如く、汝も戀しう思ふべければ、されば今より尼となりて、此濱邊に庵を結び寄ては返す礒浪に、心を洗ひて、一向御身等が幸福を祈參らすべければ、早う歸り來ませ、妹よ。我に憚る事なく歸來て、其むつまじき家庭を見せ給へ。別れてより早や二年、幼き者も出來たるか、こひしや、なつかしやと此の事彼の事思ひつゝ彳む傍より、我懐しき妹の聲聞ゆ。「姉樣堪忍して下さい」。驚きて見廻せば、僅に隔たる、岩頭に俯伏して泣る少女あり。我は嬉さに堪へず、急ぎ馳せ寄らんとせしが、あはれ我足はよろめきて、岩と岩との間に倒れぬ。最早起上らん勇氣もなく、茫然と彼の少女を目守てありしが、少女は覺たらむ樣子もなく、起上りて月を仰げり。紫に光る二ッの目よりは時ならぬ、しぐれ、はら〳〵とふりて、月は其青き頰を照せり。「姉樣私が惡う御座いました、何卒堪忍して頂戴、あゝ私程世に不孝な者は御座いません、御兩親には此上も無御心配をかけて御死せ申し、又姉樣には：：あゝ今思ふもはつかしい。彼樣な事をして、嘸ぞ憎い者と思召で御座いませう。私は今全く悔悟いたしました、そしてもう自分の身が嫌になりました。だから此海の底の靜な所へ參ます。そして御兩親に御詫を致します。何卒姉樣、唯一言免すと仰(しやつ)て下さい。其で無ければ、御兩親に御目にかゝる事が出來ません：：。」我あ

りとは知らで、任るが如く云ひ終りて、潸々と泣ぬ。哀れ愛としの妹よ、汝が心の苦みは如何計ぞ、我は疾より免し居るを、何時迄かくはいたむるぞ。哀れさに堪で我も岩陰に泣ふしぬ。折しも背の繁みより山ほとゝぎす一際高う聲立てゝ、月を掠めて渡り行きぬ。「死出の田長のほとゝぎす何卒妾を導いて……」。幽かに云ひて立上りたる妹、目には一點のくもりもなく、浪間を眺めてにつこと笑みぬ。

さゝやき

東京市麹町區内山下町一丁目一番地宮邸内　安藤よし子

口でこそ三年と云へば短い樣でも……その間の妾の苦勞と云ふ物はましどんなだつたであらう。」

村端れを流れて末は遠く山の端を廻つて居る綾瀬川、それに懸つて居る橋の欄干に身を寄せながら、かう呟いたのは、今の女である。暮れ難い春の日がその殘り惜しさうな夕日を向の山口しばし漂はして居たが、それも今はなくなつて、夕霞はぼんやりとあたりの寂莫を包み始めた。丁度墨繪のそれのやうに。

「こんなに苦勞をして居る妾の氣も知らないで、澄さんは今頃はどこにどうして居るのか知らん。」

河面ばかり眺めて居た女は、此時ふと顔をあげて、何ぞでも搜して居るやうにあたりを見廻した。

丁度此所であつたわ、澄さんの出稼に行くのを見送つて出たのも……見送りの村の人が大勢居るので、妾は此所の欄干に俯伏して泣いて居たら、澄さんがそーと妾の脊を撫てて、唯一人でさみしいだらうが、な、俺れもおまへの顔が見えぬのは憂辛いが、これも皆おまへの爲を思うからの事、なーに一年計りたてばぢきに歸つて來るんだ、さ、そー泣いて居ずと、もー一ぺんおまへの笑い顔を見せて立たしてくれつ……て。……あゝ見える樣だわ。……それにしても、此一年越しと云ふ物は、手紙一本くるではなし、せめて手紙なりと來れば御ッ母さんもあんないやな事を云いなさりはすまい物。……もしや御ッ母さんの云ひなさる通りに、妾は澄さんに見捨てられたのかしら、きつとさうだわ。……でもちつとも便がないんだもの。……そうしたら妾どうしたらいゝんだらう。……と云つてあんな人の處に御嫁に行く……あゝいや〳〵……せめて死んだ御ッ母

さんが今居て下さつたら……わゝいつそ妾も御ッ母さんの。………」何處の鐘だらう此時ゴーンと河面を傳つて、暗の内に沈んで行つた、女はぢつと河面を見つめて居た、

折柄野良の歸りの者であろう、姿は見えぬが、

冬を凌いで咲く梅の花死んで花實は咲きはせぬ

身に浸む樣なよい聲で歌つて行つた。

何と思つたか女は今迄身を寄せて居た欄干をぶる〳〵と身振ひをしてつとはなれた、そしてじつと考へて居たが、やがてキッとなつて空を見上げた。そこには今出たばかしの星が一つ。パタ〳〵と足音を橋に殘して女は驅けだしたがやがては暗に見えなくなつた。一しきりなまぬるい風が吹いて、後は又もとの寂莫に歸つた。

由井が濱

山口縣阿武郡山田村第三百五十六番屋敷 神代冬子

鎌倉に着きける此夕、夜更けて、磯邊の松の琴、波の皷、繁く枕に通ひ、いとゞ、去りし昔の夜の忍ばれて夢結ばれざるまゝ、庭に居り立ちしが、思はずも、月にあくがれ來ぬる由井が濱」。濱は、飯島より稻村が崎へかけて、砂白う弦のごと撓み、青疊敷ける相模灘に、溢れ紙に書ける樣に大島を浮べたり、涼しく鬢のほつれを吹く濱風、「するりと足下襲ふ冷けき白波、ありし昔の其儘よ、あゝ友なつかしや。」そは一昨年の夏なりき、全じ學び舍の心合ふたる二人の友と、休暇を幸にこゝへ來り、朝な夕な濱邊に立ちて、白き眞砂や絲の波の盡きぬ樂を繰り返せしは。早や、それも三歲の昔となりぬ。げに、流るゝ月日と、運命の車とは暫も止まる時なきよ。姉樣よと、わが慕ひしその一人の友は、八千代を壽ぐ玉椿咲く此彌生、英吉利從解きて今はゆかしき丸髷姿、此夏は、優しき背の君と共に日光へと、一週間前の便りに聞きしが、此月何と眺め給ふらむ。さはれ、痛はしきは他の友なり、去年の卯月、共に目出度く學びの業終へて、かたみに絞りし袂別つ時、「冬子の君よ、願ふは、行く先きの東都の音信にこそ、妾もふる鄉の音づれ絕つまじければ」と、あはれ、友の、その故鄉の繁きたより如何なりしぞ、秋、月明かなれば、「深き淵に俯して、そが映れる小さて影を眺めよ。」と、春、花笑めば、「雨に打たれて木陰

に佇み、そが散り行く末を見よ。と、これわが友の詩なりき。しかも、いかに、その秋の一言の淋しかりしよ、「百年を契りし夫は、いづくに紅葉愛でますらん、妾は、今いたつきの床にあり。この夕まぐれ、風なきに散る裏庭の桐の一葉こそ、わが身の行末なれ。あゝ、友よ、歌ひ給へな、此世の別れに、來る春に逢ひ得ぬ妾に。」と虫の音も細り行く十月半、遂に哀れなる友は、無常の風に誘はれて、是れを妾の名殘としぬ、誰か知る、此友の心秋知る桐の一葉をおきて。「今は、吾れ只獨り、盈ちては虧ぐる月の光を浴び、白波の寄せては又歸り行く汀に佇む、うたゝ、短き夏の夜に、いとゞ思ひの長きかな。そこに、戀に捨てられて脆く秋風に散りし友あり、かしこに、夫と手をとり、紅に咲く薔薇愛づる友あり、戀もせず志も得で、元の杢阿彌なる妾は、獨り、果しなき海邊に月を仰ぎて茲に立てり、千々に定めなき物こそ人の運命なれ。此深き秘密は夜の海ぞ語る、戀も、愛も、血も、涙も、凡て、世の問題の解釋に苦む人は、妾と共に夜の海に來ませ、いざ、巖の頭に蹲りて、遠く寄せ來て碎くる波の私語に耳傾けよ、汀に佇み、秘密をひめて散る波の花を掬び見よ、極みなき海の彼方に落つる星を仰げよ、そこに無言の教訓と慰藉とはあるならむ、何を人の子、薄命の佳人に泣き、好運の乙女に諛ひ、至らぬ吾が身かこつぞや、夜の海に來り、神の御心を悟れかし。」今しも十六夜の月大空に冴え、歸る漁火の三つ四つ沖に燃ゆる見ゆ、思ひぞ出だす、かの翁はいかしつらむ、過ぎし夏は、いとまめやかにし見れたるが、今も猶健かに漁り暮せるにや、妾三人が都に歸る際にも、彼は停車場まで送り來つ、「嬢樣、皆まめで御座ルやう、爺はもうとる年ちや、運がよきやあ、又、御目にも掛らうが。」と、鐵の樣なる拳もて涙ぬぐひしが。明日はまだきに、彼の運命訪ひて昔語らむと思ふ内、櫓の聲近きて船歌いとちかしく聞ゆ、遂に舟は黄金しらかねの波を碎きて磯に着きぬ。そが中に、翁に似たる眉濃き男の魚籠提げたるが、妾を見返り勝ちに松原に入りぬ。」珍らしくも、此夜は、夢を吾が胸に浮べざりき。」

わが身の思ひ

靜岡市三番町　田中とり子

春は漸くたけて、何となくのどかに、四方萬樹、今は綠

りに濃く淡く間々白き香ばしき香もやと思ふ、梅花の點々、濃綠の堤の松の色、ゆるやかなるべきこの春の水にうつりて流れもあえず、清く靜かに澄める此川口の潮は美しき自然の景を宿して、何處迄も、わが鄕の樂しきを思はする。

今しも小坂の山に沈まんとせる夕日のかげの美くしさ、黃金の波のたゞよふ一面の駿河灣、とぶ水鳥、いづれか樂しからざるものなきはなきに、いかでか、妾はかく樂しまざるか、妾は深く瞑想に沈めるか、ほと〱と起るわが胸中の思ひ、徒らに迫りて茲にまづ何事を語るべきかを知らず。

あゝこの景は、わが古鄕の景にして、また日每に交ひし二百余りの教へ子を有せる校舍と、及び教へ子の住ふ里の景色よ、なつかしき青山よ、慕はしき松原よ、ゆかしき學校よ、やさしき生徒の家よ、さては愛らしき波よ、岩よ、これ皆わが久しく愛らしき生徒と友に深き惠を受けたりき、暖かき光りにつゝまれてわが望も輝き、わが樂しみもつきざりき、あの山に登りしこと幾回、あの林にさまよひしこと幾回、あの波に遊びしこと幾回、然も愛らしき生徒と共に麗はしき景色に接して互に睦みつ、かくてわが林は樂しく七月とすぎぬ。

この山よ、波よ、林よ、川よ、海よ、松よ、さては學校よ、汝等はわれをかくまで生徒を捨つるべく悲しくせしめしか、思ひに沈ましむるか。

天眞爛熳一點の罪なく、一塵の惡なく、如何に無邪氣にして清く愛らしきよ、汝が星の如き眸、花の如き顏、やはらかき紅葉の如き手、而して少しの邪念なく神の如き誠を以て朝夕われをうやまひし、あゝ生徒よわれの恐ろしき惡魔にせめられし時、汝が小さき姿はわれを、かくし、絕えがたき不平になやむ時、汝がかはゆき情はわれをなぐさめぬ。

されば、汝を外にしては、われはこの世にわが胸を動かすべき他の物を有せざるなり。何の樂しみもあらぬなり。されど今汝を捨てざるべからざるなり。

過去を思へば、幸多きわが身なりきよ。隈なく晴れし空の下に汗をぬぐひして、紅葉の山に昇りて栗を拾ひしこともありき、海の景色にあこがれて廣野の濱に遊びしこともありき、その時よ、汝はわが止むるをも知らで、波に心を清むるを怠らざりき、あまり、心の清きに、しひて止むるを止めたりき、或は茶畑に惡術して遊び

につ、小野寺の絶景をさぐりつ、或はつれ〴〵なる雨の日には日課の暇に、汝と古英雄を語りき、その時よ、汝はよくわれの話に耳をかたむけたり。されど今日よりは、あの安倍川紀行と、チャンダークの物語りの後は、何事をも語り得ざるなり。これを思ひて痛哭にたへず、日夜深く思うて心はさながら縄にていましめられしが如く、糸のからみしが如し。かゝればこの數日、そも何事を汝等に敎へしか、只苦悶と悲みとにて人知れず泣きしのみ。

いざ別れん、わが汝等を敎ふる生命は、今日を以て終りぬ、三十五年三月を以て終りぬ。

汝等よ、汝等も妾が爲めに泣くらむ、別れを惜しむらむ、實に汝等の爲めに泣かざるを得ざりき。あゝ幸よき妾を、汝等は今迄慕ひよれるか、別れを惜むか、妾はかくまで感情の迫りて、つらきことはあらざるなり。妾は早や多くを語らざるべし。氷を弄べは、水を得るのみ。花を叩けば、徒に花を散らすのみ。水を指して、氷の形を語り、枯枝をながめて花の當時を說きたりとて、何の得ることかある。妾は去らん、さらばこの山よ、海よ、この愛らしき景色よ、東風ふかば梅花今の如くにさけよ、暑さ來らば冷しき波を起せよ、秋來なば栗め實れよ、紅葉も色づけよ、われは長くこの長田の天をながめて、忍びの涙に泣かん程に。

頭をめぐれば、夕陽正に赤くして、暗き影は、遠くより近きに、靄雲一帶孤村をつゝみて、烏にやあらん、飼を求めて聲をたつるは。あゝ汝も別れを惜しむか、抑も吾れを憐むか。

嗚呼つゝむに堪へぬ涙かな。妾の息ある間は、長へにこの景を忘れざるべし。また愛らしきものを忘れざるべし。

賞外佳作

躑躅の一枝

埼玉　倉林　孝

兄君の單衣今ぞ縫ひ終へたれば。まだ袷には早きも、洗且納めつゝ、今日はもの日とて、他の友もはや歸りぬれば、己れもと、明日を期して郷の家を出てぬ。

夕風涼う漂ひて、右も左も一面の青麥、切揃へたるばかりなる葉末を渡り來るに、夕日照りそひ、滴たゝらん許りの綠の波打ち寄せつ、其度毎に穗末のさら〳〵と擦れ鳴る音の、恰も初夏を唱る聲の如く、或は未だ全く逝かぬ春の名殘を惜むき囁の如く、たのしく悲しく、さま〳〵に聞ゆ

なり。袖の下より起る青蓼の香芬々と薫し來るに、心地よく、恍として立佇みぬ。

折りしも遠方より恰も鈴虫の鳴音の如き優しき歌聲耳にひゞきぬ。見渡せば、右手の山根、夕日に烟る青葉の中を二八三人の乙女等手に手に赤き物捧げ、細く長く歌ひつゝ來るなり。近よるまゝにながむれば、まばゆき許りの紅の躑躅なりけり。あな美しき躑躅哉と賞めつるに、中なる一人御の君が頻子、こは天神山より採り來つるなり、一枝參らせんと云ふに、ありがたしと受けつ。あな面白の枝振とながむ折しも、花の香芬と匂ひたち、四邊に滿ちにみち渡り、たゞ花の世界にやと思はる許りなり。やがて殘のべて別るれば、またも優しく唱ふなり。流き流の土橋に掛る時しも、傍の森より妾を呼ぶに、立佇めば、妾の兄君なりき。手にへイチノ詩と新聞の上紙に記せし小冊持ち給へり。あまり景色の好さに、今まで此處に遊びたりっ。實に面白きは田舍の景色にこそといふ。兄君は過ぐる月、足の病とて都の學舍より歸り給ひしなり。痛みはと問ひまつれば、はや元の如くなん。夏の休みも程近ければ、一先行きたきものといはるゝに、はつと胸せまる、こは弱し、攀えて上り給ふは、浄なるをと押ゆるも、猶そ哀れのまさるなる。こは好き花哉、何處より机上にながめんに與へてよ、あゝ此の散る頃迄には歿ちたきものといひたまふに、あはれ長く散らであれよと念じて渡す。

いつしかに日影沈みて夕榮の空薄れ行き、紅は紫、紫は濃くやがてうすく、遂に暮色蒼然四方よりたちこめぬ。かなたの林かしこの山根の賤家、薄網の內に包まれて、やがてそこゝゝ灯淡く見えそめぬ。折しも森上にはつと紅の火花またゝく間に大方消えつ。殘の二筋やがて一筋消ゆ時しも鐘の音、寂うなり渡る大かた子等のすさびにや、烏二羽三羽南へ南へと飛る空に、野寺の鐘の音一層寂う今日の終りを告げぬ。

名なし草

東京　かへで

常にえたへぬ心の傷を抱き、いひしらぬ思ひに悩ゆ身の、今宵も赤亭にわ物思ひにはりさく胸の苦しさに、閉ぢこめし窓おせば、一片の弦月、中天に高し。松の聲、波の音、寂しき響を傳へて、いとし、我悲思をまきしめぬ。我は遂にたへえで家を出て、鬱蒼き松の下道辿りぬけ、例のごと濱邊のこの岩に腰おろしつ。はてしなき海原に眺め入り、こし方は遠く思ひ起せは、父なく母なき今の身に思ひくらべて、そゞろかなしく、いつしか涙のこぼるゝを覺えず。あゝ憶へば、四年昔とはなりけるよ。今はこの世の外の母上と、この濱邊の自然の大景をめでつゝ、朝夕のそゞろあるき、如何に樂しかりしよ。母上のいつも休らひ給ひしも實にこの岩よ、我のものすそ高くかゝげて海の歌高らかに誦じつゝ、寄せ返す波は追ひ波に追はれてあなたこなたにとび廻るを、母上はほゝゑみ見給ひて、去にし所の老來のそれならで、汝が卑なき幼子にも似たる振舞を見れば、我も若き昔に浮びあひし心地ぞするると仰せられき。あはれ其御聲、其御面影、尙我耳目にのこれで、今は幽明身の置所を異にして、心の中聞え上ん術もなし。思へば如何であつき涙にむせばざるを得べき。憂の海に浮沈していつ底の藻屑と消えはてんもわかぬ身を慰めんとて、都なる清子の君、尊き御勉強の暇偸みてまても送り給ひし御玉章の數々を、我は如何なるよろこびをもてむかへたりしぞや。字毎にこもれるあつき御情に、我やいつその涙を注ぎたりけん。昨夕の御玉章に、近き中にうつしゑとらせんとの御事なれば、なつかしき御姿拜し上んも遠きに在らざる可ければ我短からん生涯の中に、又相見ん折の幾度ぞ有るべき思へば／＼悲しき我身の上かな山の姿、波の色、戀しへに變らざるは。

ばかなき人に物思へけや。　あゝ我あし下にくだくる波よ、我れを哀れと思はん情はありや。共に昔を語らへ心はなしや。いへども〳〵音は何とあら波に、其すそけぬれて、からださへ冷え渡りぬれど、願はいたく激し、胸をついて出たる思のいつはつべしとも覚えず。あゝ如何になげゝばとて、聞えたればとて、如何で之れ世上の矯り来給ふ可き。何事も運命の神の業とあきらめて泣かじ思はじと、眼を閉づれば、浮世の道に行なやむ我がよわき心は叱るが如き波の音、はげますに似たる松のひゞき。

月の賦

松本孝子

四季をり〳〵のうつりかはるにつれ、いとなかしきは月になむありける。

梅が枝、あるは櫻の梢に、朧ろに霞む月影の照せば、花も一しほ芳しき香をぞますならむ。まいてれみだれ髪とや見む枝垂れ柳に、ほの〳〵白む暁の月の、かゝりたるこそをかしけれ。折しも、雲井遥かに歸る雁かれの、二聲三こゑ、訣別のねを鳴きゆくは、いとゞあはれなりかし。

夕立の洗ひつらむ如き夏の月を仰げば、晝のまの暑さもうち忘れて、心神いとゞすが〳〵しうなむ。　まぐれ、蚊遣火の烟の末まで消えやらず、石燈籠に火を點せむとする折しも、みがきいだしたる如き月のさし出でたる、いかばかり詩的ぞや。あるは、三日月のかげ凄く、山の端にかくれむとする時、血に鳴くてふ杜鵑の、一こゑ高く雲間より名のりいでたる、いとあはれ深きものにこそ。

桐の一葉に、秋の女神のおとり給へば、いと澄みわたるみ空に、一輪の明月かゝりて、葉末の露も玉とあやまたれ、折り〳〵、鈴蟲などの鳴きいてたる、恰がら、天女が奏ずる琴の音と疑れて、いと哀れなり。あるは、小夜ふけて、消ゆるばかりの月かげをかすめて、二つ三つ、雁がれの何に喚ぶか、聲たえ〳〵に鳴きわたるなど・いかなる雄々しき武士も、などて胸を焦さぬとやある。まして、寂しき山中にて、をちこちの鹿のこゑ〳〵、嵐に落つる頃は、何心なき山かつも、斧をすてゝ腸をたつ心地やせむ。

木枯しの風、肌をつんざき、をく霜しろき夕べ、凍らむばかりの寒空に、かゝれる片割の月は、恰がら水晶珠のごとく、四邊しん〳〵と靜まりつる折しも、けたゝましう鳥の叫ぶこゑの聞ゆるは、こよなう物凄きかぎりになむ。

あはれ四顧蒼茫たるわだつみに、身を一葉の漁舟に委ねて、釣するいさり男も、限なく照らす月影を仰ぎては、渦石に竿をなげて、腸をたつ心地やせむ。勝ちほこりし武士も、露營の夢もる月かげをながめては、萬里遠征の情、緩々として起り、心は夢現にはせて、郷山にや及ばむかし。淋しき旅窓の、暁もる月を仰ぎては、遊子の胸裡、そも如何ならむ。親に別れ、夫に先きだゝれたる少女子の、ありし昔なしのび出てゝ、空にしられぬ小夜しぐれ、洩る襤褸の孤袖に。やどる眞如の月影は、珠簾たれし高樓に、美しく美酒を汲みかはれ、杯裡に金波を漂はのものゝ知るや知らずや。

嵯峨野の月影は、悲しくして、たをやめの涙を誘ひ、峰の松風うち寒く、夜食の聲をひそむる時、不圖起る笛竹の音を聞きては、足柄山の昔を偲ひ、波の音靜かにして、舊のすさびの笛竹の、さすがにみだるゝを聞かば、誰が須磨の嵐を、偲ばざらめやは。

蝶と百合

上総　多田繁子

美しき溪川の流れに沿ひて、一本の姫百合の匂ひゆかしく咲きて、あつきおもひのありがほにうなだれたるありき。姿やさしげなる胡蝶の一羽、かげを水に映しつゝ、たのもしげに花のほとりにまひ狂ひぬ。恰も、かれを慰めんかの如くに……。されど花はあはれにます〳〵うなだれぬ。さながら、手弱女の深き思ひに沈むが如く……。蝶は叫びぬ。ナ、花よ。慕はしの花よ。とく散れ。遠に流れ去れ。徒らに美にまよひ、世の嘲笑をな受けたまひそ。

一度無情の風吹かば忽ち色あせ香も失せんものを。と其後蝶はしば〳〵かの花を訪ひぬ。蝶も亦あたりを去らざりき。程なく花は散りぬ。水と共に流れ去りぬ。蝶は力なげに殘んのひとひらに小さき口押しあてゝ、身動きもせず、折々白き羽を開き、開きては又閉ぢゐたりしが、かのひとひらも蝶とともに溪川に落ちぬ。あわれ、水流れ去りて、花はつひにかへりきたらざりしよ。

ほとゝぎす

筑後　十時やゑ子

軒玉水いと間遠にきこえて、昨日までうしとばかりに聞きたりし軒の雫さへ今はなか〳〵に心ありげに覚えつ。今日は心地やゝ勝れたれば、しばしの程とてやまう病の床を離れて、窓近き文机のあたりによりつゝ、ふと庭面を眺むれば、思ばざりき、我が病かくまで久しかりしとは。花と見し木々の梢は、青葉と繁り地深く散りて、影だに止めず。自然の羽風に我をなぐさめつる胡蝶は、今いづ地に去りて、いかなる花の上に夢結びてか。淋しき風は軒もる雫とゝもにつかれたつかれて、衰へはてたる頬のあたりかろやかにかいなでつ。折しもあたり漸う〳〵暗うなり行きて、物淋しさは一しほまさりたる、垣根に匂ふ卯の花のほとりに、音信るゝ時鳥のこえ、一聲二聲我が思はいよゝ重なりぬ。

あわれ世の心ある人々は、この鳥のこえをこよなうめでゝ、初音を尋んがためには、山路に分け入り、あるは草にいね、岩を枕として、日を重ねつゝ詩歌の友とせり。さるを我はなどてかくきく度毎にむれいたむるにか、そもいかなれば。

思ひ廻はせば、我れ十あまり一つの夏の末つ方なりき、母君はかりそめの病におかされ給ひて、終に朝顔の露とゝもにはかなくきえ失せたまひぬ。あはれ其時の悲しさは如何なりしよ、かくてひま行く駒の足早み、いつしかなげのうちに、年は暮れて長閑けき春はこゝに來りぬ。花は咲き、鳥はうたへども涙の袂は、濕りて朦朧たり。漸く木々みどりして端居の風心地よき頃、我は故ありて住みなれし都もば、戀しき友も、なつかつかしき家も、皆打すてゝ父君とゝもに故里にはかへり、草の庵に朝夕父君につかへまつりしうち、又しも一年は夢幻の如くに過ぎて、いとつれ〳〵なる夏の初は再びこゝにめぐり來りぬ。なつかしき家、戀しき友、都の空、しのぶごとにたへず涙の袖ぬらすに、あはれ母君は今いづこの空に我を守り給ふ。あはれ桐の一葉におく露のなほそれよりもはかなく消ゆるは人の命なりけるよ。我れはじめて浮世のつれなきをそとろにおぼえぬ。久しき病の床にいたくつかれ給ふ父君を見奉ることに、逝き給ひし母君をしのぶごとに、實に斷腸の思せり。

あはれ夏深うなり行くにつけて、父君の病はいよゝ重うなり行きて、名あるくすしの見たても其甲斐なく、眞心こめて仕へまつりし我が心づく

しもあだにして、垣根の卯の花一ひら二ひら風なきに暮れ行く首夏をのせつゝ散り行く、夕たそがれつぐる鐘の音とゝもにとこしへに眠りたまひぬ。

我はあまりの悲しさに心も空になりて、しばしは涙も出でざりき。思へば五月雨しげき夜中のことなりき、あまりの淋しさに、父君はいかにせさせ給ふとそうとかへば、永き病にいとつれ給ひて、悲しき御姿なるに、やさしき御面には、幽に笑みをたゝへて、我れを見つめたまひつ折から音信るゝ時鳥のこゑをきゝ給ひて、しづかに御歌など物し給ひぬ。心にこれ父君が御うたの最後の御筆なりしよ。そのこと今ははや五年のむかしとなりたるに、今又我がむかしゝのぶ枕邊に、音信るゝ聲、つゆむかしに變らず。あはれ此鳥よ、時鳥よ我いとけなき時より冥途の鳥とききゝ居たり。いかで死出の山こえてきつらんものを、せめてなき父母の君の御ことづて傳へくれずや。

頬に飛ひておつるあつき涙は軒端をつとふ雨よりもなほ繁し。静に眼を開けば、ともしびの光いと打しめりて、あたりいと寂しく、思はいよゝ深うなり行くのみ。

折しも窓外はるかに不如歸と鳴き渡るは、誰れに告げしらするにか、あなあさましの時鳥や。

別れし友

ゆき子

雨につけ風につけ思ひ出でらるゝは、他郷にさすらな友の上なり、青葉は日の光りをさへぎり、子規の聲は裏の山邊にひゞく頃となりぬ、あゝ子規のこゑも、親しきかの君のあらば戀しくはきこへじ、五月雨降りくらすとも、かの君と物語せば淋しきこともあらざらむ、あゝ戀しきはかの君よ、今はいづこの里に、此の五月雨のつれ〴〵歎ち玉ふやらむ。

わかれまゐらせてより、戀しく過ぎし月日はこゝに三年となりぬ、あゝわすれずよ、をとゝしの霜月上の三日、これ君と逢ひ見るの終りなりき、あゝその夜は、月の冴き夜なりき、妾はそれより月の夕べ毎に、君を思ひ泣きぬ、殊に去年のその夜は、戀しさに耐へて、夜の更くるも知らで月下に袖をしぼりぬ、あゝ又わすれざるは、秋風寒き夕のそゞろありきに、君がのたまひし言の葉なり、あゝゆき子の君よ、他郷に別るゝことのあるも、文の通ひは絶へずせむ、妾もおこたらじ、御身もおこたり玉ふなと、あゝ此のみ言葉は、妾が耳には今もあり〳〵と殘りぬ、君の胸には殘らずや、此の地を去り玉ひてより、一度びの便りも玉はぬはあまりにつれなきみ心よ、君はなどかく心のかはり玉ひしや。

過ぐる四年の昔、都の女學校に物學びされし頃には、月に二回の音づれは缺き玉はざりき、あゝかの頃には、別れて月日を過すとも、心をなぐさむ玉章のありけるを、今はそのなぐさめもなく、たゞなるきうつしゑに向ひて、涙にくるゝのみうつしゑは物語らず、玉章讀みてうつしゑ眺むればこそ、物語りする心地もするなり、春は花鳥の色音につけ、秋は木の葉の色ずくにつけ、すぎし樂しき思ひ出て、夜毎の夢にはいつも君を見まゐらすなり。

此の頃風の便りに聞きつたへ侍れば、下總銚子里におはすとかや、あゝ誠しからんには、こなたより文送りて見んと思へど、いぶかしきふしもあれば今にをくらず。

あゝ戀しき君よ、妾はかく君を思ふを。君には妾を思ふ折はなきや、あゝいかで、君の心に妾を忘るゝことのあるべきや、たゞその身の境遇の玉ひてのことならむ、親しき友にさる心づかひはいらざるを、世に身恥

浮き沈みはあるものを、心に誠あらば身につゞれまとふとも、汚れし錦にはまさるを思ひ玉へ、よろづ君には劣り姿なれど、御身の氣付かぬ所に、心づくこともあらむに、さな見捨て玉はで妾に心を添へしめ玉へ、こゝなる椎の下陰の庇に一片の玉づさたまひてよ。

夜汽車

東京　大津賀ゆき子

汽車は、今品川の驛近う、はせきぬ。初夏の月、いと哀に冴え渡りて、潮吹く、風、心ゆくばかり、爽かなれど、今宵は、深う身にしみつ。波の音も、千鳥の聲も、思を碎く種ならぬはなし。姉君は、今し眠につき給へり。美しき面わの、いたうやみさらぼひて、幽けく眠をとざせるみ姿の、夢み給ふや何ならん。たゞうなたれませる、兄上の氣色に、妾も幾度か、語りいてんとして、え打ちいでず。心むづかしう疲れて、太息のみぞいやまさりたる。あはれ、思へば〳〵、悲しき身の程や、妾は今、兄上と共に、病篤き姉君を、故郷に伴はんとするなり。そも姉君の病を得て、駿河臺なる、さる病院に入り給ひしは、去年の秋、紅葉かつちる頃なりき。病の窓ながら、年浪はかへりつ。梅もさきぬ。櫻も咲きぬ。されど癒え給はぬのみか。日に〳〵重りゆきて、今は雨夜の星の、幽けき望も、失せぬれば、「せめては、故郷に歸り給ひてと」の、醫師の勸もだし難く、今宵しも、都をいでたるなり。かくて程なく、横濱に着けるに、眠ざめ給ひて、「さとは、はや近きか、妾はえ堪へじ」などのたまふに、「忍び給へ、はや程近し。」など、答ふる胸も、はりさけんばかりなり。大船過ぐる頃、魔王の旗手とも見ゆる黒雲幾片、月を掩ふ。いと心細しやめる人の眼には、この夜の景色、いかに見ゆらん。吾等だに見ともおぼえて、野にえ、山にえて、大磯まできぬ。この時、月影全く落ちて、あたりいと暗く、宛ら死の森に包まれたらん心地しつ。あなうら寂しやと、思ふ間もなう、姉上の顔ばせ、鉛の如く、青白うなりて、われかのけはひなれば、「姉上〳〵と」、よべどもいらへなし。妾ははや、女心の悲に堪へかねて、泣きいでんばかりしが、兄上は、かひ〴〵しう、用意の藥をしひて、含ましめ給へば、やう〳〵氣づきて、微に笑ひ給ふ。あはれこの笑顔なりきとも、とはに忘れずよ、餘りの嬉さに、固くみ手を握りて、「今しばしなり。心强くませ。」と、勵ましつ。夜やいたう更けぬらん。山北小山など過ぐる頃は、乘合の人の多くは、夢路に入りぬ。急行にて、佐野三島へ停まらざるも、嬉しからぬかは。幾度か勵まし、幾度か慰めつゝ、やう〳〵沼津へつけるは、翌日の午前四時頃なり。こゝにて下りつ。姉君は、いたう弱り給へるやうなれど、出迎の人も多かれば、今はなか〳〵に心安し。

かくて、姉君は家に歸りて、七日目の夕暮、遂に家に歸らぬべく逝き給ひぬ。今は戀しとも、果敢なしとも、いはじ。山背く、水白き所に、其亡き骸を葬りつ。妾は、再び都に上りて、物學ぶ身となりぬ。されど妾には不盡の涙あり。永久の恨あり。何の處、何の境に往きてか、この夜のかなしき歴史を忘れむ。あはれ〳〵。



敍事文

底無池

甲賞

塚越停春君選評筆

茨城縣新治郡土浦本町 山口すみ子

菅の根の長き春日も漸く黄昏の色遍り來りて、紅の雲はおぼろ〳〵薄らぎ、遙か彼方の森陰は夕べの霧に環ぐられて、河畔の柳なよ〳〵と打ゆらぐ里川の流にそひ、妾は進む事小半町、やがて底無池の水際に彳みて深き物思ひに沈みぬ、見渡す限り漫々と宛ら濃き藍色の齊なみ〳〵とたゝへられし如き水の色、物凄さばかりのあたりの景色、年古たる藤の古木は曲がり〳〵て廣く遠く池の面を掩へる樣、宛らそれよ、恐しき〳〵大蛇の立姿。

近きわたりの人々は主住む池と仇名して大方はより近づかぬものを、妾はそれさへいとはず、あらず、なつかしう戀しうさへ思はれて、日毎〳〵池の水面を眺めてはいとせめて心の憂を慰むなり。

吹く風ゆかしき香を送り、空いとう晴れ渡りて長閑なりし去年の春日、可愛き妹花子は一人の友とつれ立ちてこの池のほとりに遊び暮しつ、胡蝶たはむるゝ美しき藤の花とらむと過ちて足ふみはづし、アッと叫びし一聲を名殘に、悲しや遂に溺れ死せしなりき。友の一人はあはてまどい歸り來りつぐる言葉に、夢かとばかり打驚き馳せつきし時は、あな無慘や、いとほしや、双手はかたく握りしめ、紅の頰は色褪せて花の唇はきりりと喰ひしばり、問へど言はず、叫べど答へず、遂にあの世の客となり終んぬ、その時よ夢といはむか、幻といはむか、物いひたげなるこの唇、笑傾むけんばかりのこの眼、なぜに笑まぬぞ、なぜに語らぬぞ、さらば最早死せしにや、いかで誠と思はるべき、おゝ娘よ、おゝ妹よと母は泣沈みぬ、妾は悶え狂るひて天に叫び地にまろびぬ。されど〳〵甲斐なしや、藤の花は依然のまゝ美しう、胡蝶は元のごと樂げに舞ひ遊びて。あゝ藤の花なくば、あゝ胡蝶の誘はずはかゝる悲しみもあらざるまじを、恨めしの胡蝶や、腹立の藤の花や、妾の心は狂ひに狂ひて、美しき一花もぎとり踏みにじりくれば、胡蝶の姿はいつか消えて、何の涙ぞはらは

らと我衣手に散りかゝりし露の白玉。
それよりぞ、妾は藤の花を憎み、胡蝶をいとひぬ。さるを水際の藤はまた咲き出ぬ、色香美しう去年のまゝにあはれ今年も誰かいとし子を妹と同じ運命に泣せむとてか。やめよ〳〵藤の花。
妾は狂氣の如く池の水際を走せ廻れば、我影を追ふ胡蝶一つ、あはれ何をか語らむとはする。折柄遠山寺の森の鐘靜かに無常を告げて末細々と消え行けば、空には黑き鳥の一群親しう友呼びかはして塒へといそぐ、さるに〳〵妾は猶池のほとりを立去りかねつ

（評日）文飾にも情思長く、哀切にして趣致多し、何等の凄絶ぞ。何等の婉絶ぞ。宛として一篇無韻の詩也。
荒無池畔の藤花、古木に纏ふて碧潭に垂れ、胡蝶の一片飛て心なきの景趣、移して以て之を斯の文藝に譬ふべし

し　賞

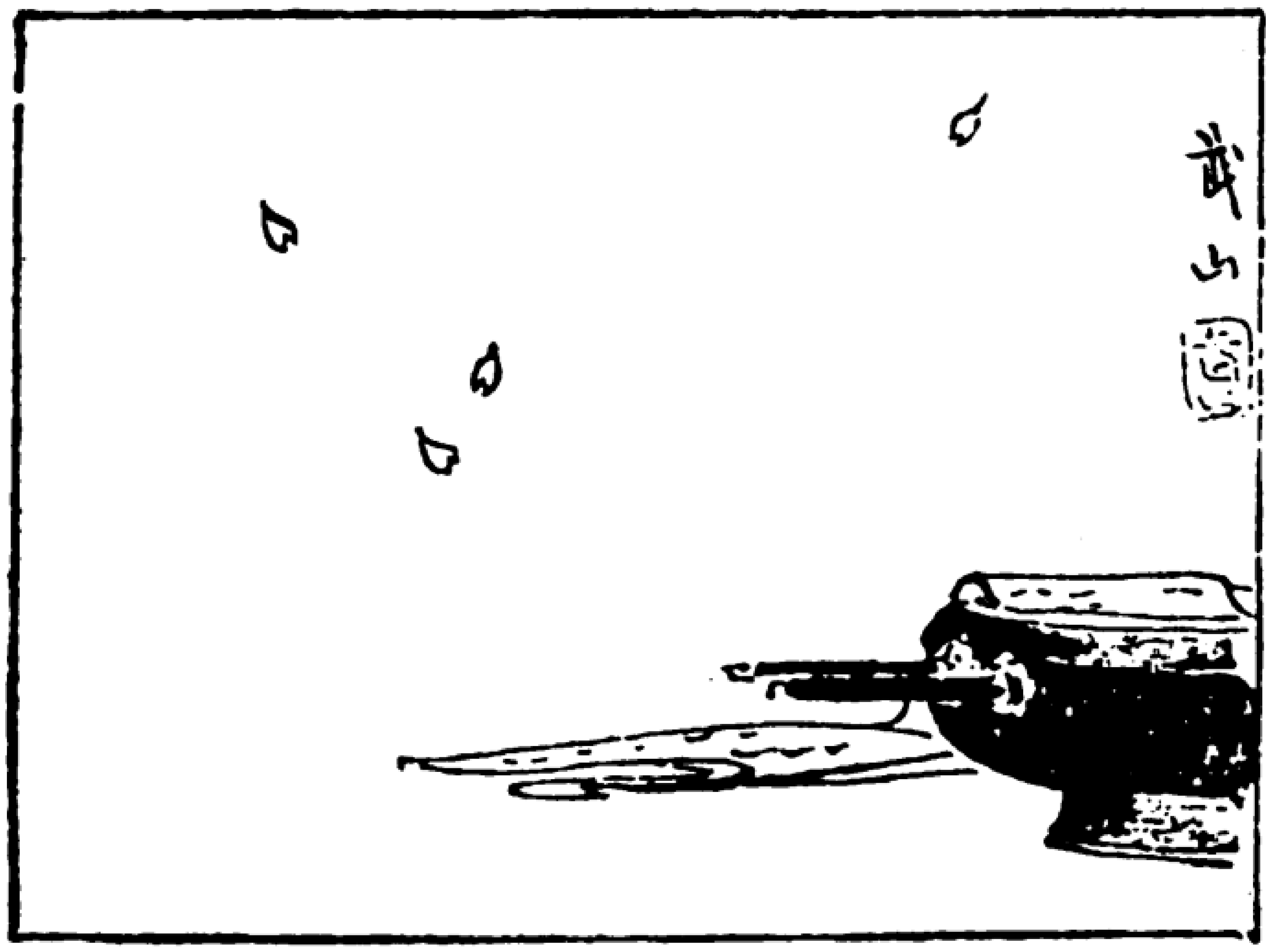
花あやめ

埼玉縣岩槻町　大亦たか子

子規の一聲だも、まださかぬに、早くもかきくらし降る五月雨のわびしさを慰め顔に、匂ひいでたる花菖蒲よゆかりの笑顔いつくしきが、雨にぬれたる姿の、さても鄙には惜しき、あてなる色かな、いでや花めづる友への贈ものにと、ぬるゝもいとはできりとりぬ。
雨、綠野にみちて、風わふるゝ青葉には、一點の塵もとゞめざる、なか〳〵に心ゆく野路のながめかな、一しきさと打みだるゝ雨の音に和して、小田の蛙の鳴聲に、きくとしもなき耳傾くれば、さても姦ましき中に、をかしき節のそれも聞ゆるよ、いつのよ誰にならひけん歌ぞと、微笑まる。
背に、ふと『姉さま其花われに賜はれかし』と愛らしき聲の聞えぬ、あなやと怪しうてみかへれば。破れし傘重たげに肩にしたる少女の十ばかりなるが悄然として佇みぬ、『誰家の子ぞ雨をつきて何方に赴く、』
わらはが問に答へはせで、愛らしの眼は、吾手に持てる花の上去らず打瞬りつ。つくらはぬ姿のいたくやつれてあはれげなれど、髮のさま眉のかゝり、とかく、無下に賤しきやうもなく、いとほしき少女のさまなり、
『此花ほしきや』といへば、愛らしき顔に微笑みせてたゞ打點頭きぬ。
「風流なる少女よ、與へなむも苦しからねど、そもや汝、

しを得て何にせむの心にか』と、顔さしのぞけば、あはれ星かとみえし眼とみにくもりて、雨の雫か、あらず、白玉、とばかり、涙はら〳〵とこぼれぬ。何と辨へがたき身にも、すゞろ哀れの催されて、ひしと少女の肩をかい抱けば、顔に押あてし、つゞれの袖のひまより、すゝりなく聲音に『好み給ひじ花なれば、母さまのお墓に手向けまほしうて』と斷々に聞えぬ。さは、あはれなる同情の友にてありけるか、優しき心かな、ゆかしき汝かな、あはれや、よのさがもえしらで、只雛遊びに余念もなかるべき、この清き少女が小さき胸に、はやも知りそめし浮世の波か。あはれ無情なる運命の神よ、今此こゝに泣ける少女が涙の一滴を、君が冷かなる其掌にうけて味へ、そこにいかなる味や含む、いかに御身が鐵腸には、些の辛苦も感じ給はぬか。げにも弱きは、人の子の情かな、かねては母に別れしわらは、又今更に、同情の涙せきあへずなむ。さはれ少女よ、涙を收めよ、若き御身の春いまだ永うして、希望の光は、とはに未來に燿けるを。たゞ優しき汝が手に、母が墳墓の塵を拂へ、いさや、花ほしくは與へなむに、泪なかけそ蕾のそれに。色美くしき薔薇の花は、少女が腕に移されて、一しほのあまひにゆらめきつ。雨は少女が袖に打けふり行く。

（評曰）　多恨多涙。詩趣掬すべく。餘韻饒し若し文に熟するに至らば一作家たるに足らむ乎。造語新奇。たゝ優しき汝か手に母が墳墓の塵を拂へと云ひ、泪なかけそ蕾のそれにと云ひ、雨は少女が袖に打烟り行くと云ふが如き、其如何に詩味に富むかを見よ。



小町

ふるさと

丙賞　　權藤和子

旅のやどりは、一日だものうきものを、影さへはなれし事なきたらちねのあつき情にわかれ來て、海山遠き東路にたゞ一人立いづれば、雨につれ、風につれ、こひしくなつかしきは、たらちねの君とふるさとにこそあれ。

春雨のしめやかに、軒端をうち、ちまたの塵そ静まれど、よろづ物音のさわがしさ、かわる事ぞなき。

たゞ一人、かたろふ人なき、文机のもとに、思ふともなく思ひめぐらせば、すきさりし事とも、まぼろしの如く目の前にうかびいでぬ。

あはれ、忍べば三とせのむかしに、我ふるさとをこそ立出てしか。

はかなき、筆のすさびにかいつくれば、ほのぐらき室はみな過去のまぼろしのみゆきゝしぬ。

今そしられぬ、親のめぐみは。

父君が世を外にして静にすみなし給ひにしかの山里の住家は、小高き處にありて、うしろに高く聳えしは鶴が嶽とよび、今は木々の繁り さらそ美はしからめ。秋萩の木のあまた生ひたつ山なりけり。

又前なるひろき野は、これなん、太郎か原とよびて、わか花こそつねに此野邊によりてぞみたされぬ。

やう／＼夏となれば、こゝをよこぎる筑後川の水あふれ、我家の下まで一面の湖となる、其眺めいひしらずなん。さる時近きわたりの溺れし人は、あまた石垣よりはひのぼりきて、裏手の廣間につとふ。遠きは召つかふしもべどもたすけの舟をいだし、數知れず人の來るを、北向の居間よりながにき。

月ごとにひらかるゝ歌と茶のむしろには、いまじ乳くびてなれぬ頃より必ず我を膝もとにおきたまひき。かゝる事とも思ひいづればかぎりなくおぼゆる。

あゝこのをり／＼の事ども、思ひいづるさへなつかしや。げに此時ぞ、わか樂しみのきわみなりき。

三とせのむかし文學ぶとて都にはいでにけり。あわれ、其後に、此清き樂しみぞ、つゆだにも見ざりけりな。

春月おぼろげに、机の上の書ともを照しぬ、あな懐かしや山の端の月。

（評曰）文情清新、氏の筆の面影あり。語遠くして意長く。言少くして調高し。

秀逸

米子の瀧

信州下高井郡倭村大字柳澤四三番地　小林春子

いみじかりける人の子が汲みけむ、酒のなごりの瀧つ瀬を掬び、せめては此の暑かはしさを忘るゝよすがにもとて、たれ彼れの君とかたらひ合せ、處せまき蓬生の宿の苦しさにたへで、みなつきのそれの日、朝まだきそよ吹く風に袂をなびかしつゝ、みたりの友どちといて行く。やがてつゞら折なる青葉山にかゝりぬ。日は早や東の空に上り、青葉若葉の露を色どり、吹く風に日の影のこぼるゝ心地して、そこはかとなく時鳥の聲折り〳〵きこゆ。

おり〳〵は時鳥なくこゑのして
晝しつかなる夏の山みち

などくちすさみ行くうちに、路けわしうなりて、さすがに心くるしう、木蔭げながらもかはほねの手もたゆきに、折から空にあやしき雲たちまよひて、一しきり過ゆく夕立のはや名殘りなう晴れわたる空、とみに涼しうて心さへ足さへよみかへりぬ。やがて又しもなる神のたちいでけむと思はるゝばかりに、おどろ〳〵しき響のするなるに、折から山風颯と吹きおろして、またきに秋や立ぬらむとうちかこたるゝまで涼しうなりぬ。はるかに木立ほの暗き青葉のひまより、天津乙女がまだゝち縫ぬ白きぬ、いく疋とも知らすかけ流したらむごとうち見やらるゝに、近つけば、うちはかるべくもあらぬ高巖より、一筋のしろかねの水の天地をどよもして落ちたきりたる、いかづちもともに落つらむとばかり思ゐる。立ちのぼる水煙り雲となりてみな上に立まよひ。霧となりて瀧つぼのわたりうちこめ、木立さやにもみえわかず、藤ばかまの巖かどに匂ひいてたる、を鳥のかすかに聲もらしたるたゞならずかし。

ぬれぬとも猶近よりて見てゆかむ
しぶきにくもる米子瀧つせ

そのかみの物語おもひいでゝもしや病の薬にもや、などゝ味ひみるも幼なかへりしていとをかしや。今しも夕日なゝめに木の間をもれて、かゞやけば雨にぬれたる山のこのは、こと〳〵にきらめきあひてをかしきに、瀧のしぶきのあやどられて、くれなゐ、紫にうち匂ひたる、げに〳〵つきぬ眺めになむ。

おちたぎつ瀧のしぶきを吹風に
　　拄うをゝどり夕日色とる

（評曰）調高く趣多く、凡ならさる歌なり。又文委米子の瀧の瀧しぶきに、夕日に映したるに似たり。

夏夜随筆

河内國北河内郡安野村大字私部　大矢多爾子

いといと長き夏の日影も、やう／＼西の山端に隠れ、夕を告ぐる鐘のまに／＼、高嶺の松原ごしにほのめき出づる三日月の光に、ひとたびは見えずなりゆきし、森はやしわるは家ゐなど再顯はれて、谷川の流れいと涼しく、時鳥のふた聲三聲、木々の青葉の茂みより、月を慕ひてや名のり出づるなど、いひしらずをかし。

　　山近く家居しそれは時鳥
　　　木のまいさよふ月になくなり

清少納言が夏は夜と愛でけるも、うべなりやと眺めらるゝに、心抑へがたくてあこがれ出づれは、野ごし山ごし吹く風の限りなく涼しく、打渡す山田の稲は、いつよりもみどり深き心地せられて、葉末に結べる露の光、はら／＼とこぼるゝ樣など、げに云はんかたなし。遙に見ゆる麓の里わより立ち登る夕げの煙、また消え残る山の端の白雲に交れる樣もまたをかしきに、まいて誰かすさひなるか笛竹の音空にすみて、の琴音ならねどみねの嵐か松風かと云ひし、嵯峨野の奥、須磨の浦風に音を通はして、敵味方となく徐ろに故里の空仰がしめたる平家の君のみやび、さては足柄山の月に無常を觀ぜし、義光のすさびなど、そゞろ昔の忍ばれていと哀れ深し。其調の妙なるは空ゆく月も感ずべく、短か夜の更け行くまに／＼、月に心をのこして歸へるは、又われのみにもあらじかし。

　　きくまゝに世のうきことも忘れけり
　　　ふしおもしろき笛竹のこゑ

月ももらぬまでに青葉の茂りあひて、小暗き木の下かげを我物顏に螢の風に吹かれて、三つ四つ二つ飛びかふも、いとあはれなり、折しも童べらあなたの畦こなたの岸のつかさに、のゝしりあひつゝ、小さき籠にあまた入れて、持てはやせるを見るも、ひとしほ涼しげなり、

　　里の子のなくこゑ遠くきこゆなり
　　　ほたる追ひつゝみちや迷ひし

大空には塵ばかりの雲もなく、若竹の葉末には、なびく

ばかりの風だにもなく、暑さたえがたさに、夕暮を待ちわびし日影も今は山の端に傾きければ、おばしま近くたちよりて風まつ程に、ゆくりなくかき曇りて、夕立はげしく降りしきりたるが、またゝくまに名殘なく晴れわたり、さし出づる月影いと清く、袖吹きかへす風のすがしさに、堤傳ひにそゞろありきしければ、川ぐまのまこも隱れに、映れる月影動かしつゝ、二こゑ三聲水鶏のなくもゆかしや、

月清み小川のつゝみさまよへは
まこもかくれに水鶏なくなり

（評曰）寫し得て如畫。才華と可申候。

修學旅行之一節

靜岡縣引佐郡
西濱名村岡本　神谷賤子

紀州には淡路よりすぐに渡るべかりしを由良のとを渡る船人梶を絶えてと聞き、さてゆくへもしらで思の外に阿波に渡れるなり。さるを彼の音に聞ゆる鳴門の沖にて雨風さへ添ひ來て、海あれ船ゆること限りなし。中にはいといたくゑつふれて、大伴大納言まねふ者さへありしなと、長き紀念の思出ぐさなるべし。さて阿波に渡りなば、思ひ頼むべき大船も心のまゝなるべしと思ひきや、こゝにもさる船なきのみならず、添ひ來し雨風さへいよ〳〵降り、ます〳〵ふきて、海の上いつ靜まるへしとも思はれず。われらは月の柱こそ折らむとすれ、龍の玉取られむとする者にもあらぬを、如何なる神にかくわはめらるゝかわらむ。それにつけてもきのふけふ經る國の名ともいつれもあはといへるにさへくしやなと、わらぬことわりさへつけてうたてがれど、せむすへなし。居ること二日、からうして日和まちつけ、船もとめていてゝ和歌山をおふ。船はれいの棚なし小船にて、梶取はたゝ二人なり。心細さといはむかたなし。朝のまはおひ風にて少し心ゆくはかりに船もゆきしを、午すくる頃より風俄にたえてたゞいさるやうなれば、いつはつへしとも見えて心ぼそさいふはかりなし。梶取にとへばあせり給ふともいかにかはせむ見給ふまゝの櫓の力より外にすゝむべはなきものをといふ、いと力もなきいらへする楫取かなとつぶやけどせむなし。紀の朝臣が昔物しけむ土佐よりの船もかくはあらざりけむとおもふを、此の見ゆるぬ島に問はな、その

かみの船のすゝみといづれかはやきなと、さる方に心をやりてすくる程に、やう〳〵暮れはてゝぞ加太といへる港につきたる。和歌山には猶三里あまるへきといふ。彼のひなもす船底にと云ふ淡路のたうえならねと、さすがにかしらも重く、腹もたへかたきを、大陸につきたるよりこびにや、人々勇みたちてすぐ徒歩より出てたち、夜の九時すくる頃にぞやう〳〵和歌山につきたる。けふ朝またきより船のうちによびしもさるものにて、むなしき腹かゝへて夜みちをたどりたるくるしさは筆にも言にも盡しがたし。是も忘れかたき思出ぐさの一つなるべし。

（評曰）幽婉清絢。手弱女の衣に塩へさらむとする情趣あり。

宇治の昨今

山城宇治町一六四谷村方　紫花女

喜撰朝日の山々に一帶の横雲棚引く東雲の空、宇治川の流も何となう靜けき比、ポン〳〵〳〵茶蒸す音聞ゆ、或は遠くあるは近くに。曙の美神が薔薇の薄衣被ぎて来給ふを喜び迎ふる皷の音か、さてもたへにゆかしさよ。手拭被つて襷かけて、手袋、脚絆、單衣の裾輕く籠負ひて三々五々連立ち行く。お早うさん！今日もお天氣て宜ーおすな。是ぞ昔より歌にも詠まれ、畫も彩れし茶摘女なる。畫に見るより優ならず、歌に聞より美ならぬは、何れ摘む茶の苦きうき世渡なればこそ。

萬貫の重荷乘せゆく滊車の其ならで、いと恐しき湯氣吐く釜の上に今しも綠艶々しき若芽は乘せられぬ。ポン茶を入れし器は流しに飛ぶ。滴く。煽く。熱！パタ〳〵〳〵。器中をはいてそれお次へと渡す。芽を入れる釜にのせる。冷した蒸芽を冷籠に移す。運ぶ。ポン〳〵パタ〳〵。鐵納戸羽織の半白の關羽髯が蒸方で紺の筒袖がパタ〳〵。そら煮が落た！ 割木ー、瘦男がかけ行きぬ。其忙しさ急しさ、など描き筆の及ぶべきやは。

簟笥並べ連ねたらん樣の棚培爐、大將に帽子被せし樣の籠培爐！、從來の製法、衛生に害ありて費多ければ此籠培園主人の丹精にて改良せられしもの、第三回勸業博覽會に進歩二等を得られしとか。

何れも荒男が三四人、引出しを上下に代へる。カサ〳〵茶を反す。生乾芽を集める。下の引出しに入れる。一方では茶を被つた帽子を一々隣へカッポリ〳〵移し行

く。窓外を眺めて冷笑す。弄ぶる。「姉はん！往きますエ埃が……赤いたすきエーぜ」。短評は試み次第。

「オイお鍋どん！二十四孝ヤェ（澤庵の別名）」與の異なる年増が驅け來る。此方の片隅に生乾芽撰の二板八人ばかり。

新嫁、深川、丸まげ、梳き髮、思ひ〳〵の女連が聲を合して歌ひ出しぬ。朝の早やければいとねむげに、

今宵の雨は、内に居作ら袖ぬらす！

棚のや龍のも、やけ聲張り上げ、

雨が降ふが、照ふが儘！よ……

上の棚の引出し、ちよいと一握み、ウマイとうなづきぬ。

「旦那樣モー上げまひようか？」今しも來りし鐵納戶。

「ヨシ〳〵上て置きー」番頭らしきが笑て、量衡でかける。倉へ運ぶ壺へ入れる。彼所で喧々此所でどや〳〵歌ふ。笑ふ。喋る！淡墨の朝日山流き宇治川、さながら茶の香に薫れるがやう。おかしきは宇治の昨今なる哉!!!

（評曰）寫し來て目睹るか如し

うれしきもの

本所區仲之郷竹町十一番地野村方　宮内千代子

嬉しきもの多かるうちに、ふみこそかへす〳〵もうれしけれ。世の生業にいそしみて口ごとつとめのいそがしき身、あるは海山遠くへだゝれるの處、語らはまほしきことかず〳〵ありとも、いかでたやすうあひみること得らるべき。さるを水茎のあとにかきながして、かたみにとり交はしつれば、まのあたり逢ひてかたらふ心地せらるゝよ。

年まちえたるあしたこそうれしきものなれ。鷄のこゑ花やかに曉をつげ、神棚に引はへたる注連のうちに輝く燈ひかりしらけて、やう〳〵あけゆくほど、日頃はろう〳〵しくはした女が手繰る釣瓶さへ、若水の音は一しほゆかしくもまたうれしうこそきこゆれ、ましてよべは年の關越えかねてほと〳〵穴にも入らまほしげにみえし人も、今朝はほろ醉の機嫌にてうたひさゞめくも、みなうれしきゆゑなるべし。

ものより歸るさ行きなやむ闇の夜道に、ゆくりなく來る燈火をみそめたる、五月雨の名殘なくはれて夕風すゞしく、池の邊のうちかをりていと心地よきに、杜鵑の

一聲たかく名乗りいでたる、大波にゆられゆらるゝ船路にて思ふ湊のみえそめたるなど、うれしさたとしへなくおもほゆ。

さらでもながき秋の夜を、身はいたつきに犯されてつれ〴〵やるかたなきに、親しき友のいかにしつるとて訪ひきたれる、またうれし。わきて村雨はげしき夜半などかたみに語らふほどは、げに病もいえたる心地ぞせらる、殊にわが家は隅田川のほとりゆゑ、まなびのとものきましてこゑ〴〵に聲うちそへたまふに、兄君の短艇競漕に勝ちませる、いかで嬉しからぬかは。

（評曰）着想は別に斬新なりとも覺えれど、筆の運び自在に、用語のしなもいやしからざるは、流石に文に熟したる人に非ざれば能はず。

賞外佳作

花あやめ

埼玉縣　恩田桑子

五月雨の雲のゆきかひ定めなく。日さへ月さへ曇りがちにて。味氣ならも打ち過さるゝにつけ。世の中のいともつれなく思わるゝ身にくらぶれば。見るもの聞くもの。皆涙のたね憂の種なるに。一入の哀れを添ふる彼の庭園の邊りの花あやめにぞある。あはれ父上が重き病の床を慰むる種にもと。活けしもまた此のあやめの花なりき。何れか夢か幻か。まぼろしの世どうたてき。病重らせ給ふる父上が。せめての心遣りにと思ひしも。仇なれ甲斐なしや。父上は其夜ついに永き眠りにつきて。白玉樓中の人となりぬ。臨終のみ聲は。震ひて怨みを帶ぶるが如かりし。「止みなん。命なり。歎きそ。」の數言を殘してみまかられぬ。妹はひた泣きに泣きぬ。母は遂に泣き伏しぬ。妾は身も世もあらぬ心地しぬ。あゝ止ぬる哉。父上が魂は早や此の世にあらぬ也。

やがて葬儀の日とはなりぬ。柩は今ぞ數人の白丁に擔がれ。妾は母もろ共。幾多の會葬者に取りまかれ。泣く〳〵送れる也き。晴雨常なきこの空合ひより太陽は弱き光りをわづかに放ち。心地あしく面なぶるなま暖かき風は白提灯を力無げに。ゆるがして散花一ひら二ひら。散らずなど。いかに悲しき眺めなりしか。

妾はかくて。幻の中にあり。悲き過去の夢を繰り返しつゝありし也き。思ひ回せば。いと幸なきは妾が身なりき。僅に六つの時足痛を患ひて病の蓐にあること恰と三年。鍼者よ醫師よと。みとりに父母のみ心を勞せしを幾く度ぞ。されど神明の加護にやありけん。全快はしたりと雖。世にも哀れなる片輪ものとはなれり。

父母は妾がかよわき身を憫み給ひて。いかに不具者なればとて。終生を寡獨に過ごさしめんも。いとふびんと思ほし。心つくしも多かりしかど。遂に去る方より聟がねを迎へられき。夫と頼む其人はいと親み深き性なりければ。こよなき幸あることに思ひて。先だし後れじと固く契りしも。あだなれ甲斐なしや。宿世なりけん。樂みは束にの間にてまだ日も深からぬに。ぬしは去ぬる二年前の五月にいと重きいたつきに惱まされ黄泉へ

寂び立ち給ひぬ。其時の悲みはいかなりしか。妾は共に逝かざりしを怨めり。

あゝひとりの母上に老ひぬ。妹はいとけなし離れなたよりに憂世を送んかな。思ふまじ言ふまじとは。かれてより覺悟はせしかど。此恨み此の悲みの。などか繰り返さゞるべきかな。憂き身なりとて。我か良人の世のおはせば。力と頼み杖ともなり世を送るべきに。いまは唯獨とり残こされし捨小舟。いづこをさして漕ぎ出さんかな。曩には良人を失ひ。僅か一年を經ぬうち又父に逝かれし身。悲しきかも。うたてきかし。げに聞るなき憂歎をいかにせん。不幸の極み！哀れの妾！

・　・　・　・　・　・

かゝなふれば。早や一年の前とはなりぬ。父上か愛にし庭園の池の邊りの花あやめ。今は時得顔に咲き匂ひて果てし其人はおもかげを止めず。見るも憂し見ぬも憂し。あはれ汝も亦。憂苦を増しゝ昔の友なるよ。

（評曰）戀人戀語多し。誰か爲に一掬同情の涙なきを得むや。

夕景色

埼玉縣　倉林孝

日影傾きぬれば、さしもの蒸暑さ、肌もとろけむ許りに淋漓と流れし汗滴も、そよ／＼渡る夕風に涼しく、打拂はれ、こはまた別の世界にやと思はる許りすが／＼し。あまりの心地よさに、そゞろ浮かれて赤平の川岸に至る。そこ石垣の上二抱へ許りなる櫻木。葉枝こまかに傘の如くに生茂る根元、稍楕圓なりの青石に馬頭尊と深く刻みし碑、幾百年の雨風に色うす黑く臺石には苔むしたり、たが拾てたりけむ未だ古からぬ參差鐘一つそがわにころげたり。打ち眺むれば四邊の景色、はや夜網に落つるに間もなき夕暮の寂寞、灯の今はの一と明みのそが如く今日の別れを惜み、最後の光飾るにやあらむ、西の空恐ろしき許りの夕榮美しく、紫がすむ遠山の凹みしあたりまばゆぎ許り黃金なす雲たゞよひつ。やがて四方に眞紅、紅梅、柑とうち連らなりて濃き中空淺黃色にぞ打ち沈みたる。此の美しの空景色水の面に打ち映し大波小波色どれり。黃金に沈みては、白金にたち登り、あるは紅また紫に、深き淺きなべて銀の瀬をなせり。そこの淵かしこの岩陰小魚羽虫を餌はんとて白くきらめき飛び立てり、此美しく靜けき眺にしばし臺石に立佇みぬ。時にしもいと崇嚴の大音樂、今迄氣にとめざりし流の調、恍たる耳に響かせぬ。近きは高く太鼓のとゞろき遠きは低く鈴の音また微けき笛の音の如し。强く弱く各も黃昏の崇大唱ふが如く、また今日の終りを惜みて悲しむ囁きの如く、妙なる音曲なる調、たゞ恍惚と聞き入りつ、其一曲一曲に妾が心と身は其音調に化するが如くしばし己れを忘れけり。

折りしも向岸に白き小犬の走せ來るを見出しぬ。其汀に立佇みて何顧みるさま、家の白にさも似たるよと思ふ折りしも、麥藁帽の男早歩にあらはれぬ。こは兄君と景も調も打忘れつ白よと呼ぶに、彼は頭振立ながめしが妾と知りたるにやあらむ、ざんぶと飛び入り此方に向て流一文字に泳ぎ來りぬ。妾も石の傍立ち出てつ汀に立ては漸くに渡り來つ、尾うち振ひぬれし頭に觸るに手拭もて拭ひ與ふる程に兄君もつき給ひたり。夕鐘寂うなり渡るに、さしもの夕ばの色あせつ。水面は紫にやがて紺碧に化せられつ。折りしも何處よりか清き笛の音、細く高く靜けき空になり渡りぬ。いざや歸らん。

（評曰）平凡の景も君か妙筆に入りて、悉く無韻の詩となる。

一日の旅行

愛知縣 倉橋希世子

鳴りひゞく起床の鈴に夢は破れぬ。いざとて仕度調へつ校門を出しは五時半頃にやありけむ。やう〳〵東雲のそらほの白うなりもてゆくに、あやあは〳〵や轉阪登る朝日子はまだも美はしきかげがにさゝず。馬車はやがてステーションにつきぬ。

あとなる師の君は、友の君は、など待ちつ語らふ程もなく師の君來ましぬ、友も來ぬ、乘るべき汽車も早來れり。

「心してうつり給ひれ」とかゝるきはにもみなさけこもる師の君がみ言葉嬉しう我は椿子の君と共に室の一隅に腰うちかけつて扱あやしかりし空の模様はと窓の戸押して見出せばあなや雨なりけり。

口惜しき事かな恨めしき事かなせめて歸らむまでは烈しからざれ見ぬ間に散らむ花の惜しきを。祈りつる間に早いつしか蒲郡かちくやなりぬらむさぎり深う立ちこめて水や空そらや水なるあたり大島竹島などの夢のごとほのみゆる。さながらに一幅の畫繪なり。

と見る間に此處もうち過ぎてやがて汽車のとゞまりぬと思ふに早椿子の君のいざとせ給へ御滑なるを、との給ふ。扱もつきぬるにか今乘りしばかりと思ゆるをなどいふ〳〵下りつ。

ステーションに近き家の前なる櫻の今一日早かりせばといと殘り惜しうも思はるゝものから散りまがける花びそらとひらひて袖に拾めつ。さりとてこれに果敢なき運命問はむの歌もなかりし。

すみれたんぽゝつゞける道はやがて一里あまりもありつらむかやう〳〵豐川の町にたどりつきしは十一時過ぐる頃なりき。鳥居前なる鶴屋とかやいへる旅館の二階にしばしいこらひ晝餉ものしつ。時もうつりぬ、いざと打つれて扱稻荷の社にもうでぬ。奥の院や、拝殿や、と見終りて此處をたちいてしばらく行きて豐川停車場にいたりぬ。しほたれ衣肌寒う待つ間はやがて三十分ばかりにやありけむ。

艶々しき島田髷に金銀具うかけたる乙女もあれば何とやらむ云へるシガーむせぶばかりくゆらして招魂祭の話樂しげに語る兵士もあり居れむる人、笑ふ人、語る人、實に人様々の浮世なるかな。

とばかりありて時は來ぬ、俄に立騒ぐ人々の我をくれじと乘りうつるをこは幸にもさのみをしつまらてありしかばゆるやかに座を得つ、やがて程なく豐橋につきぬ。さるにても恨めしき空かな、雨たに降らずば此處も閑しう見ありかむものを、かへす〳〵もとは皆云ひ合せたらむ如き恨みなりき。ステーションのほとりなるつぼ屋といへるに入りてまづ茶菓などたべてやすらひつ。我は例の椿子の君と隣りで坐せるものから心のまゝなる物語りに聲さへ高らかに笑ひさゞめきしをあはれ彼方に聞きませし師の君たちの何とかは思し給ひし。

かくてこたびは、いよ〳〵歸るべう汽車にうつりぬ。刈根なるステーションにつきしは何時頃なりけむ。雨はふりにふりても空暗うがちてかざすべき傘だに持たぬ身の中々に心なかしう旅路の憂さは今日ぞ初めて知りぬ。さるにても此馬車なかりせばと思ふにいとゞしう明けゆく世の嬉しうてかれやこれや思ひたどる間に身は早いつしか殿橋にぞいたりける。泥にまみれし足重う御氣の事や此前にとびそめく人の聲をうしろにかへりつきしはちまたの家に燈火のかげちり初めしころなりき。

あはれくるしくも樂しかりしけふの一日よ。

いかで〳〵それ美はしう寫しいださむ筆はなけれどせめては後の思ひ出

にもと日□のはしにかくなむしるしとヽめつ。
（評曰）筆の運びすら／＼と心ゆくさまなり。文。記し得て精詳。

夏の朝夕

信州　小林つね子

たりとめも無き夢の半ばに眼が覺めて、終夜蚊に喰はれたるかひなを掻いて居ると、家のも、となりのも、向ひのも、鷄がしきりにとうたひ出した。ヘテな、もう夜が明けるのであろうかと、雨戸を明けて見ると、案じた事は無い。ほんのりと明けかけて居る、庭の木立の綠深う繁り合つた梢に、眠むたいやうな光りの月がおぼろ氣にかゝつて、而もそれが六日頃のだから、丁度若葉に朧といふ畫題！

向ふの米ちやんは桔槹に縋つて精出して水を汲んて居る、隣の作男は例の牛を曳いて草苅に出かける、まだ誰も居ない學校の運動場の若葉した梅には老鶯の聲が老いしともなく聞える、自分は此面白い風景に誘ひ出されてどこともなくさまよへば、俗念はすべていづこへか奪はれて、我今吾にあらざる折から、思ひがけなき杜鵑一聲！それは／＼血走しる樣な聲で、村の若者が二三年前に情死した森の中に鳴いた。月の光は次第に褪せてあたりは少し小暗くなつたからソッとして振



り返ると彼方に男女二人幻影が現れた樣に見えたので、えたえず家に逃げ歸つた。入つになる學校へ行く弟はまだ夢路て居る。

＊　＊　＊　＊　＊

夕日の照る岡の上の蟬時雨がやむと、蛙が喧しなき立てる。風が吹き出す、雲の色が少し變になつたと思ふと、雷光一閃、間もなく雷はごう／＼と鳴り渡る。すると大きな雨がぼつ／＼降り出し、暫くする内に篠をつき車軸を流す底になつて仕舞つた。しかしそれはほんの一としきりて、後は拭ふやうに霽れて、向ふの村に雷がまわつた樣子、その今を盛りに降つて居るのをこちらから見ると恰かも田能村さんの畫いた畫絹のそれにそつくりである。

ならぬ天の惠の露に、勢ひを得て螢がちらほらすると空には瞬く樣な星が二つ三つ出て、見るまに數へられぬ程になつた。それが門田の水に移つて、弟が螢と思つて水の中に飛込だのも、猿猴の月てふとが思ひ合はされて、おかしくもあり、氣の毒でもあつた。

星は迎へた如く、月は迎へられた如く、薄紫の横雲を押し分けて、ぬつと顔を出した。すると草木の梢に垂る滴が皆月影を浴びてぴか／＼光り出した。夜も大分更けたらしいので橋のわたりに人の聲もせず、靜かな涼み臺の上に一人寢轉んで居た自分は早一度華胥の境が過ぎたらしい。

（評曰） 宛として一幅の水彩畫也。
又。語氣殆と男作家の筆に非ずやとおもはまたる。

時と燈

神田 木村富子

かの水を見よ。靜かなるときは溶々として油の如く、たゞよふ雲のかげをうつし、飛ぶ鳥の姿をうかべて、さながら鏡のおもてにむかひたらんやうなれど、一たびあふるれば澎湃として山を崩し、岩をさき、堤を决り隄をたゞよはせ、人畜を殺傷す。またかの風をみよ。なだめるなりはこぼるゝ露の音せ聞えず、梢にさはぐ響もたえ、さながら世は太古にかへりたらんやうなれど、一たび怒れば颯然として雲を捲き雨を飛ばし、砂を揚げ石を走らし、萬木を摧殘す。あはれ、この世の中にかばかりかづよきものあらんや。されどこれを時の力にくらべなばいかに。若かりし人も忽ちに老いぬ。强かりし國も忽ちに亡びぬ。廣かりし水も狹くなりぬ。深かりし海も淺くなりぬ。花やかなりし都も名殘だに留めずなりぬ。膏腴なりし田畑も砂礫の原とかはりぬ。歌舞の聲喧しかりし華も、燕雀のすみかとあれぬ。これ何の力によりてかかくは成りゆきたる。水か風か。そも／＼時の力ならずや。あはれ强き力よ。恐しき力よ。さるにても此の力のまに／＼變りゆく世界こそあはれなれ。移ろひ行く人こそあはれなれ。わが身またその人數にもれぬこそことにあはれなれ。時よ、時よ、などて、水の如くは弱からざる。風の如くは剛からざる。

＊　＊　＊　＊

ともし火こそけに親しきものなれ。一盞の殘燈かきたてゝ青史にむかひ、見ぬ世の友を得たる樂しさよ、何物かこれに及ぶべき。一基の洋燈をかこみて、且つ談し、且つ笑ふ友だちのまとゐ、いかてはおしくものゝあるべき。ふとおどろきたる曉の寢覺に、かすかに守れる枕頭の背燈、たづきも知らずふみまよひたる山路に、うれしく認めたる庵のともしび、いづれ心を强うせざる。金殿玉樓の裡にきらめく華燭の光り、賣り出しの店さき高くかゝげる無數の球燈、いかばかりか人の目を賑はさゞらむ。神前のみあかしは心よりげにかう／＼しく、法のともし火、永劫のやみを照らし、御殿にともしたるは、あらぬ夜風にあやふく打ちなびき、雨夜の大となぶらは公卿の品さだめにやう／＼かすかなり。ひらけゆく大御代には、電燈の光さやかにして、天ゆく月を欺き、土は小虫のゆくさへ分ちうべきも、降ちゆく世人の心の闇は照らしがたきを如何にかせむ。あなあはれ、燈火ひたも。

（評曰） 妙趣妙筆。
又。十分御熟顧の御筆の跡端に見受申候。

女のろゞみ

わかやま 綠葉女史

世に孝子と呼ばれんこといと難し、况んや貞節をかぬるをや。和歌山縣花野郡桂村に、柳田やすといふ女ありけり、林甚左エ門の二女にして、生れながら心優しうしとやかなり、年十六の春、同村なる柳田巳代吉の許に嫁ぎぬ。

柳田家はもとより生計貧しく、ことにやすの嫁ぎたる折には、そが姑となるひさは、數年の長き月日を病の床に過しゝため、巳々醫藥の代の貢

みさみだるすらあるを、貞千代吉は七十一歳の高齢を重ね、とりいでゝ働かんことも得ず、朝夕たつる烟もいと細やかなりき、やすはもとより孝貞の志あつき女なり、これを見てなどか心の奮ひ起らざるべき、いかではお質の苦と心を悩せて、病みていませる母上を一日も早う癒えしめ、傾きかゝれる柳田家をもとの如くかへさんと思へるなるべし。さればにや大方の世の少女が、よき衣かひてよ小櫛もとめてよと、垂乳根にむつかる二八の妙齢をもて、朝は鶏が音より早うおきいで、夜は星眠れども、賃裁縫の下針はこぶ手忙はしく、少しの閑あれば姑の心を慰め、其歡ぶを見て樂みとしき。さるからに夫巳代吉との間もいと睦まじく、一男三女をさへまうけたれば、貧しき中にも子の愛ひにしかれて、世の春風はこゝにのみ吹くよと思はれけるも、思へば夢の世なりけり、一年巳代吉は悪しき友にそゝのかされてより、心の駒のくるひそめけむ、ひたぶる酒と色とに耽り、兩親の憂ひ、妻子の愛情をも顧みで、日々花柳の巷にのみ足を運ばし、やすが細き腕もて蓄へおける少しの貯金を奪とりて、我身一人の快樂をのみぞ極みけり、兩親の嘆きは更にもいはず、やすがこの時の心やいかに悲しかりけむ、思ひたのみし夫はかゝるさまにて、家にはまた幼き子の飢に泣き、病みふせる姑の憂に沈むを見ては、定めて心も消ゆる思ひしつらむ、されどもやすに聊も夫をうらむる色だになくひたすらに神にいのり佛にいのりて、はやく夫の心をもとにかへさしめ玉へ、姑の病ないえしめ玉へと、夜もえ眠らでいそしみけるも、悲しきかゝれる家のなどか一木をもてさゝへえらるべき、今ははや烟だもたてかぬる計りになりぬ、さればこを見る人の多くは、やすに向ひて、まだ女のさたさへ過ぎぬ身をもて、かゝる苦を見んよりは、寧ろ富みたる人に嫁ぎて、樂しき世をば送らずやなどいへば、妾は知らせ玉ふ如く、文字一つ學びしことなければ、世の理りさへ知られども、妾が此家に嫁ぎたる日より、身は夫にさゝげたるものと思ひ居り侍り、さるを今夫があつき情のきえぬればとて、病みませる姑と、いとしき子とをおきで、いづこにかえ行かるべき、再びさることはの玉ひぞと答へて、ひとり小さき胸に、家計挽回の策めぐらしゝこそ、いみじくも亦けなげなれ。姑はこをきゝて、やすに向ひ、あわれいかなる緣あればにや、親と呼ばれ子と呼びたる計りに、わが爲にいましのかく苦むを見ては、餘命いくほどもなき身のよし一度いえぬればとて何かせん、寧ろ早く死りて、いましが苦しみをも免れしめたや、惜からぬ命長らへんとて、針灸藥餌の料にあたら多くもらぬ黃金を費さんは、いともやくなしなどうち佗ぶるを、やすは、さなの玉ひそ、人の妻となりて姑に事ふるは、女の務めときゝ侍るを、さのみ心を痛め玉はで、たゝ何事も安らかにおほして、ひたすら養生の道にのみ心かけさせたまへなど云ひ慰む。それより後はやすは亂れし髪を結ばんともせず、綻びし帶をとかんともせず、數はびれいす、夜はよもすがら、幾おり糸紡きておのれは三度の食を二度にへして兩親のため身をくだきてぞつとめける、ざれば四隣の人はいうも更なり夫巳代吉も木石にあらざれば、いつしか妻のま心の身にしみて、おのづと心疚しく、遂には感化せられて、家業に手をつくるまでに至りぬ。こを見たるひさはいかに心嬉しう思ひけむ、いとあつしき病をも打忘れて歡びの眉をぞひらきける。やすはこれに力をえて、いよいよいそしみ勵みければ、光ある玉はこゝにあらはれて、時の縣知事にさえきこえつゝいたくやすが孝貞の志あつきをめでて、昨三十四年四月褒狀に黃金をそへて其善行を表彰せられき。

あはれ、德義の光きえうせて、文字學び書よみつる人の心も、名利の雲にとざゝれて、日に月にあらぬ方にのみくだち行く今の世に當り、やすの如き目に一丁字なき女の千辛萬苦、病める姑に仕へ、良人を助けて家

道を治め、其家をかへざる二十一年の久しきに至る。げに女の龜鑑とこそいうべけれ。

親のためつむぐや糸のひとすぢに
つくしゝ人ぞ世のかゞみなる

(評曰) 此くの如き文字は、風教に關すること大なり。區々に看過すべきに非ず。

歸郷前の一夜

伊勢國 河原芳子

妾は今、故郷に携え行く可き土產の數々を整へて、そゞろなる思ひに心浮れつ。何かとそはそはしう用意する內にも。後めたきは下婢の獻育なりき。

さても、此品は誰にとて求めしかと疑はぬやうなり。此品と取換んか、されどこは餘りにあどけなう見ゆ。寧此の品にせば嬉ぶならん。此は誰に。彼は誰にと定め置て。さて、姉樣お土產を、と先づむつかる妹には誰それよ。忘れたり、手匣の中。

大は姉樣の分。其の大は兄樣の……、これこそ大切なれと何氣なう稚にかゝへしを、心ありげに下婢の笑ひて、嬢兄樣のお待ち兼てせうよ、とは耳立ちし言葉なれど、そを爭ひて兄たらしめんともせず、ときめく胸をさ見けなう押へて、包むに餘る頰笑を洩らしつ。とかくする間に夜も更けたり。二番汽車の時刻も早ければとて、寢室への誘ると共に。臥顯たる床に名殘の夢を結ばんとすれども、心神愈々冴えて眠ること能はず。明日を限りのそれとしもあれと思ひ亂れげ、總ての思ひは幻となりて或はれつ。

々風情のをこがましきなど嘲けられつゝ、三年の暇乞ひて郷關を出たる時。彼の柳多き黒川の土橋にて、親しき友に別れ、慈愛深き母君に別れ、乳含める妹に別れ、情厚き兄君姉君に別れを告げて。父君と共に上京しつ、空の知己の側りに宿を定めて某校に通學することゝなりしも。流石は女心のかよわきものから、月にも花にも故郷の空なつかしく、夕の鐘の身にしむ頃には人の運命の行末を思ひて、無限の感慨に涙ぐみし事もありしが。又或時は嬉しくなかしき事もありて、茲に三年の業を終りつ。今宵限りに花の都を辭し行く我身の、汽車に樂しき思ひを乘せて、故郷近くなりたらん時よ。我家の側に停車場の設けられたりときけば、かれて通知を待ち詫び給ふ父君母君。さては兄君姉君などの出迎ひ給ふなるが妾のおもがわりせし姿を見ては、いかばかり驚き給ふことならん。妹も今年四歳になれゝばあどけなき樣して、姉樣よ、など呼び立つるならん。親しき友の番り給はんには改良衣服に御不審をうたるゝならん。家に着ては先づ何よりか語り出てん。さて其後はいかにしてなど。順序もなき談想もて其人々の面影を描きつ。今や我汽車は懷しの山河に迎へれらて勇ましき汽笛を鳴らしつゝあるが如く、何とも言ひえぬ夢心地になりしはわつかのまにて。車夫の呼びか。と驚き覺むれば、さにあらで最早時間に及ましからと、下婢が例の猫撫聲なりき。折しも曉のしづかさを破りて、お迎への俥は來りぬ。あゝこの忙はしき宿の別れよ。

(評曰) 達者なる筆なり。歸郷前一夜の光景、さこそ想る。

消息文

文學士　鹽井雨江君選評

郭公聞きに行かむとそゝのかされしかへし

甲賞

神戸市下山手通二丁目　青木京子

にび色の雲のひくさよ、今宵の程にもふりいでなむを、いかにながめさせ給ふらむと、ゆかしう思ひまゐらせ候折りから、御なつかしき御玉章たまはり、いとゞ嬉しう巻き返し拜し上げまゐせ候。郭公きゝにとて、須磨の御なりどころへ物せさせ給ふとて、こなたをもそゝのかし給ふみやび心の御すさみ、いと〳〵おもしろう見まゐらせ候。一の谷あたり、松の風浪の音にまがひて、ほのかに名のりいでたらむは、いかにをかしからむと思ふにも、御供は願ひてもせまほしく、雨は物かはなか〳〵にをかしきこそ添はめと存じ候へば、よろづをさしおきても、仰せの時刻に御宿をおどろかしまゐらすべくと、一言御かへりごときこえあげまゐらせ候。つねよりも一入なるみだれがきも、よろこびのあまりの筆の狂ひと、なか〳〵にみゆるしたまひてよ。

（雨江評）　全篇、一の閑文字無く、句々皆一篇の骨たり肉たり。且つ、前後の詞、よくひゞきあひ、輕妙熟還の筆致、敬服々々。

乙賞

避暑中友の許に

大阪府泉北郡北上神村井上館方　藤井登美子

暑さきびしく候を、都の中の御住居、さこそと推し參らせ候。御許様には御さはりもおはさずや。私事當地へまゐりてより、友とては、濱の松風、波の音のみにて、ただ朝は花瓶に挿む草花を、後ろの山に尋ね、晝は海水浴夕は海濱のそゞろ歩きなどに、日を送り申し居り候。されど、海邊に立ちて、巖をかむ波のしぶきを浴ぶるをりは、げに夏としも覺えず候。夕げを終へて、旅やかたの欄干に倚る時、見渡す海原は美しき薔薇色に匂ひ、濃紫の夕雲のたゝずまひ、いづれもなつかしき思ひに堪えず候。此の景色を君に見せまつらば、如何に心ゆかせ給ふらむ。夕波高く松風清き處、語るに友あらば、い

かばかり候はむと、御許様をのみ喜はしう存ぜられ候。宿の主婦は、我が乳母にて、萬づに都合よろしく、私事は、猶ほ二週間ばかり逗留の筈ゆゑ、御許様にも御出かけありては、如何に候。ならば、明日の汽車にて、着かせ給へや。

此の宿のはなれの室に居たまふ方の姫君が、夕な〳〵の琴の調べ、にくきほど妙へなるを、たゞ打ち聞くのみにては、口惜しく、いかで、御許様を請じて、此の返しせんものと、必ず待ちまゐらすぞや。

（謂江評）平凡のやうなる中に、平凡ならぬ興致あり。何にとは無き中に、何にとなき趣味あり。おだやかなるいひまはしの中に、器用なる筆づかひあり。平生の習練見えてゆかし。

丙賞

旅行中故郷の友におくる

福岡市荒戸町　脇山わか

夕闇くらき停車場の内、電氣の光り冷やかなる下にての御別れは、今猶目に見ゆる心地して、響きし汽笛の聲ぞ、我が故郷を離るゝ時にて、又戀しき君に別れまゐらする時に候ひし。窓より投げ入れたまひし紫色の半巾こそは、よしや色香はあすとも、ながく忘れぬかたみに

候はめ。十時過ぐる程、門司に着き、其の夜はとかくの中に明け放れ、今朝山城丸にて出帆いたし候。こひしき九州の地も、これやなごりと思へば、いと戀しう、見返る空は、あやにく春霞にとざされて、見えわかず。行く手の方を眺むれば、廣々として水天のけぢめも定かならず。何處をさしてたどる船にかと、いとも心細く眺められ候。

夜半獨甲板の上をさまよひつゝながむれば、春の夜の月は高く天心にかゝり、四邊の島山朦朧として、聞ゆるものとては、波を切りて進む機關の音のみ。かゝる折りは、又徒に故郷こひしう、友垣こひしう、遠征人のそれならねど、轉た腸をたつ思ひに存じ候。情せまり、御上こひしう、船室の窓によりての走り書き、今宵の月影をも巻きこめ候はむか。此の文は、明朝萩の港に着次第、投函いたすつもりに御座候。委しくは到着の上にと、あなかしこ。

（謂江評）簡潔輕妙の筆、折からの情景なか〳〵に描寫しておぼえたり。これも熟達の筆愛すべし。

秀逸

嫁げる妹の許に

大阪東區雨替町一丁目五十二番地小野政子

桂花女史

御手紙の趣細〳〵拜讀致し思はず熱き涙に片袖を絞り申候年頃同じ窓に起き臥し同じ師の君の裏の露におほしたてられし身ながら雪子樣俊子樣の世にも美はしき家庭の主婦と仰かれ給ひ歡喜の聲屋外に溢れ候に引かへ其許樣のみはなどで斯く邪見の罵りの下に涙に明し暮らし給ふ運命かと思へば今更世の果敢なく心細くも思はれ五月雨の軒の玉水の音しげを寢覺の曉は茂みにさけぶ蜀魄にあらね共八千八聲血に啼く心地せられ候脊の君の此頃の振舞もとく心からにて無之たゞ〳〵姑の君と其許樣との交情の折合はぬに面白からぬより斯くは亂行のつのらせ候次第にて元より賢明なる君におはし候得は不日御悔俊被在候は必然の義と存候世に仁義に刄向ふ劒なしとやら姑の君とても鬼にも無之候得ば如何なる難題仰せ出され候とも唯〳〵命に從ひ御心に逆らはぬ樣常〳〵心かげられ候得ば自然と姑の君の御心も釋け隨て脊の君の亂行も立ち消え申すべきかと愚考仕候くれ〳〵も狹き女心より後指さゝるゝ振舞などゆめ〳〵あるまじく此義くれ〳〵も申入候吾とても此家に嫁ぎてより、今日のおん身のやうなるなげきは二度三度の事にもあらざりしなれ共其都度吾術の到らぬ故と深く吾身を責め吾心を叱りて此年月を辛抱せし甲斐ありて只今の處にては御存知の如く家内は貧しきながら平和の空氣のみは柞の宿にも溢れ姑の君も今は生母にもまして頼みと存居候さあれ石の上にも三年と申すことの候得ば何事に依らず辛抱か第一に御座候必ず〳〵不用の言と捨て給はてよく〳〵味はひ給はんことを念じあげ候かしこ



（評）筆よく整ひたり

薔薇にうへて

伊勢國飯南郡松坂町　龜井爲登子

ふりつゞく五月雨に心もしめりがちに侍るを。いかゞこの頃をおくらせ給ふにか。御樣子承らほしう存じ候。さて、兩三日前より、園の薔薇咲きそめ申し候、昨日、師の君より、薔薇は、西洋の國々にてめではやし候のみならず、我が國にても、古くより賞し、曾丹集にも「垣根のうばら花さきにけり」など見に候よし承り候まゝ、今朝しも少しの晴間を得、雨にぬれたるまゝを、一枝手折りて、御目にかけ參らせ候。その刺のこちたきは、香の淸きにゆるしやり給ひめで給はゞ、うれしかるべく、尚ほこれをしるべに、園に殘りたるをも、尋ねきたまはゞ、こよなき花の面目のみか、あるじの喜びは、如何ばかりにか候はん　あなかしこ。

（評）才情掬すべし

親しき友の新盃におくる文

信州上水內郡柴村住良木四八一番地　小林つね子

のこんの暑さ、中々にきびしうて、あらかねの土もさくてふことの忘られがたき今日此頃、御姉君樣には何の御變りもおはしまさぬ御事と、こよなう嬉しう存じ奉り候。

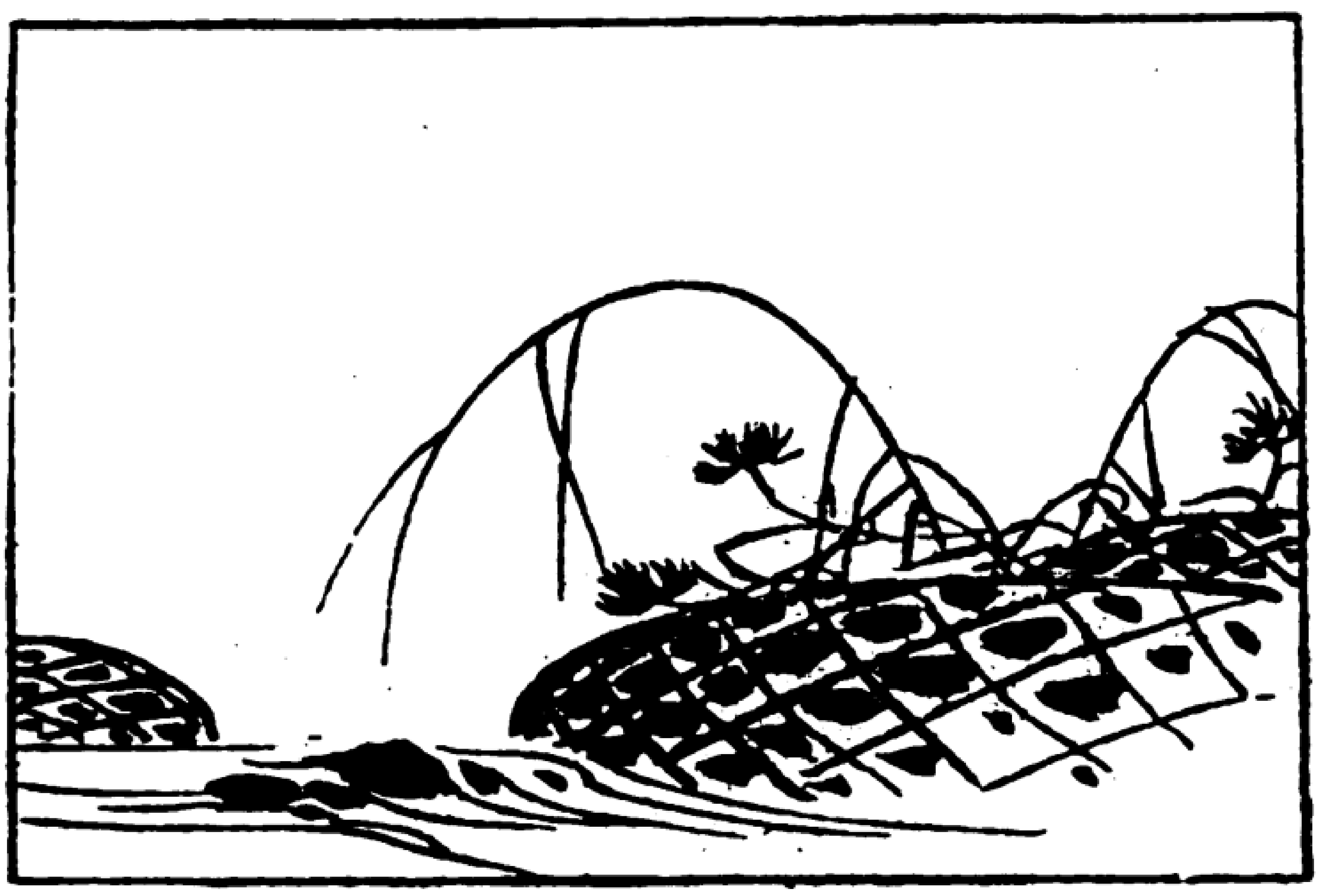
さても待つとしも無き月日の下に、早今年も七草賣る聲を大路に聞くやう相成り申し候。軒なる薄綠の岐阜提灯に、色なき風の訪づるゝを眺め候ひては、如何に心强き人とても、云ひしらぬ悲哀の感に耽りぬらんと存じ候を、まして御わたりはと、そゞろに思ひやられ申し候。

去年の今日頃は、御妹樣未だ御惱にも罹らせ給はで、ある日私の家を訪ねたまひ、ものゝかずならぬ池の蓮見に、日を暮らし給はりし其の折り、池の中に一輪勝れてめでたき花のありしを思ひ入りて望ませたまひければ、早速うべなひまつりしに、君にはさらばゆるしてよ、亡き父母の奧津城に捧げん程にと、御自らそを手折らせたまひし時、御袂より紅のハンカチーフもれ出でゝ、水の上に時ならぬ花を畫きたまひし御事の、只今の樣に思はるゝに、うたてや、つとに天國にましまし、今日は御靈の迎ひ火の烟に咽び給ふ御身の上となり給ひけんと、今更に人の世のはかなさをかこち申し候。

亡き御君が生前殊にめでさせたまひし、みそのふの萩の花よ、あはれ今年は唯みたま祭の棚の上にのみぞ、御君に見ゆる事を得んと。さては、その花の運命さへ、轉た涙の種と相成り申し候。御ふた方さへ此の世におはしまさで、唯一人なる御中、且暮に御睦ましう餘處目にもいと羨ましき樣なりしを、嘸かし御思出草さま〴〵にて、なかなかに慰めがたう入らせ候はんと、却つて御おもひ増さる種とはためらひながら、有りし名殘のその蓮の花一枝差し上げ申し候。尚又此の林檎は、今年初なりのものにて、未熟には候得ど、今しがた取りおろしたる品にて候。ともにみたまの御前に、賤が身に代りて、供へ賜はらんとぞと願ふはなめげなりや。よしなに計らせたまひてよ。

あなかしこ

（評）文才見ゆれど、なほいひまはしの、練熟せざるところあり。



旅中友の許に

東京本郷通り四の十六　宇田みとり

先日御別れ申候ひし後、先づ西京に參り、それより須磨明石などの名勝を巡り、昨日兩太神宮に參拜致し、日暮れかゝり候ひしかば、朝熊山には登らず、暗くなりて二見につき申し候。此處の朝日は、昔より名高く候へば、今朝薄暗き程に起き出て、磯邊づたひに少し行きて、かの立石のもとに佇みて待ゐ候に、遙かなる沖に漂ふ雲、あかねさしたる如くになりて、浪に輝き渡り、やがて朝日の光さし昇る景色は、いかなる畵工も元寫しとるまじう覺え候。傍に居たる浦人に、富士のねはと問候ひしに、常は朝日の左に黑く見ゆるを、今日は見えずと云ふ。心なき身には見せじとの心にやと、いと口惜う覺え候ひしかど、又明日の朝こそと思ひて、それより潮合の濱に參り候。こゝは鴨長明

の歌にも見え、五十鈴川のすその海に入る所にて、潮合橋と云ふいと長き橋のかゝりたる上より眺め候に、影を涵せる山の影、さら〳〵と行く水のたゝずまひ、かの嵐山の景色にも、をさ〳〵劣るまじう覺え候を、彼方は都近くて見る人多ければ、世に知られ、此方は訪ひ來る人稀なれば、世に顯れず。かゝる山水にも、幸不幸のあるものと、人の上にさへ引くらべられ、いとあはれに覺え候。古き歌等を讀み候ては、旅はたゞ憂き者とのみ思はれ候へ共、かく立ち出て見候に、思の外樂しく面白く、又、いづちの山里、いづこの海べにも、馬車人力車の通ひ候はぬ所なく、草を枕にまき、笥にもる飯を椎の葉に盛るとか聞き候古の旅のわびしさは、さてこそなりけめと、かく物事足らひたる大御代の旅路の行かひ安きに、いとゞ思ひ出でられ候。先は旅路のあらましあら〳〵申し上げ度、餘は歸京御目にかゝり候折にゆづり、

かしこ

(評) 風景、感情うちまじへ得て、おもしろし。

別れて後の親友に贈る

熊本　中島なを

懐かしの君よ。さて、何事より書き初め申し候べきか。春風こゝちよきの處、竹内橋の邊りに、君と別れしの我は、たとしへなき離別の悲しさを、胸に秘して、家路をたどり候ひしが、身は草深き廣安の里、罪なき兒童の群に日を送れど、心は常に東の空にさまよひて、喇喨たる風琴の音や、運動場裡の樂しかりし遊戯も、今は却て過去を想ふの媒となり果て申し候ひぬ。

懐かしの君よ。顧れば、去る月の二日にて候ひしよ、我が君と別るゝの時、池田停車場に君を送るを以て約したりき。一夜明けて君出立の日となりては、朝より降り出だせし春雨の。蕭々として何時晴るべくとも見えず。然も我はまた止むを得ざる事情に妨げられて、心ならずも前日の約束をはたし得ざりき。

懐かしの君よ。我言の葉の虚しかりしを責め給はで、供に語りし昔のへだてなき友をもて許し給ひてよ。

君去り給ひてより、早や一月余を經過致し候ひぬ。不幸と不運と荷ひし我が境遇よりは、夢路ならでは往來

する能はざる繁華の地に、君は樂しくも此所彼所の友打集ひて、日々彌高き文の林にみわけ入り給ひてん。夜靜まりて獨り書齋に沈思するの時、思ひはいつも君のほとりに走せ及はて、我も亦遊學念爵勃と禁じかたく、覺えず身の不遇を嘆つこと、そも幾度。

あゝ懐かしの君よ。君と別れ候いては、我はまた親しく語ふの友もなし。たゞ希ふ、孤寂なく片山里に住む昔の友を忘れ給ふなく、學びの暇のをり〳〵に、都の事情など筆にして、不幸なる我を慰めてよ。それせめてもの我が樂しみにて候ものを。言ふべき事、書くべき事、いや實に繁くなり來たり候も、机上の燈油盡きて、光ます〳〵暗くなり行けば、餘は後便に讓り申すべく、尚花の都は宜しからぬ慣はしもありときく。よろづに御心づけのほど。嗟不悉。

（評）一かど變はりたる筆は、おもしろし。されど、なほ筆ののびやかならず。且つ龍頭蛇尾に似たる嫌ひあり。

賞外佳章

妹に送る文

伊勢　河原芳子

其後は何のお障もなう日々御勉强被成候由目出度存まゐらせ候。母上の御病氣に就き種々御心配、夢にもおいとしき姿を見まゐらせて驚き寤に喚ばれ候樣承はり、いつに變らぬ御孝心の程いと頼母敷存まゐらせ候。尚も母上の御容躰は、常の御持病に府の病はり候程にて、食物等は例の樣に召上らず候得共、玉子と牛乳を無理にお用ゐなされ候ものから、さしたる御苦痛も見受申さぬ位なれば、日ならず御全癒遊ばさる可く候得者御安心可被成候。

お許の手紙によりて、寄宿舍生活の模樣、學生の風俗、學課の程度等何かと委敷拜承、尚叔父樣の御親切も難有奉存、唯一母上に申聞えまゐらせ候處、百里の旅空に知らぬ人々を友とする心の內、いと便なう思ひ遣らせ給ひ、故郷を夢みし曉の空いかに難しからむなど流石は御心元なう御案じなされ候ひしも、樣々御慰め申上候得者、いつになう御滿足の御樣子にて、御歌の返しにとて、

恙なく歌への道を進れよと祈る心や夢に通ひし

と仰せられ候ひしは、誠に勿躰なき御情にて候。此の御深意寸時もお忘れ有之間敷候。

さて、また別紙にお認めなされ候は、大方いみじき戀の歌のみに候ものから、父上の御思召もいかゝと存じまゐらせて、私かに妾の懷に秘め置候、わけて當時は學生醜聞の喧しき折柄なればかゝる御すさび事は憚りある

やう被存候儘、遠慮なく申遣可被下候、愈々申上度事お尋ね申度事數々之有得共、そは後便に讓り申候、陽氣不順の時節、折角御自愛專一の程祈入まゐらせ候、叔父樣へは何分宜敷御傳聲被下度候。あなかしこ。

（評）母の歌のあたりは面白し。

都の姉の許に

茨城　山口すみ子

此頃の春雨に、野邊の若草、漸々もえいて、ここなる垣の内さへ、我が御色を作り、軒端の梅に來なく鶯の音も、いとしげく候を、まして都の御住居よ、いかばかり興しうおはすらむ、上野向島を一ところに集めまし、隅田川の下ゆく水に、櫻のおもかげうつしては、朧月夜に舟など浮ばせ給ふらん、此方一同打ちよりては、只々御噂のみ申し居り候。御兩親樣には、いたりて御すこやかにて、一度も風邪ひき給ひし事もなう、わきて、母上樣には、二三日前より、可愛き都の孫の春衣ぞと、覺束なき目に眼鏡おけて、余念なう縫おり居られ申し候。昨日は妹引つれ、近き野邊を、遊び暮らしはべりぬ。小川の根芹、岡の嫁菜など、いとさはにて、歌の題にせまほしきやうの趣き、種々に候ひき。取りわけ蝶々鶯もまだ拙ひかれし幼な頃、姉上樣にともなはれ、彼の板橋を渡るとて、まろび落ちし櫻川の水際の櫻、主待ち顔に咲き出てしまのゆかしさに、一輪二輪もぎとり、書中になさめ申し候。その折よ、何やら怪しき腰折との浮びいて候、まゝ例のこと別紙にそめ、御目にかけ申し候。笑はせ給へや。かしく。

（評）文才の愛すべきは見ゆれど、なほいまはしの熟せざるものあり。

乳母の許に

茨城　石崎しげ子

霞がくれに、遠近の梅も、漸々ほころびそめ、百千鳥のさへづりかはす音も、いとゆかしき此の頃、如何暮らし給ふらん。例のこと、眞木小屋のほとりにて、孫背負いての守歌か。さあらずむば、今年はわきて寒さはげしかりし事故、老体のつよき風邪に苦められ、葛根湯よ振り出しよと、やさしき嫁の手わづらはしておはさずやと、戀しくなつかしさに、只々御地の空のみ眺められ候折柄、花實屋の話によれば、いつもながらすこやかにて、日毎に孫引つれて、麥畑の草採りとや。まづは、事なき御様子、いともいともうれしうなむ。振り分け髪の幼な頃、やさしき腕に抱かれて、門の青柳長く枝垂れし下に、樂しく遊びくらし候事ども、今猶忘れかね、朝な〳〵柳に陰にそみては、なつかしき春風を袖にしめて、歸り申すに候。

本年は、試驗も滯りなく終り候事故、いづれ近日御伺ひ申し、なつかしき〳〵御笑顔に接すべく、それのみ樂しみ居り申し候。其の折は、必ず例の野川に根芹つみつゝ、かち〳〵山の昔話ならぬ樂しき語り草、今より願ひ上げ候。かしく。

（評）あどけなげなるところ、愛すべきも、なほ筆のまはらぬところあり。

遠方にある友の許に

筑後　十時やゑ子

雲か霞かとまがひたりし野山の花も、いつしか散りはてゝ、梢のあたり

いと淋しき心地いたし候。此の頃を如何に渡らせ給ひてか、同じ學びの園にて、數ぐさ摘み居たりし頃には、春の花秋の月とゝもに樂しみ、螢の光窓の雪とゝもにいそしみまゐらせしに、今は御互がひに山川をへだつる遠方にと立ちわかれ、日夜御すが〳〵しき御面影だに拜しまつることかたく、わきて此の頃はいと繁きに取りまぎれ、心にもあらぬ御無沙汰にのみ打ち過ぎたりしを、君はなほも其のかみのことを思ひ出でられて、文おこせ給ひつることのかたじけなさよ。今もなほ甦らせられず、文の林に分け入り給ふこと、いとゞ目出度く御悦び申し上げ候、此方御友どちの君たちも、日々學びの道にはげみ居られ候まゝ、御心やすめ給へや。かねて御存じの當地高等女學校も、いよ〳〵落成いたし、昨年の十一月十日あまり三日と云ふに、開校の式事行いたされ申し候。實にはてしなき學びの園とは申候ものゝ、大御代の惠の光り至らぬくまもなく、數ぐさ摘むてふそのゝ數多くなりとて行くこそ、いともいともうれしきことの限りなりけれ。なほ申し上げたきこと山々なれど、後の便と筆とめまゐらせ候。かしこ。

（評）平凡なれど、文は整ひたり。

弟の亡くなりしを訪はれしに返し文

茨城　白　菊

葬送の折りは、何かとやさしう御いさめ下されし御言葉も忝らで、我がまゝの涙御覽に入れし事、誠に恥しく存じ候。さるを、なめげとも思し給はで、ふりはへて御ねんごろなる御文、嬉しく拜し申し候。老少不常定めなきは、此の世の常と、一度は強ひにあきらめは致し候ものゝ、無邪氣なる話と活潑なりし所作とにて、賑きる笑聲絶えざりし窓の内、眼に淋しう、鐘の音のみ絶えつ響きつ耳に聞ゆる悲しさに、またもや胸のふたがりて、せきくる涙とゝめ難う、物狂しきまで歎き暮らし申すに候。やさしき御文にも、餘り悲しみ歎きて、己が身損ぬる事なき樣にとの御言葉もおはす事故、強ひて心を取りなほし、文机に向へど、女々しき姿の眼には、甲斐なく候よ。くりひろぐる書も、讀み行く文字も、皆悲しみの種のみなるに、さらばと縫ひかけし衣、手にとれば、あゝこの針も、この糸も、衿の破れ、衣の綻びつくらひしにはあらざりしか。我が後、我が陰より、不圖立立顯れ、姉樣と大聲にて呼びかけ笑ひ興せし事など、思へば、只夢の星のこと果敢なく消えし弟の上にのみ馳せて、戀しさ淋しさの増へ繁きに、中々亡人の上を語れば、心慰む心地に候まゝ、御暇の節には、御訪ひ下され度く、ひたすら願ひ參らせ候。かしく。

（評）筆なほ未だしといへども、情は深くきこえてやさし。

懶惰なる都の友に

わかやま　や　す　女

此程は、久しく御目に懸りませず、段々、戀しうなつて來るばかりで御座います。さて、此間のお音信に、あなた樣今度學校で成績が思ふ樣に行きませず、日頃あなた樣より席順の下な靜子樣とかに、お負けなさつて口惜しいとの事で御座いましたから、そう力落をなさいませず、もう今一年で卒業なさるので御座いますから、次の卒業試驗までにお勵あつて、靜子樣はおろか、誰にも、誰にも、お勝なさつて、一の席順を占めて卒業なさる樣、お答へ申したので御座いますが、此間花子樣のお手紙に由りますと、何だかあなた樣それが爲に、御失望なさつて、一向御勉强もなさらず塞いてばかり、おいてなさるそうで、洗うて見ますれば人

に負けまいと云ふ、お胸の心から起つた事で御座いますが、それは、餘子樣、思ひ違ひては御座いませぬか、あなた樣は妾より遙か學問もあり、思慮も深い方で御座いますが「智者も必ず千慮に一失あり」とか申しまして、如何程賢い方でも、思ひ違ひと云ふ事はあるもので御座いますから、千に一つ、妾風情の申す事でも、道理とお心付なつたらば、其通り行うて下さる樣願ます。

斯う申しては何で御座いますが、妾の宅とて、あなた樣の宅とて、さう人樣に笑まれる程の身分でありませぬ。二人共に女學校を卒業しました時、女子大學へ入學を望みまして、妾も兩親に其事を云ひ出したので御座いますが、財産は財産の上に、父の氣質はあの通りで御座いますから、どうしても、許して呉れませず。あなた樣も御兩親にお願あつて、ならぬと云ふのを、强ひての事で、うどうお許があつて、殘念ながら妾が殘つて、あなた樣だけお都へ出る事になりました。それてあなた樣は、今迄年取つた御兩親の手から得た、血の出る樣なお金て、修業中て御座いますぞ。そして、御兩親があなた樣の卒業なさつて、お歸りなさるのを、千秋の思に指折り數へて、待つて居られるので御座いますぞ。猶一人の友が、あなた樣の成功を祈つて、毎日東の空を眺めて居るので御座いますぞ。其れに其樣な事で病氣にでも罹かるか、大事な今度の卒業試驗にでも失敗じる樣な事があつたら、どうなさるので御座います。餘子樣、競爭して勉强なさるのは宜しう御座いますが、妬むと云ふ事は、呉れぐも女子の心得ねばならぬ事で御座います、正乎、あなた樣は其樣な事は御座いますまいが、人樣はそうより、思ふて呉れませぬ、口說い樣て御座いますが、此處の道理をよく審締めて、過去の事は仕方が御座いませんから、これから其樣な事はもう心に留めず、どうぞ勉强なさつて、來年の春には錦着てお歸りなさる樣、願ます。

妾風情が此樣な事を申しまして、嘸お氣に障りましやうが、姉とも頼むあなた樣の事て御座いますから、默つて居られませず、失禮も考へませんて、申すで御座います。

（評）よくいひまはされたり

寫眞めぐまれし友の許に

長崎　古賀秀子

每週淋しく暮せる私を音づれ玉ふ御君の御便り今日も音なひ玉ふならんにいざ御迎へ致さんと門邊に立ちてまち居り候折しも日頃になふ勇ましき配達夫の聲に驚き手に取りあげし時の嬉しさ寫眞在中とありしは君の御筆跡飛立つ嬉しさに奥にはせ入り封押し切り拜すればさても美はしく愛らしき君が御姿よ學生時代おぞうさにつかれ玉ひし束髮の影はどこへやらつやゝかなる御髮を丸髷にとはよくもうつり玉ふは誠にうれしきは者どれ玉はざりし御良の御すこやかにほゝのあたりのいよゝふくよかなるあまりの嬉さに涙出て候やよ君よ久々にて御逢ひ申せしに愛らしき御口を開きて笑み玉へ君は今日かくも萬里の波濤を離えて古里にある私の傍に來玉ひしに何とて一言ももらし玉はざるやとは私のぐちにはべり今一つは御膝の上に愛らしき方の見え玉はざるを御一家の如何に樂しく温かなるかは御君の僅なくゑましげにうつり玉ふ御顏によりて知られ候此後はますく御變りなき樣一日も早く御目出度き御知らせの來らん日をまち居り候私えもぜひとの御事近き内にうつしま送り申可く候。かしこ

螢見にとて友の許に

筑前　飯田しげ子

五月雨いたく降りしきりし後とて、暑さもせはしく日にまし進み候やうに打忍ばれ、庭の噴水線の木蔭、なほよく、人を憐すの納涼となり申さず、今や岩溶け金鑠たざるかと存じ候程の昨日今日、御許樣には如何御暮しなされ候や、なほも、書齋のとぢこめ人とお務め怠らせ玉はざるか、折り〳〵は青葉あさりのそゞろありきも、いと興あるとに御座候。承れば高瓦川原の虫螢、夜な〳〵光りをいや増して、こゝ三日が程は其盛壁なるべく、柳の糸にすがれるは、夜光の玉を貫きとめしかとも見え、草間に照すは、風に亂れぬ露の光か疑はれ、さては、川瀬に高く低くとびむれたる、幾千々とも白頭の、言ひえぬ眺に侍るとか、これを打見むもまたなかるべく、且つ、田舍びたる四方のけしきも、並みたつ家にのみ住みなれ、塵たつ中に起臥し玉へる御身には珍しかるべく存じ候まゝ、黄昏時より御出共は出來申さず候や、姉も、そを見ばやとの望み心にまかるべくは申すものゝ、姉妹二人のそゞろありきもあまりに候へば、かねて姉の心合ひの御許樣とて、姉もなぐさむべく、偏に妾の樂しみたくて、かくは御誘ひ申し候。かしこ

故鄕の妹より在京の兄君に寄する文

赤阪　原田すみ子

だん〳〵おあつくなりましたがお替りはありませぬか學校迄一里もあるんですッて隨分大變ねこちらでも御兩親樣始め私も婆やも皆丈夫ですから御安心下さいてもうぢッき御卒業ですッてよく辛抱して勉强して下さい

家の近所の田はもうスッカリ植付がすみました私は今年も稻ちやんとこの叔父さんに苗を貰つて來て根掛にしやうと思つて干して置きました螢ももう飛び出しましたよ昨夜お父樣が外へお出になつてかへりに一疋とつて入らしつてよまだ珍らしいものですから澤山人が出てよいつか兄さんにこしえて頂いた螢籠ねあれはもうこはれてしまひました螢はもう上がりました私も穴に一ぱい繭をかきましか母アさんが今年はよく繭いたからお盆に好い着物をこしらえて上げるッて仰しやつたのよ私もう嬉しくッて嬉しくッて其時分には兄さんも夏休みでお歸りになるでせうその時關村の叔母さんとこへ泊りに行きませう私あの叔母さん大好きよ此間も入らしつてね屹度夏休みには兄さんと御出でッて仰しやッたわ夏休みといへば兄さん去年御歸りの時御約束のハンモックといふもの買つて來て頂戴なあの榎の下へかけて御本でも見て居たらそれこそ屹度涼しくッてよ此頃に民彌やが東京へ運送引いて行くッて云ひますから其時螢と鮎を屆けて上げませう其代り兄さんもお伽噺の御本を買つて屆けて頂戴な御隣りのお靜さんとこでお産があつてよ今度のは男の子でそれはそれは可愛いゝ赤ちやんなのよ私も昨日おんぶさせて頂いたの家にも赤坊かあるといゝはね家の玉(猫)にも三つ赤坊が生れてよ此頃はもうしやれて面白いのよでももう他へ上げる御約束になつてますの私一つ家へ置きたいわ「かなりや」は二羽とも丈夫で今年は二つ子が孵りました大きくなつたら淸ちやんとこの兄さんに上げるんですッて私此間から玉函先生とこへお琴を習ひに行つててよ今度兄さんの「ハモニカ」と合せて見ませう

さよなら.

（評）細かなる言文一致の筆、また一かどの妙味ありといふべし。

都の友に送る文

和泉　霜野俊子

さらぬだに御なつかしさやるせなく思ひ侍り候折りから、御なさけ籠る御ふみ給はり、一しほなつかしさまさり侍りぬ。のたまへる如く、今年はわきてあつさいみじく、みどり葉の中にかくれたる山里の家居だに、凌ぎ難きを、まして人家のみしげき都の御住居、殊につよからぬ御身には、如何にわびしくやおはすらむ。此方は恙なう侍るまに、かまへて〳〵御心になかけせ給ひぞ。暑き程の御とぶらひ、疾く聞え上ぐべきを、例の筆とる業に拙き身とて、ひと日二日と怠るうち、斯く御返事となりぬるは、いとも面なき事になむ。あゝ思ひ出せば、去る年のやよひ月、別ち難きよつの袖を別ち侍りてより、折り〳〵の消息の外、たえて久しう打ちかたり侍る事も叶はず候ひしが、たま〳〵月を仰いで、そゞろに君を思ひ浮ばれて、あはれ去年までは、親しう月を賞しつゝ、歌をよみかはし、あるひは琴の調べあはせして、親しみしを、今は一人言ひかはす友もなく、たゞ昔を忍ばるゝに候。都もひなも變り無き月にはあれど、みる人の心に依りては、悲しとも、戀しとも、はた樂しくも面白くもみえ侍らむ。あゝ親しき友は、都にありて、此の月を如何にながめさせ給ふらむ。そのかみ學びの道をいそしみつゝ月を愛てしも、今宵の如き限なか夜なりしをと、くさ〳〵の事ども浮び出て、曇り無き夜も、心は曇りがちにて、御なつかしさやらん方なき折りから、此度の御旅行の御道すがら、近き程に立ち寄らせ給ふとかや聞ぎ侍るは、おのがま心や通ひけむと、嬉れしさよろこばしさ、たとへん方なく、さらば久々にて、月を賞し、はまの眞砂のかず〳〵積れる御物語をも聞えつくさばやと、今よりたいめの日を、指をりかぞへて、待ち奉るを、いかで〳〵、一日も早く出で立ち給はん事を、返す〳〵も折り上げまゐらすになむ。かしこ。

（評）これも平凡なれど、文は整ひたり。

女子師範校にある妹の許に

武藏　恩田桑子

花も散りはてゝ、青葉になりゆく梢に、はやみなう雨の濺くさま、何となう物淋しく、心さへ晴れまなき空のけしき、いかにおはしますらん。定めて御すこやかに學びのわざを御いそしみ居られ候はん。當方は母上樣をはじめまひらせ、皆々無事に暮らし居り候まゝ、御安心なさるべく候。さて、今更あらためて申す迄もなきとながら、我々はらからは、世にも不幸にして、先つ御父上かくれさせ給ひしより、母上の手一つにてはぐゝまれ、われら姉妹をば、人に嗤われぬやうにと、女の道なにくれとなう敎へ給ひ。そのみ心を勞せしと、幾そ度ぞ。殊に御身をはる〳〵と其地の學びやへ入らしめ、將來の敎育者となさむものと、其心づかひ御いつくしみの程は、ありがたしともなか〳〵海山も及ばぬ御恩に候。此の限りなき御惠みの萬が一だにむくゆるは、我々のつとめの重きものと存じ、朝な夕な及ぶ限りかしづき候へども、甲斐無身の悲しさは、よろづに至らぬとのみに候。

御身は隨分勉强なされ、師の君の御敎へは更なり、善き友は交り、行を正うし、智を磨きて。やがて成業の後は、天晴れ敎育家の模範なられ候やう念じ居り候。かゝれば草葉の蔭に見そなはす父上も、如何ばかりうち喜ばせ給ふらん。今日この頃は、生れつき雄々しき母君も、世のあら浪に捨てられ給て。小舟の行末を案じ給ひし故か、御體さへいたくやつれ給ひ、御身なつかしみ給ふあまり、雨のあした、風の夕べ、其地の

空のみ眺めつゝ、よしなき繰り言のみ仰せられ候ゆへ、やがて色香も深くなりまさりて、この家庭の園にうるはしう咲き出てん春の花ざかりも近きに侍れば、など色々御慰め申しゝに、此頃はかゝるとも仰せられず。候愛の及ぶだけは、母上には仕へ侍るべければ、ふるさとの事は必ず／＼御心をいため給ふまじく候。又暑中のお休も近づき候まゝ。其日には早く御歸りなされ、母上を御喜ばせ下され度、待ちより。文字は早く歸ちやんに逢て、いつもの桃太郎の話を聞きたしと、日々片言まぢりにさゝやきつゝ待ち居り候。妾は一と日も早く御顔を拝したく、夜にひるに、それのみ、指折り數へて待ち居り候。さるにても、あしき病などに犯されぬやう、呉れ／＼も御氣をつけなされよ。

かしこ。

（評）情はやさしくきこえたり

初夏都の友の許に

澁谷村　鈴木うめ子

咲くを待ち散るを惜みし山の櫻も、いつしかと散りはてゝ、花にうとみし風の音も、青葉のかげには心置かれぬを、しばし木陰に佇みて今はちる憂さもなしと心長閑に降る雨の雫に濡るゝも心地よくなりぬ。折柄、山里の夏は、茶摘み、蠶飼を忙しうなり侍りぬるを、都の方にては如何おはすらむ。音信も聞えざりし無禮の罪はみゆるし玉へや。別れ參らせしは昨日と思ふに、いつしかと花ちり春くれて、初夏のはつかに久しうなりぬ。嘸かし學の業にいそしみ玉ふらむ。青葉茂れる窓の下によらせ給ひて、唐倭外國の文や見給ふらむ御優しの姿思ひ出られて、いと懐しくいと床しく思ひ侍る。片山里に獨殘されて、文の山道ふみ行かれぬ身は、いとゞ味氣無の心地致し侍り、萬に心細く侍るを、御許樣にも御里親なくなを御惠の露を垂れ玉ひてや。程なく夏休みともなりなむ、御目もじの上、海山の物語も致し度と、其折をいとゞ待侘び候。御宅樣にては御兩親樣始め皆々樣御壯健に被入候へば、乍憚樣御心安う、御許樣にも定めし御壯健に入らせ給はむなれど、昨今不順の折柄、くれ／＼も御身いとひ玉へや。

今し、夕暮の闇を郭公二こゑ鳴きて過ぎ行き候。うの花の垣不の月もあるに、何處に迷ふらむなどそゞろ可笑しく、萬に見なりせらるゝ片山里も、郭公の初音のみは、都にも誇りたくて、「世に遲き片山里魁けて、夕の空に鳴く郭公」、など口すさみ侍りしか。御笑にもと書きそへ候。たど／＼しき賤の女の言の葉、とる方なくくち惜しうてなむ。　とし

離縁になりし姉の許へ

廣島　岩崎よし

桃も櫻も何時しか根に返り青葉涼しき頃と相成候處御姉上樣には圓滿なる御家庭に世の憂き事知らで過させ給ふ事とのみ存居り候ひしにゆくりなくも痛ましき御文に接し魂も消ふる斗りに驚き入り參らせ候さても如何に御無念に思召され候はん東西知らぬいとしき太郎を殘しまかも兄上御留守中二夫にま見えずと申女の身にして斯る御境遇におち入らせ給ひし事なれば御嘆きは御尤も候專心赤心もて仕へ給ひし姉上露斗の御過ちも無きに事の行き違ひよりとは申ながら余りに御虐なる姑君之遣計ひ實に恨めしき極りに存候去りながら姉上よ神は正しき者を守り給ふと申さすや御心正しき御身を如何で悲しき運命にのみ導き給ふべきやがて御歸參相叶ひ今日の悲しみ昔語りになす事の候はん何事も運命と御諦め留し

御忍び給へや病みませる母上之御爲め御涙をおさへ給へや太郎之事御心に懸るは無理からねど脚之如き可憐の幼兒殊に子よりも可愛しと申孫之事なればいかで疎かに　し給ふべき御心安め給へや御嘆きの余り若御身に恙ありもせば如何にし給ふ兎にも角にも運命と御あきらめ被下度何れ近き内參上御慰め申べきも不取敢文もてきこえ上候かしこ

雇人の周旋を頼む文

松本　峯村さき子

かの花の莚のまとゐのうち、御消息きこえんと、思ひ給へながら、幼きものゝあつかひに、とかうまぎれつゝ、かう郭公さへ、いぬめう比まで、打ちすぐし侍りし成りは、例の御寛き御心に覺させ給へ、姫君には、久しうたいめ給はらぬ程、如何に、おとなしう成らせ給ひつらんと、ゆかしうなん。愛の言ひかひなきも、今はやうやう、物の心知りそむる程に、なり侍りしかは、いかて、能きめのとえてしかなと、愛かしこ尋ぬれと、さるべきも見出て侍らす。さるは、むげに物知らぬ田舍うども、本意ならず。又、ひたぶるに、耆覺ゆる老人も如何にそやなど、さまざま思ひわふるになん。さて、ふと思ひ寄り侍りし。姫君の御めのとの、今は心安げにて、御わたり近きに侍めるは、さきに、某の文の林に、幼き人の、しるへせりとこそ承りしか。いかて、かゝる人なしも、えはやとなん。若し、かのおのづからまうのぼる事も侍らん折、さやうに、ほのめかさせ給ひなむや。本意叶はゝ、如何にうしろ安う嬉しき事に侍らん。いてや、いみしきなめげさは、心のやみと、せめてを覺させ給へ、こまかには、まうのぼりてなん。あなかしこ

海水浴場より伯母の許へ

埼玉　大亦隆子

二日三日の中にとの給ひつるが樂しくて、けふか、あすはと、御噂のみ申上候程に、早くも稲毛の海に、七日の潮を浴し候て、今はなかなか海人が子よりもけに、色黑々と、皆々いと健かに侍れば、こはみ心安う思召され度候、一郞様は、殊に御元氣盛におはし、日々、御寵愛のポチを御伴に、兄とふたり、離れ小島の探檢やら、植物採の山巡りやらに、御忙しく候、昨日は此沿海の奇勝と聞えし、犬吠岬へ趣かばやとの、發議候ひしが、こは「母の來着を待ちて、一家宗族の大運動會を擧げむ」てふ、一郞様の御計畫に發して、一先中止いたし候、父は着早々より、同好の士數多見出し給ふて、碁盤の上にのみ、想をこらし給ふものから、母とわらはとは、何とやらむ心淋しさに堪難候、さはれ、私は折々蟹が子に交立りて、磯馴松陰に松露をあさり、小波よする渚に小貝を追ふなど、幼げながら樂しみも侍れど、いつも御留守居の、母は、知る人もなき旅館のうちに、ひとり淋しく、今昔の文ども友となし給へど、徒然の御おもひは、あらはにて、只管伯母君をのみ、待ち渡り候を、いかで他事に御聞すてなく、一時も早う、團欒のみ光を添へ給はりたく候、こゝは、逗子、大磯あた　と違ひ、物靜にて、水もいと清う侍れば、必御氣に叶ふべくと存候、何も御着の上にて…かしこ

別れし後打絶へて音信なき友に遣はす文

愛媛　石川君子

去年の春かたみに、さきしこと、露けき袖を、わかち参らせし折の、悲しかりしは、今も猶、さながらなる、心地致し候を、御許様には如何に過させ給ふらん、かく、わりなく、打絶へさせ給ひてよとは、ゆめにも祈り奉らざりしに、さても御便の遠々しき、日頃より御健かとにおはさぬ御身の、如何渡らせ給ふらんと、心も心ならず、折返し文参らするも、更にそよとの、御聲の音だに、ほのめかせ給はず、餘りの心えなさに、都に在す御姉君の御許に伺ひ奉りしに、度々御便おはします由承りさては御變りなくてかと、漸う心落居嬉しきにつけ、つれなきみ心の悲しさ、そも如何ばかりかと申侍らん、あはれなさけなき御心に怨み奉るべき心さへ御懐しさ床しさに言甲斐なく打消たれ、ひたすら御便をのみ御待ち申上居候彼の二人ならびて、とりし寫眞は物こそ申され、笑みそ致され、睦まじげに、手をとりかわし居候を今も文机の上去らず座させ参らせ、朝夕ながめ参らせては、樂しかりし昔を忍び轉悲しき今を思ひ笑ひつ泣きつ、物狂ほしき今の我身を露ばかりだに哀れと思し給ひなばいかでいかで一とひらの御返り言は惜しませ給ひそなめげのふしは幾重にも御探しゆるさせ給はれかし

あなかしこ

都の友の許に

茨城　山口すみ子

花ぞめ衣ぬきかへて軒の若竹むぐろうしげりゆき、そゞろに春の行衛な忍ばれ申候折柄、如何過させ給ふらん、音なく霞む御庭の枝垂柳の露の玉ぬくぬれ色など賞しあひつゝ、御歌など詠じ居給ふらんと、筆になつかしくはた亦羨ましう存じまゐらせ。候此方山住の何の風情もなく、あたりの人の心ばへと霞む野山の朝夕の景色とに慰められ、友なき宿に只獨りうら淋しうくらし申になん。来ん夏には必ずとちかへてし去年の夕も、あはれ空しく過ぎ去りて、訪のふものは峯の松風しぐるゝ雨の音のみにていとわびしかりつるものをいかで今年は忘れさせ給ふな、たゞに待ちこがれつゝあるは妾のみに候はず、池の水際に生ひ延しくれし松に覺束なげにかゝりて咲ける藤の花の、我ありと言はまほしげに主待ち顔なるさまいとおかしく候に、かゝる折こそ御出ましたまはりて、復歌の一首も御恵下さらばいかばかり嬉しからむ。あまりのいとほしさに胡蝶の一夢散し一輪二輪もぎとり封じ入参らせ候、あはれこれをしほりに春のなごりは如何とおとづれ給はりたく、したすらに念し申候、かしく

俄なる歌會に親友を招く文

崇　花　女

八日の月清う文よむ窓に照りて、心ひそかに山郭公や、いかにと待わぶるに、見る影さへそゞろ動きて、おかしき文もおかしからねば、かひやりて、窓の外眺むるに、若葉の茂みほのぐらき邊に、雪とも見ゆる卯の花咲き匂ひて、こゝも一聲待ち顔に侍れば、妾聞かじりせばいれじなと、こしなれ二つ三つ口ずさみて中空にすみ渡る月の御船うち眺むる、折しも心知りてや一聲高く鳴きぬ。あなうれしと思ふ間に三聲四聲あるに遠くあるは近く、しばなきて、さながら友尋ぬるやうに侍るを、妾もこのおかき月の夜におかしき郭公の聲聞つゝ獨りわびしくやあかし侍らん、せめては心合ひたる友どち二人三人うら集ひて月を、賞て、郭公なうれしく聞かば、いかばかり樂しからんよ、我が君よ、我が友よいざたまへいざ。曲げても今宵の宿となし給ひれ、あまり夜深くもあらぬに。

ほとゝぎす

木村武山氏新案





英國の家庭

英國ケンブリツヂ女子師範學校長 ミス、ヒユース述

●英佛家庭の相違

英吉利の家庭と日本の家庭とは大變に相違した所が御座います、其の重なる點を擧げますと、先づ子供が婚禮を致すと、其妻即ち嫁を、婿の住んで居つた家に連れて往かないて、新しい家に連れて行くと云ふ事で御座います、勿論親程金が無いから家の裝飾や其他凡ての事が單純であつて、親の家程立派でないのは當然の事でありますが、兎に角英國では新しい婚禮は新しい一つの家庭が形づくらるゝと云ふ意味てす。夫れから佛蘭西の國の習慣は、小供が結婚しても、英吉利の樣に新らしく家を築てないで、矢張自分の住んて居つた古い家に伴れて來るのてあつて、其の風習は稍や日本に似て居ります、夫で英吉利の人は常に、佛蘭西風のホームの拵へ方と、英吉利のホームの造り方と何方が利益であるか、不利益であるかと云ふ事を研究いたして居りますが、經濟の點から申しますと、英國の家の拵へ方は佛國のよりも不經濟になります、何故なれば、英吉利のやり方は一々子供等が結婚する毎に凡て新しいものを拵へなければなりませぬ、從つて子が一つの家庭を造るには、非常に澤山の金を親から貰はなければなりませぬ、之れが即ち不經濟の點であります。

次に又英國風の家庭の拵へ方は結婚すると同時に新しい家を持つのであるから、其主婦と成つたものが、何も彼も責任を以てしなければならぬ、即ち、若い婦人が新しい家に往つて、今迄馴れない事を一切行なければならぬのであるから、之も又一の困難であります、其内にはやがて又子供が生れる、而うすると、愈々年若い主婦は手馴れない難儀な事が多く成つて來ます、夫ですから婦人の一番困難な時期は、この婚禮した當時て御座います。之れも佛蘭西あたりの家庭に比較べると、若い主婦が年老つた人の傍に居つて其の經驗話などを聞く事が出來ない、自分で何も彼も考へてしなければなら

ないから、自然と不利益な事が多くある譯で御座いますけれども、英吉利の家庭は其不利益を補ふ爲め、に一人で家庭を形造つて其責任を盡す事の出來る年齡に達する迄は家を持つなと云ふ事を親が子供に言ひ聞かして置きます。

夫から又夫になる人の方は、どうかと申すに相當の收入若くは貯蓄が出來る迄は家を持つ事は出來ないと云ふ事に成つて居ります。結局女の方は年老と一所に住はんから、其缺點を補ふために、充分に主婦の責任を果す事の出來る樣になる迄は結婚しない、又夫ばかりでなく婦人が相當に年も取り智識も進歩してから、婚禮すると、生れた小兒も自然健康である又智惠には富んだ小兒が出來る其れから又家の修め方をも知て來るから、良人に對し、下僕に對する心得も覺えて來て、從つて面白く家を修める事が出來ます、即ち新らしい趣味のある家庭を造る事が出來ます、之れが英吉利の家庭に於ける一つの利益であります。

●家の治め方

扨て又家を治め、子を育てる道を能く知つて居る女であれば、夫れに伴ふ自由と云ふものは自然に備つて來るのであります、夫れですから英吉利の家の治め方は總て經濟でもあるし、又婦人に非常な自由を與へて居る。夫れから婦人が婚禮をして、小供を持つても、其の子供を自己の考へ通りに敎育して行く事が出來ますそれ故英國の人は老人などは決して小供の事に就ては關渉しないので御座います、夫れで新しい家に於て、新しい母が自分の思意通りに子供を養育して往くと云ふ事は大變に小兒の爲めに善からうとおもひます、

英國でも日本でも同じ事ですが、世の中と云ふものは、終始變遷して文物習慣皆時勢に伴れて變つて行くので御座いますから、新しく家を持つ樣な若い人が、親とか、祖父母などゝ云ふ樣な二三代先の人々と一所に家庭を造るのは全く不可と思ひます。何故なれば若い者は若い者で今日の現在世の中に行はれつゝ有る所の樣に依つて事を、仕樣とするし、又老人は老人で以前自分で行つて來た例を取らうとする、然うすると、どうしても那方か偏する樣になります、老人の好む樣にすると、若いものが壓制になり、若い者の思ふ通りにすると、老人の言葉を輕蔑する樣に成て、いけませんそれで此等の點に於てどうしても、種々の人が一所に成つて、家庭を造

ると云ふ事は不利益であると思ひます。

英吉利人は結婚を非常に貴んで、神聖なものと考へて居ります、夫れ故新らしく結婚をすれば必ず一つの神聖な場所を撰んで住まなければならぬ、又た神聖な關係を續けて往くのは大勢同居などして居つてはいけないと云ふことになります。

英國の家の治め方は、良人が得る所の歳入全額を以て、家の總ての入費にするので、豫め一ヶ年に何程と云つて、豫算が決まつて居るので御坐います、妻女は其定められた金額を以て、自分の考案通りに支出して家を治めて行くのです、妻の方が澤山に金を持つて居る場合には、自分の小遣を算用して、殘る金を何程々々、家政の方へ出すと云ふ事を決る、又良人の方が、金滿家であれば、妻の小遣として、年に何程と云つて決めて遣るのです、小遣として、與へられた金は素より家の事には關係しないのですから、妻が任意に使用て宜いので御坐います、夫れてありますから、英國では妻が自由に使用し得る金を澤山持て居るので御坐います、

●奴婢の責任

婢僕は日本の普通の家に比較ると英吉利の方が人數は少ないが、其代りに月給も高い、又能く働きまして、日本の召使の二三人位掛つてする仕事を下婢は一人でして行きます。

英國の家の裝飾の仕方は、日本と違つて複雜して居りますから、掃除に大變手間が懸ります、けれ共英國の主婦は自分が先に立つて掃除をすると云ふ事は無いのであります、これが日本と違ふ點であらふと思ひます、結局英國の主婦は一家内の掃除其他萬般の事を一人で引受けてする事の出來る位の技量のある下婢を撰擇して何も彼も責任を持たせますから、自から手を下さなくても間に合つて往くので御坐います。

又英國の母親として大變に善い母親であると云ふ事は他の國の人が賞賛まするが、實に英國の婦人は小兒を育てる事が上手で御座います、併し自分が、朝から晩迄傅いて居る譯では無い、中以上の所であると、適當な保姆を雇つて小供に附けておくので御座います、又小供を育てる室があつて其所を養育室と云ひますが、此室に當てる場所は家の中で一番好い室を撰ぶので御座いますつまり空氣の流通の宜しい、光線の充分に這入る閑靜な室を撰び小供は皆寐るのも遊戲するのも食事も

皆此室で致しまして、八九才になる迄に年長の人と一所に住ふと云ふ事はないのであります只一日の中に朝一度、午後に一度、都合二度兩親の機嫌を伺ふために、親達の室に來る、夫れから又母親も往々子供の室を見舞つて、傅母からどう云ふ風に注意されて居るかと云ふ事を視察するのである、然うして、一時間か、二時間位小供等と一所に遊んで居るので御座います、斯う云ふ風でありますから英吉利の小供は常に養育室に居るか又は郊外運動に出るか、此の二つの事で日を送るので御座います。

それは何故かと云ふのにどうしても大人と一所に居ると、大人の話しも聞くし、又大人の行爲も見るから自然と其れを眞似る心も起る、又食事のやうなものも大人の食べるものを食べたがる、夜分寐るにも大人と一所に居るとどうしても早く寐る事を嫌ひますが、小供は可成夜分は早く就眠させ、食事はなる丈け、大人の食物より輕い淡泊なものを與へる樣に仕なければなりませぬ。斯く種々な關係から、どうしても小供は兩親其他年長者と起臥飲食を共にする事は不利益であらうと思ひます。

●訪　問

訪問の時間は日本では定つて居らぬやうですが、英吉利では午後三後から六時迄の間が、人を訪問する通例の時間になつて居ります、であるから若し訪問する人が、朝の内に來たり、又午後早々などに來たりした時はそれは要事の訪問でありますから、禮儀の訪問に對するやうに、主婦などは必ずしも出て面會せんでも宜いのです又それが決して失禮となる譯でもありません。

●家庭の交際

英國では家庭が原となつて、夫婦、小供、夫れから極く親友間に於て交際を致しますが、夫れは訪問時間にも何にも關はず極く不規則に度々御飯なんぞに人を招待ので、小供は小供同志聚つて、お茶を呑んだりお菓子を食べたりして娯しみ、大人は大人同志相集めて小さな晩餐食などを開きます、之れは元より親友間の事でありますから　或時は先方から訪ねて來ても今日は多忙いから又來て下さいと云つて、只歸して仕舞ふ事もありますけれ共、然う云ふ時は斷はられた方も素より不規則に尋ねて往つたのですから、心持惡るく感ずる樣な事は無いのです、斯う云ふ事が即ち、英吉利人の時間

を徒費にせずして娛しみ合ふ親友間の交際で御座います、

御承知の通り、宴會の季節になりますと、知つて居る限りの人を聚めて晩餐會を開く事も度々あります、之れは交際を擴める爲めの主意であつて、斯う云ふ風に度々出會ますれば、始めは疎かつた人も段々親友になつて來て、益々交際が廣く成つて、男女共に歡樂を盡す塲合が多く成て來る、日本てはどうも斯う云ふ無邪氣な交際をする塲合が少ない樣に思ひます、英吉利に於ては、結局社交的の娛樂を日本よりも澤山に持つて居るので御座います、

夫れてあるから英吉利の家庭ては、主婦が交際上手でないと困るので御座います、今若し一人の男子があつて、新に結婚した時に、交際下手な妻を撰ぶと、大變に傍らから氣の毒に思ふ、而已ならず、其の男子は漸次人から擯斥を受けるやうになるので御座います、何故と云ふのに、前にも申した通り、英國では新しい結婚は新らしい家庭が成り立つのてあるから、つまり其家の主婦に成つた人は、大なり小なり一の社交的中心とならなければならぬのてあるから、良人が世間から豪る所の毀譽の多分は、主婦たるものゝ交際の巧拙如何によると申す譯てあります、

◉夫妻の關係

次に夫妻の事に付き御話を致します、妻と云ふものは私が申す迄て無く、良人を一番善く知つて居る人てあります、啻に自分の家庭に於てのみならず、外に出てゝも矢張、妻はその良人を最も能く知つてる人てあると認められて居るのてあるから、良人の執る業務に對し、内に在つて補助るのは當然の事てあつて、妻たるものは、家政を監督して夫を助け、或る塲合に於て或る點までは、夫が執る業務に立ち入つて働かなければなりません、慈善事業、にせよ政治上の事にせよ凡て夫が從事して居る業務を助けなければなりませぬ、又敎育のある婦人てあれば全く良人とは異つた所の公務に從事する事が度々あるのです、

故に英國などでは、報酬を貰はずにする公の仕事の多くは、敎育のある、怜悧な婦人の力で成効する樣で御座います、婦人を斯く敎育するとに依て英國では四つの好結果を得ました今其の槪畧を申上げますと、

第一は英國で家庭敎育を施して得た處の結果として五

十年前と今日とを比べて見ますと外部の裝飾に於て非常に進歩して居る樣であります、敎育を長く受た人は、趣味が自然と高くなるから、只だ價ばかり高くて人の眼を驚かす樣なものを裝飾としないで寧ろ價の安い高尙なものを使用うやうになりました、之が第一の結果てあります、

第二は家の監理の仕方と家庭の衞生が非常に發達したと云ふ事で御座います、私の見た所では文明國中でも、英、米の家庭が、一番善い樣でありますが第一厨房の淸潔と云ふ段に於て恰ど完全と云ふ位に衞生が行はれて居るのは、英國が一番であらうと思ひます、之れも矢張り婦人の敎育が進歩した結果で御座います、社會百事の進步に伴ひまして、成るべく短時間に成るべく澤山の仕事をせねばならぬやうになつて來る、これは男子ばかりでなく、婦人も同じことでありまして、社交に於ても、公共事業に於ても、一旦關係する時には、及ぶ限り澤山の仕事を爲なければならぬ、又考案も爲なければならぬ、夫れで時間が益々必要に爲つて來るから、時間を節約する爲に家の監理、下僕の監理が上手に成つて來なければならぬ、此等の點から斯く發達したのであらふと思ひます。

第三は小供の取扱方が大變に上手に成つて來た、母達が打寄て會を組織して、どう云ふ風に小供を取扱つたらよからうかと種々研究して、其法を實行するのが多くありますか、つまり小供を育てるのに、偏頗の愛を持て可愛がらない、併し又餘り嚴しくもしない、其の中庸を取つて行くと云ふ事を望んで居りますが、之れも矢張り、婦人を敎育した結果であらうと思ひます、

第四は社交上の習慣などが大に進歩して來た事で御座います、昔は交際するにも婦人の敎育が低くかつた爲めに、交際社界に婦人が顏を出さなかつた、何故なれば會話を男子と一所にする事が出來なかつたからです、然るに敎育が進むに從つて男女相携へて交際場裡に出るので、話も面白く趣味も淸潔になつて來た、亞米利加では、贅澤な事を喜びますが英吉利人は贅澤は野卑であると云ふ考を持て居りますから、人を招待するにも澤山に食物を出して、人を喜ばせると云ふ事はしない、只交際の仕方、話の仕方が面白く、且つ有益であつて、可成人に愉快を與へると云ふ事を勸める樣になりました、夫れが第四の點で御座ます、

此の四ヶ條の外に尚一ツの好結果を得た事は、敎育を受けた婦人を妻にすると、夫婦の關係が親密に成つて來る　何故かと云ふと、敎育のある婦人てなければ夫の思ふ事に同情同感を寄する事が出來ないから、夫の方ても何事に拘らず、相談をすると云ふ事に成つて、自然と夫婦間の親密を保つ事になつて參ります、

●日々の課業

英國ては大抵朝は七時に起きて冷水浴をする、八時十五分前に一家族打ち寄つて祈禱をする、祈禱の時には小供も、奴婢も皆一所に聚つて致すので御座います、夫れから八時に朝の食事をいたします、此時は養育室に居る樣な幼い小供は列しませんけれ共、少し大きくなつた小兒は、矢張り食卓を共にする。若し宿り客でもあつた時には、客人も一所に、種々のお話をしながら食事を致すのです、元來食事も一種の交際て、食事中には種々愉快な話をして娯しむので御座います。

食事が濟むと、運動に往くものは往き、學校に行くものは行く、夫は自分の職業の場所に行く、婦人は家の取締りに付いて事務を執る、それが終ると今度は手紙を書くとか、或は公共事業に從事して居る人ならば、其事に就いて奔走する、夫れから今度は二階の養育室に行つて、小供と暫時話などをして遊ぶ、其の內に正午になる英國ては大抵一時か一時半頃に晝飯を食べるので、主人は大抵は晝には留守ですから、學校へ往つた小供が歸つて來て、若し朋友があれば夫等と一所に母親を主人にして、面白い話などしたり、又は學校で聞いて來た事などを語り合つて愉快に食事を濟ます、食事がすむと、主婦は大槪大きな小供などを伴れて、運動に出懸ける、其あとて、他人を訪問する要事などがあると出掛けるので御座います、他から歸つて來ると、今度は又二階の養育室に往つて、小供が寢床に這入る前に暫時話をする、大抵午後七時に晚餐を致すのですが、其時には、夫が歸て來るから、其の準備をするのてあります、晚餐の時には、良人或は自分の友人などが、一二人位食べに來る事は普通の樣になつてをります、夫れが濟むと、今度は、夫妻打つれて、運動に出掛け或は劇場などへ往くとも御座います、而して床に着きますのが十時半頃て御座います、之れが先づ普通の家庭の一日の有樣で御座います、

英國では夫婦の關係が他の國よりも一層親密の樣に思はれます、此の事に就て私は度々人に向て話しますけれ共、往々私の言葉を御信用されない事がありますから、之を證するために一ッの昔話を致しませう

或る所に一人の王樣があつて、其奥方との間に、一人の世嗣があつた、所が、戰爭があつて、王樣は戰地へ臨まれた、其時に國内が非常な饑饉があつたので、群臣が評議して、之は饑饉の神樣がお腹立に成つたのであるから、何か國中で一番大事なものを扶げて饑饉を起す神樣に犧牲として上げたら宜からうと云ふので、其時王樣はお留守であるし、何が一番大切だらうと云つた所が、奥方が夫では私が犧牲になると申されました、而うすると、多くの僧侶達が考へて、一番大切なものは奥方ではない、此のお世繼であらうと云つて其御子樣を縛りに往つた、所へ戰地から王樣が歸つて來られましたから奥方は王樣に向て斯う〳〵云ふ譯であると話された所が、王樣も如何して好いか分らないで思案して居られる内に、最う時間が來たから、早く捧げなければならんと云つて、皆が小供の咽喉を締めて括らうとしました、而うすると母の慈愛で夫はならぬと云つて、飛出さんとせられた、而うすると、王樣が此國中で誰よりも私の一番愛するものは、御身であると云つて抱止められた、そこで奥方は王樣の一番大事のものは私であるから、つまり國中で一番大事なものは矢張私であると云つて、自分から殺される人に成つて仕舞はれたと云ふ話があります、夫れであるから矢張、良人の一番愛するものは小供よりも妻であると云ふお話がわかりませう

（完）



支那の婚禮

在清國漢口 理學士 西澤公雄

予は嘗て本誌に於て支那婦人の風俗一斑を諸子に紹介せり、今又本號の餘白を假りて支那婚姻に關する一般の風俗習慣を記述して讀者の參考に供せんと欲するものなり、固より支那は土地に於て我邦に數十倍の面積を有するのみならず、人口に於ても亦十倍餘の多數を有するの大邦なるを於て、其各地方には各自特異の奇俗あるは言ふを俟たずして明白なり、從て本題目の婚儀に就ても種々の習慣あるを以て、一々之を列記せんとするは容易の業にあらず、依之予の寓居の地方、即ち湖北省を主眼とし、之に他省の奇風を雜て讀者の一發に供せんとす、讀者之れを諒すれば幸甚

▲婚姻に對する清國人の感念

所謂婚儀は人世の大禮にして世界各國民の均しく共に尊重するものにして、其之を行はんとするに方りては愼重に愼重を加へ、彼我の家系家風は勿論、其性質職務等の微細に至るまで充分に探究し、双方の意に滿つるの後茲に始て其儀式を行ふものにして、其式に於ても或種の人を除きては各邦古來の儀風に準擬し莊嚴し躰度を用て之を擧行せり、清國人に至ては、殊に其慣例を重じ、儀式を貴び、一世一代の感念は其裝飾に、其儀容に、其饗應に、盡く善美を盡すを以て知るを得べく、時に虛禮に近くの譏あるのみならず、日本人の眼より之を見れば寧ろ滑稽に過ぐるの嫌なきを得ず、唯其婚を希望熱願するの意志に於ては、恐くは世界中之に匹敵するの國民無かるべし、彼等の多數は十四五才に於て已に兩親の命に依て許嫁の妻を定むるの風ありて、一度兩親より此命を聞くや、其歡喜すること限りなく、上流社界の子弟は是より一層勉學に砥勵し、秀才擧人等となるべき試驗に應するに全力を注入せり、中等以下殊に普通士民に至ては、多く海外に商を營み、人の僕役に從事し、勞働を甘受し、受くる所の給料の幾部分を割て貯金し、一定の年限を經て貯蓄の金錢は茲に壯大華麗の婚儀擧行の資に變ずるなり、内地にあるもの又均しく、商家若くは公所に奉公し、一意只婚期の達するを樂み、貯金是事とするの有樣なりとす、故を以て清國にありては、幼年に於て早く已に許嫁婦人の定れるを名

害とするの思想あるを以て、本邦人の淸國に遊ぶもの往々彼國民の間に對して妻子無きを以て答ふれば、彼等の心中時々輕侮蔑視の念を生ずることあり、此點は現代文明國人民より想像する時は、如何にも愚鈍極まるが如き感を生ずれども、此等の風俗の今猶淸國民に盛なる所、即ち老大國の名ある所以にして怪むに足らざるなり、此地方の土人は習慣として道路相遇へば「食事は濟みしか」と口を開き、談話の内には必ず「年齢」に次ぐに「妻子の有無」を問ふ、予彼等の多數に妻の有無を質すに、大低有矣の二字を聞くのみ、其使役せるボーイ及コックに至るまで盡く妻を有せり、但多くは數年の後の目的たる許嫁なりとす、而して其許嫁の婦人の容貌を知るものは、中流以上に於ては極て稀にして、唯兩親が他人の申込に就て承諾し、是を其子に告ぐるに止る、而して其子弟の多數も亦未來の妻を見んとするの念慮なきか如く、又見るを得べからざるなり（支那婦人の話を參照せよ「第一卷第十四號」）婚式の最後に於て、始て双方顏を接するものにして、文明國の自由結婚等とは天地霄壤の差ありと云ふべし、然かも我邦古來の婚式は支那の現俗と能く相似たる所あるか如し、又

淸國下等社界の男子は未だ結婚式を擧げざる以前に於て、屢々許嫁の女子と顏を合すことありと雖とも、決して昵近し若くは醜行あることとなし、此一點は未開國の人民としては最も善良なる行爲なりとす、殊に大書すべき一事は、彼等は結婚の後は容易に離緣すべからずとの感念を持するを以て、其間他國の如き閨門に關する醜聞褻聲を杜絶する美風を存するのみならず、處女の如きも婚儀以前に於て男子に近づき穴隙を鑽るが如き行爲なく、殆んど世界中第一流に位する品行方正の女子と稱するも溢美にあらざるべし、茲に記すべき必要あり、現今世界文明各國に於て稱道せらるゝ、婚姻の法則とも言ふべきものは男子夫婦となるに先て、豫め交際を重ね、其互の性行を比較し、若し兩者の間に於て後來團欒快樂を得るに適當なる資格性狀の抱合するを認識するあれば、其所に結婚の大儀は始て形成せらるものなり、然るに支那に於ては如何、上述の如く、既に自己の未來の妻たる女子の顏色容貌を知らず、況んや其性質をや、而も結婚後は文明國人に比して離婚の數少く醜聲を洩すこと稀に夫婦相愛し、相憐むの情緒纏綿にして實際上少しの不幸不可を感ぜざるが如し、習

慣俗を爲し、俗遂に自然の人情を形成する乎、眞に一奇風と稱すべきなり、

支那人は正室即第一の妻を迎ふるに以上華美莊宏の儀禮を用ふるのみならず、第二第三(所謂妾)以下の妻を迎ふるに方りても、尙同一の慣例を川ひ饗應舞樂等差異あることなし、又一人にして數人の妾を有するも、皆同一權勢を有し相爭ひ相鬩く等の事一として無きのみならず、互に相憐み共に主人を尊敬し貞節淑操を盡くすの風俗あり、唯正室の特權は其生子をして家門の後繼たらしむるを得るにあり、

結婚の年齡に關しては上下貴賤各一樣ならず、上流に於ては早きは八九歲に於て旣に許嫁を約するあり、通例男子十六歲以上廿歲前後女子十四歲以上十七八歲を以て最も適當なる時期と定む、然れども下流人民に於ては一定の規なく、大抵婚儀の遲延するを常とす、間々婦人を娶る能はざるものあり、是れ必覺儀式に費ゆる所の貯えなきが爲なり、

▲婚嫁の約束及其儀式

男子の父母其子に妻を配せんと欲する時期に達すれば先づ親族中の或者若くは朋友中の最親交あるものに依頼して媒妁を爲さしむるものなり、此依頼を受けたる氷人は女家の親に面會し、男家の系統家風等一般を述て婚嫁を申込むなり、若し一回にして承諾を得ざる時は、數回此手續を反覆し、其允諾を得たる時は、迅速に之を男家に報じ、男家は直に其媒妁人に酒肴を供し其勞を謝す　爾後合卺式の終る迄は媒妁人は常に兩家に出入して儀式に關する斡旋をなすの義務あるものとす又兩家の父母は緣談の成立するを俟て、之を各自の子女に命令し決して違背するを許さず、子女又能く其命に服從し、更に不滿の氣色あるなし、文明國より之を評せば一種の殘酷なる壓制婚姻に外ならずと云ふべし、又上流の紳士には、兩家各一人の媒妁人を要し、男家の媒妁人は女家に入らず、女家の媒妁人又男家に入らず、双方の間に熟議して承諾を求むるの風習あり、

▲授茶式　上記の交涉を經て、彌よ配偶の約成り、婚嫁の承諾成る時は、數日の後男家より書簡と共に、數十個の錫製の小罐に茶を盛り、媒妁人之を携へて轎子に乘り、之を女家え贈る女家之を請取り其父直に返翰を認め又媒妁人に托して男家に送る、是を授茶式と稱し、吉日を選定し必ず鄭重に之に行ふ、書翰中に記する所

のは女子の生年月日及諱氏の出たるを問ふものなり、又貧富の區別に依て錫鐶の數は非常の差異あるものとす、授茶式の由來は俚諺に基く古俗より始りしものにして、蓋し茶は其根幹を移植するにあらざれば更に子を生ぜずと云ふにあり、尙特筆すべき遺風あり、最も窮屈千萬なる不條理の習慣にして、是が爲に古來より幾多の處女の終生をして不幸に陷らしめしや、其數計るべからず、將來に於ては是非破却すべき必要あるものと信ず、則一旦兩家に於て婚嫁を約するの後、若し不幸中途にして男子死去するも又女子死去するも互に定式の喪服を着し喪に居らざるべからず、而して女子の場合は男子は喪を終るの後死去したる女子の妹あれば必ず是と婚せざるべからず、但適當なる妹なき時若くは女子の父母の承諾を得れば、他家の女子と自由に結婚を行ふも支障なきものとす、男子死去したる場合は、女子一旦喪期を終り、其父母之を他家に嫁せしめんとすれば、死去したる男子の父母に協談し、其許可を得れば再縁の婚姻をなすを得べし、若し此際男家之に異議を唱ふれば、女家は其議に服從するの義務あり、其女の成長を俟て男家に遣し、男家は之に婿を求めて配せしむるを常とす、

▲**送盤式**　授茶式に次ぐものを送盤式となす、此式又黄道吉日を選定し、男家の父は自己の署名したる書簡に目錄を添て、布帛珠玉、頭髮飾物金銀器具等總て女子の必要なる物品を女家に贈る、女家は其使者に祝儀として金錢を與ふること我國の風俗に同し、然して玆に最も注意すべきことはこの如く男家より女家に贈る所の物品は、時としては金錢に換て之を女家に贈り女家をして隨意の衣裝道具を求めしむるにあり、加之婚すべき女子の容貌如何に依て中等以下の士民にありては多額の金錢を男家より女家に贈るの例あり、上流又然り、少きも二三百金多くは數千金を費す、恰も人身賣買の觀あるも奇なり、故に商業に從事する者等にありては、貯金の大半を割て容貌の美姿艷の華を目的として媒妁人に依賴すること多し、町家の女子は市場に於ける物品と同一視せらるゝこと支那を以て最も甚しきものとなす、要するに支那人の多數が遠く鄕關を去て異域に流寓し、苦辛を嘗め艱難を凌ぎ、常人の及ばざる勞働使役の下に屈從して、貯金を唯一の快樂となすは歸國後の良妻を得んと欲するにあるのみ、大概貯金の一

年を結婚費に宛て他の一年を以て夫妻糊口の資に供す、是其婚儀の支那に於て盛大なる所以なりとす、而して一度婚禮を濟すや彼等は其自己の本分を全ふせりと爲し、更に或る定年間内地若くは異郷に出て、勞働及商業に從事し、時に妻を携帶するものあり其同伴せざるものも一年一二回は郷里に歸省し一家團欒の快樂をなす故に日本人の支那にあるもの一二年間歸朝せざるを見れば、彼等は異樣に感じ其理由を再三質問するを常とす、官職に在るもの等は自由に歸朝を爲し得べからざる制規あるを知らざる支那人の目には、恰も日本人は旅費を吝むの餘り歸朝し能はざるが如く影じ、時に輕侮る以て揶揄するに至ることあり、風俗の異なる時に意外の結果を生ず、淸國人に接交するもの注意せざるべからず、

▲道日と回帖　送盤の時に婚儀擧行の吉辰を定て女家に通ず、故に之を道日と名く、女家此日に支障なくんば直に承諾の回答をなし、又女子の裝具粧品等の準備に着手し、同時に女子の額際の髮を剪むを常とす、此送盤日を經過すること四五日の後女家より男家に贈物をなす、之を回帖と稱す、大概男子の衣服及身躰周圍の飾品を選擇し、男家の贈品と全く異なるを要す、其使に與ふる祝儀又前に同し、一般に女家の贈物は一見女家の費用にて調製したるかの如き觀あれども、是亦例の男家の贈與金額中のものに外ならずと知るべし、此贈答濟めば双方共に諸般の準備に着手し、彌〻吉辰即ち合巹の當日より三日以前花嫁の諸道具（俗之を粧奩と云ふ）を認めたる目錄を男家に贈り、男家より使者來りて目錄書に照して粧奩を受取り、女家再ひ祝儀を使者に與ふ、以上三回の贈物は、通常中流以上の士人に於ては、媒妁人をして禮服を着せしめ、轎子に乘りて之を護らしめ、各贈品を別々に釣臺に載せ、二人つゝに之を擔はしめ、且つ貴重なる品及書篩は久しく使役せる僕をして手に捧げしめ、壯嚴なる儀容を用て殊更人家稠密の道路を經過して先方に届くるを常とし、釣臺の數の多數を大に誇り、双方の面目を施すとなし、成るべく品物の多數を運搬する虛禮を喜ぶ、故に男子女子の贈品の外に、當日に限り殊に外觀を飾るの用として他の器具を持運ふことあり、此粧奩の主なるものは、夜具、男子帽、女子衣服一切飮食器具一切、室內裝飾品、女子化粧品一切、寢臺の裝飾品等にして、直に一家の所帶を整理するに充

分なる物品を以て成るものとす、

婚儀當日の光景

百年伉儷始て斯に舉り、鴛鴦雙棲の盟斯に成るの日なるを以て、上下貴賤に論なく、出來得る丈け華美壯麗を貴び、各親族朋友亦今日を晴れとして諸種の祝品を贈り、大禮服にて當日の儀式に列す、女子又然り、何れも其夫の位階に相當せる大禮服を着裝し式場に列することあり、凡て婚儀は白晝之を行ふものと晩間之を行ふものとの二あり、白晝のものは午前八時頃媒人大禮服を着し、轎子に乘じ婿家に來り案內し、婿直に大禮服禮帽に其身を飾り、所謂衣冠肅々堂々として花轎（赤色にして金銀珠玉を鏤め光彩人目を眩惑するが如き轎籠なり）に乘り、前後に儀仗鼓樂の供人を引連れ、殊に婿の生家の門閥にして、四品官以上の人を輩出せんことあれば、其行列一層花々しく高札を擔ふもの前後に扈從し、其高札には現今支那の大官名を記せり、出入する者の中最も信用あるものは、大禮服にて騎馬前驅を務む恰も封建時代の大名の登城に類似せるの感あり、奏樂につれ行列齊々女家の門に向ふ、之を親迎と稱す、此時門內爆竹の響雷の如く轟き、見物人門前に山をなす、婿即ち新郎の花轎門內に入れば主人出て迎て、客室に案內して互に挨拶す、媒妁人常に其側に在て婿を指揮し、同時に花轎は女子即ち新娘の室內に舁入れ、樂人は別室にて奏樂す、斯くして後主人は媒妁人に茶を侑め、又女家の親戚家內一同を紹介し、媒妁人一々之に婚姻を恭賀するの挨拶をなす、終て桂圓湯篇豆湯等甘味の品を饗し、次て一同に祝酒し呈す、此間種々の談話を試むるも盡く其言語祝喜の意味を含めるものを用ふること我國の諱語を避くるに同一なりとす、玆に奇なるは東洋相隣れる二國にて、而も目出度物に異動あること之なり、即ち日本に於て猿猴の如きものを好まずと雖ども、支那人は猴の音公に通ずるを以て王公の瑞祥ありと稱し、非常に之を珍重するに反し、日本に於ける鶴龜の龜は音忌と相同しきを以て之を嫌惡すること甚しきが如し、其他日本人には紅白兩色を貴べども、支那人は只紅を重し白を賤しむ、以上の錯雜せる虛禮を行ふの間、婿即ち新郎は未だ花嫁即ち新婦の顏を見ることを得ざるものなり、

斯る儀式に際し、最も緊要なる一事あり、則ち媒妁人は男家に代りて、金圓の首飾を女家に送らざるべからず、

其一は新娘を迎ふ爲に花轎を送るとの意味を認めたるものにて、轎の行列女家に達する二三町前に於て、僕に托して豫め先に屆けしむるなり、其二は客室にて女家の主人親戚一同にて飲酒述賀の際、其時機を見繕ひ之を主人に呈するものにして、花嫁に衣服を更らしむべしとの注意を認むるものとす、第三は花嫁の仕度充分整ふたるの時を見計ひて主人に差出ものにして合巹の式を促すと云ふにあり、是に於て酒宴を收め、一同花嫁の門出の準備に從ふ、

▲觀迎式　此婿の觀迎式は土地に依て非常の差異あるものにして、或地方に於ては婿の花轎女家の門に着するや、女家の僕童等は早く門を閉ぢて婿の進入を妨ぐ、男家の僕賄賂として女家の僕に祝儀を與ふれば、其報酬として開門し、婿をして內に入らしむ、實に滑稽も又極まれりと云ふべし、又主人は婿を客室に導き、詩文の題を出して、婿の識才を試むることあり、但其娘にして詩文の嗜好あれば自ら詩文の題を選び父に依賴して婿の學力を試驗することとあり、此試驗の良否に依て、閨門の裡女尊男卑の弊風を萠芽するものなりと云へり、

▲合巹式の光景

午前十一時頃、花嫁の裝束準備全く整へば、其自己の內房口より花轎に乘り、媒妁人の案內にて正堂に出づ、女家の新戚婦女一同は內房內にて挨拶し、外に出て送ることとなし、主人及男子一同は客室の前まで之を送り、次て婿も告別し、門外にて轎子に乘り、媒人又轎に乘り一同を導き、鼓樂の音、爆竹の聲、轟々嘵々四隣を驚かし、行列整齊堂々威儀鄭重を極む、男家は花嫁の近くの報を得ると同時に主人門前に出迎へ、媒人及花轎を導きて正堂に入る、此時婿は自己の內室即ち洞房に入る、正堂に於て媒人及主人の挨拶濟むや、媒人の指圖にて花轎の戶を開く、轎の左右には乳母及下婢相併んで侍立す、此時花嫁は徐々轎より出て乳母其手を執り正立す、其裝束は下には通常の禮服を着し、上に紅色の婚服を着し、光彩目を眩惑するの美裝をなす、而して紅色の覆面帛を以て其面を被ふる以て、何人も其容貌を知るに由なし、媒人の指揮を俟て主人紅綠二條の布片を用ひ、花嫁の腰に纒ひ之を引きて洞房に導く、洞房は實に珠玉錦繡を以て裝飾し、夫妻一切の器具皆此內に併列せり、媒人及主人は花婿及花嫁を床上に坐せしめ、其面前に美善を盡くせる珍膳十六種を置き、二個の酒盃の

底部を紅糸にて聯結せるものを用て兩人に持たしめ、喜酒を飲ましむ、但花嫁の覆面は未だ取除らるゝことなく、又手を動すこと等は一切腰元たる下婢の扶けを待て之を爲すのみ、恰も此時の姿躰は我國機關人形と評すれば大差なかるべし、媒人及主人各々珍膳の二三品を兩人に食せしめ、目出度語を弄して二人を笑はしむ、此式終れは一同再び正堂に出で覆面の花嫁大禮服の花婿相列んで父母兄弟姉妹一家の親戚に交る〻最敬禮をなす所謂三拜九拜にして男子己に之に依て疲勞を感すること多しと聞く、況んや花嫁をや、此間座起進退を擧て一切腰元の力を借る、其風情見るに忍びざるものあり、親戚に次て朋友續來同一の禮を爲す、奏樂は絕えず其儀を壯にせり、又花燭と名くる紅色の蠟燭は其正堂を照せり、始て相弁たる兩人を天地宗廟と拜すること其式嚴重なり、斯の如くして正堂の式を終れば、兩人は洞房に入り衣服を更む、同時に覆面を除去するを以て、其二人の視線始て相合し、玆に年來の熱望たりし花婿は、其花嫁の容貌を觀るを得るなり、洞房には親戚の婦女一同置酒賀を述ぶ、然れども花嫁は未だ一語を發することなく、只腰元代りて答話をなす豈に奇風にあらずや、

▲饌宴　午後に至れば、各室に來客を請ひ、盛大なる饗宴を張り徹夜快を盡くすを常とす、此宴大家にありては三日三夜に續く、晝夜花燭は室内に點じ、鼓樂猶日々其盛宴を壯にせり、三日目より夫妻同卓にて食事し、又三日或は五日目を期して親戚朋友一同を招待し、夫妻杯盤周旋の勞を取る、男子は客堂に女子は内房に盛宴を張る、此女家の父母を招待するの式を進門と稱す、進門式を擧行せし後數日を經て女家より兩人を招く、之を回門と稱し、女家の一族共に盛宴を張る、婚禮の後約一個月を經て、嫁は里に歸省するは我邦の里歸と同一なり、之を人事と稱し、逗留一ヶ月にして婿は人を遣し之を迎へしむるを常とす、

▲合巹後の奇俗

支那人の常として其婦人の顏を他人に見らるを厭ひ、貴女淑孃の多數は大概自巳の室内に屛息せしむるのみならず、貴顯紳士の夫人令孃は成るべく他人と顏を接せざるを以て人世婦道の第一とせるの迷想を有することけ、今日世人の熟知する所なり、然るに奇躰なるは結婚式の當夜より三日間は何人と雖ども、婦人の室

内に自由に出入し其容貌を視るを得べき一事なり、即ち來客は別室に於て盛大の饗應を受け、宴の酣なるに及べば續々花嫁の洞房に來り、或は恭賀々々と叫び、或は祝喜々々なぞ呼び、燭を自ら手にし、花嫁の顏面を反覆觀望し、姿躰の良否を熟覽し、其面前に於て、客人一々美醜良否を批評し、罵賞褒貶を勝手自由にす、主人及花婿は決して之に故障を申出ると能はざるのみならず、儀式の一として寧ろ之に滿足の意を表せり、此時花嫁は綺羅錦繡に其身を裝ひ、頭髮飾るに金銀珠玉を以てし、一見人を惱殺するの情あれとも、其眼は決して開くを得べからざるの風習にして、兩手に大扇子を捧け胸部に置く、乳母其右側若くは後方より殆んど之を抱き、動作皆其手指に依る、故に眼を眠れる人形と稱する方適評なるべし、此時如何なる暴言罵嘲に遇ふも、更に顏色を變せざる婦人を以て良好とするが如し、日本人より之を見れば、實に殘酷極まれる風俗にして、予嘗て其席に列し、其清國紳士の擧動に一驚を喫し急ぎ逃れて寓居に歸りしことあり、然かも三日夜斯かる侮弄を受けたる婦人も、其一夜を經れば内助の一賢婦人一令閨と尊稱せられ、他人は固より婢僕と雖ども容易に其門に出入を許さゞる嚴確なる家庭と稱ずるものなり、同文同種の我邦と俗を異にせる實に斯の如し、世の令孃夫人一讀熟慮する所あらば、記者の幸之に過ざるなり

（完）



戰死せる將軍の寡婦

（佛蘭西小說の一節）

華族女學校講師　淺岡一

其一

佛蘭西帝國と獨乙聯邦との間に起りたる戰亂の治まりて後幾程もなき一千八百七十一年の秋の末敵味方の間に英名を轟かし終に名譽の戰死を遂げたる佛蘭西の故將軍「マルグーリット」の未亡人は名を「ジャンジャック」と呼ぶ其頃十三歳ばかりなりける一子と共に巴里を距る三里程東の方なる片田舎に移り住みけるが「ジャンジャック」は五六日前より知人の許にとて出て行き夫人のみ奴婢を相手に留守して居りしに故將軍の親友同某の夫人訪らひ來て、時候の挨拶抔終りたる時、未亡人のいふやう秋の景色はいつも悲しい樣に思はれますが今年といふ今年程深く身に染む樣に覺えたことは御坐いませぬ、あの兵戰にかゝつて燒けました家々は家根もなく、庇も無く、煉化石の壁ばかり殘つて崩懸りました樣やかしこの森の木が砲彈に打れて折れたり碎けたりして幹ばかり殘つてゐる有樣皆戰爭の名殘でありませうこの光景の目に映る毎に腸が斷るゝ樣な心持が致します第一には皇帝拿破崙三世の御身の上も御傷ましい、第二には國家の損害恥辱、それから良人が「セダン」の討死、軍人として名譽ある終焉とは申しながら敗軍の戰に斃れました今臨の時の其遺恨はまアどんなで御坐いましたらうかと思ひやられまして、女子でこそあれ當の敵に對一太刀なりとも思ひ知らせてやらうかともおもひましたが伜は御存じの通りの幼年にもありこれを育て皇帝の御爲國家の爲良人の爲に報復を圖りますのは私の最も重いつとめであらうと、考へ直して片田舎に詫住居する事になりましたといへば、客夫人はうち聞きて御理な御話御子樣は御幼年とは申しながら御心ばえといひ御才學といひ行末賴母しい御方との評判は隱れも無い事、殊に兼々此方樣へ御出入する、文武官の方々も彼の御子樣は故將軍を其儘うつした御氣象、御容貌まで故將軍を生寫し行末は適の大將軍に御成り遊ばすに相違あるまい抔と御噂するのを承り蔭ながら御喜び申して居りました、これを御樂みに浮世の中の憂き事をも自ら御慰め遊ばして御保養を專らに御運動かた〴〵御親戚や御友達や其外處々の公園抔へも折々御越し遊

ばしませ月日の立つのは早いものですから五年や十年は瞬く間て御座いませう、されば御子様の御成長も唯今思召程長くは御座いません餘り深く思ひ過し遊ばして御身の御障りにも成りませうと左右を見まわし。はて今日は御子様を御見受け申しませぬが何れへか御越し遊ばしましたかと問へば主婦はうち首づき御親切の御心添有り難う御座います、また悴の生立抔御賞詞を戴きまして却て耻ち入りますが悴事は御承知でも御座いませうがアの久しい御知り合で、御年若ながら良人の討死の折から引続き御世話に成つて居ります陸軍中尉の「ポールディ」と申方が悴を自分に預けよ故將軍に劣らぬ適軍人にしてあげやうと申され兼々御世話くだされます故折々彼方に參りますが此節中尉は歸省中で此田舍よりは十二三里も北の方の郷里に居られますのて五日ばかり前其方へとて參りましたがまだ歸りませぬ、昨日便が御座いまして今日は歸る筈悴の健氣な所を御目に懸けて御喜びをも願ひまた二ッには悴をも喜ばせたら存じます何卒御寛り遊ばしまして、とそこら取片づけて別席に請づれば客なる夫人は言葉をつぎ今日はまことに好い折に伺ひました御子様に御目に懸り御達者の御様子をも拜見いたしましてそれを土産に致しますれば良人を始め幼少の女兒までが嘸喜ぶて御座いませう、御免くださりませと打寛ろぎぬ。未亡人は重ねて御懇切の思召御嬉しう御座います待たるゝとも待つ身になるなとやら申しますが、最早歸りませう、まだ色々御話し致したう御座いますし寧そ今晩は私方に御泊り遊ばして戴きませう、といへば客なる夫人はいやをなし、御子様の御歸りの摸様に依りましては寧そさう願ひませうか

「電信で一寸御斷り申上げましたならば御内でも御案じも成されますまい」

「有り難う御坐いますが電信は少々御待ちくださいませ、ハテ何方かの御聲か」「さればで御坐います」

客夫人あれは「マルセイエーズ」（新政府即協和政府の國歌）の第一第二の句て行矣健男兒。成名是此時といはるゝ樣に思はれますが」といふ時未亡人ハット立ちて

「アヽ奥様あれは悴の聲で御坐います、丁度好い所へ歸つて參りましたこれは御親切が届きまして乾度悴の方てむ虫の知らせて自然急いで歸つたので御坐いませう」

「願うたり叶うたりて個樣な嬉しいことは御坐いません御出迎ひ致しませう」未亡人は手もて制しつ
「イエ何卒御構ひくださいますな」
「少しでも早く御目に懸る方が御嬉しう御坐います、さう仰しやらずと御玄關まで行かして下さりませ」
「それでは勿體無う御坐いますが」と未亡人は打喜び打連立ちて出て迎ひける

・其　二

時に陸軍幼年學校生徒の正服を着けたる一個の少年帽子の下より金絲のやうなる髮の溢れ出てし樣いと雄々しく殊に眼光烱々として一見尋常ならぬ樣なるが足早に玄關に進み寄り帽子を脫ぎつ御母樣御機嫌よう、誠に長逗留致しまして濟みませんといひつゝ客なる夫人に向ひイヤ伯母樣よう御出くださいました私は大御無沙汰をと挨拶しながら兩夫人共々室に入りぬ
客なる夫人は少年を左見右見していふやう暫く御目に懸らぬ中に大さう御背も伸び何かの御樣子まで立派な軍人の樣に御成り遊ばしましたな、此御樣子では行矣健男兒成名是此時も御尤と思はれます後の軍の始まらぬ內御伯母さんの所へもちと御出なさいませな。」といへば少年は嬉しき思を滿面にあふらし
「エ、上りますとも上つて伯父さんと御話でも致しませうアノどうですこの頃御機嫌」
「エ、達者で御坐いますよそしてあなたに御目に懸りたいと申して居ります」
「それなら近日伺ひませう伯母さんと伯父さんとを征伐に」客なる夫人は目を見張りつ
「エ、なんですと征伐と仰しやいましたが」
少年は笑ひながら征伐つてのは子伯母さん「テニース」の事ですよ客も笑ひながら、ようございます私達中々負けせんは
「何負かして上げます私は佛蘭西人ですもの
「そんなら私共も矢張佛蘭西人ですわ」少年は又笑を含み
「テニース」をする間あなた方を獨乙人と見做します」
「これはしたり、マアそれぢや餘り可愛想ではございませんか獨乙人なぞと」
「でも私の敵に成るのですもの」と少年は言へり
「覺えて御在成さいよ獨乙人也と仰しやつた仕返しにひどい目に逢はしてあげますから」

「獨乙人には決して負けませんよ勝ちます勝ちます佛蘭西人萬歳萬々歳」客夫人は少年の氣慨にいと感じたる様にて

「アの奥様マアお聞き遊ばせ若様が佛蘭西人に成りすまして私共をば獨乙人にしてお仕舞ひ成されましたがと果は大笑ひとなりぬ

未亡人はやがて少年に打向ひ「アノ「ホール」さんは御替りも有るまいね」

「相變らず壯健てアノ御母様へもよろしくと申されました」「御前汽車で歸つて來ましたのか」「滊車には乘りませんてした」「それなら乘り合馬車てゝも」「イヤ中々」「それなら十二三里の路を歩いてか」客なる夫人は打きゝてこの少年の健氣なるを賞讃しぬ

其　三

少年は辭義して「伯母さんそんなにお賞めに預ッては困りますは、實は私も昨晩までは汽車て歸る積りてしたが「ホール」さんが軍人は身躰を強壯にすることが肝要ぢや十里や十五里の路を徒歩することが出來ぬ様ては有爲の軍人には成られぬ今日に限らず其後とても此位の路は馬上て驅るか徒歩することに定めよとの嚴命てしたから「成程流石は「ホール」さんぢや」「それでもマア御可愛想に」主婦は少年に打向ひ「アノ此伯母様に御前の好きな橙實の「ジャム」を澤山に戴きましたらそれて何かこしらひさせませう」「伯母様それは有り難う併し「ジャム」は戴きません」兩夫人は不審におもひ「其れはまたなぜ切角伯母様が御前にとてくだされた御前の好きな「ジャム」を戴かぬとはどうした事だね」少年は迷惑さうに「イエこれは人と誓つたことがありますから」

「なんの爲にそんな誓をしたのです、其の理由を私に話してきかせなさいヨ」

「外ではありません御母様も御承知の通り「ホール」さんは羊の肉を何よりかお好てまた私は橙實の「ジャム」を何より嗜みますが昨日「ホール」さんが突然私に若し御前に橙實の「ジャム」を食べてはならぬと強ゆる意地惡者が有つたらどうぢやとの問を起されましたので私はそんな奴が有つたら打つて遣りますと斯う申しました、すると「ホール」さんが其意地惡者が此に居ると見做してそれを打つ事が出來るまでは御前は橙實の「ジヤム」を絶つて居れ、自分は羊の肉を絶つといはれまし

た、それで私が其意地悪者と見做す者は何者で何處に居ますかと尋ねましたら何時の間に其處に置かれましたか獨乙「ビール」の瓶を庭の敷石に叩き付け、微塵に破はして、斯うして遣るまでは、御互に飲食の好みや、衣服の好み抔に心を費やすことはならぬといはれました。私も「ポール」さんの心は三度の食事中にも其仇敵の有るのを忘れてはならぬとおもひ其仇敵に對して大打撃を加へて國家の爲に耻辱を雪がねば好きなものをも食べぬといふ意味を諭されたものと思ひまして即座に「ポール」さんに誓ひました「ポール」さんも私に誓はれました誓約の大略は此通りで御座います」少年の物語を聞いて兩夫人は共に涙を拭ひぬ「それでこそ「ポール」さんぢやそれてこそ故將軍の御子さんぢや「ツャンツャック」さんぢや」と讃め稱へけり。

少年は語をつぎ「ですから獨乙のものは麪包に「バタ」で澤山で御座います」

其　四

此時主夫人は下婢を召び少年の爲に食物の用意を命じ更に少年に向ひ「ポール」さんの御內で五日の間どんなことをして居られましたか」

「五日の內其二日と申すものは實に愉快でした」

「それを母と伯母さんに聞かしてはどうだね」

「「ポール」さんの近傍にはヤッパリ獨乙の兵隊が野營して居りまして毎日の樣に調練をするので「ポール」さんが其兵隊の亂暴な振舞をして大事な作物のはつて居た田圃の中でもなんでも構はず蹈み荒すのを切齒して殘念がつて居ましたが丁度私の參つた翌日「ポール」さんや村の少年共と散歩して居ますと獨乙兵士の一中隊が調練して歸る處を見ました其通り路が私共の行く途と十文字に成つて居ましたすると「ポール」さんが國歌の第一第二の句を謡ひながら駈け出して敵の中隊の眞中心を突き貫いて遣らう諸君も自分の後に續けといふや否や駈け出して突貫を始めました我々も後れじと都合十五人到々「ポール」さんと一緒に敵軍を中斷しましたそれは〱實に愉快でした、マア恐ろしいと客は眼を見はりしが主婦はさも氣味よさゝうに中々大膽ぢや折々は其位のことをするとよからう、それからどうしました。

「不意の出來事のせいか獨乙兵が「ポール」さん始め一人でも武器を持つた者も御座いませぬ私共におめ〱

と中隊を中斷せられたのですから茫然して居ましたすくると其中隊長は馬上て御座いましたが馬を飛ばして我々の後を追ふて來ました其時「ポール」さんは止まれといふと同時に立ち止りました「ポール」さんは大音揚て佛國人が只一騎の敵に追はれて遁げたとあつては國民の名譽にかゝる彼隊長どうするか見ておらうと小石を拾ひ取つ一同を勵ましましたすると敵の隊長は馬を間近く乘り進めて物をもいはず我々の方を睨まへて居ましたがやがて引き返へしました其時我々一同が鬨の聲を揚げてはやしましたそれは〳〵よい心持で御座いました」

未亡人はうち笑みながら嘸愉快で有つたらう併吶喊して時に若し抵抗されたならどうする積りで有つたか

「無論戰ひます」

「武器も持たずになんで戰ふ積り」

「どうとも爲ます喰ひ付いてでもやります」

「御前獅子や虎でもあるまいに誰が御前杯に喰ひ付かれて居ませう只殺されるばかりさ併その心いき丈けは面白いそれから今一ツの御話はね」少年はやをら言をつぎ

「其翌日のことでした「ポール」さんと私と二人で鐵砲を擔いで五里ばかり山の方へ出かけました雀だの鳥だの色々な鳥を征伐しましたが隨分疲れもし、また大夫晩くも成りましたから滊車で歸らうと申して停車場へ駈け付けまして大急きで切符を買うて既に二等室へ入りました、すると其處に獨乙人が澤山居まして如何にも其傲慢な顔つきが癪に障りましたから滊車を下り樣と存しましたが、マウ發車するといふので其儘居ましたけれども何分イヤなので車掌に斷つて一等室へ乘り込みましたが矢張獨乙人が澤山居まして中將も居り少將も居り大佐、中佐、少佐何れも高等の武官で御座いました此人々が滊車の窓を開けもせず煙草を喫んだ樣子で其烟が室内を眞暗にする程でしたそれが如何にも氣に喰はなかつたからで「ポール」さんか荒々しく自分の側の窓を開けましたそれでも烟は殘つて居ました、きかぬ氣の「ポール」さんですから自分も煙草を喫む權利が有るといッて衣嚢から二本の巻煙艸を取り出して摺付木を探しましたが生憎持ち合せません樣子で苦い顔をして立て居ると獨乙の中將の服を着けた將官が附木を摺つて「ポール」さんの前に出しましたけれども

「ポール」さんは知らぬ顔してすまして居たのです、それにも拘はず中將は重ねて附木を擂つて火を上げませうと一聲かけられましたから「ポール」さんは此時始めて中將の方を見て傲然として默禮しながら煙草を吸ひかけたんです「ポール」さんの心では前の仕返へして獨乙士官を煙攻にして困らせる積りなのか只管煙を吸ては吹き吸ては吹き無茶苦茶に烟ばかり吹き續けました暫くすると少將の服を着けた士官が火を一ッ頂戴と丁寧に會釋して「ポール」さんの側に來て煙草を出しました私は先程より是等の獨乙人は「セダン」でお父さんを殺した仇敵だなと心の内におもつて見て居りました、サテ「ポール」さんは丁寧に乞はれたからでも有りませうが、自分の煙草を唾壺の縁で輕く叩き其灰を落して相手の煙草の前へ出して遣りました、私は「ポール」さんの擧動にのみ氣を取られて居ると最前「ポール」さんに火を與れられた中將が私に向てあなたは幼年學校の生徒ですかと佛語で話しかけました、すると「ポール」さんが横合からイヤ士官學校の生徒ですと答へた中將は私の顏を穴のあく程見詰めてどうも御幼年の樣に思はれますが御何歳てといふとまた「ポール」さんが横合から十六歳てと答へました、中將は十六歳にしては御優しい樣ぢやが御國では其御歳で士官學校に入學することが出來ますかと重て問ふや否やまた「ポール」さんが更に横合からこれは特別ですといはれた、特別とはと問ひ返へすと。此少年は「セダン」の戰で討死した佛蘭西國の故將軍「マルクァリット」の一子「ジャンジャック」ですと大變長い肩書付きて私の名をいはれました「ポール」さんの此言葉を聞くや否や獨乙士官は中將を始めとして其處に居合せた一同の軍人が殘らず一齊に起立して軍隊の禮法を以て十六歳の少年なるこの私に鄭重な挨拶をされました、のみならず中將を始めとして士官の方々が迭る／＼私に握手せられました。そこでお父さんを殺した敵人は此等の獨逸人よと最前から憎み見て居つた眼は自然敬愛の心を以て見る樣な心持に成りました。それはかりでは御座いませんお父さんを殺した者は此人々ではあるまい抔と思ひ直す樣なことに成つて來ました、其後中將の言はれたのに「セダン」の戰は實に激しい戰で自分の子は騎兵中佐て有つたが砲彈に中つて腰部以上丸て微塵に成つて討死しました、又此少將の令弟はハと傍の一將官を指して同じ

戰に面部を打たれて即死しましたと語られ、其他大佐の伯父さんやら中佐の兄弟やら、其他此に居合せた人々の親戚故舊の死傷した有樣を詳しく物語して「ア、悲しいものは君戰爭だナア」（佛語ニテ「トリスト、シヨウ、ズ、モッシウ、アー、ゲール」）と淚と共に私の手を握つて少焉は聲を出し得ませんでした」

其五

最前より此物語を聞いていとゞ深き物おもひに沈み居たる主婦は愁然としてア、如何にもそうぢや、悲しいものは戰爭だのう」

「兎角する間滊車は停車塲に着きました「ポール」さんと私は滊車を下りて、兎ある茶屋へ這入ッて椅子に倚ッて居りますと其處へ同車した中將が急ぎ足て遣つて參つて「シヤンパン」を出させて「ポール」さんと私の健康を祝すると言つて盃をさゝれましたから私共の方では中將の健康を祝して御互に祝し合ひましたが程なく發車するとの報知で中將は急いで衣嚢を探ぐつて金貨を出す積りでしたがそれと見るより「ポール」さんは手早く金貨の一片を取り出しこれは今の酒料だと言つて番頭に與へられました、中將は實に間の惡い樣な顏をして其店を見廻はし子供の喜びさうな菓子や菓實を求めて恭しく私共に下さいましたけれども「ポール」さんは御腹が十分ですといつて謝絕しましたそれ〳〵ちや志ばかりでもと中將の言はれるのを打消し、我々は乞食では御座いませぬと突き歸しました、中將は嗚呼是非もないと嗟嘆してまた丁寧に挨拶しつゝ滊車の方に行つて仕舞ました……

成程と主夫人は沈思しつゝ聞き入ぬ。少年は語を次ぎ「獨逸人は實に情誼に厚く又禮儀に行屆いてゐます皇帝の仇、國の仇、父の仇でも禮儀は禮儀、「ポール」さんの成され方も少し穩て無い樣に思はれました」

茲に於て未亡人は儼然として曰く「如何にもそれおちや無い併し「ポール」さんはそれ位の道理を知らぬ方ぢや無い御前は子供にしては血も有る淚も有る方ぢやが、血も有る淚も有る人の常として情に脆い所が有る御前が獨逸人の情と禮との爲に皇帝の仇、國家の仇、父の仇を忘れもしまいけれども人は感情の動物とさへ云ふ位のものぢやから感情の上から疾いといふ念が薄くも成り深くも成り易い現に御前が獨逸人を見る心に滊車に乘る前と後との差が出來たては無いか「ポール」さんの心持

は感情の爲に深讐を忘れぬやうに敎へて玉はつたものであらう、どうもさう思はれます」

「私め實は御母樣の今の御諭しの樣に思はれました故「ポール」さんには何ともいはず分れましたが此次御目に懸ると乾度御推測の通り御話が有ると思ひますそれから「ポール」さんは仇を報ゆるまでには佛蘭西人の百や二百てなく千人も萬人も犧牲に成らねばならぬ、佛蘭西の人が獨逸人に殺されたり辱かしめられたりする者が出來れば出來る丈復讐の期が近づくのであるから我々が今日彼の爲に殺されても決してそれが犬死ではない復讐戰爭の先鋒隊で討死するも同じことぢやと口癖の樣に申されました」

「ほんにそれに相違ないよ」

「ですから私共は何處何時命を取られる樣なことを仕出來すことやら分りません御母樣も兼て其お積りで」

「よろしいとも自分も其心持でゐます何も運命です國家の爲めとあれば子供の命でも」と言ひつゝ潸然として涙ぐみぬ

客なる夫人はいとゞ感服の躰にて「アヽ御子樣の御話を承りますと私は胸がひやりとする樣な危いことが有るのでほんとうに心配でなりませぬ御話しの「ポール」さんとやら申す御方に御如才も御坐いますまいがどうも險呑では御坐いませぬか孝子は岩墻の下に立たずとやら申しますから」

「御道理で御座いますが何か斯う申すと忰を譽る樣で濟みませぬ併し年に合はせては思慮が有るやうに思はれますが良人の生前に忰は小供にしては理屈が分り過ぎる子供には餘り理屈や思慮の有るのはいけぬから今の内「ポール」さんの樣な快活な人に附け置くがよいと申して彼の方に親む樣に仕向けたので御座いますが折々考へて見ますと良人は良人丈けに熟く心を用ひられたものぢやと感心致します若し彼方に托し置きまして忰が一身を誤ります樣なことが御座いましたなら運命とあきらめます、それで獨乙の一中隊を中斷した抔と申す危いことも何とも申さず却て褒め置いた樣な次第で御座います、折角の御親切は有り難く御聞き申しましたが右樣な譯で御座いますから御心配くださらぬ樣に御願ひ申します。」

（完）

隠れたる日本の風俗

（魔狐の奇談）

帝國大學文科大學講師 小泉八雲述
女學記者筆潤

（一）狐についての迷信

日本といふ國は實に不思議な國である、私は英國からこの日本へ參ッて既に十年、永らく出雲の松江地方に語學を教師として滯留していたが。其の他の風俗習慣に就て見もし聞きもした中に奇怪に堪へないのは狐の話である、此れは日本風俗上表面に顯はれた事實でないから、何とも確定した自分の意見を加へる事は出來ないが、聊か裏面の風俗として玆に少し書き記して見ました。一躰この日本の風俗上言ひ傳へられた魔狐の奇談はこの出雲の國はかりでなく全國至る所ろの田舍で古から言ひ傳へられ居るばかりでなく又現在でも無智蒙昧な村夫野孃の間に折節出來せる事柄で宗敎哲學上にも精神病學上にも又人類學上にも一つの研究すべき事柄でありますが、私は今これ等を綜合して御話をする餘裕を得ませぬから、唯私が實地に見聞した一地方の事柄に就て御話をいたしませう。

扨て魔狐の奇談に就てはいろ〱ありますが、玆に不思議と申すべきは狐が人に憑り移ッて其人を狂人にする事である。尤も其の狐憑になる位なものは元より常識の備はつたものではなく、平常から多少精神病的の徴候のあるものに多いといふ事は一般の説であるが、私は今これ等に就て研究する餘裕を得ないから、唯私が聞いた所ろに依つて御話をいたします。扨その狐憑は或時は眞裸で街道を叫びながら驅け出したり、或は道の眞中へ横さまに打倒ふれたり、そして口からはぶつ〱と泡を吹き出し（これは癲癇病に多くある徴候ともいふ）狐の鳴くやうな奇異なる聲を發して鳴き叫ぶのである、且つその狐憑は平素狐が好んで食する所ろの豆腐、油揚、赤豆飯などを貪り食ふのである。その時此の狐憑の言ふのに、自分は決して飢へたのではないが、狐が飢へているから、こんなに食ふのである、といつて。驚ろくべき分量、豆腐三十丁、油揚ならば五十枚、常人の食量の十人分二十人分を一時にぺろりと食ふて仕舞ふのである。

扨又此の狐憑の犧牲となつた人々は、其家人若しくは

親戚から非常な殘酷な目に遭はされる、それは即ち其の狐を追ひ拂はん爲めに、嚴しくされるのである、其の時には、魔祓ひといつて、法印を迎へる、此の魔拔ひといふのは、其狐と議論をするのであるが、狐は、狐憑の口を借りて答辯するから氣焔萬丈で中々當り難いのである、併し段々と爭論して、敎法上の議論に狐が云ひまくられ仕舞つて、狐憑きは弱り果てる。遂には一語も出なくなる、すると、狐は其法印から、豆腐、油揚其の他の物を今後多く供給して貰ふといふ條件で以て立ち去らうといふ約束をするのである、さてその約束の食物はどうするかといふのに、それは曾て狐が何處の稻荷の使はしめてあると宣言をした其の稻荷の堂へ持つて行かねばならない、こうして、狐憑きは狐に去られた後、直に卒倒して無感覺となるのである、これは實に奇態である、且つ言ひ傳へによれば、一度狐に憑かれたものは、其後一切食べないといふ事である。

（二）狐を利用する權柄家の話

魔狐は時々召使などになつて人の家に往み込む事がある、若し其の一家內の中て、娘が他へ緣付くと、其花嫁にも矢張りついて行つて、新夫婦の家內中に擴がるといふ事である、夫れが爲めに、世人は一般に狐持を敬して遠ざけるのである、それ故出雲の國では、隨分敎育もあり、又種々の手藝に達した娘でありながら、世人から狐持と認められた爲めに、夫を持つことが出來ないやうな人が澤山ある、一般の習慣として、出雲の國では、娘を緣付ける爲めに、遠い他國へ出すことを好まぬ風俗であるから、狐持の娘等は、同じ狐持同士の家と結婚する、さもなくして、普通の家へ嫁からうとおもへは勢い、遠國他國へ行つて夫を持たねばならぬ、富裕な狐持の家では、其娘を持參金付て緣付ることが出來るけれども、貧しい家ては、如何なに容色よい娘でも、世人が此の迷信の結果で哀れや終に獨身て一生涯を送ねばならぬ、つまり正直な田舍の人は、一般に此の迷信に反抗することが出來ないのである、而して敎育もなく且つ狐の事に信を措く田舍人が、此の迷信に反抗したために出來る恐ろしい結果は、其主人が蒙るのみでなく、家內全躰、尚ほ進んでは親戚知己一同に及ぼすものだと思はれてゐる斯樣な次第であるから時によると狡猾な狐持の內には、世人が嫌のを利用して種々な事をやるものもある、それは田舍人の習慣として、狐持に反對す

ることをこわがつて居る、若しそれに反抗した時には狐持がその復讐をして目に見えぬ召使の狐をして自分に憑かせると思ふのである、或る狐持は之れを利用して、其一郷内で非常な勢力家となつた噺しがある、曾て米子町に一人の狐持の町人があつた、其の人の意思は殆んど一町内の法律ともなり、其の意見は恐ろしい權力を持つて何人も之に反對するものがなかつた、それ故其町人は其の土地に於ける司配者となりそして漸々に大金持となつたのである、斯様な次第で、凡ての原因は、只狐持だと世間から信せられて居た爲めである、

こゝに一ツ除外例ともいふべきは相撲取である、相撲取は、狐に憑かるゝ事は無と思はれて居る、それ故に相撲取は狐持に對して一向平氣である　全躰非常に強力な人は、是の如き魔力に抵抗し得らるゝものと信せられて自然狐は相撲取のやうな強い力を持つた人を恐れて居る、是に付いて狐が或る力士の兄弟に向つて公言した事がある、「おれは汝の兄貴の躰内に入り込んでやらうと思つて居たが、餘り力強いから失れて汝の處へ來たのである、おれは何うかしてきさまの家に復讐をしなければならぬ」實に奇妙な譯ではありませんか、

（三）　狐の宴會

扨又、狐に就ての迷信は、單に人の身体に就てのみならず、物体にも關係を及ぼすのである、出雲では狐の爲めに一萬圓も二萬圓も價のする不動産（田地）の上に關係する事がある、それは前記の如く、狐持と思はるゝ家に屬た土地は、相當の値段で賣ることが出來ない、一般の人は斯る土地を買入れるとを恐れて居る、何故なればそれは、狐が買主の家に禍をすると思ふて居るからである、譬へば稻を植付ける爲めに開墾された田園である、是等の土地に必要なのは灌漑の便を得ることであるが、時としては水が非常に欠乏して爲めに人民間に爭鬪を惹起すことさへある、かゝる場合に、若しも其の田地が狐持の家から買たものであれば、狐は人の知らぬ間に其の田地から水を取り去つたり、或は故意と水樋に孔を穿つて水の通せぬやうにしたりして、穫には田地を悉皆干魃にして仕舞つて秋の收穫をして皆無とせしむることがある、それ故狐持と信ぜられた家の田地は中々人が買つて與れない、買手がないからこう信せられた人の田地は自然値がないのである、

かやうな次第であるから、世間では此の奇怪な信仰を

取り消すために、即ち此迷信を打破る爲めにいろ〱と盡力した有力者もある、いつぞや松江市で農學に熟練した或る紳士があつたこの人は今から十五年ほど以前世人が狐に對する迷信を利用して、非常に奇利を博した事がある、即ちこの人は出雲の東の方で何人も手を出さぬ所謂狐持の田地とし知られて居た廣漠な地面を買入れて、近代の學術を施して耕作した爲めに、收穫か非常に多く、土地は六倍許の價を生じて來た、そこで彼の紳士は其の土地を賣つて俄に大金持となつたとの事である、此人か農業に堪能であつた爲めに來た成功は人民一般か信を措く樣になり、從來の迷信を打破り、夫の結果として以後、其地面には狐が居ない事になつて仕舞た、併しこれは單に此人が農業に堪能なばかりでなく一つは、此人が官廳の役人であつた事が、預つて大に力あるのだ、由來百姓に對して「官」なる一字は、一種の魔力を有して居たのである。

又或裕福な農家があつた、其家の資產は凡五十萬圓にも及ぶもの事であつたが、此の家は一般の百姓から狐持だと信せられて居た、此の家に付て百姓どもの噂をきくと、夫れは彼家の主人が昔時ひどく貧乏であつた時に或日八幡山の森の中から一匹の白狐の兒を見つけ出して、是を持ち歸つて手塩にかけて大切に可愛がつて、豆腐、油揚、小豆飯等を與へて養ふて居たがその狐が段々と成長して來るに隨つてその家の景氣が次第によく遂に二十年立たぬ間に斯樣な大身代の分限になつたといふ事である、それでこの家には秘密の大座敷がある、これは客座敷で話に聞くと五十疊も敷かるゝ程な大廣間であるが、定めて四方は金屛風でも建てめぐらして、錦襴緞子の茵でも敷きならべられてある事とおもへど決してそうではない、唯この廣い大座敷は一面荒蓙が敷かれてあるといふ事である、何故かと聞いて見るとこれは即ち狐に對する客座敷である、毎月一度づゝ此の座敷で大家内の眷族（大家内とは土俗狐持の家をさしていふ）を集めて宴會を開くのである。それで當日の準備は大したもので赤豆飯が大釜で四釜、十飯、豆腐が五百挺、油揚が二千枚といふそれは大變な事で、その御客樣の數は何でも五六百人はあるそうだ、してその御客樣といふのは家の娘が持參金で嫁づいた家や、二男三男が婿に行つた家や或は分家した家から段々とこの總本家へ集つて來るのでこの總本家が身代

を仕出してから凡そ二十年の間に一匹の白狐が産み出した眷族の數がこの如く殖たのであるとは何と大變な話ではありませんか。

（四）狐に賄はれし醫者の話

狐の一種に又人狐と云ふのがある、此の人狐が夜に入つて人の家に來て戸を叩くことがある、若し其の時に聞なれた人であれば、直ぐに人狐でと勘定をするこれは一種特別の毛ざわりをきゝわけるのであるが、（狐が戸を叩く時は、尻尾でもつてたゝくからである）、若し其時戸を開けて見ると、大抵は美人が立つて居るとの事である、其女は、いつもとぎれ／＼の言葉であるがよく解る樣に話しかける、（狐は言葉の全部を言ふことは出來ぬが、其の一部のみは話しが出來るとの事である）而して、若し其の人が、日頃の友人であるならば、何かしら或る送り物を少し許り殘して直に暗闇の中に失せてしもう、してその送り物は何なものでも、夜見ると中々立派なるものゝ樣に見えるが、朝になつて見ると、つまらぬ物になつて仕舞ふ、すべて狐の送り物は、少し許りの塵丈けが眞物であるそうな、

曾て松江に一人の紳士があつた、或夜深けてから自分の家に歸る途中、一匹の狐が數匹の犬に追はれて命から／＼て逃げて來るのを見た、彼の紳士は犬共を傘で以て追ひ拂ひ其の暇に狐を逃してやつたすると、翌る晩何人か紳士の宅の前へ來て表の戸を叩くものがある出て戸を開て見るとついぞ見馴れぬ非常な美人が人待顏に表に立て居る、紳士は不審して何か用事でもあるかときくと美人は恭しく辭儀して「昨晩はありがとうございました若しあの時郎君がお助け下さらなかつたなら、私は死てしまつたかも知れませんどう御禮申してよいか私にも分りません、此品は誠につまらぬ物ですがどうぞ御納め下さい」と、彼女は小い包を其人の足許に置いてパッと消へるやうに何處かに影をかくしてしまつた紳士は不審におもひ乍ら、その塲て包を開けて見るとこれはしたり二匹の奇麗な「おひる」と、二個の銀塊があつた、さて其の銀塊は小判形で、一個の價が十二三兩もして當時或る考古家から熱心に尋ねられて居る品物であつた、然るに暫くして見ると、その銀貨の一個はいつの間にやら硝子の破片と變つて居たのである、けれども他の一は大丈夫眞物であつた、

又松江に杉亭庵と呼ばるゝ一人の醫者があつた、或る

日の夕方、町から可なり離れた「白髪山」と云ふ岡にある一軒の家から來診を頼みに來たものがある、醫者はその家の立派な定紋つきの提燈を持つた臣僕に案内されて、とある宏壯な家に連れ込まれた、その家は重々しい武士氣質の家であつて鄭重な挨拶で迎へられ、奥へ這入つて樣子を聞けば其家の主婦が今安產をして一人の美しい赤兒を設けたとの事である、招かれた醫者は早速產婦の室へ這入つて見舞つて跡の始末をする、用術を畢つてから家族のものはいろ〳〵立派な御馳走を出して叮嚀にもてなし、そしてかへる時には贈物に金を二圓添へて人までつけてそして家に送り歸した、翌日その醫者は日本流の習慣として其家に答禮に行つたら、こはいかに「白髪山」の丘の上には一軒の家もなく只古い森のみが寂々としておひ茂つてゐるばかり、醫者はいかにも不思議でならぬから直に家へ歸つて自分が昨夜受取つた金を改めて見ると、これはしたり二圓の銀貨の中一個は眞物であつたが、其他は硝子の片破に變つて居たとのことである、

（五）　狐に魅されし豆腐屋の話

これから狐神に付ての一層力ある迷信に就て御話をしませう、數年前松江に數多の顧客をもつた一軒の豆腐屋があつた、（豆腐屋とは豆腐を賣る店で、豆腐とは豆で造つて凝固物で、外見上上等の「カスタード」「菓子の名」によく似て居る）、狐は食物の中で豆腐と蕎麥とを最も好むものであるが、さて此豆腐屋に就ての話であるが、この豆腐屋の主人は、種々狐の爲めにひどい目に遇はされた事がある、一と頃毎日のやうに夕方お定の客が來る、其の客は長らく餓てても居た樣に其塲で大急ぎに豆腐を食ふのである、併し未た一度もこの主人と話しをした事がなかつた、然る處主人は或晩其の客の怪しけな着物の下からちらりと毛の生へた白い尾の端を見認た、處て主人は好奇心に駆られて其晩から此の怪しげな客に對して樣々とお世辭を云ふやうになつた、すると程立つて彼の怪の客が來ていふには、「私は人間のやうに見えますけれども實は人間ではない、私は只お豆腐がたべたいばかりにこんなに人間の姿をして來るのですが全躰はあのお前さんのよく參詣なさる高町の稻荷の使はしめです、扨て私はお前さんの日頃慈悲深いのに感心してゐるが、豫ての善心に報くひたいとおもつて、今日はお前さんの身の上にふつて

來る一大難義を救ふ爲めに來たのです、といふのは外てもない此町から明日大火事が起る、そして町は大半全燒になつて仕舞ふのですから、これを救ふために來たのです、火事を救ふといつた處で別に仕方もないから魔術でも使はふと思ふて居るのですが、此魔術を使ふにはまづお前の土藏を開けてもらはねばならない、併しどうか誰にも私の姿を見せないやうにして下さい何故なれば人目にかゝると魔術が利きませんから」と言はれた、主人は奇怪な事だとはおもひながらも大きに喜んで、その土藏を開けて此の稻荷を敬しく導いたそして家內や召使の者に命じて土藏の方を見てはならぬと言ひきかせた、此の命令は能く行はれて眞夜中に藏の內から種々な什器を持ち出されても何人も咎めるものがなかつた、すると翌日土藏が空つぽになつて仕舞つた、然し狐の言ひ觸らした火事は無くて濟んだが土藏の中に納めてあつた什器は皆なくなつて仕舞つたこれは狐がこの豆腐屋の主人に何か怨があつて其の意趣がへしをしたのであると信ぜられてゐる、

（十八）慾から失敗せし商人の話

それから又是に類した眞實らしい話で私は松江の商人梶谷といふものから聞いた、其の商人はまんまと自稱稻荷の餌になつたのである、此の稻荷は梶谷に告げて曰ふに「我は汝が生來の善行を嘉し汝に鴻大の利益を授けん、若し汝にして夜中我が社內に若干の金高を置かば翌朝に至り二倍にして授けん」と、此の商人は稻荷の宣言を信じて其通り僅かの金高を社殿の內に置いた、翌朝になつて行つて見ると果して昨夜の金が二倍になつて居た、それ故彼の男は大に喜んで今度は以前よりも少し巨額の金高を置いて行つた所がその金は前夜の通り二倍になつてゐた、かうなつて來たから彼の男はもう堪らない、今度は二百圓ばかりの金を奮發して運試しをやつた、ところが稻荷さんの御宣言は靈驗なもので翌朝行つて見るとその金が果して四百圓になつてゐたのである、考へて見たまへ、二百圓の金が一夜の內に四百圓になつた、世の中にこんな有難い事はない、自分はもう一廉の稻荷さんの愛子といふ考へて、今度は自分の年來の貯蓄の金のありたけを銀行から引出して、うや／＼しく稻荷の社殿に置いて家へ歸つて、一と夜寢ずに稻荷大明神に斯念をこらし、翌歸になつて行つて見た、ところが今度はいつもとは樣子が違つて

昨夜の金が倍になつてゐないのみならず、置いた金さへ何處へか失せたか影も形も見えない、彼の男は大騒をして社殿内を限なく搜索したが遂に見得なかつた。それが爲めにこの商人はとう〳〵破産して仕舞つたとのて、大きに稲荷さんを怨んでゐる、併し私おもふにこれは稲荷さんの仕業でなくて、何人か稲荷にかこつけてこの商人を欺したのであらうとおもふ。即ち狐の迷信を利用して姦策を施したのである。

(七)　願立娘の話

これから稲荷さんの御利益に就て少し申しませう。松江市内のさる横町、この横町は行止りて途にても迷ふた時てなければ滅多に踏込む事のない小路て、「地行場の稲荷」并に「小供の稲荷」と呼ばれて居る一の小祠がある、此の社は極めて小さき祠ではあるが中々有名で、こゝへ近頃一組の大きな石造の狐を寄進したものがある、此の石造の狐は雌雄の一對で社の兩側に配置せられて居るが、雄は口を開いて笑ふが如く、雌は口を閉ぢて物思ひに沈んで居るかのやうてある、それから進んで社内に入ると、或は古風の小石狐で鼻の頭や尾の端のぶち毀れたのが幾つと無く奉納してある、又中には大きな唐獅子があつて、其前には數多の草履が供へられてある、すべてこれは或る心願の爲めに、跣足參りをする人達が供へたものてあるが、試に彼等は此の如き熱心を以て諸その災難を免れんことを唐獅子樣に祈願するとのことである、或は荒神と稱して小兒の翫具にする人形の手が堆高く積まれて山のやうになつて居るのを見受ける、又此の社の扉は磨滅して居るが、彼の「八重垣」の社と同樣に澤山の紙切が結び付けられてその爲め扉が一見白色になつて居る、扨て此紙片は何れも人々の祈願をこらしたものである、それから又扉の左右兩側并に其上面に當つて祈願の額面が掲げられてゐる、其の額面は悉く小兒の沐浴をする圖、又は月代(剃髮)を剃つて居る圖てある、又其の中には小兒の嫌厭する有樣を畫いたものもある、一體これは何であるかと自分は色々穿鑿をしたところがこれは左の如き譯のものであると了解した、元來日本では、大人も小供も同樣に熱度の高い湯に沐浴して、身體を清潔にする風習があるのみならず、又極めて幼少な子女の頭髮を剃り落す習慣がある、けれども此の風習は因襲の久しい習慣と遺傳性の堪忍力であ

るとは言ひ乍ら猶その月代を剃り落す時の痛みや、沐浴する時の熱さには堪へることが出來ぬ、日本の湯は實に熱い、華氏の百十度より下ることがない、外國人などは大人でもなか〱その熱さに堪へない程である、又日本人の用ゆる剃刀は、吾人の使用する剃刀から見ると餘程劣等なもので、餘程の熟練家でなければ毫も傷つけずに剃ることは困難である、この如く日本の小兒は外見難儀な目に遭はされるやうであるが、これも煎じつめて見ると實は兩親がその子に對する愛情の深いのを顯はしてゐる、此等の兩親は常に自分の兒を愛し慰むることのみを勉めて居て、其兒が風呂に入るときに無理を云ひ出したり、又は頭を剃らるゝ時にだゞをこねたりする時、其兩親は怒るにも怒られず、叱るにも叱られず、實に進退維れ谷まるの有樣である、その時兩親は其兒に恐怖の念を與へないやうにせねばならぬ、夫れて愈々其の兒が風呂や頭を剃ることをいやがる時には、其の兩親は「地行場の稻荷」へ願を懸けるのである、すると此稻荷の神樣が其兒を慰撫するために、其召使の狐をして其の兒のむづかるのを直すのてあるそれから又兒供の身體が虛弱であるとか、又は病氣にでもなつた時には、直に此の神樣に哀願して此等の災難が全然除けらるゝやうに希ふのである、而して愈々其の願の屆いた時には、其の社に心ばかりの賽物を捧げる、即ち兩親が懇願して居るやうな額書を其の神社の扉などに張り付けて、そして其の哀願の成就した事を神に感謝するのである、私が此の神社の前を通つた時社前に子供を負ひながら跪いて頻に祈願をこめてをる年若な母親の一人二人三人はかり居たのを見たが、其の子供の一人は仲々可愛らし容貌をして居た、そして其の頭が土地の風俗に反して少しも剃られて居なかつた、これは月代を剃る事を神さんに祈つて居るのであらう、即ち或る病氣を癒して貰ふために願を立てゝゐるのであらう、

（八）狐と遊びし小兒の話

扨又私の召使の話に隣家の息子て當年取つて七才になる子供が、或る日の朝、遊びに家を出たまゝ二日ばかり何處へ行つたかとんと行方が知れなくなつた、けれども其の子供は是迄に親戚の家へ行つて一日も二日も留まつて來る事があるから、兩親は此度も亦例の通り親戚へても行つた事と思ふて、更に氣にも留めなかつ

たが、二日目の夕方になつて始めて小供が親戚の家へ行つて居ないといふことが知れた、そこで俄かに大騷をして探し始めたが、其夜も遲くなるまで更に行方が知れなかつて、家内中は非常の心配で夜の明けるのを待つて居た、すると夜半過ぎて其の家の門を敲く音がしたので、母親が急いで出て見ると、其息子が地上に熟睡して居たか。あわてゝ呼び起して見るとまづ別條もなかつたから家内もほつと息をついて喜だ、扨て一體誰が門を敲いたのやら更に合點が行かなかつたが、やがてその息子はこういふ事をいひ出した、

それは自分が遊びに出た日の朝であつたが、丁度自分と同じ年頃で目元の愛らしい一人の小供に出會ふた、其可愛い小供は森の方に行かうといふて、自分の機嫌を取り／＼勸めて呉れたもんだから、二人連立て其の森に行つて種々と面白い事なんどして遊んで其の日を暮した、そして其の夜も亦其の翌日も斯様にして遊び暮したが、最早非常に睡くなつたからその子に家迄送られて歸つて來たのである、併しその如くあそびくらしたけれども自分は少しも饑じうなかつたそして別れる時に其の可愛らしい小供は明日また來ると云ふて自分と約束をして行つたといふ事である、兩親は不思議な事とおもつたが、明日來るといふからどんな兒であるか見てやらうとおもつてゐたのに、翌日になつても彼の不思議な遊友達は遂に來なかつた、そして又其の近所にも可愛い小供は見えなかつたとの事である、世評によれば彼の可愛らしい子供は狐ではなからうかと云ふ事である、此の噺をした主人公の小兒は彼の可愛らしい愉快の友達が居なくなつた事をやゝ暫くの間は歎き悲んでゐたといふ事である、

(九)　高慢な相撲取の話

三十餘年前の事であるが、松江市に其の以前高川と呼ばれたお角力取があつた、それは實に名高い豪力の者であつたが、此の角力取は常に狐を狩つて殺すのを商賣のやうにして、何でも狐の爲めにひどく、殘忍極まつた事をする一の讐敵であつた、しかし自分には大層の腕力があるから、狐位のものは何でもない抔と思ふてゐた、しかるに或日占者、この人は白髮の老翁であつたが、高川の人相を見て、「お前は世間の人のやうに妻子に看病して貰うて疊の上で死ぬ事の出來ない人間だ」と云つた事がある、ところが此の豫言かすつかり當つ

て、相撲取は誠に變つた不思議な死に様をしたのである、元來この高川といふ男は、動もすれば計略で人を穴に陷れて面白がる性質であつたが、或る日天狗に假粉て、和久羅山から程近い處に神聖な並木原があつた、此の並木原の高い樹の枝に登つて大元氣でゐたが、暫時するとその邊の百姓の一人が見つけて驚いて歸ると、やがて大衆の村民がさあ天狗といふので、いろ〳〵の供物を擔いで登つて來る、拍手をうつて拜むやら、御經を唱へるやら、中々の大さわぎであつた、僞天狗先生此の有様を見て大喜び、調子に乘つて樹の枝から枝へと飛鳥の如くに枝傳ひの輕業をやつて、さあ見ろ乃公は斯様に通力があると大氣焔であつた、終に誤つて足を蹈みはづして眞逆様にその高い〳〵樹の枝から落ちて夫が爲めに首を挫いて死んでしまつた、まことにこれは小供の御伽ばなしのやうであるが、實際これは狐の報で狐に魅まれたのであるといふ說が有力であつた。

（十）狐に關する文學上の記載

日本に於て文學上狐の問題即ち魔狐についての書物は頗る多い、其の中の或者は千年前にあつた逸話もあれば又は近世の稗史小說若しくは家乘、野史の上に顯はれた片話、或は世に有觸れた怪談中にいろ〳〵あるが中に就て古來尤も有名な話は玉藻前及び篠田の狐である、玉藻前は日本中古の英邁なるエンペロール鳥羽帝の妃となり、信田の狐は有名なる武士安名の妻となつたその外演劇や淨瑠璃にもいろ〳〵狐の奇談があるが私は十返舍一九の書き顯はした東海道旅行記にある狐の話に就て深く日本人の狐に關する迷信の著しい有様を記載されてゐるのに感服したのである。今玆に其の一節を揭げて見ませう。（編者曰く十返舍一九の旅行記中狐の談は道中膝栗毛中赤坂驛の所を拔萃したるものに付き省略す）



父親

モーパッサン作
武田櫻桃補譯

（一）

高等教育會の書記フランソア、テツシエールが、バチノーエの自分の家から、毎朝巴里の教育會へ通ふには、必らず乘合馬車へ乘る事に極めて居たが、これと丁度仝じ時刻に仝じ馬車で、仝じ巴里の――教育會の向ふ側にある圖わる店へ通つて來る娘があつて、フランソアは不圖此娘に迷ひ初めたのである。

其娘と云ふのは飛切つて美人と云ふのではない、眸の黑い、色の淺黑い女ではあるが、容貌は先づ十人並より稍勝れた方であらう、て、此娘が何日も馬車へ乘る時の樣子と云つたら、馬車を見ると小股にきざんで來て、一寸立停るかと思ふと、ひらりと馬車へ乘る、急いて腰を懸けて、せかせかして、いつも四方を見廻はすのが癖である。

フランソアが其娘を見染めたのは眞個に偶然で、其前には顏すらも見た事がないのであるが、乘合馬車の中で初めて娘を見ると、いかにもゆかしい所があるやうて、こゝに戀と云ふ曲者がフランソアの胸の中に芽を吹いたのである。

古い諺にも思ひ中にあれば色外に現はるゝと云ふ事があるが、仝じ馬車へ乘合はして居る中も、フランソアの眼は自然に其娘の方へ注ぐやうになる、すると娘の方でも除りしげしげ見られるので、極りが惡いか、ぱッと顏を赭くして下を向いてしまふ、フランソアもさては感づいたいなと思ふから、瞎めて居た眼を擬さうと試みるが、生憎と娘の姿は眼の前にちらつくと云ふ仕末！これが抑も毎日の事であるから、別に言葉を交すと云ふ事もないが、いつとはなしに次第見知り越しの顏になつて、馬車が立て込んで居る時などには、自分の席を其娘に讓つてやる、さアかうなると娘の方でも多少は砕けて來るものだ、顏を見合はせると莞爾として會釋をするやうになる、て、除り激しい感情が娘の小さな胸を衝く故か、いつでも伏目勝になるか、乃至は天井を瞻めるのが常であつた。

一言――二言談話合つたのが始りて、相思の情は著しく昂まつた、此相思の情、これがまた敢果ないもので、

一日の中で相見るのは僅かに三十分の事ではあるが、此半時間の短かい快樂は、フランソアにとつては千秋無量の快樂で、日がな一日教育會の事務をとつて居るやうなもの丶、娘の事は始終腦裏を來往して、絶えず其周圍に勞繞として居るばかり！

それからと云ふものは、二人は、手に手をとつて馬車へ乘るやうになつたから、フランソアの得意は想ふべしで、娘が零碎の談片も深く耳底にとゞまれば、娘が柔かい指で押した所などは、翌る朝まで大切にして置くと云ふ有樣であるから、此三十分の時間が待遠しくて、それで殘餘の時間が惜しいやうに思はれるのも無理はないが、殊に、日曜日――此日程フランソアにとつて大厄日はないので、教育會も何處も安息日である爲めに、可愛い娘の顏を見る事が出來ぬからではあるが、もうかうなると娘の方でも戀しいと云ふ念が昂まつて、それは春のある土曜日、フランソアと馬車の中で會つた時

『明日の日曜は二人で、メーソン、ラフヒツトへ行つて、一緒に御膳を食べやうぢやありませんか』と云ふ約束が出來てしまつた！

（二）

フランソアは其翌る朝定めの停車場へ行つて見ると、もう其處の待合室に娘が來て居た、で、フランソアを見ると待ち兼ねたと云ふ形で、

『大變に遲かつてね、妾は……あの……メーソンへ行く前に、少し話したい事があるの、未だ發車までに二十分もあるんですから、まア聽いて丶下すつて？

かう云つて娘はフランソアの手を把つたが、伏目勝ちになつてなほ其言葉を續けた、膝は異樣に慄いて、

『什麽もね、妾は貴郎が迷はせていらつしやるんぢやないかと思ふのよ、だから、末の約束を極めて下さるか、神に誓つて下さらなきやア、メーソンへ行つてもつまらないと思ふのですわ？

急に娘の顏は赭くなつて、もう言葉を續ぐ事が出來ぬ、フランソアはまた什麽答へて好いか解らぬ程熱してしまつて、心の底では無論約束もすれば、誓もしやうと思つた、此時若し娘の了簡が判然フランソアに解つたらば、そうまで愛を傾ける事もなかつたらうが、もう此時は迷つて居る最中であるから、其意中を深く汲む事も出來なかつた、人間の常性や戀愛で大抵推測されるものではあるが！

フランソアは只娘の顔を瞻めたのみであるが、娘の眼には既に涙を湛えて居る、言葉も尠からず淀んで、

『眞個に約束をして下さるの、え、末の約束をして下さらないやうぢやア、妾はもう家へ歸つてしまつた方が好いの！

フランソアは今娘の手を固く握らざるを得ぬ。

『堅く約束する！お前の好きになつてやらう！

娘は僅かに胸の中に合點いたやうであつたが、涙の眼には寂しい笑がほのみえた。

『ぢやア眞個ね、眞個に約束して下すつて？

『神に誓つてさ！

フランソアの視線はまともに娘の眼へ落ちて居たのである。

『誓つて下されば嬉しいの、ぢやア切符を購つて來て頂戴！

列車の一つへ乗り込んだ二人は、車内が餘り立て込んで居た爲めに、さう〳〵親しい話も出來ず、メーソン、ラフヒツトで列車を出ると、其儘歩をセーヌの方へ進めたのである。

河の流れや、繁つた森の梢や、廣い芝草の上へ落ちて居る太陽の光りは、眞個に長閑に輝いて、二人の『幸』を祝ぐやうにも見える、手に手を把つて河岸を沿ふて行くと、樂しさうに小魚の一群が躍つて居る、娘はうつとりしてから云つた。

『何て妾は馬鹿でせうね！

『何故さ、お前はかうして二人で歩行い居るが馬鹿氣てると云ふんだね、思ひ合つた二人がかうして手を曳いて歩行くのは寧ろ自然ぢやアあるまいかね、えツ、何が一體馬鹿なのだえ

『だつて、貴郎、妾は今になつて見ると、飛んだ約束をしたと思つてますの、こんな事をしでかして、これが自然だなんて、考へて御覧なさいまし、娘の墮落する始りですわ、それに妾の家は阿母さんと二人限りで、阿母さんがまたやさしく下さるから、妾はもう妾の出來るだけ阿母さんを悦はせやうとしても、それが半分も出來ないのに、こんな惡戯をしちやア、眞個に濟まないんですもの、ねえ、さうぢやなくつて？

フランソアは此言葉を聞くと、有繋に憐しくなつたかして、突然娘の耳へ切吻しやうと試みたが、娘は早く身をかはして、とげ〳〵しくから云つたのである。

「あらッ、貴郎、眞個の誓をして下さらなくちやア……

かくして二人はまた踵をメーソン、ラフヒットの方へ廻したが、其所の繁つた丸葉柳の蔭にある、小料理店で晝飯を認める事にした、食事の間は空氣と熱と白葡萄酒と二人の感情と、皆共に閉込まれて、二人はぼーッと其顔を赧くしたばかり、談話と云ふものも別になかつたが、珈琲を飲んでから、愛しいと云ふ情が復活して、殆んと常識の外にあるような樣子であつた。

二人は勘定を濟まして店を出たが、矢張河沿ひをラフレット村の方へ向つた時、フランソアは思ひ出したやうに立ちどまつて、

「お前の名は何て云つたけかね？

「妾？　あのルイスと云ふの

「ルイスか、ル……イ……ス

河は井桁に流れて、遙か建ちつゞいた家の白堊が始終洗はれて居るかのやうに其水に映つて居る、フランソアは今牧場に向けられた駒のやうに、嬉しい思ひに浮かされて、快げに何か古い詩を吟んで居る間に、ルイスは菫の花を摘みためて、大きな花束を拵へてしまつた。

葡萄の繁つただら／＼坂へ懸つたが、フランソアは黙いたやうに不意に立ちどまつて、

「御覧！　まア、彼處を御覧！

見ると其所はもう葡萄の阪ではない、二里も先きにある村までも續いて居るだらう、地一面に毛氈を敷いたやうに、リラックの花が咲いて居るのである、ルイスも嬉しさうに立ちどまつたが、

「まア、何て綺麗でせう！

二人は牧場を突切つて、花の方へ急いだ、花は低い小山を一面に咲き盛つて居るので、巴里の花賣がリラックの花を仕入れるは、毎年此處に極つて居るのだ。

木蔭を縫つて居る狹い徑を此丘へ來た時に、二人は其處へ座を占めた、先きから二人の廻りを飛びかはして居た小禽は徐かに其歌を續けて居る、太陽は眞盛りの光りを坂へ投げて、咲盛つて居る花からは力ある薫りを送つて居るのである。

遠い寺院の鐘がうつとりとした響きを傳へた時は、二人は草の上に身を横へて、切吻の外は何事も知り得ぬやうに、殆ど氣意識の境を過ぎたが、ルイスは俄かに何か一大不幸を認めたかの如く、矢庭に飛び起きた、で其顔は諸手に深く隱されて居たのである。

フランソアは什麼なる事とも理へぬから、驚いてルイスを支えやうとしたが、ルイスはもう元來た道へすた〳〵と引返へして居るのである。

『ルイズ、ルイス、まアもう少し俟つてくれ！

フランソアはかう云つて後を追つたが、此時ルイスの頰は紅を漲し、眼は尠らず凹んで居た、て巴里の停車場へ汽車が着いた時は、ルイスは『左樣なら！』とも云はず、さつさと家の方へ歸つてしまつた！

（三）

翌る日またルイスとフランソアは馬車の中で乘合はしたが、ルイスは前とは打つて變つた調子である、で、フランソアに向つては、

『妾は少し貴郞に話したい事があるの、だから今日はヴオールヴァー、で下りやうぢやありませんか？

馬車を下りて二人がとある鋪石路へ來た時に、ルイスはまたかう云つた。

『ねえ、貴郞、これまでの事は夢と諦めませうよ、ね、いゝでせう、もう除り逢はない方が好くつてよ。

『何故さ、何故またそんな事を云ふんだえ

フランソアは其意を酌むに苦んだのである。

『何故でも、妾は飛んだ罪を犯してしまつて‥‥もう妾は恐くつて堪りませんの！

これまで深い愛に陷ちたルイスを什麼して失す事が出來やうぞ、フランソアはもう狂人のやうになつて、一諸にならうと勸めたが、ルイスは只『出來ません』の一點張りで別れてしまつた。

其後一週間と云ふものフランソアはルイスに遇はなかつた、什麼した事であらうとは竊かに不審つては居たものゝ、もうとても會はれぬ事と諦めたが、九日目に自分の宿の鈴を曳くものがあるので、戶を開けて見るとルイスが悄然と立つて居る、で、フランソアを見ると、突然其手に身を投げ懸けて、謂ひたい事の半分も得謂はれなかつたが、それから三月の間と云ふものフランソアの花嫁になつて居た。

未だ女の缺點が解らぬ中こそ可憐いとも可愛とも思つて居たのであるが、少し一諸に居て見ると、徐々鼻について來る、三月經つ中にフランソアはもうルイスに飽きが來た、で少しばかり手切れの金をやつて別れ話にしやうと思つて居る處へ、生憎ルイスは姙娠してしまつて居る、今日は云はうか明日は別れ話を切り出さ

うかと思つても、産れた我兒がどんな不幸に陷るてあらうかと考へると、それも不憫で、什麼も切り出す理由に行かぬ、もうこれまでと思つたか、或晩ルイスの留守に家財を賣りこかして、夜逃げをしてしまつた。

可愛想にルイスは男の心がこれ程早く變らうとは思ひもかけぬ、頻りに其無情を恨んだが、さて什麼すると云ふ目的もないので、母の膝へ泣きついて自分の不幸を訴へたが、間もなく一人の男の兒を産み落した。

（四）

幾年か早く過ぎてしまつた、フランソアは毎日仝じ時刻に起き、仝じ町を通り、仝じ戸を開けて、仝じ局に仝じ仕事をして年を老つてしまつたが、今ではもう希望もなければ野心もない、世界に一人ぼつちになつてしまつて、晝も夜も寂しい下宿に起臥して居るのであるが、年を老つた代りには、月給は百法を貰ふやうになつた。

で、日曜が來ると、フランソアはシヤム、エリッセへ行つて其處へ集つて來る婦人や馬車を見るのを樂みにして居るのであるが、翌る日下宿の一人にかう云ふのを例として居た。

「昨日は餘程綺麗だつたよ、ヴオア、ド、ボーロギコーから來る馬車と云つたら、そりやア見せたかつたよー

天氣の好い日曜の事であつた、フランソアは珍らしくモーショオー公園の方へ杖を曳いた、すると路側に十歳ばかりの男の兒と、四歳ばかりの女兒を遊ばせて居る一人の婦人が在つたが、見るとそれは思ひ懸けもないルイスである。

フランソアは思はず知らず其婦人の方へ寄つて行つて共仝椅子へ腰を下して、婦人の擧動を瞻めて居たが婦人は氣が注かぬやうに、小供の手を曳いて行つてしまふから、フランソアは急で其跡をつけた、五六間行つて婦人が其處へ踞むと、小さい女の兒が砂で城を拵へ始めた、男の兒は茫然婦人の側に立つて居るのである。

婦人は正しくルイスである、が見違へたのは身の廻りが小綺麗になつて、何處から見ても令夫人と見えるので、側へも寄り兼ねて、フランソアは遠くから見て居ると、不意と男の兒が首を上げて此方を見た時に、思はず慄然として躊躇いた、それが自分の兒であらうとは思ひも懸けぬ、あゝそれが自分の顏に生寫して、幼い時に

撮つた自分の寫眞を見るやうなので、立木の後へ隠れて、遣り過ごして、後をつけやうとしたのである。

フランソアは其晩寢る事が出來なかつた、小兒の事が激しく胸を衝たからで、確かに自分の兒であつたらうか、確かにそれに相違ない、若し相違ないとすれば什麼したものであらうと云ふ事が始終脳の裏を往來した、今はもうルイスが昔住んで居た家へ行つて聞いて見るより外の手段はない！

ルイスはフランソアに見捨てられてから、産落した兒を對手に寂しい生活を立てゝ居たが、直ぐ隣りに住んで居た物堅い心學者がルイスの不幸を憫れに思つて、男の兒ぐるみ引取つて、自分の妻にしたのである。

毎日曜フランソアはモーショオー公園へ出掛けるが、乾度またルイスと自分の小兒に遇ふ、遇ふ度びにまた其兒が可愛いので、狂人のやうになつて、其兒の手が曳いて見たく、其兒の頬に切吻がして見たく、いつそ其兒を盗んで、連れて行きたく思ふのも無理はない。

鰥夫者の寂しい境界に恐しく惱んで居るフランソアは更らに性理上の拷問に恐しく惱まされて、自分の兒を慕ふ情は益々烈しくなつた、て、或日曜ルイスに公園で遇つた時に、突然側へ寄つて行つたが、戰慄へる口にかう云つたのである。

『ルイス！　お前は俺を見忘れたのかえ？

ルイスはフランソアを一目瞻ると、『アッ！』とばかりに二人の兒の手を曳いて駈け出した、が、恐らくは家へ歸りつくまで、否、歸つてからも深い哀みの情に打たれたであらう！

フランソアは凝ずまに公園へ通つたが、其後ルイスはさて置いて、小兒の影も見る事が出來なかつた、が、フランソアの胸には夜となく晝となく小兒の愛が往來して、一度でも其兒に切吻する事が出來なければ氣死してしまふ、切吻するまでは事に依つたら謀殺もやらう、どんな危險でも冒して見せる――あらゆる手段を執らさう！

フランソアはルイスに都合二十通ばかりの手紙を贈つたが、何の返事もない、もう此上は彼女の決心を飜す事は出來ぬと思つたから、今度はルイスの夫に手紙を贈る事にした、封のまゝ歸されやうとも、それは覺悟の前てある。

手紙の文言は極めて單純なものであつた。

拜啓　先生は小生の名に對しては極めて惡感を抱かせられ候事と存じ候へ共、小生は現に悲哀の極に陷り居り申候、小生の願望は先生ならでは他に相達し申すべき望み無之、僅か五分間の御面晤を辱ふし候はゞ、小生の本懷之に過ぎず、此段貴意相伺ひ申候也。

フランソア、テッシエール拜

フラメール先生

翌日ルイスの夫からまたかう云ふ返事が來た。

拜復、折角の御望に候へは、明水曜午後五時御光來被下度、切に御俟ち申居り候。

フラーメル

フランソア、テッシエール殿

（五）

フランソア　テッシエールがフラーメルからの返書を受取つて二階へ上るまでには幾度立停つたであらう激しい感情が胸を衝いて、何處かに馬のやうな動物が疾驅するかの如き響きがして、二階へ上つてからも、姑くは欄干へ凭れて、深い想ひに耽つたのではあるが、若し欄干の小柱がなかつたら、彼は地上に轉げ墮ちてしまつたゞらう。

て、フランソアは約束の時刻にフラーメルの寓居へ來て、鈴を押すと、一人の下婢が戶を開けた

『フラーメルさんは此方でせうな？』

『左樣でございます、どうぞ此方へお出で遊ばして

應接處へ導かれたが、獨り俟つて居る間と云ふものは自分の胸を掻拗りたいやうに、少しも氣が沈着ぬ、姑らくすると其處へ一人の紳士が現はれたが、脊の高い嚴肅な、寧ろ剛壯な容貌をして、黑のフロックコートを着て默つて椅子を押遣つた。

テッシエールは其椅子へ腰を下してさも云ひ憎さうに

『始めてお目に懸ります、定めて私の名前は御承知でもありませうが、突然上りまして

『いやもう、貴郎の事は妻から毎々伺つて居りまするので、其御挨拶には及びません

フラーメルの聲は眞個に紳士の態度を保つて、嚴かに沈着き拂つて響いたが、テッシエールはまたかう云つた。

『では早速ではありますが、私の昨今は憂愁と苦痛と慙愧とに殆ど死ぬばかりでございます、どうぞ、先生子供――俺の悴に一回の切吻をお許し下さいませんか！

フラーメルは立ち上つて鈴を押したが、其處へ直ぐと下婢が來た。

『こら〳〵、ルイスを此處へ呼んで來い！

下婢は出て行つた、二人の主客は一言の詞なく、互に顔を見合すのみであつたが、姑くすると十歳ばかりになる少年が突然馳け込んで來て、彼が自分の父であらうと信ずる人の方へ身を寄せたが、何と思つたか急に立ち停つて、客人の顔を瞻た。

『オイ、ルイス、其お客さんと切吻するがいゝ！

少年はテッシエールの側近く其顔を仰いたのである。

フランソア、テッシエールは立ち上つた、で、フラーメルが、妙な端目になつて、默つて見ても居られぬから後向きになつて窓を覗いて居る間に、其兒の帽子を除つて、顔を見る爲めに自分もまた中腰になつたのである。少年は其身が什麼なり行くであらうと云ふ事を懸念する模樣であつたが、それでも臆面なく床に落ちた帽子を把つてフランソアに渡した、するとフランソアは突然其兒を抱き上げたが、頬と云はず、眼と云はず、口と云はず、髪と云はず、無闇に切吻し始めたから、少年は懊惱に堪えぬ、彼方此方へ身を捻つて、小さな手でフランソアの顔を突き除けるやうにしたが、フランソアは不意に少年を手から下して、

『有難うございました、左樣なら！

と云ふかと思ふと、周章窃盜のやうに身を翻して出て行つてしまつた。

（完）



上代 日本文明の面影

(本朝最初の女文豪)

塚越停春

其一、奈良の世盛り

(奈良朝の文章藝術)

空見つ大和の國家が打建てられて、こゝに八百年、九百年とは成れり。其處此處に蒔き散らされし國民は、漸く繁り合ひて、西の方筑紫の磯廻より、東の方陸奥の安太多良が山の山下まで、清き小川の流に沿ひ、涼しき木立の蔭を漏れ、三筋五筋の炊烟を颺ぐるもの稀ならず。しば〱出し出されたる遠征の師は、百濟の野を巡り、新羅の山を獵り、幾度か送り送られたる遣隋使、遣唐使は日の沒る國の彼方に到り、其富を取り、其文化を收め、持ち來りて之を日東の日暖かく草緑りなる野邊に植付けたりき。

其處此處に繁り合へる國民は、之を一統して國家的活動を發せしめざれば叶はぬ也。持來りて植付けたる文化は、之を助長して新なる世運の花を開かしめずしては叶はぬ也。去れば時代は、次第に國内を統紀し、内地の富源を開拓し、民族の文化を發達せしむべき要用を自覺し來りき。雄略帝は最も早く此の大勢を自覺し給へるものなりしも、全く之を事實にすべき準備を有し給はざりし也。舒明推古の朝に至り、聖德太子亦此の自覺を得給ひしも、時機の未だ熟せざるもののあるを如何にもし給ふこと能はざりし也。然るに天智帝に及び、夙に英邁の資を以てし、加ふるに帷幄に其人ありければ、先づ蘇我氏を斃して中央政府に蟠りたる情弊を一洗し、之を機會に大化の革新をなし、以て中央集權の大政策を定め給へり。殊に神功后の昔より富と文化との門戸たりし朝鮮半島の版圖は、帝自ら母天皇を奉じて西征し、朝倉や木の丸殿に御鎧の袖を片敷き旅寢の夢を結ばせ給へるに拘らず、時に利あらずして之を見棄つるの止み難きことゝなり、今は全く内地の富に依賴して内地の繁昌を圖る外なく、全力を内治の改良に用ゆべき時となりたり。藤原時代奈良時代は、實に此の大政策を承け繼ぎて之を實行したる時に外ならず。之を實行して著しき之が效しを見たる時に外ならず。

亞細亞の東、蒼海の外、雲懸き波迷ふが中に、縹緲として遊龍の若くに隱見しつゝある我邦は、黑潮渚を洗ひ海風山を吹き、輕烟となり、細雨となり、凝りては滴らむと欲する翠りの岡となり、發ては雪の如き櫻の花となり、優麗高雅にして活潑勇敢なる國民となり、清淨を愛し、潔白を愛する風俗となりしと共に、廣狹限りある島國の慣ひとして、之を進め之を高むるには、世に大に外來の刺擊を待たざれば叶はざりし也。文化の輸入は進歩すべき我の欲くべからざる糧なりし也。而して朝鮮半島は、北我の版圖に在ると在らざるとに拘はらず、毎に此の糧の供給所にして、就中其媒介に依りて輸入したる支那六朝の文物と佛教とは、我が文化の發達に大飛躍の翅を與へたり。發して推古時代の開化となりしもの是れ也。天智の西征は我に取りて利益ある終局を見たるものに非ざりし。而も此の日に於ける唐兵との衝突は、不思議にも唐人との握手を媒介し、遂に唐人との間に文化の直輸入を開始し、唐人の聚集したる印度波斯希臘の文化を併せて之を輸入したり。發して天智時代の開化となりたるは、則ち實に此の輸入開化也。

此くの如くして一時天下を風靡したりし朝鮮風の開化も、唐風開化も、國民に咀嚼せらるゝに及び、漸く日本固有の開化に調和し始めり。一方に世界的開化が盛に輸入せらるゝと共に、一方に着々日本固有の開化と調和し、以て新なる開化として大に我が内治を文飾したるは、實に藤原時代より奈良時代に延び、天平を其絕頂としたる開化也。

國造縣主が地方に割據したりし弊は、郡縣となりて十分ならざるながらも救はれたり。大臣大連の權勢を專らにしたる弊は、左右大臣内大臣を置かれ、八省百官を置かれたるより十分ならざるながらも救はれたり。戸籍は作られ、班田の制は設けられ、租庸調の法は立ち、軍制は改められ、人材登用の道は開かれ、藝術は保護せられ、天智帝の命に依りて藤原鎌足等に撰ばれ、天武帝の時に刊修せられ、持統帝によりて諸司に頒たれ、文武帝の時更定せられたる法令は、名にし負ふ大寶令として發布せられたり。學校は天智の朝に起され、文武の朝には唐制の大學も國學も置かれたり。佛教は大に興り、名智識の入唐するあり、高僧の唐渡するあり、佛像佛經等盛に齎らし來られ、盛に製作せられ、堂塔は盛に造られ

たり。遂に奈良の都の建設となり、幾多の大伽藍の築造となり、國分寺の設置となり、千古の偉觀たる金銅盧舍那佛の建立となるまでに至りたり。而して當時已に輸入開化と國粹との調和を圖りつゝありたる跡は、其今に遺されたる彫刻繪畫建築等にて明に之を認むべきのみならず、役行者が藤原時代に本地垂跡說を出し、以て固有の神道思潮と外來の佛敎思潮とを調和せむとし、行基菩薩が奈良時代に其勸善的三道合一を客體本質の合一となしたるを見て、其一斑を察すべし。

從て社會の狀況は一轉し、國民の生活は一變せり。試に此の頃の美術工藝品を觀れば、通常の彫刻、雜嵌、鑄物、抹漆、繡纈は言ふもさらなり、七寶もあり、玻璃もあり、平文もあり、螺田もあり、末金鏤もあり、密陀畫もあり、金銀莫臥爾もあり、臈纈夾纈等の染物もあり。其精巧なるは今日に在りても殆ど摸倣し能はぬものさへある也。住居に在りても、聖武の世には已に五位以上及び庶民の富めるものは、瓦を以て屋を葺き、丹堊を以て之に塗らしめたりき。

男女の交通來往は自在なりき。歌垣は盛に行はれたりき。宴飲遊樂は盛に開かれたりき。音樂、投壺、圍碁、雙陸、彈弓等の遊戲は盛になされたりき。慈善事業に至るまで起りて、施藥院悲田院は建てられたりき。



要するに聖武帝の天平を絶頂としたる藤原時代奈良時代の八十年は、内地の富を發き、世界の文化を聚め、以て其昇平を樂みたる時代にして青丹よし奈良の都は花の如くに榮え、世を舉げて現代趣味を趁ふて、豪華に醉ひ、逸樂に狂ひ、鳥の若く歌ひ、蝶の若く舞ひ、菅の根の永き春日が偏に其暮れさらむことを望むのみなりき去れば世に美醜の標準はありて愛憎すれども、善惡の標準ありて好惡することはあらざりし。多情と無情との標準はありて喜悲すれども、正邪義不義の標準ありて去就することはあらさりき。一方に佛教の思潮は、澎湃として一世を震盪したれども、何人も現代を犧牲にして後生を祈るに非ず。只管に現代の快樂を祈り、併せて來世の快樂を祈るものな

りき。

世の進み人の榮え既に此くの如し、國民の思想は爭でか發して文學の花と作らさるべき。果然、我邦に於ける最始の文壇は開かれぬ。一方には輸入文體を用ゐて、歴史の編輯となり、律令となり、漢詩となり、古事紀は出て、日本紀は出で、大寶令は出て、懐風藻は出て、一方には我邦固有の言語に基きたる文體を用ゐて、宣明となり、祝詞となり、風土記となり、氏文となり、上代以來に有したりし和歌の大發暢となり、柿本人麿、山部赤人、高橋蟲麿等か家集出で、山上憶良の類聚歌林出で、遂に高名なる萬葉集出づるに至れり。更に印刷術さへ起りて宗教書類は印行せられたり。

中に就き最も著しきは和歌の發達にして、第一に人麿に由りて藤原時代に大成せられ、憶良之に次きて悲壯の調を奈良時代の初に歌ひ、山部赤人稍後れて高雅の詠を奈良の盛時に出し、天平より天平勝寶の春闌に落花雪の如き時代には、大伴家の姉妹兄弟出て、當日の社會を歌ひたりき。此の間に在りて、人麿に非ず、憶良に非ず、赤人に非ず、別に一種の風調を以て、當年の婦人思潮を代表し、我が民族の有したる最始の文壇に最始の女文豪たりしものは、之を大伴家詞客の一人大伴坂上郎女其人なりとなす。

其二、大伴坂上郎女

葑を采り、菲を采る、下体を以てするなかれと云り。大伴坂上郎女を觀るもの、唯其女文豪たるを見て可也。唯其時代の反影たるを見る可也。

南都五朝七十年の花と愛でられしもの二。現實界の花として、政治界に社交界に、將た宗教界に、美の女神とあがめられしは、光明皇后藤原氏其人也。思想界の花として、詞壇に、社交上に、美の女神とあがめられしは、大伴坂上郎女其人也。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

大伴家はもと高名なる武將の家にして、天照太神の元老高皇產靈尊に出て、瓊々杵尊高千穗降臨の日の先鋒たる天押日命の後、神武建國の當時に於ける佐命の元勳道臣命の後裔たり。武持初めて大伴宿禰と稱し仲哀帝の大連となり、金村に至り、繼體帝を擁立して當年の柱石と稱せらる。金村の子磐、筑紫を總督し其弟狹手彥、往て任那を鎭し、高麗を破て大功あり。咋の子長德あり、孫咋亦兵に將として任那を救へり、

馬來田あり、吹負あり、吹負は有名なる壬申役の勇將也長德字は馬飼と云ひ、大化朝の右大臣たり。長德の第六子に安麿あり、佐保大納言と稱す。之を坂上郞女等の父となす。今長德以下其重なる族人を擧ぐれば左の如し。

- 大伴吹負—大伴道足—大伴駿河麿
- 大伴長德
  - 大伴御行—大伴御依
  - 大伴安麿
    - 大伴旅人—大伴家持／大伴書持
    - 大伴田主
    - 大伴宿奈麿—田村大孃
    - 大伴坂上郞女—坂上大孃／坂上二孃
    - 大伴稻公

其中彼女の伯父大伴御行は、壬申の役に功あり、天武の朝に小錦上兵政官大輔となり、封百戶を賜ひ、持統の朝に正廣肆に進み、五百戶を增封せられ、氏上となり、文武の朝には其國司としての政績を褒せられて、正廣參、大納言に任じ、年五十八を以て大寶元年に薨せしもの。其薨するや帝深く之を悼惜し、爲に大射を罷め、藤原不比等を遣はし、第に就て正廣貳右大臣を贈らる。之を我邦最



初の贈官となす。其文武の才ありたること知るべし。而して彼女の父大伴安麿も亦壬申の役に從ひたりしもの也。初め從て叔父大伴吹負の軍中に在るや、吹負飛鳥寺西營を稱ふに及びて、乃ち彼を遣はして之を不破の宮に告げ奉らしめぬ。後小錦中を授けられ、直大壹に進み、文武帝の大寶元年從三位に叙し、式部卿となり、朝政に參與し、兵部卿に遷り、慶雲二年大納言に任じ、太宰帥を兼ね、正三位に進み、後大將軍を兼ね、元明帝の和銅七年を以て薨し、從二位を贈られたり。此等の履歴に由りて之を觀るに、彼亦彼が家歷代の血を承けて立派なる武人なりしと共に、兼て政治の手腕をも有したるものなるに似たり。加之其巨勢郞女(大伴田主の母)を聘する時歌ふて、

玉葛實ならぬ木には千早振る
神ぞつくとふならぬ木毎に

と云ひ、郞女の之に答へて、

玉葛花のみ咲きてならざるは
誰か戀ならめ吾はこひもふを。

と云へるに依れば、兼て多少の詩才なきに非ざりしを見る。

彼女の母たる石川命婦色姿に至ては、性慧敏にして取り分け文藻に富みたるもの也。嘗て冬日天智の皇女水主内親王病に臥して寢膳安からざるに方り、太上天皇（元正）靱負御井に行幸あり、侍嬬に命じて雪を賦し、以て之を慰めしに、諸命婦皆歌を作る能はざりしめ、獨り彼女のみ歌を献じて

　松ヶ枝のつちにつくまで降る雪を
　　　見ずてや妹がこもりなるらむ。

と云ひ、又嘗て賦して

　春日野の山邊の路をそよりなく
　　　通ひし君が見えぬ頃かも。

と云ひたることとありき。

若し夫れ彼女の兄たる大伴旅人に至ては、啻に文武の才幹あるのみならず、詩歌に長じ、殊に和歌は萬葉集中一種異色の歌人と稱せられ、酒を愛すること甚しく、世を憤り、時を罵り、豪放にして竹林の遺風ありたり。而も晉人の如くに全く事を厭するものに非ざりしは、其元明朝に正五位上左將軍となり、和銅中從四位下に進み、再び左將軍となり、元正帝の靈龜元年從四位上に進み、中務卿に任じ、養老二年中納言に拜し、尋て正四位下に進み、山背攝官となり、隼人反て大隅守陽侯麿を殺すに及び、征隼人持節大將軍となり、討て之を平げ、五年從三位に叙し、聖武帝の神龜中正三位に叙し、封を增し物を賜ひ、山城國事を兼知し、出でゝ太宰帥となり天平二年召還されて太納言に拜し、三年從二位に叙し、年六十七を以て薨じたるを觀て之を知るに難からず。

而して其詩才ありたることとは、嘗て初春宴に侍して、

寛ㇾ政情既遠。迪ㇾ古道惟新。穆々四門客。濟々三德人。梅雪亂二殘岸一。烟霞接二早春一。共遊聖主澤。同賀擊壤仁。

と云へるを觀ても之を察するに足り、彼が人と爲り及び其和歌の才は、嘗て讃酒歌を作りて、

　古の七の賢き人とも、欲りするものは
　　　酒にしあるらし。
　かしこしと物言ふよりは酒飲みて
　　　醉ひ泣きするにまさりたるらし。
　あな見にくさかしらをすと酒飲まぬ
　　　人をよく見れば猿にかも似る。
　今の代に樂しくあらば來む世には

虫にも鳥にも吾はなりなむ。
生ける人つひにも死ぬるものなれば
此世なる間は樂しくあらな。

と云へるを見ても之を推するに足る。是れ豈時俗の文飾主義に反對し、佛敎の來世說を無視し、以て最も直截明快に現世趣味の福音を傳へたるものなからむや。

彼女の弟たる兵庫頭大伴稻公は、

時雨の雨間なく降れゝば三笠山
木ぬれあまねく色づきにけり。

と云へる歌の作者たる一事より觀て、其文藻を知るべく、又彼女の異母兄弟たる大伴田主（大伴安麿の第二子。母は近江朝の大納言巨勢人の女巨勢郞女）は、

大伴田主。字曰二仲郞一。容姿佳艶。風流秀絕。見人聞者靡レ不二歎息一也。時有二石川女郞一。自成二双栖之感一。恒悲二獨守之難一。意欲レ寄レ書。未レ逢二良信一。爰作二方便一。而似二賤嫗一。己提二鍋子一。而到二寢側一。哽音蹢レ足。叩レ戶諮曰。東隣貧女。將レ取レ火來矣。於レ是。仲郞暗裡非レ識二冒隱之形一。慮外不レ堪二拘接之計一。任レ念取レ火就レ跡歸去也。明後女郞旣恥二自媒之可一レ愧、復恨二心契之弗一レ果。因作二斯歌一。以贈二謔戯一〇。



みやび男と我は聞けるを宿假さず
吾を還せりおそのみやび男。

大伴田主報贈歌、

みやびをに吾はありけり宿假さず
還せる吾ぞみやび男にはある

石川女郞更贈二大伴田主中郞一歌、

吾が聞きし耳によく似ばあしかびの
足なへ吾背つとめたぶべし。

依二中郞足疾一、贈二此歌一問訊也。

と傳へたる逸事を觀て、其人物も知らるゝ也。其他彼女の女婿大伴駿河麿の父たるべしと傳へらるゝ大伴道足（或は云ふ、彼女の兄弟）は、文武帝の慶雲元年に從六位下より從五位下となりたるに身を起して、參議南海道鎭撫使に至り、又彼女の兄弟の一人（大伴安麿の第三子）なるべしと傳へられたる彼女の良人大伴宿奈麿は、元明帝の和銅元年に從六位下より從五

位下となりたるに身を起し、同く九年には從五位上、元正帝の靈龜元年には左衛士督、養老元年には正五位下、同く三年には按察使として安藝周防二國を管し、同く四年には正五位上となり、聖武帝の神龜元年には從四位下となりしものにして、相當の詩才もありたり。此等の彼女か姻族を觀るに、彼女の家は、實に彼女の兄旅人の長子たる家持か嘗て歌ひて、

敷島のやまとの國にあきらけき
　名に負ふ伴のを心つとめよ。
劍太刀いよゝ研ぐべし古や
　さやけく負ひて來にし其名ぞ。

と云へる如く名譽ある武將の家なりしも、亦一方には極めて文藻に富むの血を傳へたる家なりし也。彼女か彼女となりしも其故なきに非ざるへし。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「春過ぎて夏來たるらし白妙の衣乾したり天の香久山」と時の女帝の歌ひ給へる頃なるへしと想像せらる。大和高市の野に於ける一貴族の家に、玉の如き女兒は擧げられたり。而して彼女は、武健なる父と慈敏なる母との間に、寵愛の手にかき抱かれ、時平かに人和し、上下凞々として、一意に内治の文飾に從ひ、陽春德澤を布き萬物光輝を生せずと云ふことなく、時の天皇は數々吉野の離宮に幸して、瀧つ河内の高殿に春の花秋の紅葉を愛でさせ給ひ、千古の詩聖柿本人麿は高く巧妙の辭を放て、昇平を皷吹しつゝありし時運の搖籃に搖られ、一揚と共に可愛ゆき春を迎へ、一里と共に可愛ゆき秋を送り、また餘念とてはあらさりき。

彼女は其年長けたる後に於て然りし如く、稚き當時も麗質玉を欺き、而も涼しく張りある眼元を有し、仙家の玉露撫子の花に置き、朝暾曦々、之を射るか若く、夙に聰慧穎悟なる少女なりし也。而して彼女は其聰慧穎悟を以て當年の大貴族か其愛嬢に施したる敎育を容易に吸收し、容易に消化したるものゝ如し。吾等は後年に至り、彼女か其才華と共に發揮したりし文辭を見、他方には彼女と世を同ふしたりし光明皇后か峻麗明敏なる手跡を今に遺しつゝあるものを見て、彼女等の敎育かほゞ如何なるものなりしかを想像し得べし。

此くの如くにして彼女は、花の如き妙齡の彼女となれり。彼女の兄弟たる田主仲郎か男子として並びなき儀容を有したりしか如く、彼女は婦人として絶世の容色

有したりき。加ふる慈敏比なく、雲の若き詞藻を有せり去れは彼女の頭上には幸福の天使か恰も罌粟の花に狭まる胡蝶の若く舞ひ上り舞ひ下りつゝありたるかと想はれぬ。

然れども彼女は其才色が未た大に世に發表せさるに先ち、或は其異母兄に非ずやと世に傳へられたる大伴宿奈麿と戀に落ちたり。而して彼と彼女は、此時已に才色彼女に比すへく、若くは彼女に亞くべき田村大嬢を擧げ、坂上大嬢を擧げ、又坂上二嬢を擧げたりき。世に彼女の彼と婚したるを以て、彼を最後の良人として婚をなしたるものゝ如く稱すと雖、和銅元年既に從五位に敍せられし彼の年齒より推し、天平の初年既に彼等の三女が婚嫁の期に在りたるより推して、吾等は、彼と彼女とが彼の五位に昇りたる前後に於て、方に「戀」に在りたるへきことを想定す。

而るに好事魔多きは古猶今の如く、彼等の間に咲き誇りたる幸福の花は、滿つるを疾む天道の風雨に撲たるゝことを免れざりき。彼女の才色が大に世に發表せられて忽ちに天下の視聽を聚むるや、彼等は永く同一の關係を保續すること能はざるの困難に遭遇したり。彼女は其後幾多の情誼に纏綿せられて、竟に穗積親王に召さるゝに至りぬ。親王は天武の第五子にして、文武帝の慶雲二年忍壁親王薨去の後知太政官事となり、一品に敍し、勢威赫々たりしもの也。



彼女は歌ひき、

おしてる、難波の菅の、ねも
ごろに、君が聞こして、年深
く、長くしいへば、眞十鏡、
とぎし心を、ゆるしてし、其
日のきはみ、浪のむた、靡く
玉藻の、かにかくに、心はも
たず、大船の、頼める時に、千早振る、神や離けむと、
空蟬の、人かさふらむ、通はせる、君も來まさず、玉梓
の使も見えず、なりぬれば、いともすべなみ、烏玉の、
夜はすがらに、あからひく、日も暮るゝまで、歎けど
も、しるしをなみ、思へども、たづきを知らに、手弱女
と、いはくもしるゝ、手童の、音のみ泣きつゝ、たもと

ほり、君か使を、待ちやかねてむ。
はじめより長くいひつゝ恃めずば、斯る思に逢はましものを。

宿奈麿は歌ひき、

打日さす宮に行く子を眞悲み、
　留むれは苦し、去ればすべなし。
難波潟汐干の名殘りあくまでに
　人の見る子を吾しと乏しも。

と。以て當年の事情を察すべし。

斯くる彼女は此の親王の爲に殆と譬ふるに物なからむと欲するまでの寵幸を忝ふしたり。其寵幸を忝ふしたる紀念として彼女は一の王孫を擧げたり。今城王是也。後姓を賜ひて大原眞人今城と稱し、屋家持等と唱和し、孝謙帝の天平寳字元年正六位上より從五位下、治部少輔となり、淡路廢帝の天平寳字七年に左少辨、上野守となり、八年に從五位上となり、事(惠美押勝の亂乎、淡路廢帝退位の當時乎)に座して位官を奪はれ、光仁帝の寳龜二年再び本位從五位上に復し、兵部少輔となり、三年駿河守となりし彼是也。萬葉集に

雨障り常する君は久方の
　昨日の雨に懲りにけむかも。

と歌ひて、彼の母なりと傳へられたる大伴郎女は、其未だ佐保の坂上に家せざる以前の彼女(萬葉集に雨障りの歌、藤原麿との贈答の歌は、大伴郎女と署し、坂上に家して坂上郎女と號すと註したる以後の歌は、大伴坂上郎女と署するに注意すべし)にして、大伴御行の女、大伴旅人の妻たる大伴郎女とは別人也。而して彼か大原眞人の姓を賜ひたるは、父穗積親王の兄たる長親王の孫高安王、櫻井王(川内王の子)が共に大原眞人の性を賜ひたると同く之を賜ひたるものなる如し。現に彼は、高安王の女高田女王と婚(萬葉集、高田女王贈二今城王一歌六首を載す)を結びたるものなりき。

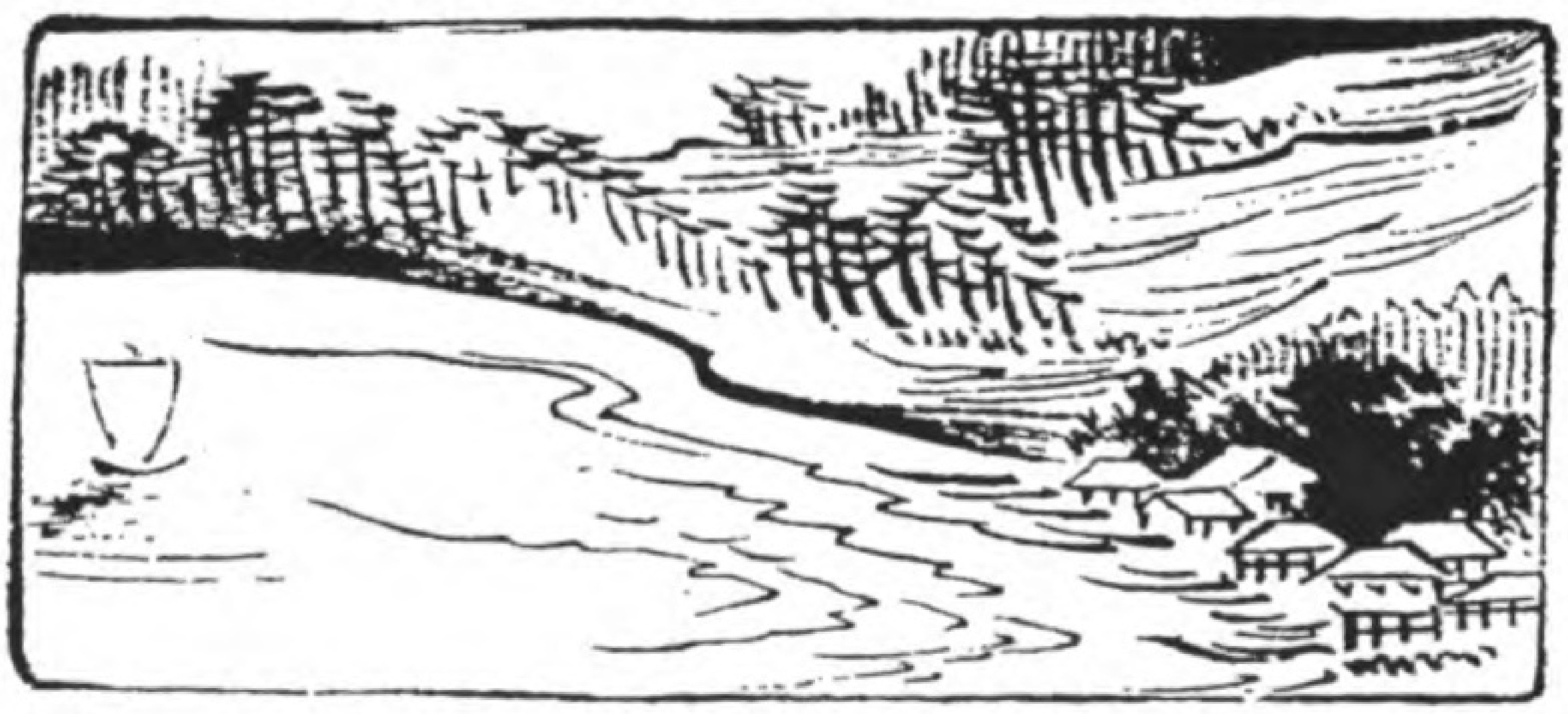
既にして尊嚴なる皇子の命は、知太政官事たること十一年、彼女に寵榮を贈りつゝありたること甚だ僅かにして、元明帝の靈龜元年七月、立初むる秋風の誘ふ所となり、桐の一葉と共に、斯の世の藉を脱し去り給ひぬ。而して當年第一の名花たりし彼女は、其後淡海公不比等の第四子にして京家の祖先たる藤原麿其人の折る所となりたり。婦人は常に母家に住みて夫婿之に通ふを習俗とし、從て再嫁に關する觀念の如き全く後代に同

しからざる當時は、此の如き再婚は實に世の常なりし也。彼は彼女に贈りて言ひき、

乙女等か玉櫛笥なる玉櫛の
神さびけむも妹に逢はずあれば

よく渡る人は年にもありとふを
いつの間にぞも我が戀ひにける

彼女は此の頃より佐保の坂上に嫁して、大伴坂上郎女と稱せられしもの、如し。然りと雖、も彼と彼女との交情は決して永く圓狀に在ること能はずして、往々に冷熱の變あることを免れざりき。蓋し彼は元正帝の養老元年正六位より從五位下に遷りたるより出身し、五年に從四位上、左京大夫となり、聖武帝の神龜元年に正四位上、天平元年に從三位、三年に兵部卿、參議、山陰道鎭撫使となり、九年に持節大使として蝦夷征討に陸奥に向ひ、其歳七月年四十三を以て薨じたるものにして、彼女が一たび未亡人となりたる其日は、彼方に年廿一也。願ふ彼は寧ろ彼女より年少者なりしなるべく、加ふるに、彼の人となりや、辨慧多能にして、善く文を属



し、才世の推す所となりたるに拘らず、放曠にして、琴酒に耽り、恒に稱して『聖主上に在り、賢臣下に在り、僕が如きものまた何をか爲さむ、唯宜しく琴酒自ら樂むべきのみ』と言ひたりしもの。其年を經るに從ひ、彼女に注ぐべき全幅の愛を分ちて屢之を琴酒の上に注ぎたること勿論なるべし彼女は歌へり、

佐保川のさゞれ踏み渡りぬば玉の
駒の來る夜は年にもあらぬか。

千鳥啼く佐保の川瀬のさゞれ波
止む時もなし吾か戀ふらくは。

來むといふも來ぬ時あるを來じといふを
來むとは待じ來じといふものを

千鳥啼く佐保の川門の瀨を廣み
打橋渡す汝か來と思へば。

彼女の切なる愛も、猶容易に彼か酒城を破ふること能はさるものありしに似たり。彼女は徒に待つの外せむすべなかりしならむ乎。

佐保川の岸のつかさの柴を刈りて

ありつゝも春し來たらば立ち隱るがに

而して彼か叔母に安倍朝臣蟲麿と贈答して、

安倍朝臣蟲麿

向ひ居て見れども厭かぬ吾妹子に、
立別れ行かむたづき知らずも。

大伴坂上郎女

逢見ぬはいくばく久もあらなくに
こゝばく吾は戀ひつゝもあるか。

戀ひ〳〵て逢ひたるものを月しあれば
夜はこもるらむしましはあり待て。

と云ひたるは、其後の事なるべく、又大伴駿河麿と贈答して、

大伴駿河麿

益荒雄の思ひわびつゝたびまねく
歎く歎きを負はぬものかも。

大伴坂上郎女

心には忘るゝ日なく思へども
人の事こそ繁き君にあれ。

大伴駿河麿

逢見ずてけ長くなりぬ此頃は
いかによけくやいぶかし吾妹。

大伴坂上郎女

夏葛の絶えぬ使のよどめれば
ことしもあるごと思ひつるかも。

と云ひたるも其後のことなるべし。蓋し郎女の母石川内命婦は嘗て蟲麿の母安曇外命婦と同く居りて、殆と姉妹の如く親みたりしより、二家は互に相往來し、郎女蟲麿亦互に相知り、爲に斯く戯歌を作りて贈答したるものなりと云ひ、彼女は佐保大納言（安麿）の女、駿河麿は高市大卿（吹負か）の孫にして、兩家女孫姑姪の族なるより、亦斯く歌を題して起居を相向ふなりと傳ふ。唯彼女と駿河麿との間には、此の外尚幾多の相贈答したる歌ありて、單に起居を相問ふの間のみにはあらさりしが如し。而して彼は實に彼女の女婿たる也。知らず、彼女の數々彼と相贈答したるは、實に其女の爲なりし乎將た彼女自らの爲めなりし乎。

是より先彼女と宿奈麿との間に有したりし三麗人は、既に長して相婚嫁すへき日に到達し、彼女は爲に少なからぬ心配と煩勞とを費したるものゝ如し。其中長女は父宿奈麿の居所たる田村の里の家に在りて、田村大

嬢と稱せり。故に彼女(母)と彼女(田村大嬢)との間は他の二女との間に於けるが如き多くの關係は有せざりき。萬葉集に大伴稻公(坂上郎女の弟)より田村大嬢に贈る歌あり。彼等の間に果して愛の關係の成立するに至りたりしや否やを知らず。而して他の二女たる彼女等は、共に母の家たる坂上に在りて姉を坂上大嬢、妹を坂上二嬢と稱し、大嬢は郎女の兄旅人の長子たる家持に嫁し、二嬢は駿河麿に嫁せり。母の彼女が一日橘を詠して、

立花を宿に植え生ふせ、立ちて居て
後に悔ゆともしるしあらめやも

と云へるは、姉大嬢の婚を家持に促したるもの、家持か

吾妹子の宿の立花いと近く
植てし故にならずば止まじ。

と賦したるは之を諾したるもの也。又駿河麿か一日

梅の花咲きて散りぬと人はいへど
吾がしめ結ひし枝ならめやも。



と云へるは、彼か妹二嬢の外なる婦人に遭へりとの世評を辯解したるもの、彼女が彼を[illegible]して、

山守のありける知らに其山に
しめ結ひ立てゝ戀の恥しつ。

と吟せるは、其女の爲に彼を詰り、彼か更に

山守はけだしありとも吾妹子が
結ひてむしめを人咎めやも。

と歌ひたるは、其斷して隔意なきことを繰返したるものなりき。

而して彼女自身に在りては、其良人(藤原麿)との關係が漸く疎なるより、此の前後に於て、往て宰帥たりし兄旅人に筑紫に頼り、或は大伴御依(御行の子)に其依然として姿色の衰へさるを驚れて、

吾妹子は常世の國に住みけらし
昔見しより若えましけり。

と叫ばれ、或は族人にして其兄の[illegible]たる太宰大監大伴百代に慕はれて、

事もなくあり來しものを老なみに
かゝる戀にも吾は逢へるかも。

と呻吟せしめ、

黒髪に白髪まじり老るまで
かゝる戀には未だ逢はなくに。

山菅の實ならぬことを吾によせ
言はれし君は誰とか寐らむ。

と答へ、都を空を望みては、

吾背子が見らむ佐保路の青柳を
手折りてだにも見むよしもがな。

と偲ひ、思ひを駿河麿夫妻の上に馳せては、

久方の天の露霜置きにけり
家なる人も待ち戀ひぬらむ。

玉主に玉を授けてかつ〳〵も
枕と吾はいざ二人寐む。

と歌ひしが、天平二年其兄の大納言に遷るに當り、倶に與に都に歸りぬ。歸途には名兒山（筑前國宗形郡）を越えむとして、名兒山の名に負ひつゝも、吾か戀の千重の一重も慰めぬを恨み、海路濱貝を見ては、暇あらば戀忘れ貝を拾ひ行かむと欲したりき。而して彼女の此の行は彼女の心裡に少なからず紀念を留めたりしものと見え、其翌天平三年の夏（？）、彼女は筑紫の大城山（三笠郡四天王山）を思ひて、

今もかも大城の山に郭公
鳴きどよむらむ吾なけれとも。

と歌ひたりき。而して彼女の兄大伴旅人は是歳を以て薨しぬ。

翌天平四年三月一日佐保の宅に在りたる彼女は

世の常に聞くは苦しき喚子鳥
聲なつかしき時には成りぬ。

と吟じ、天平五年十一月には其氏神を祭りて、

久方の、天の原より、あれ來たる、神の命、奥山の、賢木が枝に、しらがつく、木綿とりつけて、いはひべを、祝ひまりすえ、竹玉を、しゞに貫き垂り、しゝじもの、膝折り、伏せ、手弱女の、おすひ取り懸け、斯うだにも吾はこひなむ、君に逢はじかも。

木綿たゝみ、手に取り持ちて斯くだにも、我はこひなむ、君に逢はじかも。

と詠じ、越て七年には、彼女の母石川命婦が攝の有馬温泉に浴しつゝある間に、彼女の亡兄旅人の家に寄住しつゝありたる新羅の歸化尼理願の長逝に遭ひ、彼女に獨り葬事を辨じ、畢て一大哀歌を賦せり。彼女が詩人た

る生涯は漸く其絶頂に達したるものゝ如し。

天平八年には、彼女か跡見庄の秋を思ふの歌あり。跡見庄は其弟稻公の居る處也。既に其往の如く杖の如く頼みたりし兄旅人を喪へる彼女は、此時坐ろに其弟を思はざる能はさりし也。彼女は此頃竟に往て其弟に跡見庄に頼れり。彼女が跡見庄より家に留まりたり大孃に答歌を贈りて、

常世にと、吾が行かなくに、小金門に、物悲しさに、思へりし、吾か子の刀自を、烏玉の、夜晝と言はず、思ふにし、吾身は痩せぬ、嘆くにし、袖さへ濡れぬ、斯くはかり、もとなし戀ひば、故郷に、此の月頃も、ありかてましを。

朝髮の思ひ亂れてかくばかり、な姉が戀ふれぞ夢に見えける。

と言へるは、定めて此日にありたるべし。蓋し此頃大孃と其夫婿家持との間には親しき交情を交換する能はざるものあり。爲に彼の足跡が彼女の門外に見出されざること茲に年あらむとしたり。

天平九年正月には、藤原麿東陸奥に遠征し、九月を以て遂に薨じぬ。彼の妻たりし彼女は、是歲四月往て賀茂の社に拜し、仍て逢阪山を越え、近江の海を望見し、晩頭歸來して、

木綿たゝみ手向の山を今日越て、
いづれの野邊に廬せむ子等。

と唱破したりき。願ふに彼女は此時遠く征戰に在るの夫婿が能く幸さからむとを祈りたるものなるべし。

斯くて彼女は、天平十一年聖武帝の高圓野に於ける狩に、里巷中に逸出して獲られたる一小獸を見て歌を獻じ、

益荒雄か高圓山にせめたれば
里におり來るむさゝびぞ是れ。

初瀨の山を望みて時雨を歌ひ、

こもりくの初瀨の山は色つきぬ
時雨の雨は降りにけらしも。

而して靜に『しかとあらぬ五百代小田を刈り亂り、田廬に居れば都し思ほゆ』と詠じつゝ竹田の庄に在りて、姪且つ女婿たる家持が『玉鉾の道は遠けどはしきやし妹を逢見に出てゝぞ吾が來し』と歌ひつゝ來るを見て、

荒玉の月立つまでに來まさねば
夢にし見つゝ思ひぞ吾がせし。

と喜びたりき。而して數年來相疎かりし家持夫妻の間は、是より先、若くは此の前後に於て、全く彼我の疑團を氷釋し、恰も其愛を新にしたるかの如く、彼等の間には盛なる熱情を歌ひたる詩歌の交換せらるゝを見たりき。

其後天平十三年聖武帝遷て恭仁宮(山城)に在しましたる當時には、獨り隨ひたる家持より絕えず奈良に留まりたる其妻に詩歌を贈り、天平十八年是より先に內舍人たりし家持か越中守となるや、彼に其妻を携へて任に趣きぬ。此時彼女が送別の歌に曰く、

草枕旅行く君を幸きくあれど
　いはひべすえつ吾が床の邊に。
今のごと戀しく君が思ほえば
　いかにかもせむするすべのなき。

漸く頼るべ少なくなりたる彼女は、今更の如くに心細さを覺えたりし也。越えて天平二十年、彼女は遂に歌を彼等に寄せて言へり。

つね人の戀ふといふよりはあまりにて
　吾は死ぬべくなりにたらずや。

何ぞ其辭の悲しくして而も其意氣の衰へたる。家持は答へぬ、『あまさかる鄙のみやこに天人のかく戀ひすらば生けるしるしあり』と。後二年孝謙帝の天平勝寶二年に、家持が賦したる一長歌は妻の名に由りて彼女に贈られ、彼女は其最後の作なるべしと想像せらるゝ長歌を賦して之に答へり。其辭に言ふ

海神の、神のみことの、みくしおげに、貯ひ置きて、いつくとふ、玉にまさりて、思へりし、吾が子にはあれど、空蟬の、世のことわりと、益荒雄の、ひきのまに〳〵、しなさかる、越路をさして、はふ蔦の、別れにしより、沖つ波、たをむ眉引、大船の、ゆくら〳〵に、面影に、もとな見えつゝ、斯く戀ひば、老つぐ吾が身、けだしわへむかも。
かくばかり戀しくあらば眞十鏡、見ぬ日時なくあらましものを。

ア、絕世の美人、一代の才女たる彼女も、恐らくは此の後また永く世に在りたるものに非ざるべし。宜しく幸福なるべきか如くにして竟に幸福なること能はざりし彼女の生涯は、生別死別の間に浮世の波に翻弄せられ、

南都二大名花の一たりし其才華と其紅顔とは、僅に五十年内外の假りの輝きを現して、忽ちに黯然として凋零し去りぬ。而も彼女が千古の生命は猶別に在るものありき。

編者曰く本篇は猶此の外郎女の詩歌に就て縦横に解剖したる有益なる一章あるも紙數に限あるを以て遺憾ながら本誌に收むるを得ず、別に次號誌上に於て郎女の詩歌と題して掲載せん。



○文苑



馬（竹柏園五月兼題）

大君の御手にたつさふわか駒も
　野飼のはるや思ひいつらむ　久我建通

勇ましくかけゆく様のみゆる哉
　小金かはらに駒のむつれて　水野忠敦

賤か門おもにおろして村はつれ
　馬はなへなり草しけるなり　小杉榲邨

事しあらは乗りていてんと飼置きし
　佐野の伏屋のやとうま哀れ　三浦千春

する墨も生月もあれど世の中は
　こゝろの駒の手綱ゆるふな　相澤求

たまはりし月毛の駒のやゝ馴て
　故郷へ獨さひしくもあらす　梶田半古

しはらくは鞍も御し汗にあえし
　馬にみつかふ峯のひとつや　塙忠雄

老の坂くるしき道に荷をつみて
人のたつきにかけるやせ馬　太田原清治

たち並ぶ並木の松の木の間より
野飼のこまの聲きこゆる　久原保行

いさをしを世々に傳ふる武夫も
打乘の駒のなさけなりけり　大野泰

武夫の手かひの駒は肥にけり
いつかこゆらんシベリヤの野に　大木俊九郎

草花を胸にかされる左公達
肥馬にむちわて秋の野へゆく　井上公二

うまやちの松原つゝき急きゆく
駒の立かけかせにみたるゝ　土田道一

うらゝかに春日かきろふ牧の中を
小はせに走る子うま親馬　石榑千亦

小さなる主人の君を背にのせて
青葉のかけを驢馬の歩み行く　横山碩

驛路のうまのすゝおと音たえて
並木まつかけ汽車はしりゆく　關屋祐之

田に畑につかれ／＼て瘦馬の
家路をたとる足おもけなり　諸葛坊太郎

背戸口をゆるく流るゝ夏川の
夕うきわかし馬あらひきて　澤式

ならしのに行く益良夫か勇しく
足なみたつる馬のくつの音　細川玄重

一むちを此春駒の背にあてゝ
花の大野をかけらんか我は　遠藤千浪

若草をはみあらしつゝ春の野に
いなゝく駒の聲きこゆる　高木敬二

牧童のこまにまたかり夕もやの
こもれる中を笛ふきてゆく　高見憲治

かはほりの飛ふ影見えて燈みえて
村のはつれを馬ひきかへる　早川喜隆

あはれなり姜へはてし瘦馬を
猶むちうちて追ひつかふ哉　龜山新一

田舍道うまをならへて馬の背に
かたりつゝゆく賤の男二人　新井千湧

くらへ馬に聲をあけて勇しく
鈴ならしきぬ村をさのうま　高石眞康

演習の兵ことく／＼く去りしあと
村のわらはへ竹うまつくる　笠原晴多雄

かすかにも燈火見えて家ちかし
　夕けたきてわらを急けわかこま　　小林つれな

函谷やかたむく月をあふき見て
　駒にむちうつ人かけなかれ　　齋藤逆三

寒風にやり閃かすこさつくの
　馬たけりくるシベリャの原　　北條數馬

いたつきのけふはよしとて村長の
　かなし一人子うまひき出す　　落合磊波

菜の花にたそかれ富士の低く暮て
　三里のつゝみ馬子の歌とほし　　松寺久雄

おのか背につみし重荷におすの日を
　つなく會のまさゝなりけり　　村山愼三

ひな歌をうたひかはして馬ひきて
　野道すきゆくはらはへのとも　　樺山常子

いつく又か急きゆくらん谷良夫の
　手飼の駒にたちおほせつゝ　　[illegible]子

われにあれて向より來る放れ駒
　みちゆきふりの袖そとゝろく　　滑山三露子

いさましや外國までも踏行かん
　ますらたけをの乘りまさせる駒　　板倉止子

柴のせて馬のとくわらへの
　背にも薪をおひてゆくかな　　堀越科子

若草の野に放たれて遊ぶ日は
　こまの心ものとけかるらん　　安藤菊子

手綱との人の心にのりてこそ
　駒もおほさす千里ゆくめれ　　石原米子

馬の背に馬子はねふりて結付けし
　花に小蝶のくるひ〳〵ゆく　　櫻井友子

ほまれあるけふの戰のる駒も
　ともに勇むか高くいなゝく　　三宅貞子

ゆるひなく心の駒にむちうたん
　道の長手はよしとほくとも　　大竹いせ子

たくましき馬に鞭うちいてましゝ
　君のみすかたみんよしのなさ　　田中たな子

松林うまひきかへるひとかけよ
　わのひなうたよ我背なるらん　　中村文子

それとなく歌にまきらし引く綱を
　君やあやしむ花よめのきみ　　有賀晴子

なれなくは妻子三人をいかにせん
　わか屋の寶うまにさりける　　關屋愛子

夕まくれ父はあるきていとし子を
馬にのせゆくはたけ道かな　小林茂子

馬洗ふさとの小川のゆふくれに
光たゝよふ三日つきのかけ　森田妙子

ますらをか駒のりならす夕暮の
馬場のあたり花ちりみたる　市田豐子

かなひたる其ねき事や何ならん
やしろの軒のわたらしき繪馬　久保花子

汝も又國をや思ふますらをの
駒そいさめるたゝかひのさま　遠山直子

霞たつ野草にむるゝ若駒の
わかれ〳〵にならんとすらん　松本文子

のりましゝ主かはふりの朝またき
うまやの中に馬そいなゝく　小笠原政治

荒駒の風にいなゝく聲かれて
枯野五十里雲西に飛ふ　岩本英玖子

やめる夫の茶の料と馬市に
馬ひきゆけは朝かせさむさ　岡田文子

月おほろわたり靜けき春の夜に
老馬をなてゝゑむおきなかな　池谷淺子

おそくとも心の駒したゆますは
文の山みちいつかこゆらん　稻垣安子

幼きとち木馬にのりて遊ふかな
みとりすゝしき庭の芝はら　佐々木雪子

關こえてゆくや遊子の影はみえす
いなゝき寒しありあけの月　佐々木信綱

春葉かくれ赤き鳥居のほの見えて
雨しはかなり山はとのこゑ　中村文子

我やとの若葉のおくに聞ゆなり
となりのをちか碁を圍む音　田中たを子

釜の湯の音はすきやに靜けくて
庭は木ふかく若葉しにけり　有賀晴子

梅櫻いつれをそれとわかぬまて
なへて緑になれるにはかな　大竹以勢子



●東宮殿下の東北巡啓

新聞紙上にて普く報ぜられたるが如く、東宮殿下には去月二十日を以て、御見學の爲め、東北十縣へ向け行啓あらせられたるが、御道筋たる高崎、長野、長岡、新潟等到る處の官民は、非常なる熱誠を捧げて奉迎したれば、殿下にも定めし御滿足に思召され、悠々御遊覽あらせらるゝ事ならむと察せらる、いま最近の報道によれば、去廿七日を以て新潟より高田に遊啓あらせられたる殿下には、廿八日柏崎を御巡覽日本石油會社に臨ませられ夫れより直江津海岸御遊覽の後春日山に御登臨上杉謙信の英魂を吊はせられたり

雨後の天氣未だ全く回復せず晴曇定まらざりしも雨を降らすに至らざりしかば市内の賑ひは前日の如く殊に柏崎、直江津附近は朝來數萬の拜觀人群集して非常の雜踏を極めたり殿下には午前八時四十分御旅館高陽館御出門有栖川宮殿下と共に供奉員並に柏田知事を從へさせられ同五十五分高田發の下り一番列車に召し十時三十九分柏崎停車場に御着あり在柏の高等官、奏任待遇、代議士　郡會議長、町村長等三十餘名は通常プラットホームに日本石油會社員一同は同社専用のプラットホームに整列して奉迎したり會社にては豫て庭前に御休憩所を新築し御覽に供する爲め鑿井の櫓及び二三の摸型を造りて其前面に備へたるが殿下には有栖川宮殿下と共に此に入らせられ御休憩中内藤社長以下に拜謁を給ひ石油の種類及び使用職工の數等を御下問ありたる後ち社長の御先導にて蒸餾、製罐の兩所を御巡視あり高野技師長より詳細に御説明申上げ興深く御覽ぜられしも雨催ひの天氣蒸し熱く殊に石油の臭氣甚しき爲め御氣色常ならず拜せられしより侍從長は御注意申上げ十一時廿五分同社を出てさせられ同四十分曾て行在所たりし柏崎尋常小學校に御立寄り此に有栖川宮殿下を待合はさせらる同殿下は社内隈なく御巡覽の上十二時少し前御來着あり軈て御晝餐を召させられ芳賀判事柏崎聯隊副官等に拜謁仰付られたる後零時二十五分發の臨時列車にて直江津に向はせらる

直江津にては出村毘沙門裏濱の海岸に御休憩所を設けて潑剌たる鮮魚を五個の大槽に放ち海面には二十餘艘の漁舟櫂を揃へ海岸には屈強の漁夫二十餘名網を曳きて御覧に供すべく用意し停車場には文武官、議員、町長赤十字社員、在郷軍人等御著車を迎へ奉れり御召列車は一時四十分著直ちに御休憩所に成らせられ右の實況を珍らしく御覧あり槽中の鮮魚はいたく御意に適ひ献上の大鯛二尾と共に高田の御旅館へ運ばせられたり斯くて同所御出立五智街道より加賀街道に入らせられ午後三時春日山麓に御著謙信在城の當時の馬場たりし同山中腹迄御車を進められしが同所より御降車春日山神社々前に設けられたる御休憩所に入らせられ四顧の風景を御賞覧昔時は定めて要害の地なりしならんなど御言葉あり柏田知事より種々歴史的説明を上りたるが謙信の菩提寺にして彼の小豆長光の名刀を秘藏する林泉寺へは取調の爲め特に本居侍講を差遣されたり御遊覧約四十分間にして御下山仰出され山麓より御車に召し國道を經て高田の御旅館に御歸着相成りしは午後四時三十分頃なりき

此日殿下には日本石油會社へ金二十五圓、柏崎尋常小學校へ金二十五圓、春日山神社へ金二千疋御下賜あらせられ御歸館後は柏田知事を召し高田の人氣、高田と長岡との比較等に付き種々御下問ありたりと

▲巡啓零聞　▲後岩ノ原葡萄園へ成らせられし折園内御逍遙ありてマルコーといふ葡萄に御目を注がせられ御手にて其芽を御摘み遊ばされ有栖川宮と種々の御物語ありしが此マルコー種といふは英國にて故女皇陛下の愛用されしものなりとのことなれば園主は追て之を皇太子殿下に献上する筈なり又殿下には同園製造の葡萄酒を一見したしとの仰せに早速園主より差出し侍醫は之を新漉しとなし御手元に差上げたるに有栖川宮殿下は之を試みに御飲用遊ばされ何年の醸造なりやとの御尋ねあり何七八年も貯藏し置かば必ず良品となるべければ吾は二ダース許り買受け東京に持歸るべしと仰せられければ皇太子殿下もソレは極めて面白し吾も三ダース許買取らん併し東京に持往くには及ばぬ故岩ノ原貯藏所の冷き所へ保管し置けよとの御意あり園主は其光榮を拜謝し謹んで貯藏のことを御約束申上げたりといふ

▲越後にては生徒は脚半草鞋がけに尻端折り辨當背負ひたるもの多く長野にては大抵羽織を着用す柏崎以西の各停車場にては欄を越えてプラツトホームに出でたるものあり甚しきは其儘汽車に飛び乘りて次の驛に至り又欄を越えて逃げ去るものあり長野にては斯の如きことなし越後にては佛を拜む如く合掌して拜し奉りたれども長野にては御顏を十分に拜し奉りたりと長野の新聞は記しぬ

▲郡山にて御旅館は安積郡役所に有栖川宮の御旅館は宮戸川と決定開成山へ御立寄の外中學校其他へ行啓あらせらるべく郡民は三春駒を御覧に入れんと準備中なり

▲仙臺にて行啓あるべきは第二師團司令部、榴ヶ岡兵營、師範學校、第二高等學校、鑛山監督署、宮城野原、地方幼年學校、農事試驗場東奥支場、農學校、大師八幡社等の御豫定、松島にての御旅館は松島館と決定し古風を損せざる様庭園其他の修繕中なり

▲陸前の金華山にて頃日一頭の白鹿何處より現れけん境内を逍遙しつゝあるより社掌は神鹿なりと歡び殿下の御來遊を待つて獻上せんと社内に木柵を造り飼養し居れりと

▲羽後能代秋田間の鐵道布設工事は殿下の行啓につき本月十五日までに竣工し試運轉をなす筈なり

●大勲位及公爵侯爵親授式

嚢て新聞紙上に報導されたる三元帥の叙勲と徳川西郷兩氏の授爵は去三日を以て發表され宮中に於て親授式を行はせられたり當日戸田式部次長、以下各式部官は時刻前鳳凰の間に出仕諸般の準備を整へられ次て參列の久邇宮邦彦王殿下を始め田中宮内大臣大給賞勲局總裁並に當時の叙勲者大山元帥等參集せられ軈て十時三十分に至り　天皇陛下には岩倉侍從職幹事、岡澤侍從武官長を隨へ一同の最敬禮を受けさせられつゝ式場に臨御あらせられたり此時大山元帥は式部官の誘導により、御前に參進して最敬禮を行ふ　天皇陛下には戸田式部次長より捧進せる大勲位菊花大綬章を執らせられ更に元帥に授け玉ふ元帥は拜受の後退下直に勲章佩用の上再び御前に參候御禮を言上し畢て賞勲局總裁より勲記及び御沙汰書を受領して退下したり

元帥陸軍大將正二位勲一等功二級侯爵　大山巖
叙大勲位授菊花大綬章

右畢つて更に奉授式を行はせられ大給賞勲局總裁には當日の受章者にして病氣缺席の山縣西郷兩元帥に對する勲章并に勲記を一纏めとし代受者大山元帥に奉授せんとせられたるに　天皇陛下には御覧ぜられ鄭重なる式に依り別々に奉授すべきやうにとの御沙汰あらせられし趣にて總裁は叡旨の忝なきに恐懼し奉り大山元帥に其意を傳へられ元帥は山縣元帥及び西郷元帥の代理として再度總裁の前に進み左の勲章并に勲記を拜受せられたり

元帥陸軍大將正二位勲一等功二級侯爵　山縣有朋
元帥海軍大將正二位勲一等功二級侯爵　西郷從道
（各通）
叙大勲位授菊花大綬章

此に於て　天皇陛下には一同の最敬禮を受けさせられつゝ入御遊ばされ一同退下せしが同十一時田中宮内大

臣、花房宮内次官、桂爵位局主事、戸田式部次長、伊藤、穗積西郷各式部官及び徳川従一位、西郷正七位等参集の後再び戸田次長の奏請により鳳凰の間の玉座に着御あらせられたり次て徳川従一位は田中宮内大臣より「特旨ヲ以テ華族に被列」との辭令を受け更に進み最敬禮を行ふ此時　天皇陛下には岩倉爵位局長より捧進の爵記を執らせ左の授爵御沙汰書を授けらる従一位は謹しみて御沙汰書を拜受し御禮を言上の後退下し次に西郷寅太郎氏も亦前の順序にて宮内大臣より辭令を受け後　陛下より授爵御沙汰書を拜受し御禮言上に及ばれしが右畢って　天皇陛下には入御遊ばされたりかくて新爵には賢所　大前に参集岩倉掌典長以下掌典参列の上宣誓の式を爲し誓書を捧呈せられたり

従一位　徳川慶喜

特授公爵（特旨を以て華族に被列）

正七位勲六等功五級　西郷寅太郎

特授侯爵（特旨を以て華族に被列）

因に言ふ徳川の宗家なる家達公は公爵なるも慶喜公は隱居にて家達公の家族なりしを以て爵を有せざりしが茲に慶喜公も公爵を授かり別居したるにて即ち將軍家は二家となれるなり。西郷寅太郎氏は隆盛翁の次男なれども嫡出なるを以て（長男菊次郎氏は妾腹にて今は臺灣の支廳長たり）家督を繼げるにて二十七八年役の際歩兵少尉より中尉に進み功五級に叙せられ卅一年六月大尉に昇任し現に近衛歩兵第三聯隊中隊長たり當年三十七剛毅勇敢の譽あり既に停年に達し居れば近々少佐に任ぜらるゝならんと

●教育品展覧會へ行啓

皇后陛下が常に兒童教育の奬勵に御心を傾けさせ賜ふ事は今更ら記す迄もなきことながら去三十日上野なる教育品展覧會に行啓あらせられたる際陛下には兒童製作に係る幾千の出品物を些も御倦怠の御模様なく一々細密に御覧あらせられたる御裁縫品陳列場に入らせられ何の趣味もなき幼稚なる兒童の作品を最くも一々御閲覧あらせ給ふより御先導の千家總裁は玉體の御疲れも如何やと察し奉りて陳列の品は何れも同種類の旨を言上したるに　陛下には種類は同じくとも作者は何れも異なり居れば精しく見ねばならぬと仰せられ尚ほ處々御覧濟みの上此等の業を教へたる教師の骨折は嘸かしと思召す旨宣はせられ尚は此雨中に數多の兒童が態々出迎へたるは誠に大儀に存ずとの畏き御言葉さへ賜り

りたるには總裁を始め近侍の人々一同 陛下の御仁徳に感泣したるよし尚千家東京府知事は當日の御沙汰を一書にして翌日教育品展覽會へ傳達したり即ち左の如し

御沙汰書

一國語習字等は毎學區の陳列場に於て少くも一部分を開かせ御覽遊ばされたり

一裁縫品陳列の場所に於て知事より同一のものゝみ多數ある旨申上げたるに品物は一樣なるも裁縫したる兒童は異なれば能く見ればならずとの御沙汰あらせられたり

一當所の陳列場に於て知事より小笠原、八丈大島其他の教育の狀態を申上げたるに深く御目を留めさせられ當所の教育も斯くまで進歩せしや誠に喜ばしき事なりとの御沙汰あらせられたり

一剛中多數の生徒奉迎せるを御覽遊ばされ此雨中にかわいそうなりとの御沙汰知事にあらせられたり

一御覽後斯く兒童の學藝進歩するは教授する教員の苦心蓋く容易の事にあらざる可しとの御沙汰あらせられたり

又陛下の御目に留めさせられ御採用となりし名譽の作品と其生徒の姓名は左の如し

製作品の部

▲麹町區

作品	小學校名	姓名
袷	番町	井上 米子
涎掛	富士見	作岡 のぶ
繍入金屏	第一女子技藝	上松 やす

作品	小學校名	姓名
襦袢	中村	深井 とく
一ツ身綿入	穂松	小川 すゞ
短冊掛	第一女子技藝	守屋 むん 梅澤 すゞ

前垂	同	山岸 ちよ

▲神田區

人形巾着	淡路女子	池田 はつ
針箱	芳林	内田 きく
裾額面	東京女子裁縫高等	相澤 たけ

▲日本橋區

袷片袖	久松	遠藤 こと
胸當	日新	新井 ふみ

▲京橋區

雑巾	實田	高橋 たみゑ
菊枝折	鐵田	関根 よし
涎掛	靈岸島	荒井 いの

▲芝區

雑巾	良操	榊 泰子
襦袢	櫻田	浦島 まさ
雑巾	新綾	前田 とめ

▲麻布區

雑巾	小暮	伊藤 たき

▲赤坂區

雑巾	仲の町	長瀬 みち
本裁襦袢	赤坂	小池 すい

▲牛込區

比翼三枚重	女子裁縫	池谷 いち
ハンカチーフ	愛日	淺村 鶴生

雛形	麹町	山口 さだ
亀甲巾着	春日	永倉 まつ
涎掛	共立女子職業	三年生合作
巾着	東京女子裁縫高等	花房 しか
波に鯉	阪代	金田 はる
赤組	座摩	鳥居 つる
巾着	靈岸島	鈴木 とく
涎掛	築地	秀島 まつ
雛袷形	共榮	野田 とめ
前垂	新綾	齋藤 芳

▲四谷區

袷雛形	井上	小林 千代
雑巾	濱池	平川 よし
寫眞挟	愛日	森山 清子
財嚢	赤城	吉田 ひさ

貳等賞入選

日出に鶴　赤城　菅　貞子
▲小石川區
被布　黒田　齋藤　ふじ
▲本郷區
改良綿入　誠三　河島　ふく
紐　湯島　松永　あい
雑巾　駒本　田中　八重
▲下谷區
前掛　忍岡　木下　すゞ
一ツ身袷　岩瀬　飯野　かに
菊巾着　渡邊　鈴木　はる
▲淺草區
絣袷羽織　精華　阪東　けい
肱衝　淺草　森田　むめ
霜の茶掛　境南　原田　よし
▲本所區
袷　中和　坂本　たか
袷袖　刀根　眞川　靜江
單衣羅形　本所　柿塚　よし
女袴　兩國　長沼　うめ
綿入羅形　開發　田村　たか
綿入　博愛　佐々木きく
夜具　第二女子技藝　鵜沼　とみ
▲深川區

茶掛　誠三　岩村　くに
雑巾　市川　安田　よね
菊巾着　岩瀬　町田　いね
雑巾　同　朝日　もと
袷　同善　加藤　みの
手爪入　育英　中田　いゝ
一ツ身袷　待乳　大塚　くに
服紗　淺草女子裁縫　山本　靜
帶　江東女子　西尾　さと
合羽　牛島　高等　四年
茶掛　兩國　天矢　ふさ
忠孝額　同　高等　四年
茶掛　柳島　高橋　りん
紙入　第二女子技藝　荻野　はる
茶掛　明德　齋藤　たい

襦袢　東川　加藤　みさ
前掛　明治　大野　たま
▲南多摩郡
綿入袖口　同新　三橋　くに
▲荏原郡
紐　城南　高安　はる
▲西多摩郡
被布　五日市　内山　よし
▲豐多摩郡
單衣筒袖　淀橋　大岡　まき
花瓶敷　幡代　芹澤　八重
▲南葛飾郡
和歌繼取　瑞穂　福興　しげ
絹枝折二　寺島　舟田　百子

補綴　東川　高橋　まち
綿入羽繼　同　中島　つる
雑巾　玉川　村石　きの
▲北多摩郡
松に折鶴　拜島　八木　とう
襦袢　桃園　今井　きん
萬國旗　同　須賀　しづ

◉圖案展覧會

去月中上野公園第五號館に開かれたる圖案展覧會は新古和洋打交ぜての各種の摸様圖案を蒐集して一室に陳列して以て頗る目新らしく覺へたりまづ正面を入りて玄關に技藝天女の彫像あり竹内久一氏の作にしてその彩色は摸様圖案として見るべくその脇に陳列せられたる築地活版所の印刷物なりいづれも精巧。中にも活字書は最も精妙にして日光陽明門など十分に骨折の跡

見えたり
秦錦堂金子政次郎氏、同門會一派の出品は、共に耳目を引くに足るべく例へば聯圖、撫子、水仙など、一つの摸樣を、人々の考へによつて、さま〳〵の色を施さしめたるは、頗る進歩したるやりかたなりし。その物名を羅馬字で、摸樣の中に入れ込んだなども珍らしかりき又この會員の出品なる繪端書にも妙案が少からず西洋端書と競爭することを得べし
次に黄晴會は堀野文祿、大村令邦諸氏にして全幹の意匠頗る意氣にて繪端書の年中行事、新婚の表紙圖、その他服紗、風呂敷など、いはゆる凝つたもの揃ひなりし
次はデザイン倶樂部のヌーボースチールの作品なりしが、これは美術學校生の組織なり、新教育を受けし結果にや著しく西洋畫を見るやうにて十分に覇氣ありし櫻川會の、表紙及び繪端書の圖案も、なか〳〵よく小泉養和氏の纐纈染は、古代の纐纈染忍び出されて、見事なりし坂井紅見氏の布晒し、石橋、道成寺を圖形の中に新式の荒筆にて面白く治めたるは頗るめてたかりし漆工青年會の出品にては、赤塚自得氏の、手箱藤の圖など尤もよし
永井素岳氏の、大敷物は庭園といふ題にて、噴水の出口を上より見おろしたる處ろその水四方に流れ、草花の頭より見られたるなど、嶄新といはざるを得ず。竹内久一氏の、大風呂敷は、大なる法螺貝が大氣炎を焰きたるが、渦卷き出てたるが、いかにも勇ましかりき結城素明氏の、隅田川汽船圖河邊某氏等の天人花をふらす大幅久保田金仙氏の矢絣風等尤も觀者の目を惹きたり
美術學校圖案科の出品中にては、澤田霰堂氏の机掛田中有美氏作品最も見るべく、又木村德太郎の刀貨に恐るべきものなり。河村清雄氏が、油畫に是異風を交へてかけるなどは、たしかに一機軸を出したるならんこれらの圖案が或は實物に適不適當の事もあらんかされどこれは日本開闢以來初めての事にて、實に美術界の爲に、最も祝賀すべき事ならん。

◉地久節の祝歌　去月二十八日は、皇后陛下の御誕辰即ち五十三回の地久節に付き各皇族方の御息所より祝歌を上つられまた高崎御歌所長も葉山より詠歌を奉れり　陛下には昨今殊の外御健かに渉らせられ侍醫の御勸に因り諸所に行啓あそばし運動御怠り玉はず國風は毎年一月御歌會へ御詠出の外殆んど數萬首を下らずと承はれども世に漏れ傳はるは多からず先頃或る宮官

へ賜はりし四首の御歌は左の如し

△心

むらきもの心にとひて恥さらは
　よの人ことはいかにありとも

△愼獨

人しれずおもふ心のよしあしも
　てらしわくらん天地の神

△讀書言志

よるひかる玉もなにせん身をてらす
　ふみこそ人のたからなりけれ

△金

もつ人の心によりて寶とも
　あだともなるは黄金なりけり

△春月

花見つゝさしおくれたる窓の戸に
　にほふも嬉し春の夜の月

●中山一位局の儉德　中山一位局は先年大患に罹られ主治醫の人々も一時見放したる際陛下には御生母の御事とて殊に宸襟を惱し給ひ屢親ら御看護あらせ給ふと同じ大御心もて絶えず其容躰を聞し召され且つ二位より一位に進められしが其大御心の天に通ぜしにもやさし重躰なりし局の疾病は漸々快方に赴き日を經て元の健康に復り其後は引續きて六十八歳の今年まで風邪さへ冒かぬ程となられしとかや愁くて局には赤坂丹後町なる館に在りて常には先帝孝明天皇の靈前に仕へて其冥福を祈り奉るの外折々陛下の御靴下など編み參らするを務めと爲し而も之に用ゆる毛糸絹糸等は勿論吟味して臺に載せ手を清め口を嗽ぎたる上にて始めて編み初めらるゝを常とせり又有樂町なる中山邸には故忠能侯の後室即ち局の母刀自も八十六歳の高齢をもて未だ繁昌し居らるゝをもて屢々局の方より母刀自の許を見舞はれかにかくと孝養を盡さるゝ由なるが去四月十七日當主侯爵の夫人逝去あるや局には太く之を嘆かれ以來同邸に在りて通夜し居られしとぞ

●風鈴と簾　此頃の快晴から世はめつきりと夏めいて來た、汗ばみて行く日中の往返に洋傘の影は短かくうつり茄子や甄瓞と呼んで通る苗賣の尻聲は長く引いて居る、是から世の人が少しても涼しい樣にと器具調度まで念ひを凝らす中に先づ手近いものはと言へば風鈴か簾であらう、乃で商人達は只管意匠に苦しんで居るが風鈴は從來の唐金物は全廢い姿になり吹來る風に舌打をして榮枯を歎ずる代りには硝子製の物が幅を利か

せビイドロは逆さに吊さずとも此通りに奇麗だと時めいて居る樣子である、其中にも手の混入つたものは七寶燒料に拵へ燐瑯刷て球の周圍を飾つたのがあるが雅俗の點から言ふ時は御大層なだけ巽に見える硝子風鈴の事だから何んな人が是を好むか一向に分らない、其他簡單に製造されたのは硝子に彩色を施し球に花鳥や小魚等を描き出したものであるがお直段のところは何うだと言ふと上等が三十五錢位最下等が三錢位である、又葱は目下諸國より取寄せて居るが夏來れば麻衣のを解分くるといふ彼の木曾を始めとして箱根や筑波の代物が最も喜ばれるとの事である、而して形は新案も少く月に叢雲、井筒形、四阿形、茶舟形さては鶴龜、魚、夜など相變らずの好みの物がポツ／＼緣日にも現れて來たが價は一吊六七錢より五十八九錢極めて上等の大物が一圓半といふ見當である、左れど今年は昨年に比し芽の出來方が遲れて居るので今の所は見榮がなけれど色は大分好いやうなれば行水濟んで端居の時冷たい軒の額にあたるを命とばかりに愛られて大いに賣行くやうになるてあらう。

●初夏の珍藥物　食後の藥物は大いに消化を援くる効ある故近年我が邦にても外國人に倣ひてこれを嗜む者甚だ多く現に各藥物商の得意は我が邦人の方七八分の多きを占め居る由扨て本年は氣候非常に不順なれば隨つて首夏の珍と愛べき新菓物類にも多少影響を及ぼし總て實の成熟期を平年に比較すると概して三十日内外の遲延なるが目下先づ盛んに着荷するは苺なりこれは神奈川縣の產出にて鶴見又た子安在のもの多く發育極めて良しければ其の粒大にして味美く價は一と箱につき二十錢より二十五錢位、枇杷は房州產のもの珍重せられ一樽一圓四五十錢なれど早熟にて味は甚だ美ならず、○芭蕉の實は小笠原產のくの百目二十錢より三十錢位、○支那蜜柑は香港產出のもの一個八錢位にて味美きことは頰迄叩くに足るべし、林檎は撰拔きもの一個十錢位、○青梅は實の生き方甚だ惡しく本年上物にて一升六七錢位のところ凡そ二三割の騰貴この他近々の中には杏、李、山形產の櫻ン坊、米國產の紅白水桃なども着荷して大に食膳を賑はし清新の味を與ふべしといふ

●女子夏期講習會　來る八月一日より十日間神田區錦町三丁目神田中學校内に於て女子夏期講習會を開き一科に付毎日二時間づゝの講義を爲す由講習料は一科金一圓五十錢二科兼修金二圓五十錢にて申込期限は七月十五日迄なり

講習學科及擔當教師

一、日本歷史　岡部精一

一、西洋歷史　本多淺治郎
一、教育學　東　基吉
一、各科教授法　東　恭吉
一、社會倫理　野田義夫
一、心理學　雀部顯宜
一、和歌歷史及和歌作法　尾上八郎

●皇太子妃殿下の御慶事と御乳母探索

皇太子妃殿下には愈々今月十二三日より二十日迄の間に御慶事あらせらるゝ趣にて最初に二三月間御手元にて御養育遊ばされ其上は迪宮殿下と同じく川村伯爵へ御預け相成る御豫定なる由其れと同時に御乳母三人一年間御入用なるやの趣にて同邸侍醫局にては侍醫加藤照麿氏主任となりて二十歳以上三十四五歳以下の婦人にて本年正月末より六月上旬までの間に分娩せし體格强壯血統純良の者を身分の如何に拘らず廣く探索中なりと云ふ尚ほ希望者は麻布狸穴川村伯爵邸内侍醫局へ申出づべしと洩れ聞きぬ

●婦人向夏季流行品　▲帶揚にては先づ絞模樣染、染拔模樣等にて白地に染色にて花鳥模樣か、ぼかし染出し又は淡き地に白形を染出したる物、地質は紹、紹縮緬、縮緬、絹縮、紋絹縮、紹絹縮などにて此内絹縮最も流行するは他の地質より丈夫なるが爲ならんか昨年來藝者其他花柳界等にて日に何度となく締め更ふる向に專ら賣行よしとなり以上數種値段は何れも一圓四五十錢より三圓位まで　▲帶片側物にては矢張絞模樣、染出し模樣多く、最も流行するは絞類なり地質は帶揚と變りなく値段は九尺物三圓五六十錢より六圓位まで一丈一尺物は四圓より七圓位までなり　▲縞模樣染ケダシ(腰まき)にては白地、薄色ぼかし地、水淺黄、薄藤色等にて縞模樣を白く染拔きたるもの涼しげに見ゆるより最も行はる地質は大巾縮緬、別製最大巾縮緬にて値段は三圓以上七圓位まで　▲下締類にては別織染形巾六七寸丈六尺五寸地質は紋絹縮、並絹縮、紹縮緬、縮緬、絹縮等にて値段は二圓より三圓位　▲下締用、帶止用にては絹縮の伊達絞り新案物一尺三十錢前後、又紹、縮緬、縮緬地等にて手綱染絞、澁味、華美とも一尺十二三錢、縮緬にて一尺十七八錢より三十錢位、紹にて一尺二十錢内外なり　▲浴衣地にては縮木綿、中形、紹縮等にて柄は極細き小紋の中小柄、染分け、小珍敷縞柄、中大夏模樣柄好みは最新柄にて意氣向き高尚むき上品向き柄數多く値段は異同て一圓以上一圓三四十錢縮木綿て一圓二三十錢以上一圓七八十錢紹縮て一圓八九十錢より二圓二三十錢位なり

●螢狩の消息　彼の地より近きころの便りによれば最早や大宮公園の螢は出盛りとなりし由折からの日曜をし日に一日を此處に暮らすも面白からん都の塵に汚れし頭腦を養ふ屈强の處ながら稍遠しといふ人あらばそは池上に遊ぶべし兩三年以前より此處の螢名高くなりゆきて昨今は杖を曳くもの漸く繁く夕暮本門寺の附近に到れば男女童幼の打ち群れて螢追ふものいと賑はしく大宮の眺めに劣れりとも覺えずされば例の温泉に俗塵を洗ひて晩餐の後夕風に吹かれつゝ七時頃より漫歩せば興味は一層ならん

●蚊帳の相場　今年は蚊帳の相場も餘程安直なり先づ綿蚊帳にて五六が六十八錢、六七が八十八錢、六八が九十八錢、七八が一圓十錢、七十が一圓卅五錢、十四方が一圓七十五錢、十一四方が二圓十錢見當に當り母衣蚊帳に大卅五錢、小丈四十五錢位なり又和綿の上物ならば五六が一圓七十錢、六七が二圓廿錢、六八が二圓五十錢、七八が二圓七十錢、七十が三圓四十錢見當、本麻ならば五六が二圓卅錢、六七が三圓九十錢、六八が四圓五十錢、七八が五圓、七十が六圓廿錢位なるべし

●有名なる米國文豪の所得　今より凡そ二十年前米國の文豪ウエンデル、ホルムスは文學者たらんことを希望する一青年に書を送りて米國の文學者は大抵皆「寺の鼠の如くに憫れなるものなり」と云ひ又ベーヤードテーラーは「文學の如き高尚なる業務にては此國のみならず他國にても富を爲すべしとは思ひも寄らず」と述べたることあり今日にては米國の文學者は割合に裕にして最早此の如き歎聲を洩らすものなかるべしと雖も近くホーソーン及びポーの名聲を博したる時代にても其所得は極めて少なくポーの得たる最多額の原稿料は百弗なりきアーヴィングの「スケッチブック」の初版は六百弗に賣られストウーの「アンクルトムスクビン」は僅に三百弗を得たり英のサー、ウオーター、ベザントは割合に多くの資産を造りたりと傳へられたるも死すると僅に四萬弗の資産を殘したるのみ財産としては少しく繁昌なる果物商にも如かずと評せられたり又英のサッカレーが其名聲の頂點に達したるとき毎週ポンチに論文を送るは頗る面倒なれども毎週五ギニー（凡そ五十圓）の報酬の爲に之を止むる能はずと云ひし事ありエマルソンは七十四歳に達して其著書始めて書店に利益を與へたり又ブライアントは其時より得たる收入にて八十三歳の時尚小さき住家を購ふ能はざりしと

云ふ

●男兒と女兒の相違　南獨逸の小學校にて男兒と女兒の所見に對する面白き試驗行はれたりまづ敎師は勞働者の服をつけたる普通の勞働者を雇ひ來りて之を一室の中に立たしめ生徒にはこの事を知らしめず只この室の一方より入りて他方の戶口より出しめ彼等の敎室に歸着せる後衆生徒に室內にて見たる男子の風采を記載すべく命じたりこの結果女生徒百人中八十人は單にその男の服裝のみを注意し居り殘る二十人はその男の容貌または容貌と服裝とを併せ記したり然るに男生徒七十人は單にその男の容貌のみを注意し居り殘る三十人は容貌と服裝とを併せ注意し居たるを發見せりと

●天才の童子皇帝へ直訴す　我國には近來狂人の直訴沙汰頻りに行はれ苦々しき限りなるが近頃の事なりき近代の明主として英名世界に響く獨逸皇帝が皇后を伴ひて朝の運動に出てさせ給ひしとき服裝卑しからざる天才の一少年皇帝を見て「陛下今日は」と挨拶しつゝツト進みて一封の書狀を捧呈せしが陛下は受け取りて之を侍從に渡し給へり筆蹟に依れば此の直訴狀は正に少年の書きたるものにして其の趣意とする所二、一は罪なくして獄に投ぜられたる一靑年の赦免を乞ふ事にして一はスショチベルヒに住する祖母が彼の少年の財產を押領すべく彼を虐待するを訴ふるにあり皇帝は即時事實の取調を警察官に命じさせ給へる由

●世界奇聞

▲婦人は男子より長命なり　長命問題に於て婦人が男子より遙に長命なることは統計上確乎、動すべからざる事實なるが、之に付英國の某新聞此頃記して曰く、婦人中に男子より老年の者多きは各專門家の總て確認する所なり、而して其理由としては生理的關係もあらんかなれども、概して婦人の生活は男子よりも安逸なるも、男子は家の內外に涉りて有形無形的に生活の困難と戰ふの必要あれば自然其短命なる所以なりと

▲男の女に對する趣味の一變　歐米に於る男子の婦人に對する趣味は近來非常の變化を來し、以前は妙齡なる婦女子に一瞥の秋波を送らるゝを以て無上の榮譽となしたるに今や然らず、彼等は卅歲以上の婦人にあらざれば、完全の婦人と思考せず、若し夫れ廿五歲以下にして、結婚する婦女子あらんか、彼等は非常に之を輕蔑し、甚しきに至ては、世の文化の進むに從ひ、早婚の弊は漸次に跡を絕つて、晩婚行はるゝに至るものなり、早婚は實に野蠻時代の遺習なりとの考にて、彼等を野蠻人と同視するの風ありと云ふ、男子社會の風潮既に此の如くなるを以て、妙齡の處女は、今や交際場裡に立ちて、轉た寂寥の感ありと云ふ

▲新夫は百新婦は九十三　古今未曾有の珍らしき結婚は去る三月中ボヘミアはサベルボリタ市に行はれたり、新夫はマランツ、ロスチルと稱して其齡はと云へば取て百、花嫁はアンナ、レルチンと呼びて

其齡既に九十三歳は新夫の病床に擧げられたるが、此夫婦は互に相革ひしこと七十五年の永きに及びたるも、好事魔多くて結婚するの機會なく今日に打過し居りたる中、男の方は何にせよ百と云ふ寄る年波に重き病を得て命且夕に迫りたるより、意中の婦人を病床近く呼び寄せて今こそ積年の願を叶へんと直ちに式を擧げ目出度夫婦とはなりたるものゝ新夫は其後四十八時間にして歸らぬ旅に赴きしとなり

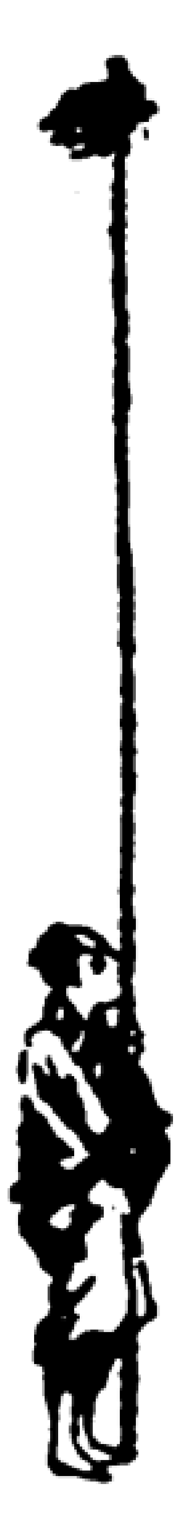
▲米國人と瑞典皇太子との結婚　今回瑞典那威國のユーゼノ親王は米國バルチモアのヘレン、ゴルモン、アイルド孃と結婚の約整ひ不日巴里にて式を擧ぐる由なるが親王は國王チスカー陛下の第四子にして畫家なり、孃はバルチモアにて有名なるカロン家の出にして有數の財產家なりと云ふ、此縁談に付ては親王の父君は專ら宗教上の相違よりして最初不承諾の御思召なりしも母君の盡力に依り結局同意あらせらるゝに至りし由なるも親王は之が爲め自ら皇族たるの地位を抛棄し玉ふならんとのことなり

▲英米金滿家俱樂部　今回英米の金滿家が各自の親交を温めん爲めに英米兩國の關係をして一層親密ならしめん目的を以て目下倫敦に組織中の俱樂部はアングロアメリカンミリチチヤス俱樂部と稱し、入會金五百ギンア即ち五百二十五圓會費年額百五十圓、歐洲諸國に在て最も大にして且つ贅澤極まる俱樂部なりとのことなるが、既に會員となりたる者英國にてスーザーランド公爵、チヤーレス、ベレスフオルド卿、國會議員ウインストン、チヤーチル氏、キントア伯等あり、米國側にてはピアモント、モルガン氏、ダブリユー、シー、ホイツトニイ氏、元老院議員デピユー氏等なり、此外入會希望者は陸續絕えず、既に豫定の會員數千名に達したるやにて不日盛大な開會式を擧ぐる筈なりと云ふ

▲女權の最も强き國　婦人の權利の最も强きは從來米國なりとは人も我れも信ずる所なるが英國某雜誌の記事に依ればアビシニア國こそ女權最も强き所にして、此處にては一家の財產は悉く妻の所有に屬し、若し夫にして妻を辱しむる如き所爲あらば、妻は直ちに之を放逐し相當に謝罪するまでは決して復家を許すことなしと

▲米佛婦人と發明　米佛の婦人にして新規の發明を爲し專賣特許を受る者近來頻に增加し來り、現に米國にては婦人の專賣特許年々百を以て數ふる次第なるが、此に近頃佛蘭西の婦人にして巧妙なる器を發明し專賣特許を得たるものあり、即ち梳るごとに中より香水其他の香物流出し、深く毛根を濕ほす樣に仕掛たる一種の櫛を發明したることなるが此種の發明は日を逐ふて其數を增加しつゝありと云ふ

▲運動は健康に害なる說　米國シカゴのアルバートホーイ博士は多年忍耐して硏究したる結果運動は卅五歲以上の人に取りて絕對的に健康を害ふものなりと斷定したり博士は曾て「飮食」と題する書を著はし專門家の好評を博したる營養學の專門家なり博士曰く余は何故に年少者及勞働者を除き卅五歲以上の人に運動は健康を害すと云へるかといふに此等の人に在りては骨及び筋肉を働かしむれば細胞を破壞し細胞の廢物を血液中に吸收せしむされば此廢物を除去するに非ざれば自然に健康を害ふに至る體內の機關中此廢物を除去するものに腎臟なれとも腎臟を活潑に働かしむるとは頗る困難なればなり而して博士は職業以外に運動するの必要なしと云へり



女學世界第貳巻第九號記事豫告

（七月五日發行）

▲風俗改良談　東京音樂學校長……渡邊龍聖君
▲題未定……三輪田眞佐子君
▲夏の自然（科學談）……藤堂梅軒君
▲忍耐の説……野中千代子君
▲生活の金針　成女學校講師……嘉悦孝子君
▲家庭の隨感　ドクトル……川瀬元九郎君
▲感化院の話（上）……高瀬眞卿君
▲室内装飾……近藤[illegible]三君
▲家庭時言……大町桂月君
▲音曲の話……水原翠香君
▲ローザボンヒール女史……中内蝶二君
▲天女使（漢文小説）文學士……久保天隨君
▲淀のわたり（國文小説）文學士……尾上柴舟君
▲詠歌のしをり　文學士……武島羽衣君
▲挿花のしをり……松華庵主人
▲鮑のはなし（科學談）……金井金牛君
▲素人料理法……岩間芳松君
▲人間身體の妙能（下）……林壽祐君
▲家庭小説懸賞披露

其他、家事、衛生、禮法、生花、裁縫、編物、圖案等例によりて材料豐富

毎月一回五日發行

定價表	
一冊（紙數二百八頁）……金二十錢	郵税一錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十九錢	
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢	
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢	
内（定刊數……十二冊 增刊四回……三、六、九、十一月價格同一）	二錢

廣告料

二十四字詰一行 半頁卅二行 一頁六十四行

特等	四十三錢	十三圓七十六錢	割引三十三圓
一等	三十五錢	十一圓二十錢	割引二十七圓
二等	三十錢	九圓六十錢	割引二十二圓
三等			割引十八圓

▲寄稿の段は〆切日等御照會次第御報知致候

注文規略

●本館發行の雜誌は都て前金の外送本せず。
●前金拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る。
●總目錄御入用の方は二錢券相添へ申込あれ。

明治卅五年六月十五日發行 第貳卷第八號

編輯人　松原岩五郎
發行人　大橋新太郎
印刷人　石川金太郎
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千八十番　二千六百二十番

全部
廿四冊
一冊紙數
四百頁以上

落合　小中村　萩野　三先生校註

日本文學全書

●第壹編（竹取物語、伊勢物語、住吉物語、徒然草、紫式部日記）
●第貳編（土佐日記、枕草紙、更科日記、方丈記）
●第三編（十六夜日記、落窪物語、辨内侍日記）
●第四編（ざりかへばや物語、堤中納言物語、四季物語）
●第五編（中務内侍日記、蜻蛉日記、讃岐典侍日記、和泉式部日記）
●第六編（濱松中納言物語、大和物語、唐物語、
●第七編（宇治拾遺物語、多武峯少將物語）
●自第八編至第十二編（源氏物語、五卷）
●自第十三編至第拾五編（榮花物語、上、中、下）
●自第十六編至第十八編（太平記、上、中、下）
●第拾九編（保元物語、平治物語、秋夜長物語、鴉鷺合戰物語）
●第二十編（平家物語）
●第二十一編（古今著聞集）
●第二十二編（公事根源、十訓抄）
●第二十三編（水鏡、大鏡）
●第二十四編（増鏡）

定價（●一冊金貳拾五錢●六冊金壹圓三拾錢●十二冊金貳圓六拾錢●貳拾四冊金五圓●郵稅毎冊金三錢●御注文は着金次第送本申上候

佐々木信綱君編

續日本歌學全書

全冊十二冊
紙數一冊五百餘頁以上

定價（●壹冊金參拾五錢●六冊金壹圓九拾錢●全部十二冊金參圓七拾錢●郵稅一冊金八錢）

●第壹編加茂眞淵翁全集（上）第二編加茂眞淵翁全集（下）●第三編本居宣長翁全集●第四編香川景樹翁全集（上）●第五編香川景樹翁全集（下）●第六編小澤蘆庵翁全集●第七編近世名家家集（上）●第八編近世名家々集（下）●第九編近世長歌今樣歌集●第十編桂園門下家集●第十一編明治名家々集（上）●第十二編明治名家々集（下）

東京　博文館發兌

（後付の一）

史學文

世界文明史

文學士高山林次郎君著（全壹冊）

上製 五十錢　郵税 十錢　並製 卅五錢　郵税 八錢

文明史は人類生活の統一的歷史なり、歷史的發達の精神は是によりて釋了せらる、本書は筆を有史以前の民族に起し佛國革命に至る迄章を重ぬる廿有五主として宗教哲學文藝政治の上より東西歷史の隱微を描破して洩す所なし

東洋西洋倫理學史

文學博士井上哲次郎君校閲
文科大學卒業木村鷹太郎君著（全壹冊）

上製 五十錢　郵税 十錢　並製 卅五錢　郵税 八錢

道德は人間の最務なりとせば之を研究する所の倫理學は又重要の學科ならざる可からず、著者多年之を專攻して本書を著はす、文章明晰其第一章の如き東西古今未だ嘗て類なきの說にして井上文學博士の校閲を經たる良書なり

宗教哲學

文學士姉崎正治君譯述（全壹冊）

上製 五十錢　郵税 十錢　並製 卅五錢　郵税 八錢

本書はカント、ヘーゲル、シエリングの宗教哲學論を統合し、シライエルマッヘル、ピーデルマンの基督教宗教學を批評し、吠檀多の無宇宙論佛教の涅槃論を精查して東西宗教の粹を蒐め、古今哲學の結果によりて宗教哲學の一大系統を組織せしものなり

支那文學史

文學士笹川種郎君著（全壹冊）

上製 五十錢　郵税 十錢　並製 卅五錢　郵税 八錢

支那は東洋の古國にして特に其文學は日本文學の鼻祖さして苟くも日本今日の文學を研究せんと欲せば必ず先づ支那文學を玩味して其淵源する所を知悉せざる可らず、本書は時代に依り種類を分ち各種文學の由來變遷を詳述せり

修辭學

文學士武島又次郎君著（全壹冊）

上製 五十錢　郵税 十錢　並製 卅五錢　郵税 八錢

著者夙に詩文を以て名あり、本書記する所詩歌散文に關する事項は細大洩さず其種類組織より條章辭句に至る迄引證提喩周到を究め加ふるに行文流麗にして明珠の盤を走るが如し、文學に志ある者必讀必携の良本なり

論理學

文學士高山林次郎君著（全壹冊）

上製 五十錢　郵税 十錢　並製 卅五錢　郵税 八錢

本書は著者が往年第二高等學校に教授たりし際講述したるものを基礎として嚴密なる訂修を經たるもの條理井然文字簡明庶幾は斯學最新の體系たるを得ん乎、是れ著者が自ら負て學界の批判を仰がるゝ所以なり。

發兌元　東京日本橋區

（後付の二）

學書類

邦語英文典（全壹冊）

文學士畔柳都太郎君著

上製五十錢　郵税十錢　並製卅五錢　郵税八錢

本書ベイン、ネスフヰルド等の英文法書クレアブーク、ガスペイ、チツトー等の獨佛文法書等を參照し傍ら著者の創見を加味して此に完全なる一英文書を成す、分章すること十節を別つ數十秩序井然叙述簡明他に得難きの書なり。

倫理學（全壹冊）

文學士蟹江義丸君譯

上製五十錢　郵税十錢　並製卅五錢　郵税八錢

斯學に關する書少なからずと雖も多くは晦澁に流れ淺薄に失して共に正鵠を得たるなし、譯者茲に見るあり乃て新學派を調和しパウルゼン氏の著書を執つて是を譯述す其文明快以て歐洲斯學の趨勢を卜知し得べし。

日本歷史（全壹冊）

文學士木寺柳次郎君著

上製五十錢　郵税十錢　並製卅五錢　郵税八錢

本邦史の上梓する者多きも、本書は從來の編纂と大に其方法を異にし事實を採りしものは此に連絡せる諸種の關係沿革を集め未だ定說なき者は先哲の說を挿み必要なる制度は精細に涉る事實正確繁簡其宜しきを得たり。

西洋哲學史（全壹冊）

文學士蟹江義丸君著

上製五十錢　郵税十錢　並製卅五錢　郵税八錢

本書は古今哲士の列傳を紹介するに非ず、內在的批評を以て、ターレスより近代に至る大思想を究め其生起變遷の原因を闡明して餘蘊なし哲學史本來の面目茲に存す蓋し本書は吾哲學界に於ける最も完全なる思想の歷史なり。

近世美學（全壹冊）

文學士高山林次郎君著

上製五十錢　郵税十錢　並製卅五錢　郵税八錢

本書は上編に方ては希臘以來ヘーゲル氏に至るまでの美學思想の變遷を說明し下編に於てはキルヒマン、ハルトマン、スペンサー等諸家の學說を敘述せり、文章明暢にして理義透徹、讀者は之に據りて容易に歐洲美學の歷史を會得すべし。

哲學汎論（全壹冊）

文學士藤井健次郎君著

上製五十錢　郵税十錢　並製卅五錢　郵税八錢

本書は獨逸の碩學フオン、キルヒマン氏が普通了解の便を與へんと欲し種々推究の末實在論的系統を採擇し好著を完ふせしもの其系統は特殊の科學に近邇し從つて初學者をして他の哲學系統をも完全に悟了し公平に其長所短所を發見せしむるに便あり。

本町三丁目　博文館

（後付の三）

（後付の四）

學書類

文學士 白河次郎君 國府種德君著（全壹冊）

支那文明史

上製 五十錢 郵稅 十錢 並製 卅五錢 郵稅 八錢

支那文明の調査は夙に歐米學者が留意する所なるに本邦學者之に從事する者ゐは最も怪む可き也本書は此に老大家に露し古今東西の學者か未だ道破せざる所未たに到らざる所を指し天下の支那學者をして驚倒せしむそれに足る者多し支那調査に志ある士是非一讀の要あり

文學士 青木昌吉君著（全壹冊）

邦語 獨逸文典

上製 五十錢 郵稅 十錢 並製 卅五錢 郵稅 八錢

獨逸は文法錯雜にして到底整備せる文法書を望むと頗る難事とさす著者夙に之を感し深く其記述の方法を研究し長年月の經驗に照して茲に本書を著はさる簡潔にして要旨を失はず解釋最も正實に無比の良書なり殊に邦語を以て獨逸の語法を詳說したるは他に見ざる特色なり

文學士 加藤玄智君著（全壹冊）

世界宗教史

上製 五十錢 郵稅 十錢 並製 卅五錢 郵稅 八錢

空想を排し事實に據りて宗教を學ばんとするは近十數年來の時代精神の思潮なり著者茲に見る所あり思想界刻下の急需に應ぜんが爲めメンジース氏宗教史を飜譯す行文簡明暢達にして秋毫も難解の憾なし豈啻宗教史研究好侶伴たるのみならんや同好の士是非一本を供へられたし

文學士 熊谷五郎君編（全壹冊）

教育學

上製 五十錢 郵稅 十錢 並製 卅五錢 郵稅 八錢

本書に一般主義或は社會主義と稱する最近の主義を基礎として輸入主義教育學の材料をも自家の體に致して構成せり從來教育學は唯小學校の教育にのみ重きを置きしが本書は教育の全体を論述せるを以て博く中學教師の參考に資するの價値あり亦稀有の教育書と謂ふべし。

文學士 岡田正美君著（全貳冊）

解說批評 日本文典

一冊 五十錢 郵稅 十錢 並製 卅五錢 郵稅 八錢

本書は我國語上文法上の諸般の事實を我國一般の人士に示さんことを欲して便宜の序順に列記し解說批評せしもの而して多くは當今最通に用ゐらるゝ諸文典に記述せる所を採せり。

文學士 青木昌吉君著（全貳冊）

邦語 獨逸文章論

上製 五十錢 郵稅 十錢 並製 卅五錢 郵稅 八錢

本書は獨逸文典中の文章論を平易に詳記せしもの曩に出版せし獨逸文典に講述したる議論と前後相待つて獨逸文典全部を完結するを得べし。

本町三丁目 博文館

（袋付の五）

文學史

文學士松井知時君著（全二册）

佛蘭西文典

邦語

正價
一册
上製 五十錢
郵稅 十錢
並製 卅五錢
郵稅 八錢

本書に佛語を知らざる人に其大要を知らしめんさするものなれども稍進んだる人にも尚有用のものたらしめんが爲めに普通の小文典には見るを得ざる點に迄立入りたれども編纂の方法は徹して一面を獨習に便し他面には教科書さして遺憾なし加ふるに昨年九月佛國文部省より發布せし佛語文法改正令を參考さして各所に之に關する注意を與へたり

大和田建樹君編（全二册）

日本歌謡類聚

一册 正價六十錢
郵稅十六錢

我國開闢以來二千五百年間の歌謡は載せて本書にあり時代を以て古今を分ち種類に由て雅俗を別にし一讀人をして昭々其沿革を詳にせしむ大和田先生之を輯むるに幾星霜の苦勞を費されしかは蓋に出したる謡曲通解の一例に由ても推知するを得べし

博文館編輯局校訂（全一册）

前々太平記

前太平記

正價 六十錢
郵稅 十六錢

聖武天皇より、後醍醐天皇に至る、百七十餘年間の事蹟を錄するもの、即ち、前々太平記さし、玄昉道鏡の亂暴、菅の詩才、道風の能書、菅公將平の爭ひ等藤原の盛り、眞に活小說を成す。而して、後醍醐天皇より近衞天皇に至る二百四十餘年間、大江山の珍談、奥州役等、描き盡くして遺憾なきものを前太平記さす

博文館編輯局校訂（全一册）

太平記

正價 六十錢
郵稅 十六錢

北條氏の末路より足利の初に至り、南北朝の事蹟記し盡して遺漏なく、楠公父子の忠義は、編者特に筆力を極めて寫し出す、滔々數萬言流麗の文章自ら一大活小說を成す、讀むて無限の趣味を感ずべし、

博文館編輯局校訂（全一册）

後太平記

正價 六十錢
郵稅 十六錢

足利氏の末造應仁戰亂の時代より群雄西方に割據し天下亂れて麻の如く、小兒時中に闘ふの器に、ここに信長秀吉に輔て打破せられ正に太陽東に出て百鬼影を蔵すの處、讀むで一大劇を觀るの思ひあり

文學博士萩野由之君著（全二册）

大日本通史

上製 正價
壹圓五十錢
小包四百匁

大日本通史は神代より徳川將軍の政權返上に至る迄を記し、安德天皇以前を上卷さし、後鳥羽天皇以後を下卷さしたるものにて時勢の變遷に從て編を分ち毎編制度文學宗敎風俗に至るまで一切漏らさず且な末に索引を附して考索に便す最も完備の書さ言ふを得べし

發兌元　東京日本橋區

（[illegible]の六）

學書類

小中村義象・落合直文兩君著

新撰日本外史

上製正價 壹圓五十錢
小包四百匁

本書は國史漢文に精通の名高き落合小中村兩先生の著なれば讀み下しの風韻を得たるは勿論文章雅健雄渾にして一讀手を釋くに忍びざる如きものあり上神代より下今日に至る一貫脈絡複雜易からざるの眞史なり

文學士坂本健一君著（全二冊）

世界史

上製正價 六十錢
小包四百匁

上下數千歳の興亡に常に世界的統一的の趨勢を見ざるなく殊に最近に至り凡百の事物殆んど世界的ならざるなきの時に當りて東洋諸興隆の我國民か史的知識に基て世界的思想を養ふを要するや言を俟たず是を以て古今東西の世界史を通叙して我か國民に裨益せんとするは既に出邦文世界史中に於て精詳簡要を得たる本書編纂の目的なり乞ふ史學家は勿論學生一般に鑑識あらんことを

大和田建樹君著（全五冊）

日本大文學史

全壹册四十錢
郵税 八錢

文學史は文學發達の歴史なり故に[illegible]入門[illegible]にせざるべからざるものなり[illegible]の指導者として[illegible]特に得意の技量を盡せり[illegible]偶然[illegible]ならざるなり四方の君子請ふ明窓淨几の下に斯の貴重なる[illegible]

文學士加藤玄智君著（全一冊）

宗教新論

正價 [illegible]錢
郵税 十四錢

熱誠なる信仰は深摯なる宗教の知識に待ち强固なる道義の大本は清醇なる信念の根底を要す然るに現今信念界の論議は概ね渾沌として健全なる宗教的智識の欠乏に基す著者茲に慨する所あり本書を公にし以て宗教の本性を明にし信念の基礎を確立せんことを期す宗教家は素より苟も宗教學を研究せんとする人は一讀して其蘊奥を探究せられよ

文學博士姉崎正治君著（全一冊）

印度宗教史

正價 七十錢
郵税 八錢

上世印度の宗教はエダの神話が唯心論の哲學となり波羅門教より佛教の宇宙的宗教を生じ大乘教印度教の變遷を經て終に佛教の衰滅に歸するの變化を指すべし頗る多趣にして殊に佛教の盛衰の跡歷々掌を指すべし上世印度の思想宗教につきて東西兩洋最新の結果を見んと欲する讀者は乞ふ此書に就け

文學博士根本通明先生述（全一冊）

老子講義

正價 五十錢
郵税 十錢

老子五千言は實に是れ支那の文字なる者、古來之を註釋せる者、和漢其人に乏しからずと雖、初學の士能く其要領を得るに苦しむもの少からず本書は老儒根本先生が數十年來沈潜研鑽の餘、獨得の見地を以て講述せられたるもの東洋哲學を攻むる者詩文に遊ぶ者共に研鑽せざるべからず

本町三丁目 博文館

（綴付の七）

女學世界
定期増刊
（明治卅五年六月拾五日臨時發行）第貳巻第八號（明治卅四年拾二月廿五日第三種郵便物認可）

淑德修養の寶鑑

櫻所 千河岸貫一君撰（上巻下巻完結）

日本女子立志編 下巻

和裝上製美本紙數三百五十有餘頁
正價六十錢
郵税八錢

◉口繪

奴の小萬（極彩色精密木版畫）……武内桂舟君筆
加賀の千代（極彩色精密木版畫）……水野年方君筆

上巻に續きて**孝烈**の部には伊勢のぬひ女、豐後のたけ女、安藝のはな女、土佐のかね女、信濃のたよ女、駿河のまさ女外十六人**貞烈**の部には信松院尼、毛利勝永の室、長岡宗信の室、淺野吉長の室、杉浦大隅守の女、三宅尚齋の妻外四十人**勇烈**の部には手塚因幡の女、富田信高の夫人、中島元行の母、榊原政房の室、井上正岑の室外廿名**文學**の部には證明夫人、島津淡路守の室、六浦の少女、今式部、了然尼、苗村介洞の妻、惠静尼、祇園の梶子、井上通女、田氏捨女、外九才媛**才略**の部には阿茶局、眞田信幸の室、岩崎又右衛門の女、富岡德章、大浦慶女等名媛烈女の操行淑德を錄す◉**上巻**は賢淑忠烈孝烈の賢媛節婦の善言美行を錄して刊行せしが今や下巻刊行茲に全く上下兩巻を完す其婦女敎育に貢献すること鮮少ならざるなり（上巻亦正價六十錢郵税八錢）

●女訓評釋

全壹册和裝
正價金六拾錢
郵税金拾錢

●點茶活法

岡崎淵冲君著
全二册和裝
正價金貳圓五拾錢
郵税小包料八百匁

發兌元 東京市日本橋本町 博文館

（定價金貳拾錢）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版⑫
明治35年6月（第2巻第7号、第8号）

2006年7月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　ジャパン リアルティ スーパービジョン株式会社
製　本　有限会社青木製本

ISBN4-7601-2958-8　C3321